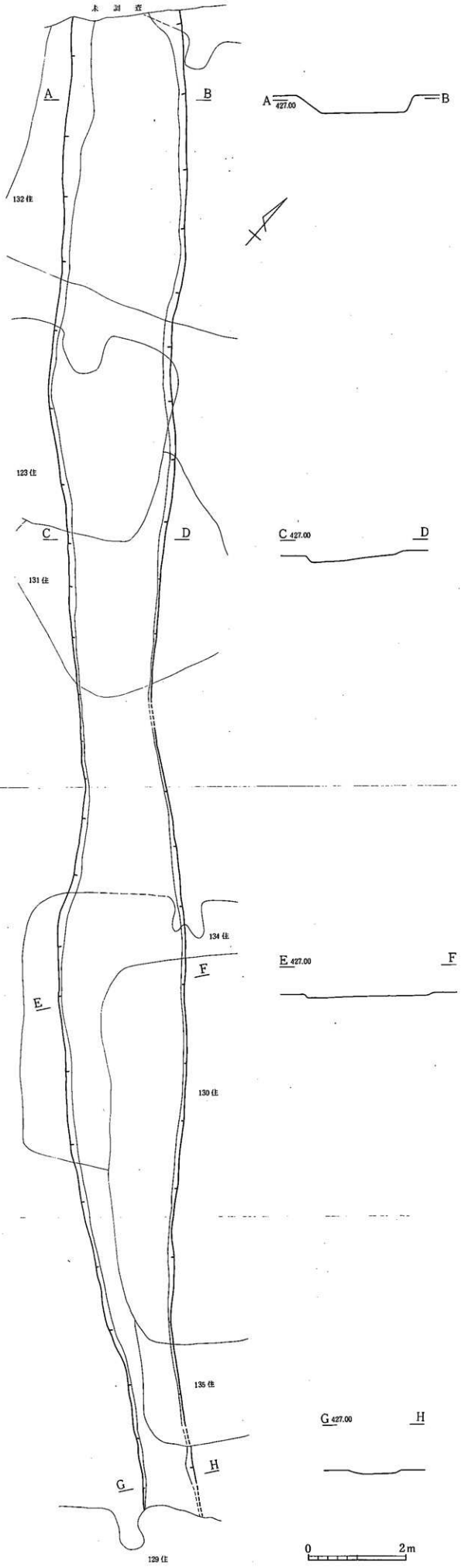
恒川遺跡群

新屋敷遺跡

飯田ヂーゼル株式会社工場建設に伴う
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

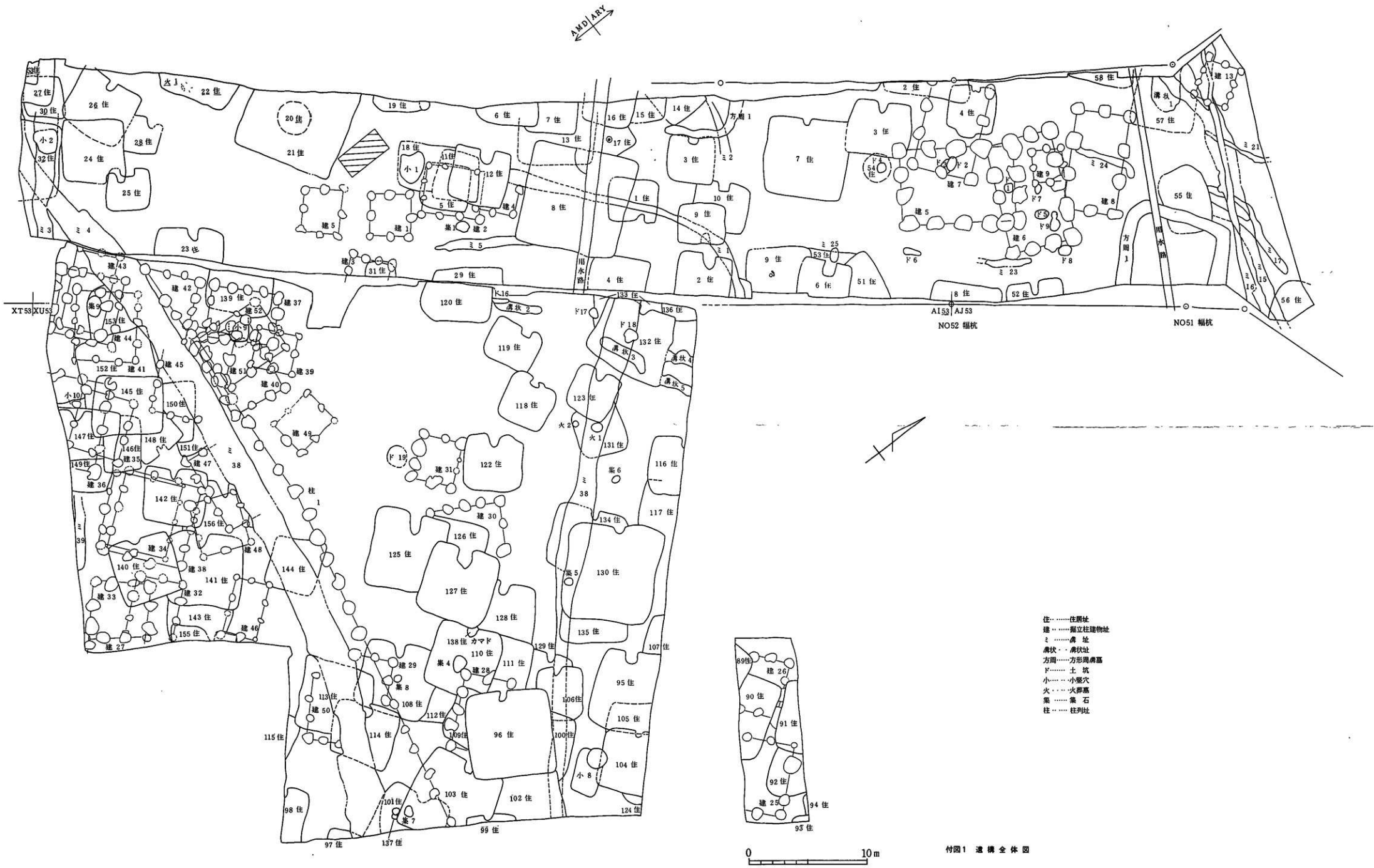
1991年3月

長野県飯田市教育委員会


未調査
A
B
A 427.00
B
132住
123住
C
D
C 427.00
D
131住
134住
E
F
E 427.00
F
130住
135住
G
H
G 427.00
H
129住
0
2m

付図3　溝址 38

付図2　溝址37・柱列址1


AMDIARY
XT53 XU53
NO52 幅杭
NO51 幅杭
AI53 AJ53
住……住居址
建……掘立柱建物址
ミ……溝 址
溝状……溝状址
方周……方形周溝墓
ド……土 坑
小……小竪穴
火……火葬墓
集……集 石
柱……柱列址
0
10m

付図1 遺構全体図

恒川遺跡群
新屋敷遺跡

飯田ヂーゼル株式会社工場建設に伴う
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

序

国道153号座光寺バイパスが開通して以来，沿線への店舗・事業所等の進出が相い次ぎ，その賑わいは隔世の感があります。飯伊地方の経済活動の振興を考えますとこうした開発の波も無理からぬところでありますが，一方でさまざまな問題を引きおこしているといえ，そのひとつとして埋蔵文化財の保護があります。

バイパス建設に先立ち実施された発掘調査の結果，古代伊那郡衙の存在を示唆する建物の跡や硯などといった役所に関係した遺構・遺物がたくさん見つかりました。そこで飯田市教育委員会では昭和57年度から重要遺跡範囲確認調査を継続しており，現在までに官衙の中心部分が具体的地点をあげて推定される段階に至っています。このような貴重な文化財をできる限り現状のままで後世に残し伝えることは，今日の私たちの責務でありましょう。

開発と保存，相い入れぬ命題でありますが，開発がもたらす波及効果等を考慮するとやむを得ないものがあります。現状で保存することが困難な状況にあっては，事前に発掘調査を実施して記録保存をはかることも次善の策ではありますがやむを得ないものといえます。こうしてバイパス及びその周辺で積み重ねられてきた調査成果は古代伊那郡衙の姿を浮び上がらせてくれるもので，今回の発掘調査の結果も古代伊那郡衙の実態を解明するに資する重要な知見を提供したわけであります。すなわち地域の歴史解明が進むとともに，古代日本史の復元の一助となるものと確信いたします。

最後になりましたが，文化財保護の本旨に厚い御理解を賜った飯田ヂーゼル株式会社ならびに地元の皆様，長期にわたって現場作業・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成３年３月

飯田市教育委員会教育長
福　島　　稔

例　　言

1．本書は飯田ヂーゼル株式会社の工場建設に伴う飯田市座光寺4737番地外の埋蔵文化財包蔵地恒川遺跡群新屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は飯田ヂーゼル株式会社からの委託を受け飯田市教育委員会が実施した。

3．本遺跡は一般国道153号線座光寺バイパス建設に先立ち調査された新屋敷・阿弥陀垣外地籍に隣接する。そこで新屋敷地籍の略号ＡＲＹを用い，その後に地番4737を付して発掘から整理作業まで一貫して使用した。

4．本書の掲載については，住居址を優先し時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし，遺物図及び写真図版は本文末に統一した。

5．本書は馬場保之が執筆し，原稿の一部につき小林正春が加筆訂正を行なった。

6．本書に掲載した図面類の整理は功力　司・馬場が，遺物実測は佐々木嘉和・佐合英治・渋谷恵美子・馬場が，写真撮影は馬場がそれぞれ行なった。なお整理作業実施にあたり吉川　豊が補佐した。

7．本書に掲載した石器実測図の表現として，使用痕及び擦痕は図内に実線で，刃潰し及び敲打痕は図外に破線で，節理面は斜線で，ロー状光沢物付着部分は網掛けで示した。

8．本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の床面ないしは周囲からの深さ（単位cm）を表わしている。

9．遺構番号については最終的な検討の結果121・154号住居址を遺構から除外したため欠番となっている。

10．本書の編集は，調査員全員の協議をふまえ馬場が行ない，小林が総括した。

11．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し，飯田市考古資料館で保管している。

目　　次

序
例　言
目　次
Ⅰ 経　　過 …… 1
1．調査に至るまでの経過 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．調査組織 …… 2
1）調 査 団 …… 2
2）事 務 局 …… 2
Ⅱ 遺跡の環境 …… 3
1．自然環境 …… 3
2．歴史環境 …… 3
Ⅲ 調査結果 …… 7
1．調査区の設定 …… 7
2．土層の堆積状態 …… 7
3．遺構と遺物 …… 8
1）竪穴住居址 …… 8
(1) 弥生時代中期 …… 8
① 92号住居址　② 136号住居址
(2) 古墳時代後期 …… 9
① 89号住居址　② 90号住居址　③ 91号住居址　④ 93号住居址
⑤ 94号住居址　⑥ 95号住居址　⑦ 97号住居址　⑧ 98号住居址
⑨ 99号住居址　⑩ 100号住居址　⑪ 101号住居址　⑫ 103号住居址
⑬ 104号住居址　⑭ 105号住居址　⑮ 106号住居址　⑯ 107号住居址
⑰ 108号住居址　⑱ 109号住居址　⑲ 110号住居址　⑳ 111号住居址
㉑ 112号住居址　㉒ 113号住居址　㉓ 114号住居址　㉔ 115号住居址
㉕ 116号住居址　㉖ 117号住居址　㉗ 118号住居址　㉘ 119号住居址
㉙ 120号住居址　㉚ 122号住居址　㉛ 124号住居址　㉜ 125号住居址
㉝ 126号住居址　㉞ 127号住居址　㉟ 128号住居址　㊱ 129号住居址
㊲ 130号住居址　㊳ 131号住居址　㊴ 132号住居址　㊵ 133号住居址
㊶ 134号住居址　㊷ 135号住居址　㊸ 137号住居址　㊹ 138号住居址

㊺ 139号住居址　㊻ 140号住居址　㊼ 141号住居址　㊽ 142号住居址
㊾ 143号住居址　㊿ 144号住居址　(51) 146号住居址　(52) 147号住居址
(53) 148号住居址　(54) 149号住居址　(55) 150号住居址　(56) 151号住居址
(57) 152号住居址　(58) 153号住居址　(59) 156号住居址
(3) 平安時代 …… 66
① 96号住居址　② 102号住居址　③ 123号住居址　④ 145号住居址
⑤ 155号住居址
2）掘立柱建物址 …… 74
① 掘立柱建物址25　② 掘立柱建物址26　③ 掘立柱建物址27
④ 掘立柱建物址28　⑤ 掘立柱建物址29　⑥ 掘立柱建物址30
⑦ 掘立柱建物址31　⑧ 掘立柱建物址32　⑨ 掘立柱建物址33
⑩ 掘立柱建物址34　⑪ 掘立柱建物址35　⑫ 掘立柱建物址36
⑬ 掘立柱建物址37　⑭ 掘立柱建物址38　⑮ 掘立柱建物址39
⑯ 掘立柱建物址40　⑰ 掘立柱建物址41　⑱ 掘立柱建物址42
⑲ 掘立柱建物址43　⑳ 掘立柱建物址44　㉑ 掘立柱建物址45
㉒ 掘立柱建物址46　㉓ 掘立柱建物址47　㉔ 掘立柱建物址48
㉕ 掘立柱建物址49　㉖ 掘立柱建物址50　㉗ 掘立柱建物址51
㉘ 掘立柱建物址52
3）土　坑 …… 99
① 土坑16　② 土坑17　③ 土坑18　④ 土坑19
4）小 竪 穴 …… 101
① 小竪穴8　② 小竪穴9　③ 小竪穴10
5）溝　址 …… 102
① 溝址37　② 溝址38　③ 溝址39
6）溝 状 址 …… 104
① 溝状址2　② 溝状址3　③ 溝状址4　④ 溝状址5
7）集　石 …… 106
① 集石4　② 集石5　③ 集石6　④ 集石7　⑤ 集石8
⑥ 集石9
8）柱 列 址 …… 108
① 柱列址1
9）火 葬 墓 …… 108
① 火葬墓1　② 火葬墓2

10) そ の 他 …… 109
① 柱穴
② 遺構外出土遺物
A 土 器
a 縄文時代 b 弥生時代 c 古墳時代後期
d 奈良時代 e 平安時代 f 中 世
B 石 器
C 金属製品
D 玉 類

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図 …… 4
挿図 2 調査位置及び周辺地図 …… 5
挿図 3 92・93・94号住居址 …… 8
挿図 4 133・136号住居址 …… 9
挿図 5 89・90・90号住居址 …… 10
挿図 6 95・107号住居址 …… 12
挿図 7 97・98号住居址 …… 14
挿図 8 99・103号柱居址 …… 16
挿図 9 100・106号住居址 …… 17
挿図10 101号住居址 …… 18
挿図11 104・105・124号住居址 …… 20
挿図12 108号住居址 …… 22
挿図13 109・112号住居址 …… 23
挿図14 110号住居址・138号住居址カマド …… 24
挿図15 111・129号住居址 …… 26
挿図16 113・115号住居址 …… 27
挿図17 114号住居址 …… 29
挿図18 116・117号住居址 …… 31
挿図19 118号住居址 …… 32
挿図20 119号住居址 …… 34

挿図21　120号住居址 …… 35
挿図22　122号住居址 …… 36
挿図23　125号住居址 …… 37
挿図24　125号住居址カマド …… 38
挿図25　126号住居址 …… 39
挿図26　127号住居址 …… 40
挿図27　127号住居址カマド …… 41
挿図28　128号住居址 …… 42
挿図29　130・135号住居址 …… 44
挿図30　130号住居址カマド …… 45
挿図31　131号住居址 …… 46
挿図32　132号住居址 …… 47
挿図33　134号住居址 …… 49
挿図34　137号住居址 …… 50
挿図35　139号住居址 …… 51
挿図36　140号住居址 …… 52
挿図37　141号住居址 …… 54
挿図38　142号住居址 …… 55
挿図39　143号住居址 …… 56
挿図40　144号住居址 …… 57
挿図41　146号住居址 …… 58
挿図42　147号住居址 …… 59
挿図43　148号住居址 …… 60
挿図44　149号住居址 …… 61
挿図45　150・151号住居址 …… 62
挿図46　152号住居址 …… 63
挿図47　153号住居址 …… 64
挿図48　156号住居址 …… 65
挿図49　96号住居址 …… 67
挿図50　102号住居址 …… 68
挿図51　123号住居址 …… 69
挿図52　145号住居址 …… 70
挿図53　155号住居址 …… 71
挿図54　掘立柱建物址25 …… 72

挿図55　掘立柱建物址26 …… 73
挿図56　掘立柱建物址27 …… 74
挿図57　掘立柱建物址28 …… 75
挿図58　掘立柱建物址29 …… 76
挿図59　掘立柱建物址30 …… 77
挿図60　掘立柱建物址31 …… 78
挿図61　掘立柱建物址32 …… 79
挿図62　掘立柱建物址33 …… 80
挿図63　掘立柱建物址34 …… 81
挿図64　掘立柱建物址35 …… 82
挿図65　掘立柱建物址36 …… 83
挿図66　掘立柱建物址37 …… 84
挿図67　掘立柱建物址38 …… 85
挿図68　掘立柱建物址39 …… 86
挿図69　掘立柱建物址40 …… 87
挿図70　掘立柱建物址41 …… 88
挿図71　掘立柱建物址42 …… 89
挿図72　掘立柱建物址43 …… 90
挿図73　掘立柱建物址44 …… 91
挿図74　掘立柱建物址45 …… 92
挿図75　掘立柱建物址46 …… 93
挿図76　掘立柱建物址47 …… 94
挿図77　掘立柱建物址48 …… 95
挿図78　掘立柱建物址49 …… 96
挿図79　掘立柱建物址50 …… 97
挿図80　掘立柱建物址51 …… 98
挿図81　掘立柱建物址52 …… 99
挿図82　土坑16～19 …… 100
挿図83　小竪穴８～10 …… 101
挿図84　溝址39 …… 104
挿図85　溝状址２～５ …… 105
挿図86　集石４～９ …… 106
挿図87　火葬墓１・２ …… 109
挿図88　柱穴平面図(1) …… 110

挿図89　柱穴平面図(2) …… 111
挿図90　柱穴平面図(3) …… 112
挿図91　柱穴平面図(4) …… 113
挿図92　柱穴平面図(5) …… 114
挿図93　調査地点周辺集落変遷図(1) …… 120
挿図94　〃　(2) …… 121

付　図　目　次

付図1　遺構全体図
付図2　溝址37・柱列址1
付図3　溝址38

図　版　目　次

第1図　92・136号住居址出土土器・石器 …… 126
第2図　136・89・90号住居址出土土器・石器 …… 127
第3図　90号住居址出土土器 …… 128
第4図　90・91号住居址出土土器・石器 …… 129
第5図　91・95号住居址出土土器・石器 …… 130
第6図　98号住居址出土土器・石器 …… 131
第7図　101・103号住居址出土土器 …… 132
第8図　103号住居址出土土器 …… 133
第9図　104号出土土器 …… 134
第10図　104～106号出土土器 …… 135
第11図　106号住居址出土土器 …… 136
第12図　107～110号住居址出土土器 …… 137
第13図　111・112・114号住居址出土土器 …… 138
第14図　116～118号住居址出土土器 …… 139
第15図　119・120号住居址出土土器・石器 …… 140

第16図　122・125号住居址出土土器 …… 141
第17図　125号住居址出土土器 …… 142
第18図　127号住居址出土土器 …… 143
第19図　127号住居址出土土器 …… 144
第20図　127・128号住居址出土土器・石器 …… 145
第21図　129・130号住居址出土土器 …… 146
第22図　130号住居址出土土器 …… 147
第23図　130号住居址出土土器 …… 148
第24図　131・132号住居址出土土器 …… 149
第25図　132号住居址出土土器 …… 150
第26図　133・134号住居址出土土器 …… 151
第27図　134・135・137・138号住居址出土土器 …… 152
第28図　139・140号住居址出土土器 …… 153
第29図　140・141号住居址出土土器・石器 …… 154
第30図　142・144号住居址出土土器 …… 155
第31図　144号住居址出土土器 …… 156
第32図　146・147・149号住居址出土土器 …… 157
第33図　149・152号住居址出土土器・石器 …… 158
第34図　152・153・156号住居址出土土器 …… 159
第35図　156・96号住居址出土土器 …… 160
第36図　96号住居址出土土器 …… 161
第37図　96号住居址出土土器・石器 …… 162
第38図　102・123号住居址出土土器・土製品 …… 163
第39図　123号住居址出土土器 …… 164
第40図　145号住居址出土土器 …… 165
第41図　155号住居址，掘立柱建物址33・35・40・47・51出土土器 …… 166
第42図　92・101・106・108号住居址出土土器 …… 167
第43図　溝址37出土土器 …… 168
第44図　溝址37出土土器 …… 169
第45図　溝址37出土土器 …… 170
第46図　溝址37出土土器 …… 171
第47図　溝址37出土土器・石器 …… 172
第48図　溝址37出土土器 …… 173
第49図　溝址38出土土器 …… 174

第50図　溝址38出土土器 …… 175
第51図　溝址38・39出土土器・石器 …… 176
第52図　遺構外出土土器(1) …… 177
第53図　遺構外出土土器(2) …… 178
第54図　遺構外出土土器(3) …… 179
第55図　遺構外出土土器(4) …… 180
第56図　遺構外出土土器(5) …… 181
第57図　遺構外出土土器(6) …… 182
第58図　遺構外出土土器(7) …… 183
第59図　遺構外出土土器(8) …… 184
第60図　遺構外出土土器(9) …… 185
第61図　遺構外出土石器(1) …… 186
第62図　遺構外出土石器(2) …… 187
第63図　遺構外出土石器(3) …… 188
第64図　遺構外出土石器(4) …… 189
第65図　遺構外出土石器(5) …… 190
第66図　遺構外出土石器(6) …… 191
第67図　遺構外出土石器(7) …… 192
第68図　遺構外出土石器(8) …… 193
第69図　遺構外出土石器(9) …… 194
第70図　遺構外出土石器(10) …… 195
第71図　遺構外出土石器(11) …… 196
第72図　遺構外出土石器(12) …… 197
第73図　遺構及び遺構外出土遺物 …… 198
第74図　遺構出土金属製品 …… 199
第75図　遺構出土金属製品 …… 200
第76図　遺構外出土鉄製品 …… 201
第77図　遺構及び遺構外出土遺物 …… 202

写真図版目次

図版 1　調査前風景 …… 204
図版 2　遺構分布状況 …… 205
図版 3　遺構分布状況 …… 206
図版 4　遺構分布状況 …… 207
図版 5　92号住居址，同遺物出土状態，136号住居址 …… 208
図版 6　90・91号住居址，91号住居址遺物出土状態，95号住居址 …… 209
図版 7　97・98号住居址 …… 210
図版 8　99～101号住居址 …… 211
図版 9　103号住居址，同カマド，104・105号住居址 …… 212
図版10　106号住居址，同遺物出土状態，107号住居址 …… 213
図版11　109～111号住居址 …… 214
図版12　112～114号住居址 …… 215
図版13　115・116号住居址 …… 216
図版14　117号住居址，118号住居址，同カマド …… 217
図版15　119・120・122号住居址 …… 218
図版16　124号住居址，125号住居址，同遺物出土状態 …… 219
図版17　126号住居址，同遺物出土状態，127号住居址 …… 220
図版18　128号住居址，129号住居址，同カマド断面 …… 221
図版19　130号住居址，同遺物出土状態，131号住居址 …… 222
図版20　132号住居址，134号住居址，同カマド …… 223
図版21　135号住居址，137号住居址埋設土器，同断面 …… 224
図版22　138～140号住居址 …… 225
図版23　141号住居址，同遺物出土状態，142号住居址 …… 226
図版24　148号住居址，149号住居址，同遺物出土状態 …… 227
図版25　152・153・156号住居址 …… 228
図版26　96号住居址，同カマド断面 …… 229
図版27　102号住居址，同遺物出土状態 …… 230
図版28　123号住居址，同遺物出土状態 …… 231
図版29　145号住居址遺物出土状態，155号住居址，同カマド …… 232
図版30　掘立柱建物址25・28・29 …… 233
図版31　掘立柱建物址30・31・33 …… 234

図版32　掘立柱建物址34・38，35，37 …… 235
図版33　掘立柱建物址39・40・46 …… 236
図版34　土坑16・溝状址２，土坑17・18 …… 237
図版35　土坑19，小竪穴８・10 …… 238
図版36　溝址37，柱列址１，溝址37断面 …… 239
図版37　溝址38・39，溝状址３ …… 240
図版38　集石５・７，遺構外遺物出土状態 …… 241
図版39　92・136・90・91号住居址出土遺物 …… 242
図版40　95・98・103号住居址出土遺物 …… 243
図版41　103・104号住居址出土遺物 …… 244
図版42　105・106号住居址出土遺物 …… 245
図版43　108・109・111・114・116・118号住居址出土遺物 …… 246
図版44　119・122・125号住居址出土遺物 …… 247
図版45　125・127号住居址出土遺物 …… 248
図版46　127～129号住居址出土遺物 …… 249
図版47　130号住居址出土遺物 …… 250
図版48　130～132号住居址出土遺物 …… 251
図版49　132～134号住居址出土遺物 …… 252
図版50　135・137・139～141号住居址出土遺物 …… 253
図版51　142・144号住居址出土遺物 …… 254
図版52　144・149号住居址出土遺物 …… 255
図版53　152・156・96号住居址出土遺物 …… 256
図版54　102号住居址出土遺物 …… 257
図版55　123・145号住居址出土遺物 …… 258
図版56　溝址37出土遺物 …… 259
図版57　溝址38・遺構外出土遺物 …… 260
図版58　遺構外出土遺物 …… 261
図版59　遺構外出土遺物 …… 262
図版60　遺構外出土遺物 …… 263
図版61　重機作業風景，発掘調査風景 …… 264
図版62　発掘調査風景，現地見学会風景 …… 265

Ⅰ 経　　過

1．調査に至るまでの経過

昭和63年10月11日飯田ヂーゼル株式会社　代表取締役中島成人より，飯田市座光寺4737番地外に工場建設を計画し，それについて当該地の文化財に関する保護協議の申請が提出された。飯田市教育委員会では，当該地が埋蔵文化財包蔵地恒川遺跡群の一画に位置し，座光寺バイパス建設に先立つ隣接地の発掘調査でも，官衙的諸遺構が検出される等，重要遺構等が存在する可能性が高いと判断された。一方計画は，市内の現施設の更新について，これ以上の規模の拡大が困難で，高度化する社会経済情勢に対応する上で，郊外への進出が不可欠というものであった。そこで，長野県教育委員会文化課に職員派遣を申請し，関係者の立会いの下，現地協議を実施した。その結果，文化財保護の立場からすると現状保存が望ましいが，事業の性格や周辺に及ぼす経済効果等考慮するとその建設は止むを得ず，事前に飯田市教育委員会による発掘調査を実施して完全な記録保存を図ることとなった。

2．調査の経過

諸協議の結果に基づいて，平成元年５月10日発掘調査に着手した。まず調査範囲の北側について重機により表土を除去し，続いて作業員を入れて遺構の検出作業を行なった。その結果，弥生時代及び古墳時代後期の竪穴住居址，奈良時代の掘立柱建物址・溝址等の多数の遺構が確認された。これらについて順次掘り下げを行ない精査した。また並行して写真撮影・測量作業を実施した。そして全体写真の撮影・測量調査・カマドの調査を行ない，引き続き調査区南側を調査した。重機による表土除去後，遺構確認・精査を行なった。写真撮影・測量調査を経て，10月12日現地作業を終了し，現地の埋め戻しを実施した。

その後，平成２年度にかけて飯田市考古資料館において図面・写真類の整理作業，出土遺物の水洗・注記・接合・復元・実測・写真撮影を実施し，報告書作成作業にあたった。

3．調査組織

1）調　査　団

調査担当者　小林　正春・馬場　保之

調　査　員　佐々木嘉和・佐合　英治・吉川　豊・功力　司・渋谷恵美子

作　業　員　市瀬　長年・今村　勝子・今村　春一・片桐　卓治・北村　重実
三村いさ子・木下喜代恵・木下　傳・木下　当一・坂下やすゑ
向田　一雄・森　章・佐々木いさ子・佐々木　啓・佐々木智子
沢柳　敞介・吉川　正実・三石　久雄・高木　義治・高橋　寛治
高橋収二郎・豊橋　宇一・中平　隆雄・松島　卓夫・原田四郎八
樋本　宣子・福沢トシ子・藤本　幸吉・松下　真幸・松下　直一
古田八重子・細井　光代・細田　七郎・正木実重子・正木　睦子
櫛原　勝子・吉川紀美子・宮内真理子・唐沢古千代・吉川　悦子
松本　恭子・福沢　育子・牧内　八代・南井　規子・筒井千恵子
池田　幸子・福沢　幸子・牧内とし子・大蔵　祥子・平栗　陽子
小池千津子・吉沢まつ美・森　信子・小平不二子・丹羽　由美
川上みはる・田中　恵子・林　勢紀子・木下　玲子・佐々木真奈美
萩原　弘枝・三浦　厚子・森藤美知子・牧内喜久子・小林　千枝
唐沢さかえ・金子　裕子・原沢あゆみ・金井　照子・木下　早苗

2）事　務　局

飯田市教育委員会社会教育課

竹　村　隆　彦　（社会教育課長）
中　井　洋　一　（社会教育課文化係長）
小　林　正　春　（社会教育課文化係）
吉　川　　豊　（　　〃　　）
馬　場　保　之　（　　〃　　）
土　屋　敏　美　（　　〃　　平成元年度）
功　力　　司　（　　〃　　〃　）
篠　田　　恵　（　　〃　　平成２年度）

Ⅱ 遺跡の環境

1．自然環境

飯田市座光寺地区は飯田市街地の北東4㎞に位置し，南西を下伊那郡上郷町，北東を同高森町，東南を天竜川をはさんで同喬木村に囲まれた行政区画上飯田市の飛地である。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり，両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘がみられるとともに，山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており，複雑な段丘地形を呈している。座光寺地区の場合，断層運動でつくられた段丘で大きく上段と下段に分けられる。上段は中央アルプスの山裾部から大規模な扇状地が発達し，扇状地が発達し，扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。下段は数段の小段丘からなり，恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合，北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し，南側は比較的段丘面がよく残る等複雑な微地形を呈する。遺跡群の北側は南大島川の旧河道，南側は田中・倉垣外地籍南側の湿地帯で画されている。

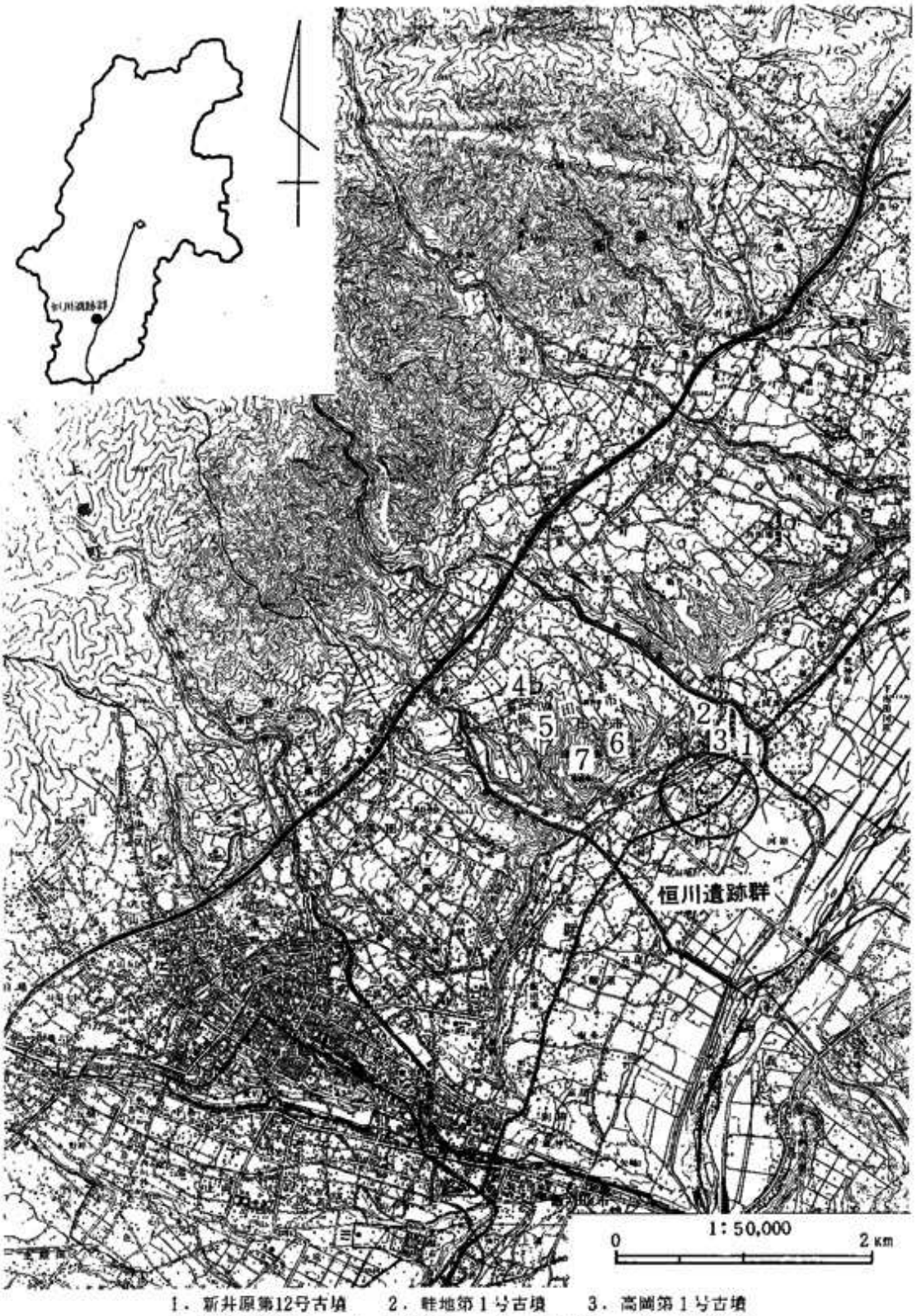
新屋敷遺跡は遺跡群の北側に位置し，今次調査地点は扇状地の中央扇端付近にあたる。このため調査に際しては地山の状態が各所で複雑に変化しており，殊に西端の礫混の押し出し部分では遺構確認に難渋した。調査地点の南西側は約200ｍで小段丘と扇状地の接点にあたる「恒川清水」に至る。地域の生活用水として利用されていたが，座光寺バイパス建設以後冬期枯渇するようになってしまった。「恒川清水」の南側には湿地帯が広がり，また南西側の小段丘崖下には点々と湧水がある。調査地点の南東側は約100ｍで段丘崖に到り，比高差約17ｍを測る。南西側と同様，湧水に恵まれる。

以上のように，扇状地上の比較的乾燥した地域であり，周囲に豊富な湧水地を控えた居住の適地であったといえる。

2．歴史環境

座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳が多いことで古くから知られており，埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は旧石器時代末までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており，上段・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。

上段は縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く，とくに山裾部にかけては縄文時代の遺跡が集中し，鳥居龍蔵の調査で知られた大門原遺跡等がある。東面した緩傾斜の扇状地扇央部分に



1．新井原第12号古墳　2．畦地第1号古墳　3．高岡第1号古墳
4．庫光寺原遺跡　5．中島遺跡　6．北本城跡　7　南本城跡

挿図1　調査遺跡及び周辺遺跡位置図

今次調査地点　　範囲確認調査地点　　緊急調査地点

挿図２　調査位置及び周辺地図

あたり，大規模な集落址の存在がうかがえる。扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の遺跡が分布する。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり，具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。昭和37年，前年の集中豪雨による災害復旧工事用土砂採取のため調査された後期前半の座光寺原遺跡，昭和50年農業構造改善事業に伴ない道路部分が調査された後期終末の中島遺跡等該期の典型的な集落があるといえる。段丘崖上部には北本城古墳をはじめとする古墳及び中世の山城２つがある。後者は小河川に開析された複雑な地形を生かしている。

下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており，時代毎占地した地点を若干異にしている。縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地に立地する。中期を除く他時期は遺物が中心で集落の実態は明確でないが，資料が十分でない各期にあって比較的良好な資資料を呈示している。中期は今次調査地点北側の新屋敷遺跡で後葉の大規模な集落の一部が調査されている。弥生時代中期から古墳時代前期にかけては弥生時代後期に一時的に拡大するものの基本的に扇状地上に位置し，古墳時代後期から平安時代の集落は扇状地及び南側の段丘面に拡大する。一方，古墳の分布は該期集落の外縁の，高岡第１号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近及び今次調査地点東側から連続する段丘崖上にみられる。これまでに調査された古墳は新井原第12号古墳（大正11年）・畦地第１号古墳（同12年）等ごく少数で，現在までに調査されずに消滅した古墳は数多くに上る。

今次調査地点周辺では，昭和51（1976）年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果，大型掘立柱建物址群や硯・鉄鈴・和同開弥銀銭等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている。そして昭和57（1982）年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で，古代「伊那郡衙」が追究されてきた。その結果，なお郡衙の中心部は不明であるものの具体的地点をあげて推定される段階に至り，同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。またバイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果，田中・倉垣外地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある。今次調査地点は推定中心部の東側に位置しており，これまで調査が及んでいない部分であることから，郡衙内でこの一帯がどのような役割を果たしたか解明されることが期待された地点である。

Ⅲ 調 査 結 果

1．調査区の設定

今次調査地点の調査区は以前調査された一般国道153号座光寺バイパス路線内の調査結果と整合させる必要がある。すなわち，阿弥陀垣外地籍（ＡＭＤＡ・Ｂ区）及び新屋敷地籍（ＡＲＹＡ区）に隣接するので，本来的にはこの調査区にのせるべきといえる。しかし，両区の設定にあたり，路線の中心杭№50を基準点に磁北を基準として調査区を設定しているため，現状でこの設定方法は困難であった。そこで，路線東側の道路幅杭№51を基準点（ＡＩ・ＡＪの境）に，幅杭№51・52を結ぶ線を基準線に２×２ｍのグリッドを設定した。またグリッド名は幅杭№51から路線に沿って西側へＡＩ・ＡＨ……ＡＡ・ＹＹ・ＹＸ……とアルファベット２文字の複合で，基準線から北側へ52・51・50……，南側へ53・54・55……と２桁の数字を用い，例えばＡＢ59のごとく表記した。なお65例は欠いている。（付図　１）

2．土層の堆積状態

今次調査地点の土層堆積状態は，調査範囲が広範に及ぶため，かなり様相が異なっている。基本的な層序の理解としては（挿図18），耕土以下，黄色砂土・暗褐色土で地山に至る。黄色砂土は，江戸時代のいわゆる『未満水』に伴う層で，層厚は20～30cm程度である。調査区全体に分布しているが，東端では痕跡的に残存するにとどまる。調査地が東に向かって傾斜しているため，北半では層の傾斜もほぼこれに沿っている。これに対し南半では南東隅に向かって暗褐色土が厚くなる。地山の状態は北側が黄色砂質ロームであるのに対し，中央で礫が多量に測じる。南側では黄褐色の砂層が厚く堆積している部分があり，自然流路であった可能性もある。

3．遺構と遺物

1）竪穴住居址

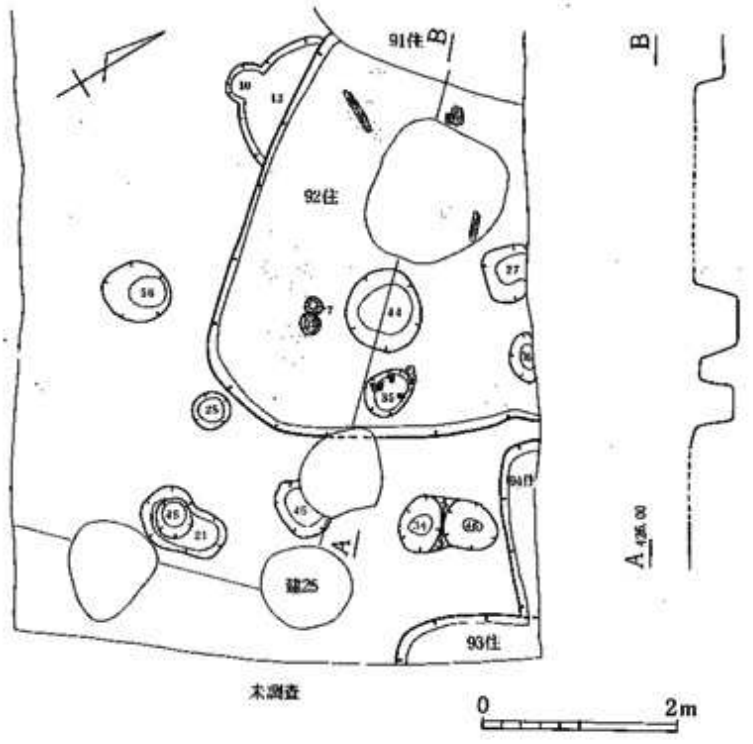
(1) 弥生時代中期

① 92号住居址（挿図3，第1図～10）

ＡＣ74グリッドを中心に検出した。91号住居址・掘立柱建物址25に切られる。重複や調査区外にかかるため規模等詳細は不明であるが，ゆがんだ隅丸方形を呈する竪穴住居址である。壁高は5～12cmを測り，浅いため立ち上がりの状態は不明である。床面は硬く焼け締まっている。多量の焼土・炭化材があり，焼失住居である。

遺物は弥生土器壺・甕，磨製石斧等があり，出土量は少ない。扁平片刃石斧(6)は基部側に緊縛痕が認められる。他に土師器甕・坏・高坏等混入品が多い。

出土遺物から弥生時代中期に比定される。



挿図3　92・93・94号住居址

② 136号住居址（挿図４，第２図１～３）

ＹＷ54グリッドを中心に検出した。132住居址に切られ，133号住居址に接する。大半が調査区外にかかり，規模等詳細は不明であるが，方形を呈すると考えられる竪穴住居址である。壁高は約10cmを測り，やや急に立ち上がる。

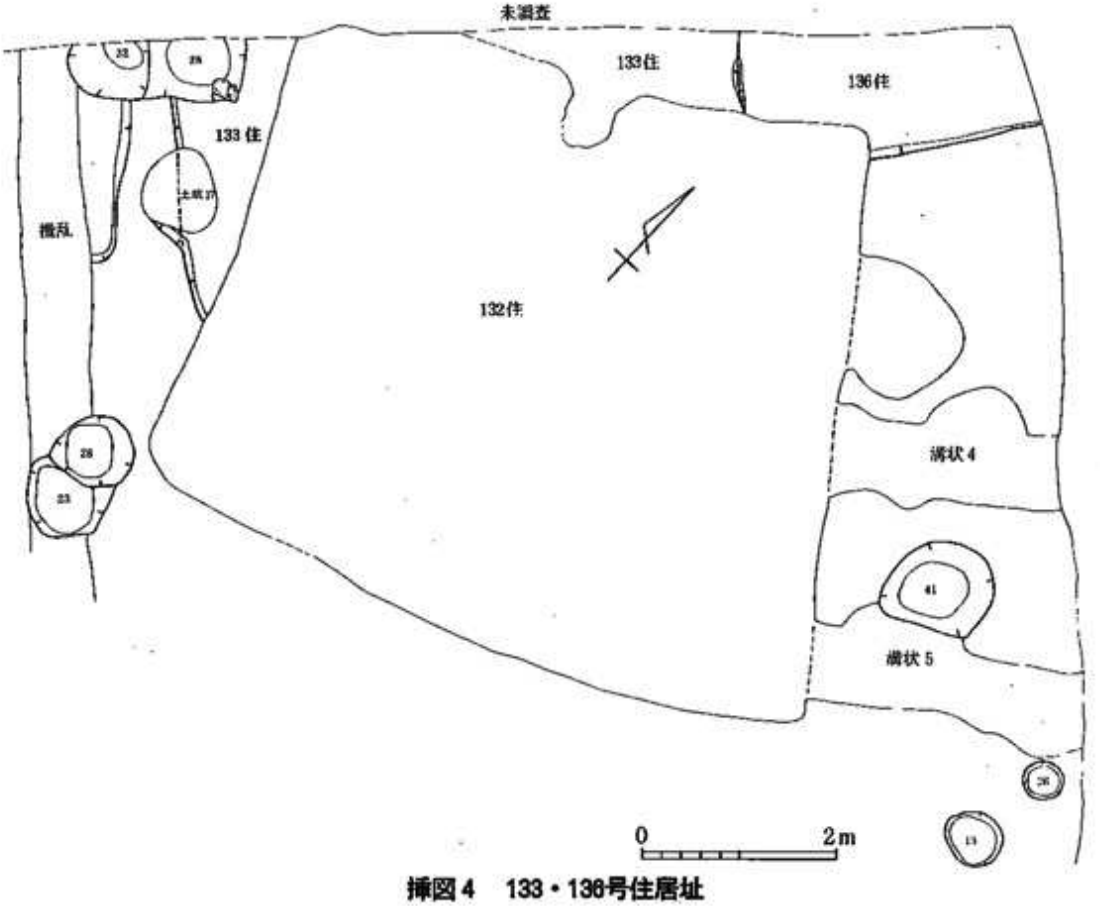
遺物は弥生土器壺・甕，磨製石斧等であり，出土量は少ない。甕は胴部に綾杉状の条線が施される。石器類は該期の良好なセットが出土した。

出土遺物から弥生時代中期に比定される。

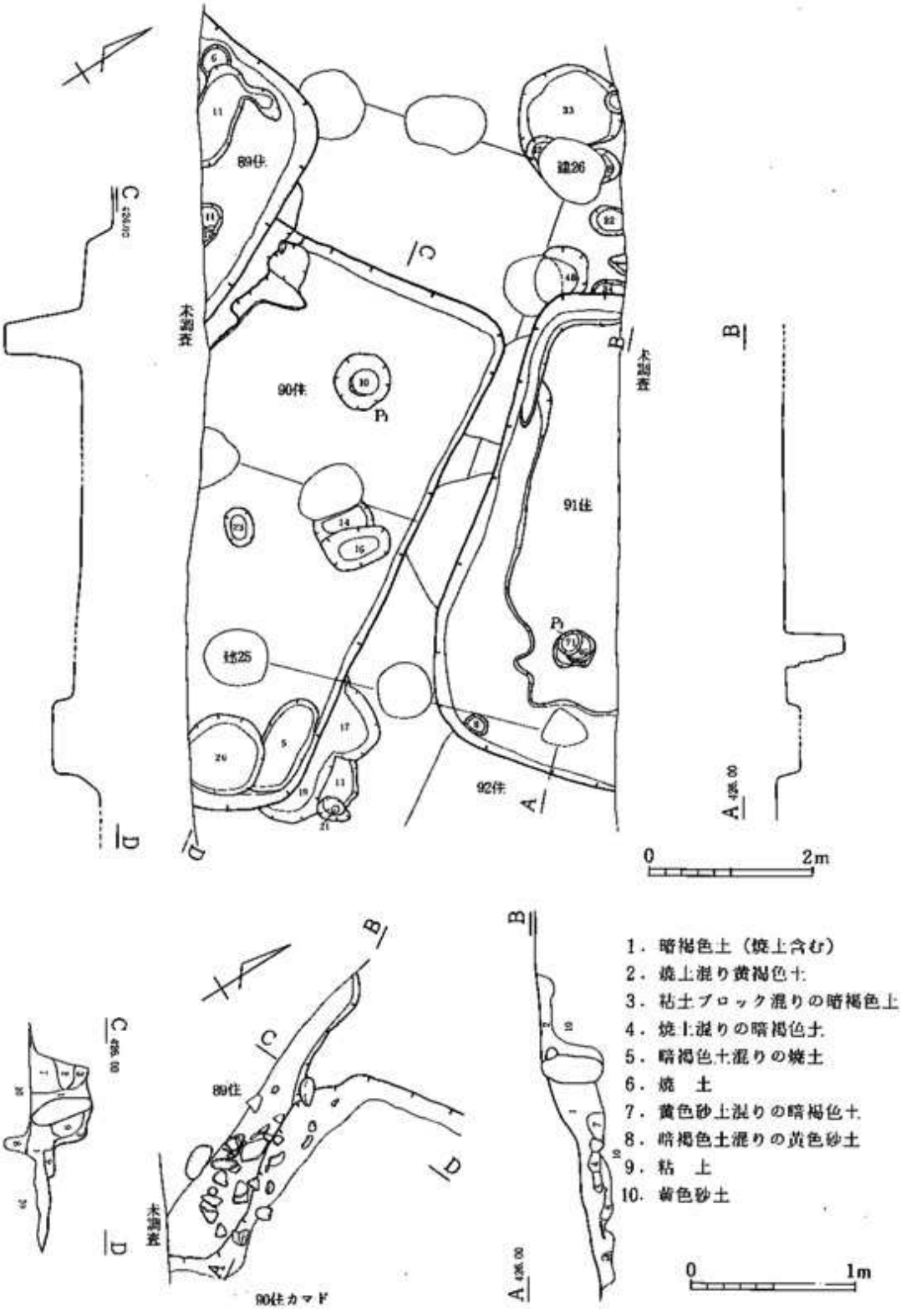
(2) 古墳時代後期

① 89号住居址（挿図５，第２図４）

ＡＡ70グリッドを中心に検出した。90号住居址を切り，掘立柱建物址26に切られる。大部分が調査区外にかかり規模等詳細は不明であるが，方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向は推定N24.7°Wを示す。覆土は褐色土の一層である。壁高は22～34cmとややゆるやかな傾斜をみせる。周溝は



挿図４　133・136号住居址



挿図5　89・90・91号住居址

一部痕跡的に検出された。床面は全体的にやや軟弱で暗黄色砂質土の貼り床がなされる。90号住居址の床面より高い。新旧関係は平面・調査区西側のセクション，本址貼り床及び90号住居址カマドの遺存状態により確認した。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋等があり，出土量は少ない。土師器甕は口縁部が小さく外反し胴部に最大径がある球形胴のものである。坏は内面黒色処理されるものがある。須恵器はいずれも小破片で，量的には土師器がほとんどである。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期終末に比定される。

② 90号住居址（挿図5，第2図5～第4図5，第73図2，第77図）

ＡＡ71グリッドを中心に検出した。91号住居址に接し，89号住居址，掘立柱建物址25・26に切られる。約半分が調査区外にかかり，東西方面の規模等は不明であるが，南北7.0ｍの方形を呈する竪穴住居址であると思われる。壁高は25～32cmを測り，東壁はやや急なものの，他の壁はゆるやかな立ち上がりの状態を示す。周溝は南東隅に部分的に把握された。床面はやや硬い。カマドの左半分は89号住居址によってこわされていたが，袖石・焼土が残っており，石芯粘土カマドと考えられる。左袖前部に土師器甕の集中がみられ，カマドが再構築された可能性がある。89号住居址貼り床下より本址遺物が出土している。

遺物は土師器甕・坏・高坏・甑，須恵器壺・蓋・坏等で出土量は多い。土師器甕は長胴形を呈し，外面ヘラミガキが施される。坏（第3図3）は内面黒色処理され，口縁部外反し胴部下半に稜をもつ。他に縄文時代中期深鉢・弥生時代中期壺・甕片が混入出土している。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

③ 91号住居址（挿図5，第4図6～第5図2）

ＡＣグリッドを中心に検出した。92号住居址を切り，掘立柱建物址25・26に切られる。大部分が調査区外のため東西方向の規模・施設等の詳細は不明である。南北約5.9ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向は推定N38.1° Wを示す。壁高は38～46cmを測り，急な立ち上がりを示す。周溝は北西隅の部分が良好に検出されたが，他の幅広の部分は貼り床の柔らかい部分まで掘り過ぎた。南西隅付近では床とほぼおなじレベルで編物石が検出された。床面は中央から北側は硬い。主柱穴は1本確認されたのみである。上部から土師器高坏，また脇から有孔の砥石が出土している。

遺物は土師器甕・坏・高坏・甑，須恵器蓋坏・砥石等があり，出土量は少ない。土師器坏には内面黒色処理されるものがある。甑（第4図7）は単孔である。

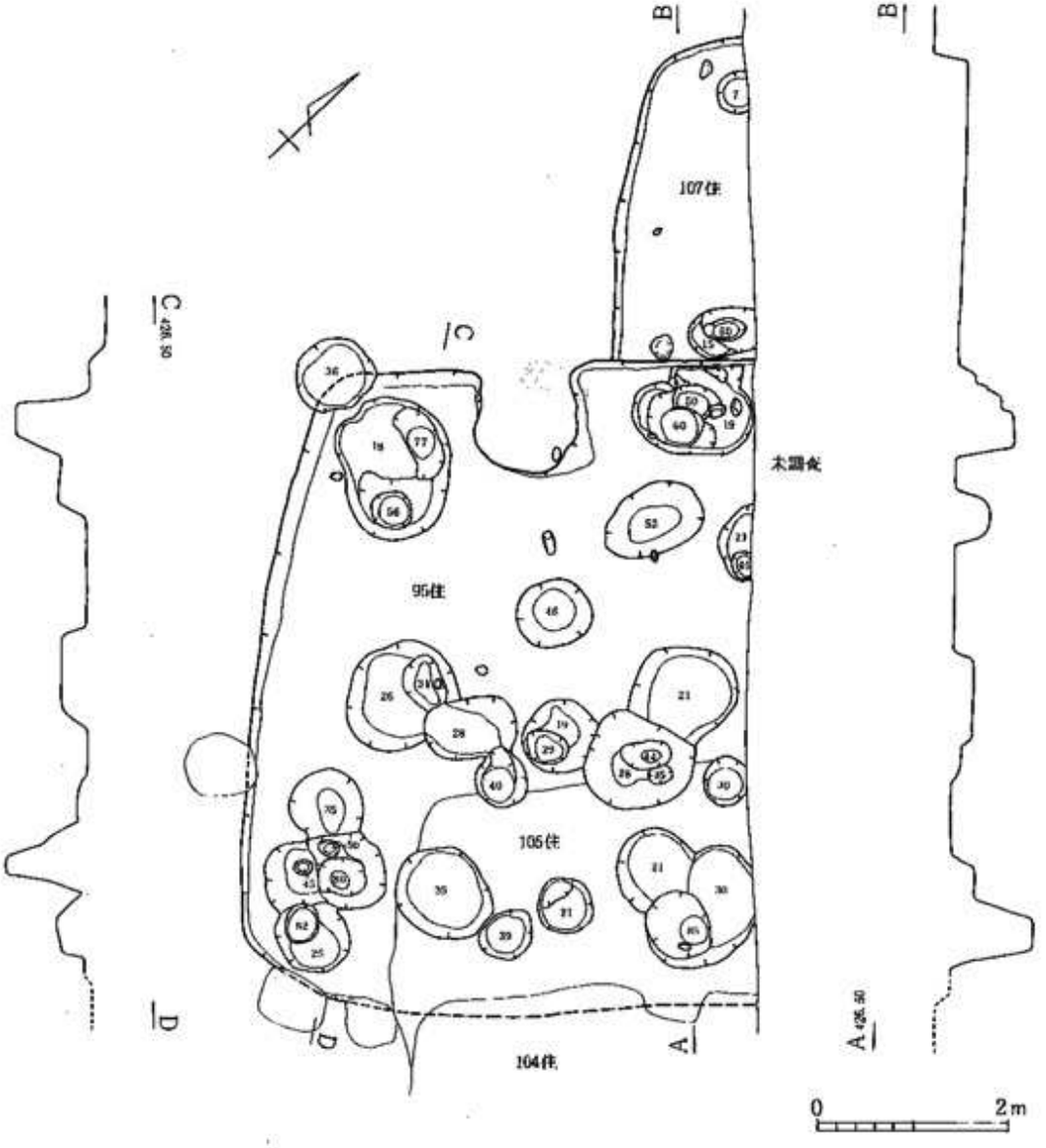
出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

④　93号住居址（挿図３）

ＡＣグリッドを中心に検出した。94号住居址を切る。大部分が調査区外にかかり詳細は不明である。覆土は暗褐色土である。壁高は10cm程度で立ち上がりの状態は不明である。床面は硬いが凹凸がある。

遺物は土師器甕等で出土量は僅少である。

詳細は不明であるが古墳時代後期に比定されよう。



挿図６　95・107号住居址

⑤ 94号住居址（挿図３）

ＡＣグリッドを中心に検出した。93号住居址に切られる。大部分が調査区外にかかり詳細は不明である。壁高は10cm程度で立ち上がりの状態は不明である。床面はやや軟弱で，平坦である。

遺物は僅少である。

詳細時期は不明であるが，古墳時代後期に比定されよう。

⑥ 95号住居址（挿図６，第５図３～７，第77図）

ＹＵ71を中心に検出した。104号住居址に切られ，105・107号住居址を切る。不整方形を呈する竪穴住居址であるが，東側約1／4は調査区外にかかり未調査である。主軸方向はN42.1° Wを示す。床面は中央部分を中心に硬く締まっており，105号住居址と重複する部分で貼り床が確認された。検出面から床面までの深さは８～18cmと浅く，壁の状態は不明瞭であるが，やや緩やかな立ち上がりを示すものと思われる。主柱穴はP_1～P_4が検出され，径60～80cmの不整円形を呈する。深さは60～85cmで，P_1を除きほぼ揃う。北壁はほぼ中央にカマドが設置されたと考えられるが，左袖に粘土・焼土が残るのみで，カマドの原形は失なわれていた。本址中央付近に炭が多量に認められるほか，P_4両側に土師甕，中央付近に須恵蓋坏，東側ほぼ中央から臼玉が出土した。

土師器甕・坏・高坏，須恵器壺・甕・坏・高坏等が出土されており，出土量は多い。土師器甕（第５図３）は頸部暗文風ヘラミガキの施される胴の張るもの，底部がハケナデ調整されるもの等ある。坏は平底で口縁が大きく開くもの等バラエティーに富み，内面黒色処理されるものが多い。須恵器蓋坏（6.7）は底部ロクロケズリが施される。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

⑦ 97号住居址（挿図７）

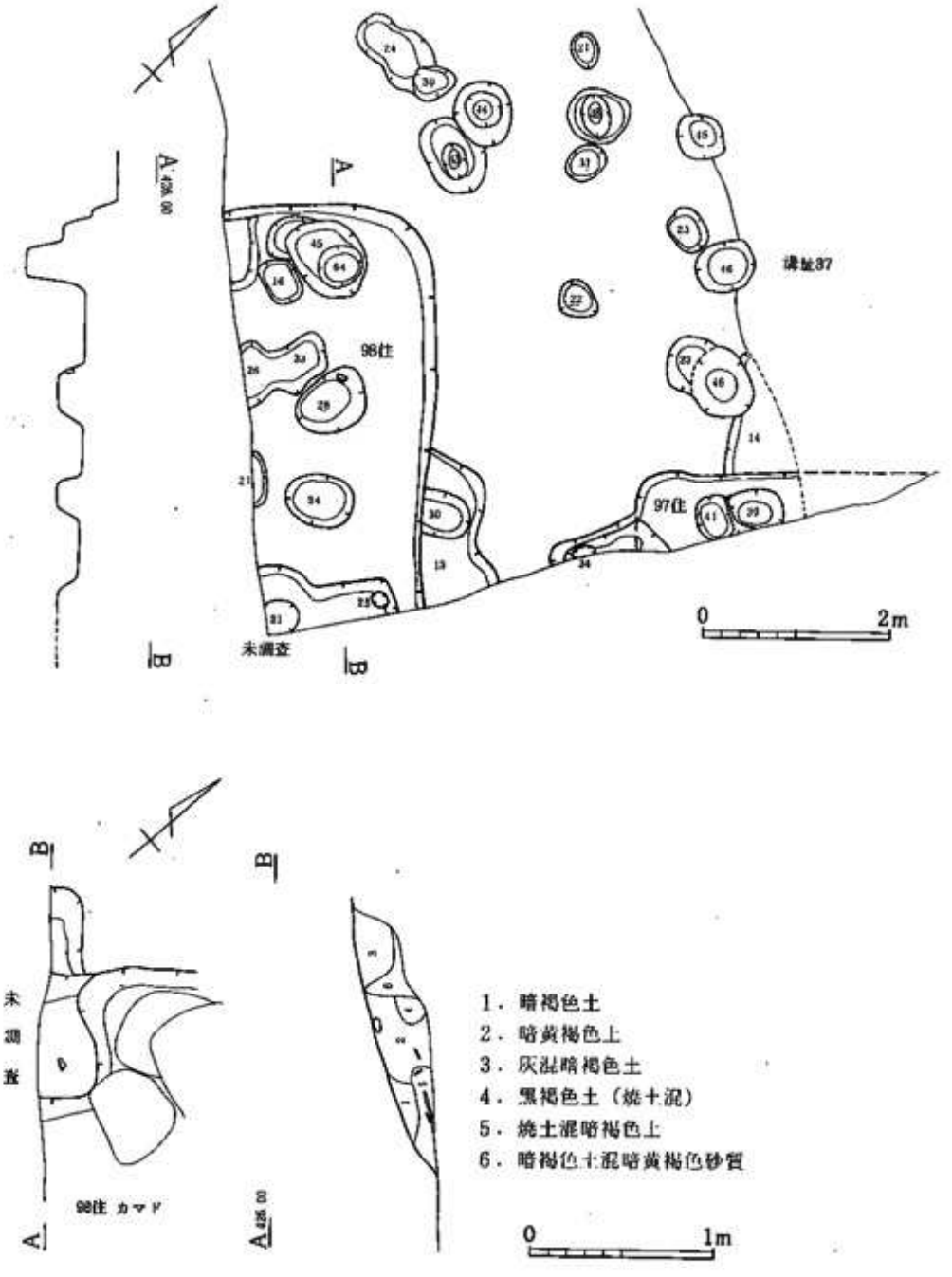
ＹＨ77を中心に検出された。溝址37に切られ，，また大部分は調査区外にかかる。平面形・規模等詳細は不明であるが，方形を呈する竪穴住居址であると考えられる。埋土は黒褐色土の一層である。壁の立ち上がりの状態はゆるやかであり，12～20cmの壁高を測る。北西隅の穴はだらだらと掘りくぼめられている。

出土遺物は土師器甕のほかほとんどなく，詳細時期は不明であるが，古墳時代後期に属すると考えられる。

⑧ 98号住居址（挿図７，第６・77図）

ＹＧ76を中心に検出した。大半が調査区外にかかり，約1／3を調査したにとどまる。隅丸方形

を呈する竪穴住居址で，主軸方向は推定N43.4° Wを測る。埋土は黒褐色土の一層である。床面は硬く締まる。18〜27cmの壁高を測り，急な立ち上がりを示す。北壁調査区際にカマドが構築さ



挿図7　97・98号住居址

れており，左袖に粘土が認められていることから粘土カマドと思われる。カマド右脇の穴は焼土が多量に含まれており，灰溜めであると思われる。内部より土師器甕がほぼ一個体出土した。また，床面直上で南隅付近からガラス小玉が出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・甑，須恵器甕・蓋・坏・ガラス小玉等があり，出土量は多い。土師器甕は胴部球形を呈するもの（第6図），長胴形を呈するものがあり，後者は内面ハケナデ調整される。内面黒色処理される坏がある。須恵器甕は内面同心円状の叩きが残る。ガラス小玉（第77図）は青色を呈する。

出土遺物等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

⑨ 99号住居址（挿図8）

ＹＯ76グリッドを中心に検出した。102号住居址に切られ，103号住居址を切る。大部分が調査区外にかかり，規模等詳細は不明であるが，隅丸方形を呈する竪穴住居址であると思われる。

102号住居址床面で確認しており，壁高及び壁の立ち上がりの状態は不明である。周溝は調査部分の全体で把握された。カマド下まで掘り込まれている。カマドの大部分は柱穴によってこわされていたが，調査区東側セクション等で確認するかぎりでは袖石がなく，粘土カマドと思われる。

遺物は土師器甕・坏等ごく少量である。土師器甕は外面ヘラミガキが施される。坏は内面黒色処理される。他に縄文時代中期深鉢・弥生時代甕片が混入出土している。

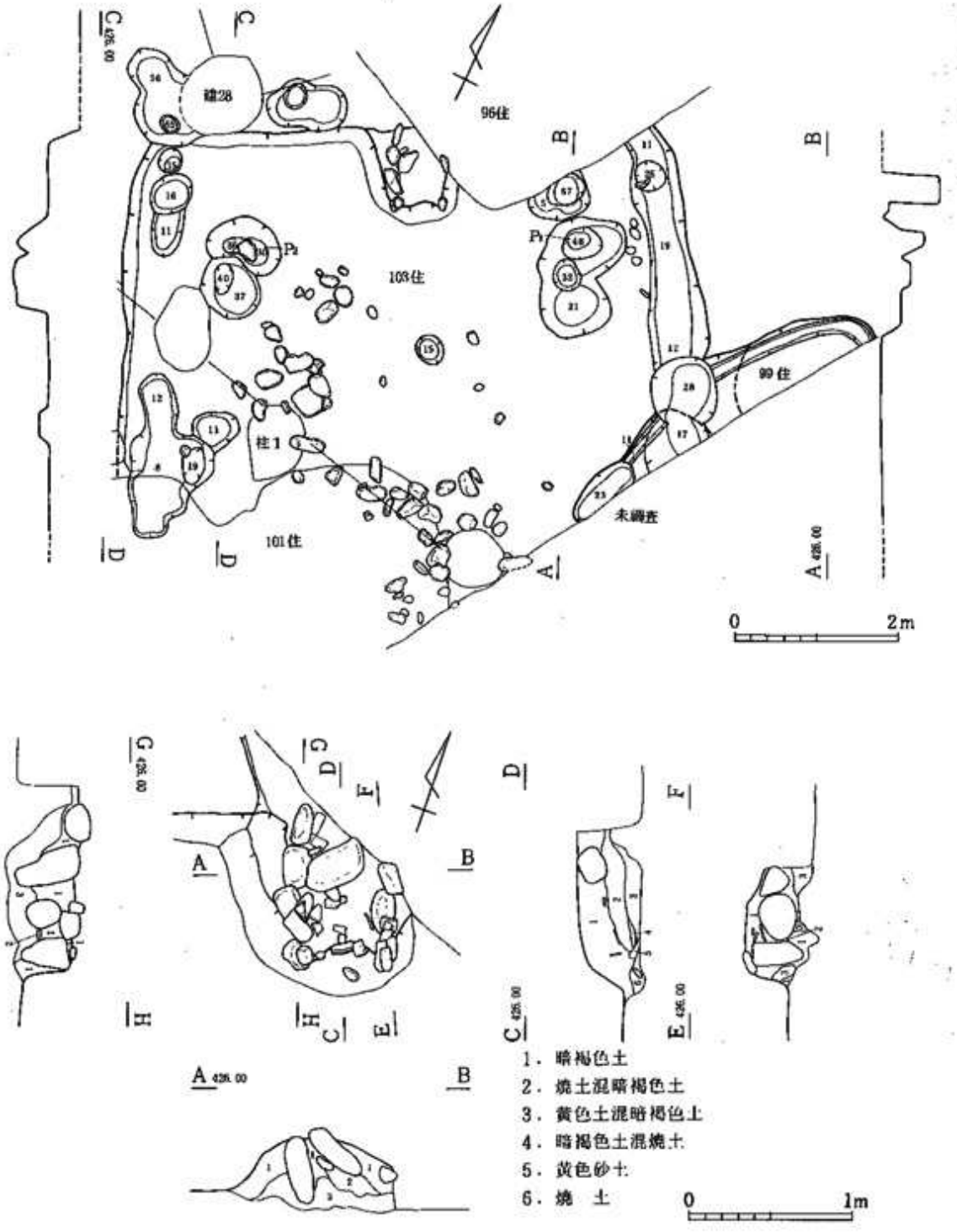
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

⑩ 100号住居址（挿図9）

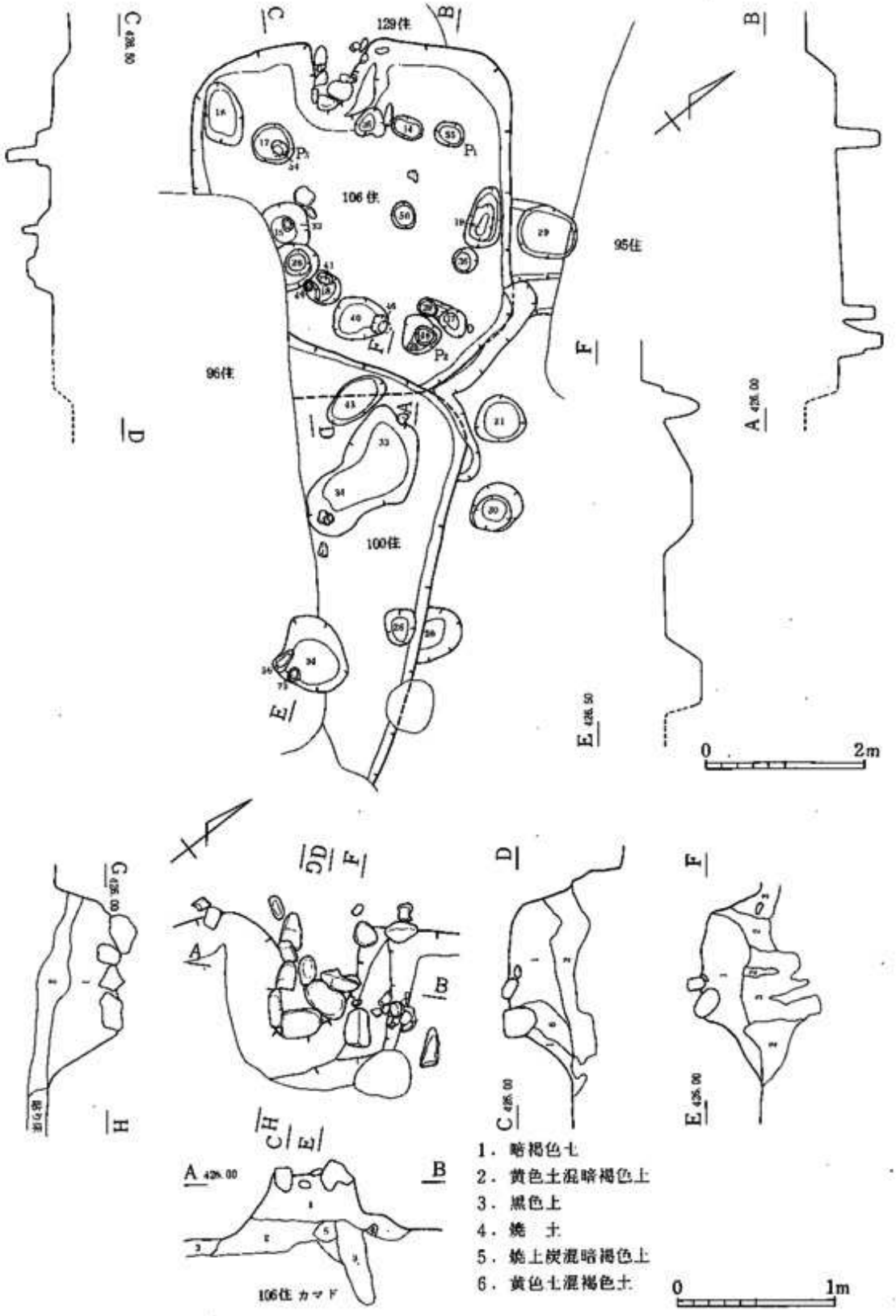
ＹＲ73グリッドを中心に検出した。96・102・106号住居址・溝址38に切られる。方形を呈すると考えられる竪穴住居址であるが，重複関係のため規模・付属施設の詳細は不明である。主軸方向はＮ39.9°Ｗを示す。覆土は黒褐色土である。壁高は約25cmを測り，西壁は急な立ち上がりを示すが，北壁はややゆるやかに立ち上がる。床面は全体的に硬く，中央付近は特に締まっている。主柱穴は確認できない。

遺物は土師器甕・坏，須恵器蓋等がある程度で，出土量は少ない。土師器坏は内黒で，内面に稜をもち口縁が外反するもの、小型で内湾するものがある。須恵器蓋は径が小さくつまみをもつもので，内側にかえりがある。

出土遺物・重複関係から古墳時代後期に比定される。



挿図8　99・103号住居址

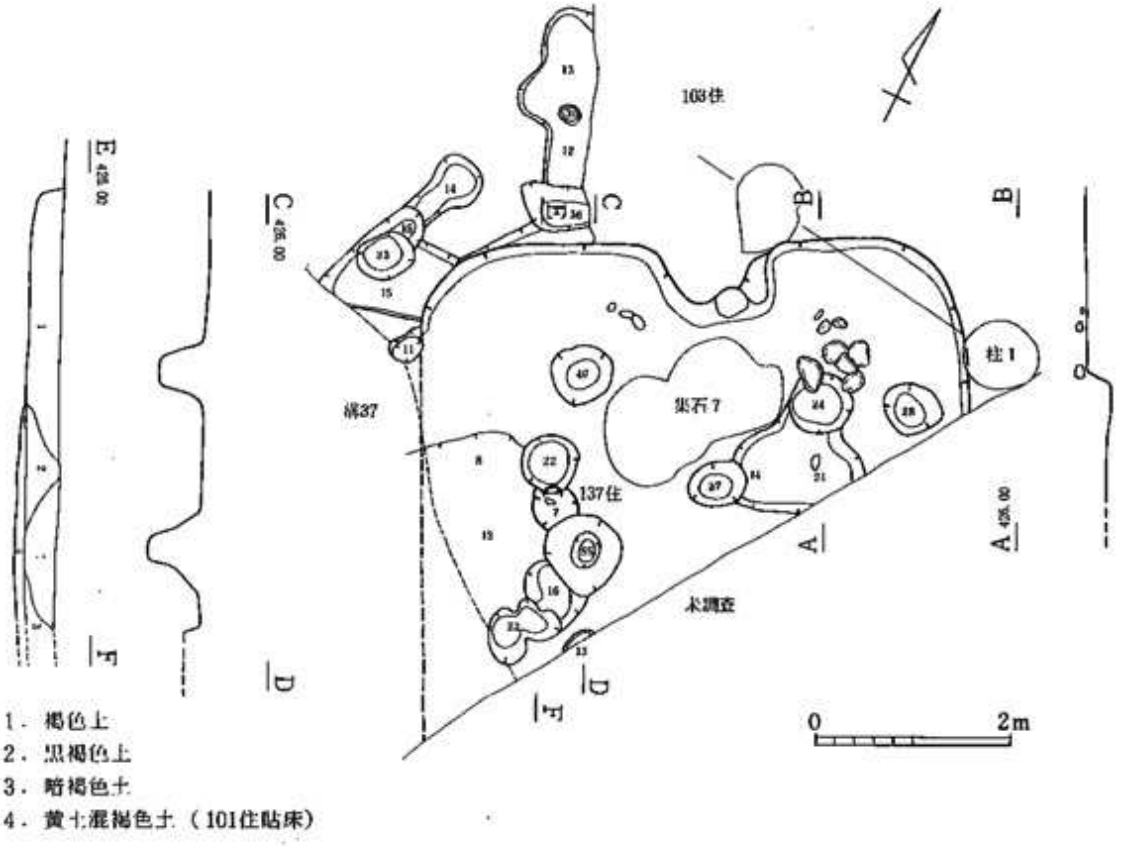


挿図9　100・106号住居址

⑪　101号住居址（挿図10，第７図１・２，第77図）

ＹＬ76グリッドを中心に検出した。103号住居址・溝址37・集石７に切られ，137号住居址を切る。南側の一部は調査区外にかかる。東西5.5ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はN28.6°Ｗを示す。覆土は褐色土である。壁高は21～29cmを測りややゆるやかな立ち上がりを示す。周溝は掘り込まれていない。床面は北東隅は硬く良好であり，中央から西側に暗黄色土の貼り床がある。明確な立ち上がりは検出されなかったものの，この付近まで137号住居址が広がるものと考えられる。主柱穴は２本確認され，径約60cmのほぼ円形を呈す。深さは揃わない。137号住居址埋設土器西側のだらだらとした落ち込みは137号住居址に伴なう可能性がある。また南東隅の小柱穴は平安時代の遺物が混入しており，本址より新しい。北壁中央に位置するカマドの遺存状態は不良であり，上部は103号住居址によりこわされており，わずかに焼土が認められたのみである。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋・坏・器台等があり，遺物量は少ない。土師器甕は長胴形を呈すると思われる。坏は内面黒色処理されるものがある。他に灰釉陶器皿が混入出土し



挿図10　101号住居址

ている。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

⑫ 103号住居址（挿図8，第7図3～第8図，第73図6～8，第77図）

YN75グリッドを中心に検出した。101号住居址を切り，96・99・102号住居址に切られる。重複のため，南北方向の規模は不明であるが，東西7.1mの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はN25.1° Wを示す。覆土は褐色土・暗黄褐色土が大半を占める。壁高は36cm程度と急な傾斜をみせる。周溝は東壁及び西壁下の一部に検出され，西壁側は壁から離れる。幅40～70cm，深さ8～19cmを測り，底面は凹凸がある。床面は全体的にやや軟弱である。主柱穴は2本確認され，掘り方は不整形を呈し，深さ36・48cmである。北壁中央右寄りに位置するカマドは一部96号住居址によってこわされているが，天井石・両側袖石が良好に残り，石芯粘土カマドである。天井石は右側がカマド内に落ちていた。焚き口付近に焼土が厚く発達する。本址西半に10～40cm程の礫が集中する。なお重複遺構の新旧関係は調査区東側のセクション及び101号住居址カマド上部に本址床面が確認されたことによる。

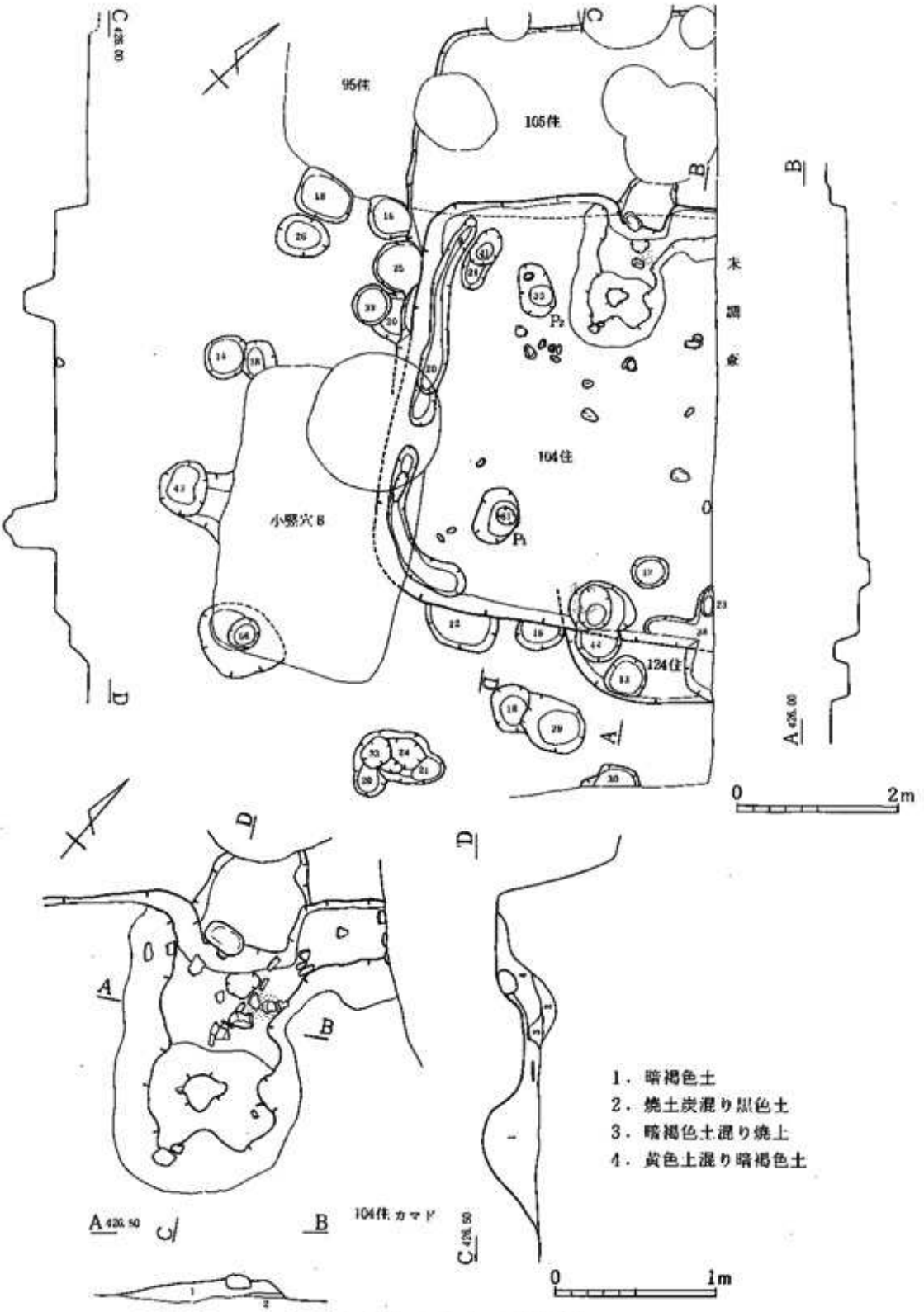
遺物は土師器壺・甕・坏・高坏・鉢，須恵器甕・蓋坏・提瓶等があり，出土量が多い。土師器甕には口縁部の立ち上がりの小さく胴部に最大径があるもの（第7図4）や，やや長胴のものがある。坏・高坏は内面黒色処理されるものがある。鉢は丸底の深い器形で内外へラミガキが施される。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

⑬ 104号住居址（挿図11，第10図1・2，第73図9，第77図）

YU73を中心に検出した。95・105・124号住居址を切り，小竪穴8に切られる。方形を呈する竪穴住居址であるが，東側約1／3は調査区外にかかり，未調査である。南北5.4m，主軸方向N37.9° Wを測る。床面は硬い部分が中心に確認された。壁高は約40cmを測り，やや緩やかな立ち上がりを示す。西壁下に幅20～30cm，深さ10～20cmの周溝が掘り込まれている。主柱穴は西壁側の2本が把握され，掘り方は不整形で，底部レベルが揃わない。北壁ほぼ中央と思われる位置にカマドが設けられている。カマドの平面形は細長くゆがみがあり，前方部上部にも焼土が認められたが，断面からみる限り壁側約1／2がカマドであると考えられる。燃焼部を中心に多量の焼土がある。遺存状態は不良であり，粘土・袖石等確認できない。カマド右脇を中心に土師器甕・坏が出土したほか，南西隅付近で刀子が出土している。

土師器甕・坏・高坏・鉢，須恵器甕・蓋・提瓶，刀子等が出土しており，遺物量は多い。土師器甕は小型甕が多く，頸部に稜をもつもの，口縁の立ち上がりが小さいものがある。鉢は大型で



挿図11　104・105・124号住居址

丸底状を呈する。須恵器甕は内面に同心円状の叩きがある。提瓶外面には顕著に自然釉がかかる。（第10図２）他に縄文時代中期後半・弥生時代中期・平安時代の遺物が混入出土した。

出土遺物・重複関係等より古墳時代後期に比定される。

⑭　105号住居址（挿図11，第10図３～５，第73図10，第77図）

ＹＵ72を中心に検出された。95・104号住居址に切られ，東側は調査区外にかかる。重複関係等のため，詳細は不明である。上部に95号住居址の貼り床が検出され，埋土は暗黄褐色土である。床面は硬く締まる。

出土遺物は土師器甕・坏・鉢，須恵器甕等があり，出土量はやや少ない。土師器甕片が大部分を占め，器形のわかるものでは胴部球形を呈する（第10図３）。他に縄文時代中期・弥生時代中期・古墳時代前期の遺物が少量混入出土している。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

⑮　106号住居址（挿図９，第10図６・７，第11図）

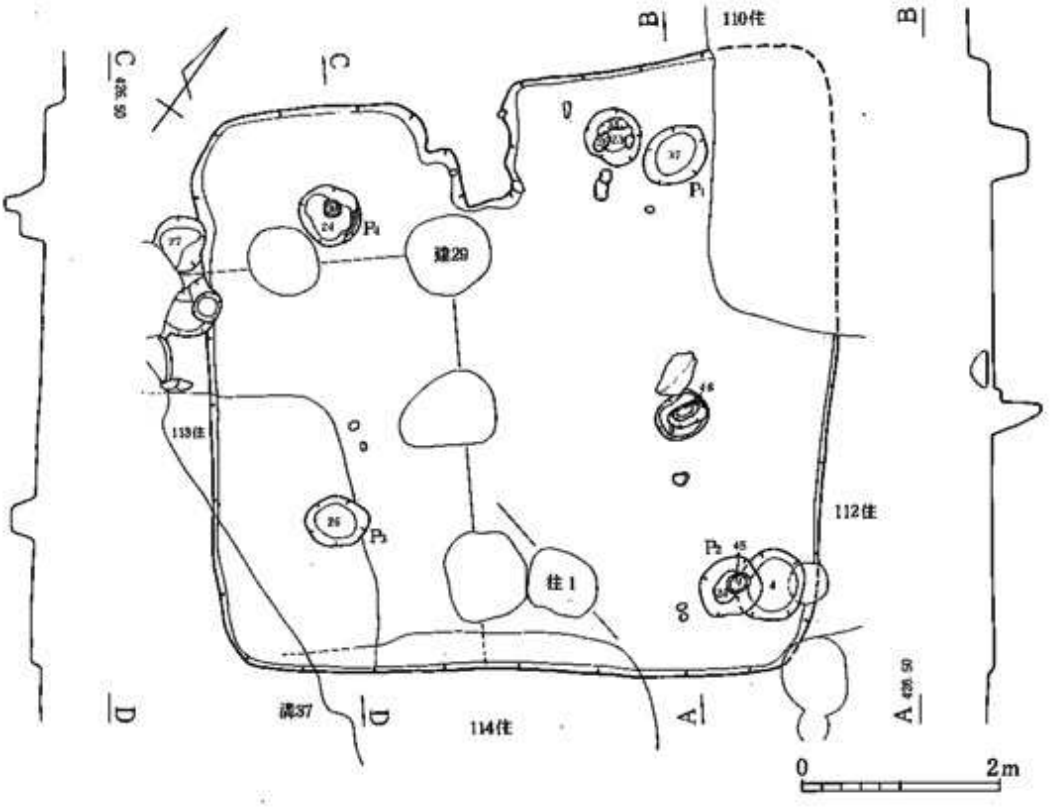
ＹＲ71グリッドを中心に検出した。100・129号住居址を切り，96号住居址・溝址38に切られる。東西4.0×南北4.4ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址であるが，やや不整形である。主軸方向はＮ46.7°Ｗを示す。覆土はほとんどが褐色土である。壁高は20～40cmを測り，全体的に壁上部までゆるやかな立ち上がりを示す。周溝は検出されなかった。床面はきわめて締まっている。主柱穴はP_1～P_3の３本が確認され，いずれも不整円形を呈し径20～35cmを測る。深さは48～55cmとほぼ揃う。カマドとした部分に明瞭な焼土はなく，その右側に袖石があり，カマドは右側にずれる。遺物は土師器甕片がほとんどで，出土量は少ない。

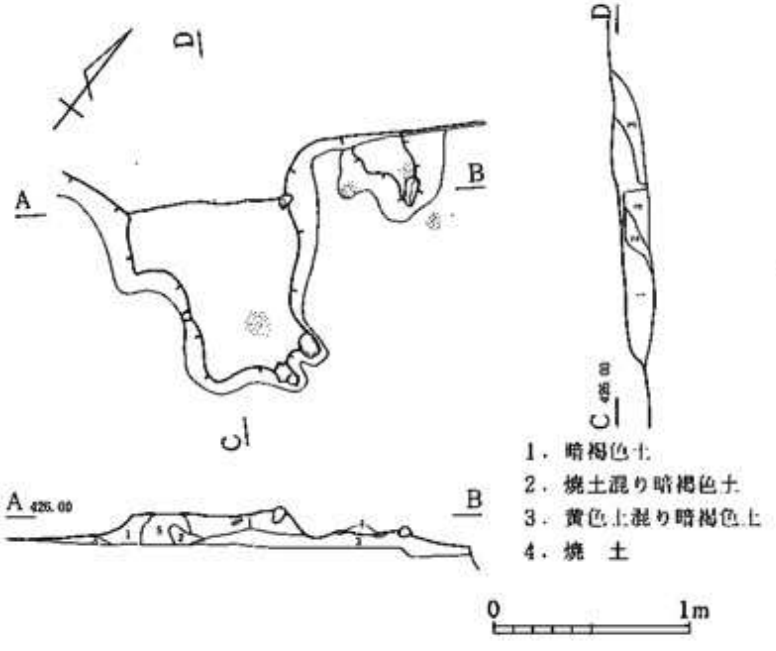
出土遺物・重複関係から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

⑯　107号住居址（挿図９，第10図６・７，第11図）

ＹＶ69を中心に検出した。95号住居址に切られ，大部分は調査区外にかかる。隅丸方形を呈する竪穴住居址と考えられるが，規模・主軸方向等詳細は不明である。床面はやや軟弱であり，ほぼ平坦であるが壁際はやや高い。埋土は褐色土の一層である。壁は急な立ち上がりを示し，壁高は約35cmを測る。柱穴３本が検出されたほかは付属施設は不明である。北側の柱穴より多量の赤色顔料塊が出土した。

遺物の出土量は少なく，土師器が大半を占める。土師器甕・坏・鉢，須恵器甕等がある。甕は口縁部やや外傾し胴中央に最大径をもつもの，胴部上半に最大径をもつもの，頸部に稜をもつ小





挿図12　108号住居址

型の甕（1・2）等がある。坏は内面黒色処理される。鉢は内黒で内外へラミガキの施されるもの，頸部に暗文風のへラミガキが施されているものがある。他に縄文時代中・晩期の土器片が混入出土した。

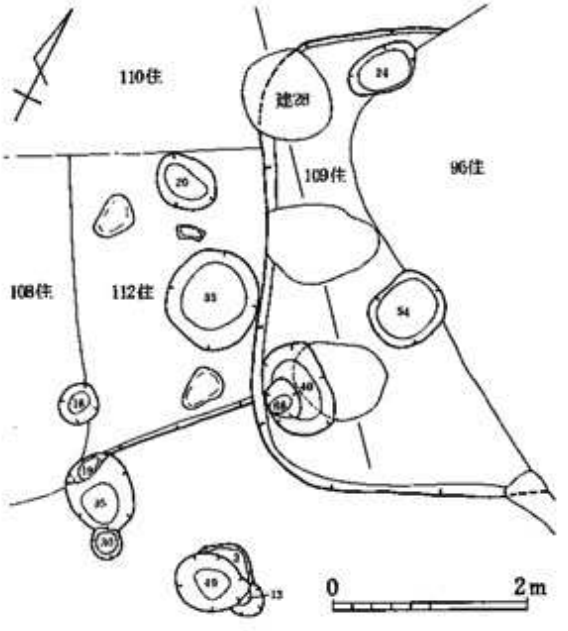
出土遺物・重複関係等から本址の所属時間は古墳時代後期に比定される。

⑰ 108号住居址（挿図12，第12図3～9，第77図）

YK70グリッドを中心に検出した。112号住居址を切り，110・113・114号住居址・掘立柱建物址29・柱列址1に切られる。東西6.2×南北6.0mの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はN40.8° Wを示す。覆土は褐色土の一層である。壁高は5～20cmを測り，壁上部が飛ばされているため，壁の立ち上がりの状態は不明である。周溝はない。床面は平坦で締まっている。主柱穴は4本確認され，径60～70cmを測り，不整円形を呈す。深さはP_1がやや深いものの，他は25cm前後と揃っている。P_2の西側に焼土が認められた。北壁やや西寄りに位置するカマドは両袖に粘土があり，粘土カマドと考えられる。右袖前部は掘りすぎにより破壊された。

遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢・甑，須恵器甕・坏・蓋があるが，出土量はやや少ない。土師器甕は胴部に最大径をもつ内外にへラミガキが施されるもの（第12図3）のほか，小型の甕(4)がある。坏は平底で口縁が外反するもの（8），底部が平底状にへラケズリされ器壁がほぼ直立するもの，内黒で小型のもの等がある。鉢は内外へラミガキが施され，大型で深めの内黒である。須恵器甕は内面同心円状の叩きの後，ナデ消しされている。

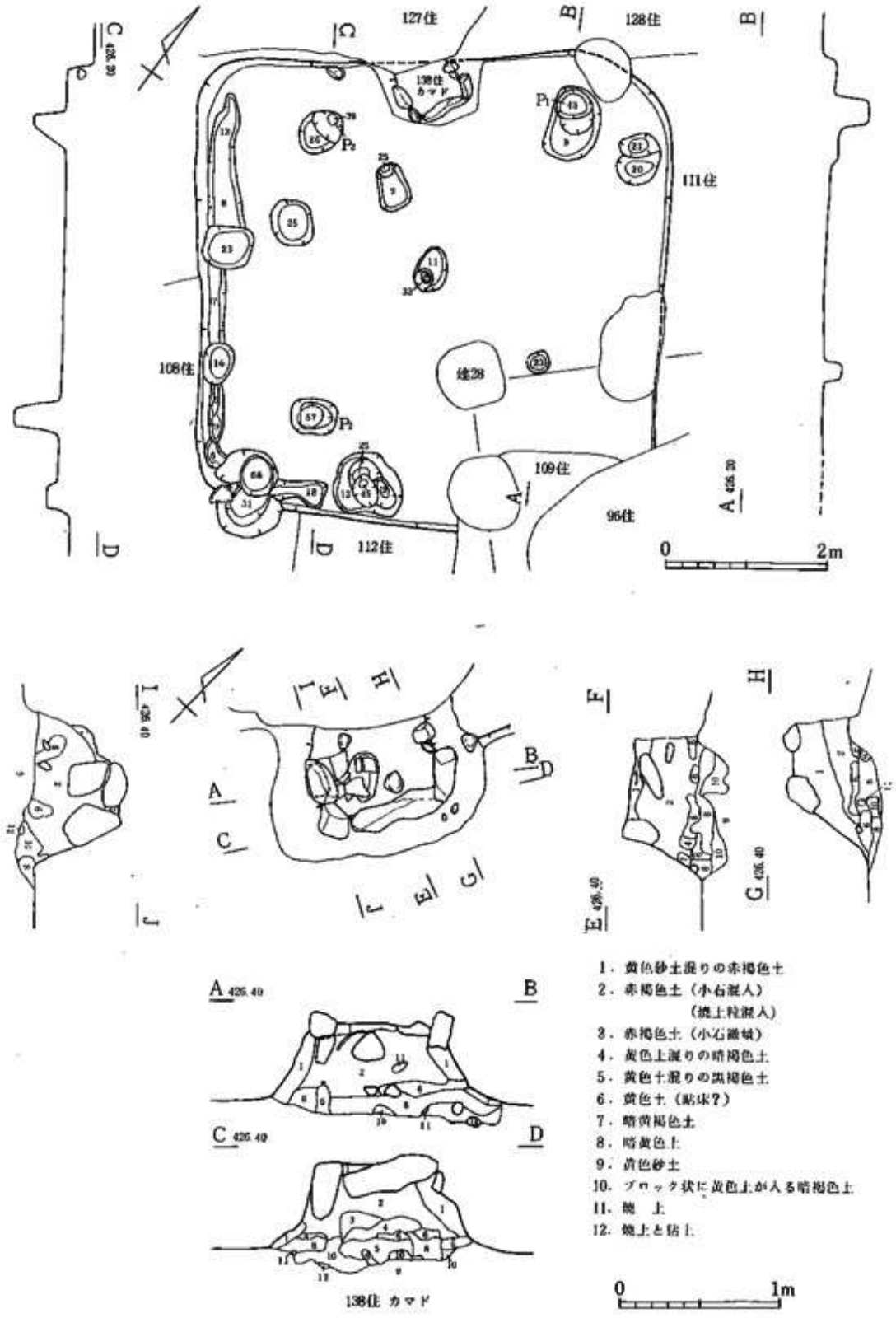
出土遺物・重複関係から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。



挿図13　109・112号住居址

⑱ 109号住居址（挿図13，第12図10・11，第77図）

YN71を中心に検出された。96号住居址・掘立柱建物址28に切られ，110・112号住居址に切られる。隅丸方形を呈する竪穴住居址で，南北4.6m，主軸方向N24.6° Wを示す。床面の遺



挿図14　110号住居址・138号住居址カマド

存状態は重複関係のため良好ではないが，全体的にやや軟弱である。壁高は10～17cmを測る。

土師器甕・坏・鉢，須恵器甕・蓋・瓶等の他，縄文時代中期後半と平安時代の遺物がわずかに混入出土している。出土量はやや少ない。土師器甕は底部へラケズリ整形される。

出土遺物・重複関係等より本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

⑲ 110号住居址（挿図14，第12図12・13，第77図）

ＹＮ70を中心に検出した。108・112・128号住居址を切り，96・109・111・138号住居址，掘立柱建物址28，集石４に切られる。隅丸方形を呈する竪穴住居址で，東西5.8m×南北5.9m，主軸方向N34.5° Wを測る。床面はほぼ平坦で全体的に軟弱である。壁高10～32cmを測り，西壁及び南壁の一部の壁直下に周溝が巡らされている。幅15～30cm，深さ８～16cmで底部は凹凸がある。主柱穴は他住居址重複部分を除く３本が確認され，P_2は他の２本より約20cm深い。北壁ほぼ中央付近に138号住居址カマドが位置するが，カマドの方向が主軸方向と異なることと，111号住居址貼床が138号カマドの下から東側にかけて検出されたため，別の住居址と判断した。北東隅より赤色顔料塊が出土した。

遺物量は多量で，土師器甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋・坏・高坏・瓶・提瓶等が出土している。土師器坏・高坏は内面黒色処理されるものがある。須恵器高坏（13）は有蓋である。他に縄文中期後半の浅鉢・深鉢片が相当量出土している。

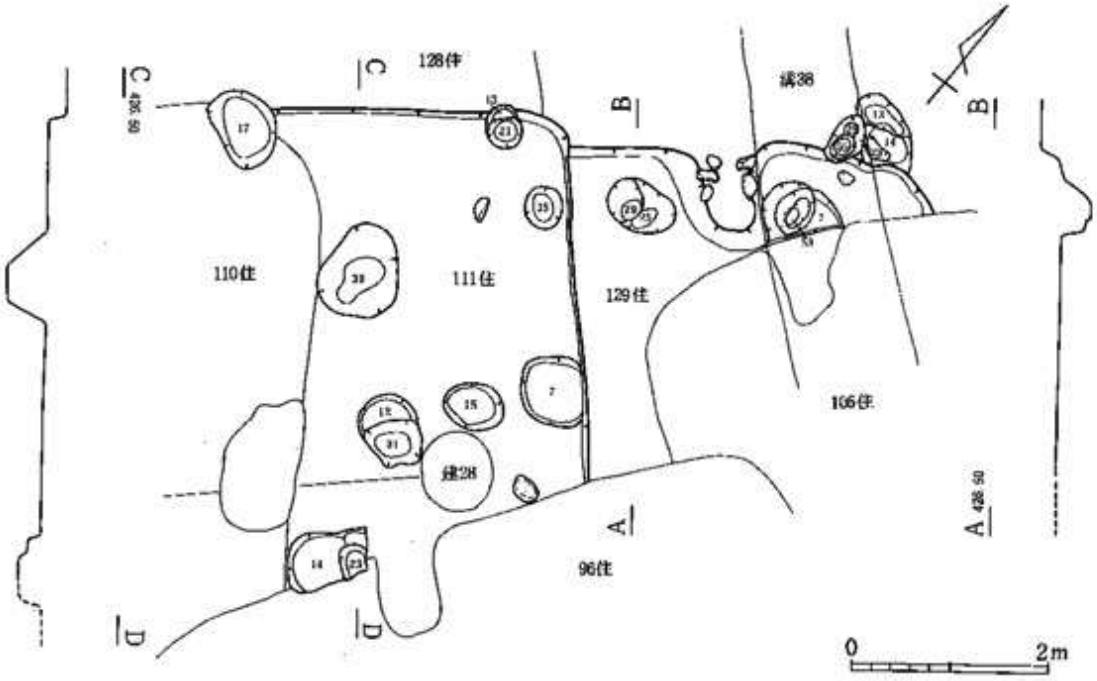
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

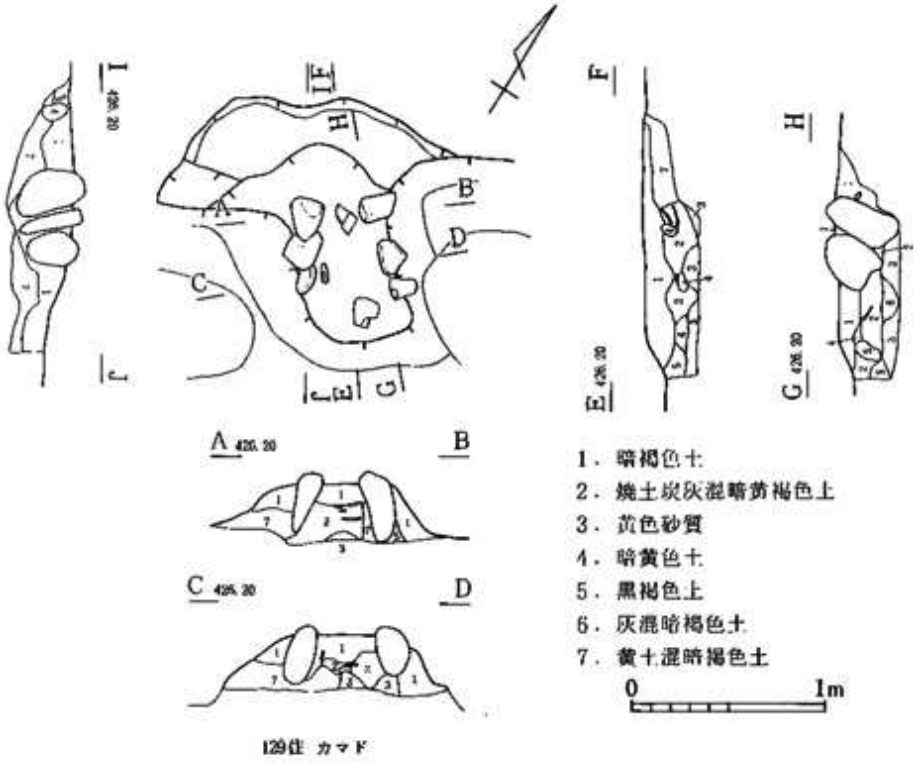
⑳ 111号住居址（挿図21，第13図１・２，第77図）

ＹＰ70グリッドを中心に検出した。110・128・129号住居址を切り，96・138号住居址，掘立柱建物址28に切られる。他住居址との重複関係のため規模・施設等の詳細は不明である。方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向は推定N42.1° Wを示す。埋土は黒褐色土の一層である。壁高は18cmを測り，壁上部は検出されないものの下部は急な立ち上がりが良好な状態で確認された。周溝・主柱穴は確認できない。床面はよく締まって硬く，110号住居址の上に貼り床されており，範囲は不明であるものの138号住居址カマド左袖下まで貼り床が検出された。110号住居址北東隅に接して焼土があり，カマドと考えられるが遺存状態が悪く原形は不明である。

遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢・甑，須恵器壺・甕・蓋坏等があり，出土量は少ない。土師器甕は頸部に暗文様の縦位のヘラミガキが施される。須恵器蓋には小型で内側にかえりのあるものがある。他に縄文時代中期後半の深鉢，弥生時代中期甕，土師器台付甕，カキメのある甕が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。





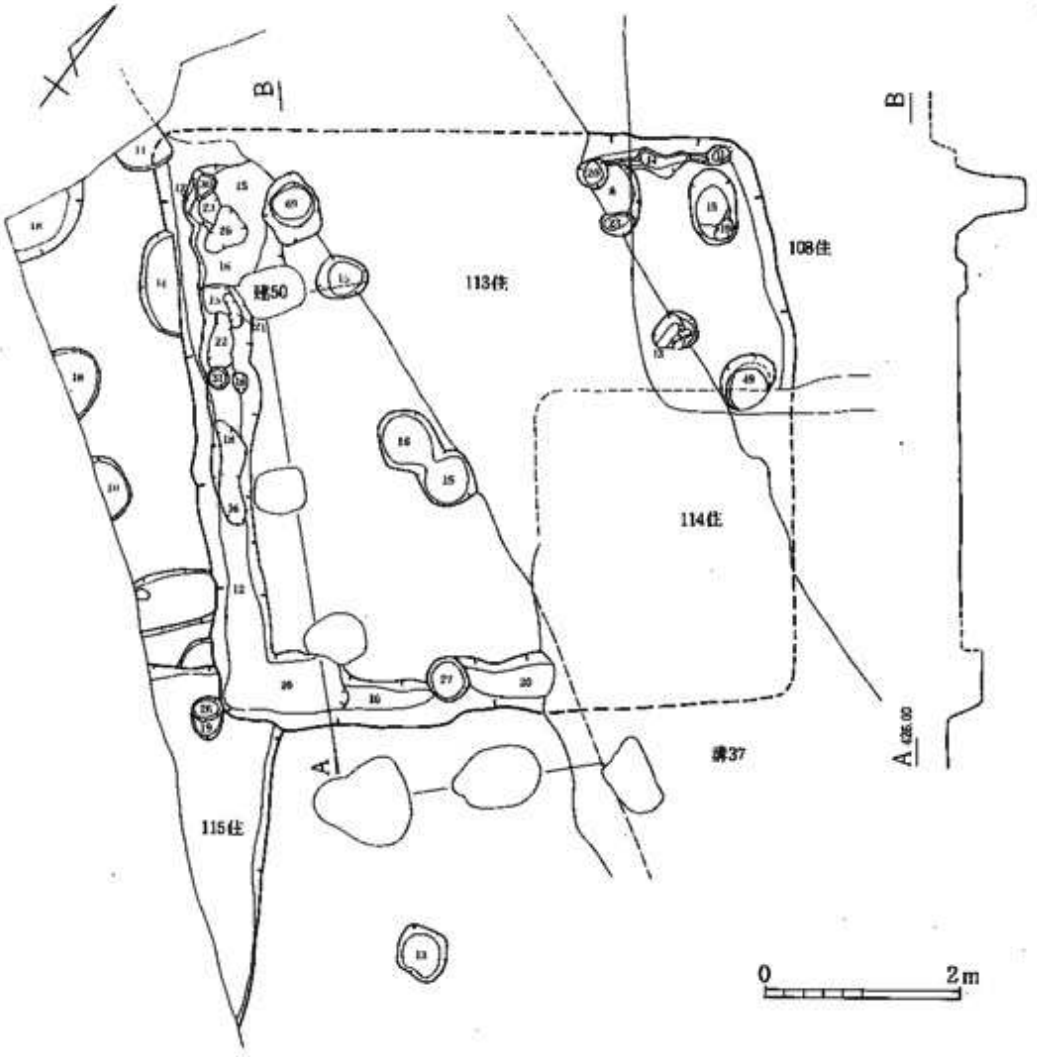
挿図15　111・129号住居址

㉑　112号住居址（挿図13，第13図３・４）

ＹＭ71を中心に検出された。108～110号住居址に切られる。重複遺構のため，平面形・規模等詳細は不明である。埋土褐色土の一層であり，検出面から床面までの深さは３～９cmと浅い。床面はほぼ平坦であるが，やや軟弱である。

出土遺物は少なく，土師器甕・坏，須恵器甕等がある。土師器坏は内面黒色処理され（３），頸部が少々くびれるもの，直線状に開く器形等がある。他に縄文中期後半深鉢片，弥生時代中期甕片等が混入出土した。

出土遺物・重複関係より古墳時代後期に比定される。



挿図16　113・115号住居址

㉒ 113号住居址（挿図16）

ＹＨ71グリッドを中心に検出した。108・115号住居址を切り，114号住居址・溝址37に切られる。東西6.0×南北6.1ｍの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ42.5°Ｗを示す。覆土は褐色土である。壁高は約15cmと浅く，全体的にややゆるやかな立ちあがりを示す。周溝は北壁を除く壁直下にほぼ全周して検出され，深さ10～20cmを測る。幅10～50cmと一定せず，底面の状態は凹凸がある。床面はやや軟質である。主柱穴・その他付属施設は重複関係のため不明である。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋坏・坏・高坏等が出土しているが，量は少ない。土師器坏は内面黒色処理される。須恵器甕は内外面に叩きが施され，内面の同心円文はナデ消されている。このほか，縄文時代中期土器片・有段口縁の土師器壷等が出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

㉓ 114号住居址（挿図17，第13図５～７）

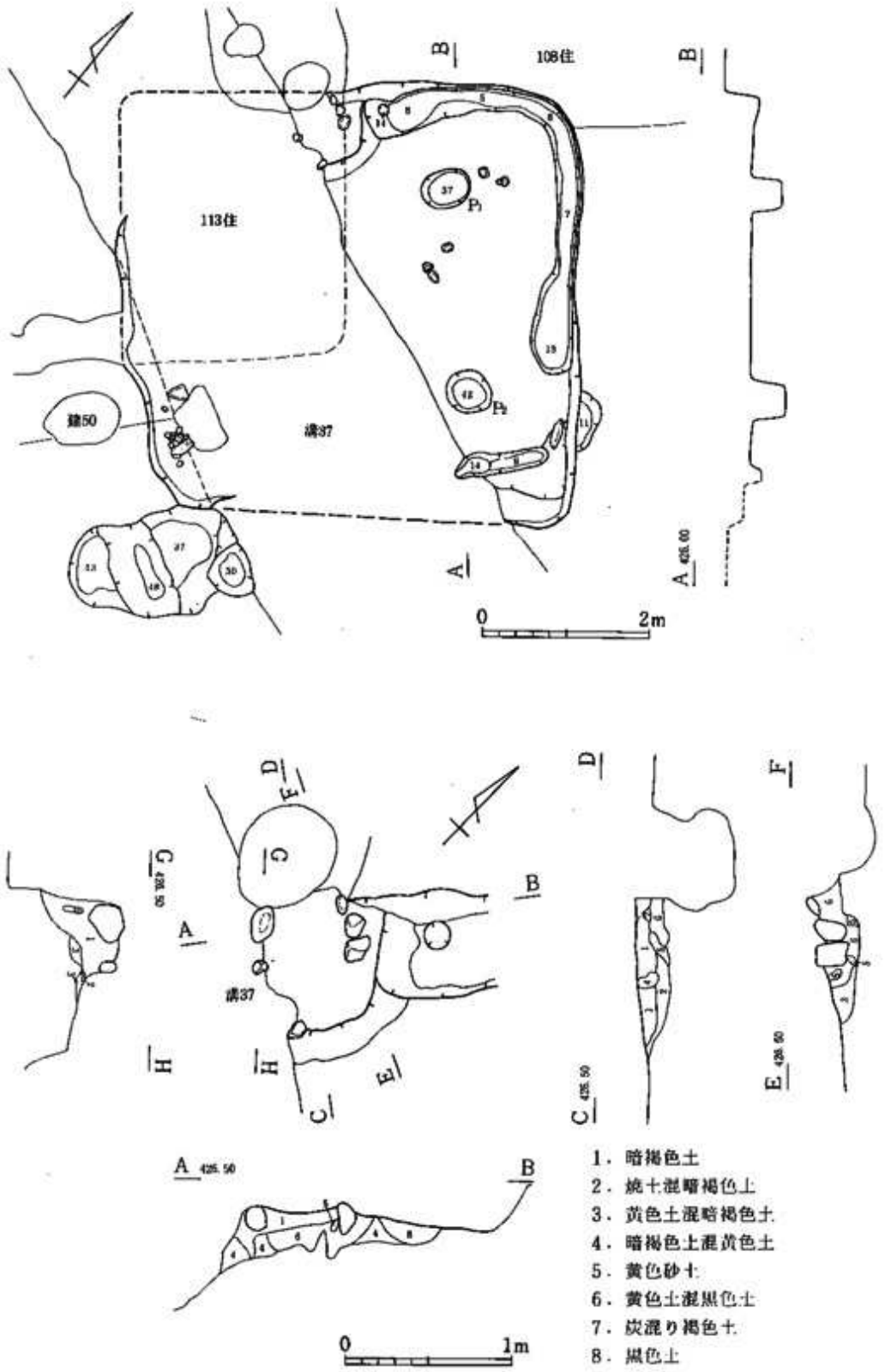
ＹＮ73グリッドを中心に検出した。108・113号住居址を切り，溝址37に約半分を切られる。東西5.4×南北5.2ｍの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ37.0°Ｗを示す。覆土は褐色土である。壁高は19～35cmを測り，全体的に急に立ち上がる。周溝は東・北壁側は直下に，また南壁側はかなり内側に掘り込まれている。幅15～30cm，深さ５～14cmを測る。火災にあった住居址であり，床面は硬く焼け締まっており，北東隅がよく焼け，多量の焼土・炭が出土している。南壁下周溝南側は床面より一段高く，建て替えの可能性がある。主柱穴は２本確認され，径50～60cmの不整円形を呈し，深さは37・42cmでほぼ揃う。北壁中央やや西側に位置するカマドは右袖の一部が溝址37によってこわされている。比較的小形の礫が袖石として用いられる石芯粘土カマドである。焚き口付近では焼土があまり発達していない。西壁際に小礫が集中出土した。

遺物は土師器甕・坏・高坏・甑，須恵器蓋等があり，遺物量は少ない。土師器甕は小型薄手で口縁がほぼ直立する。坏は下半に稜をもつもの（６），内黒で口縁がわずかに外反するもの等がある。高坏は坏部が浅い。

出土遺物・重複関係から古墳時代後期に比定される。

㉔ 115号住居址（挿図16）

ＹＦ73グリッドを中心に検出した。113号住居址の南東に位置し，同住居址に切られる。大半が調査区外にかかり，規模・付属施設等詳細は不明であるが，方形を呈すると思われる竪穴住居址で，主軸方向は推定でＮ27.0°Ｗを示す。覆土は黒褐色土である。壁高は約20cmを測る。北壁東半は急な立ち上がりを示すが，全体的にややゆるやかな傾斜をみせる。周溝はなく，床面も壁寄りの部分のみのためか硬い部分はない。



挿図17　114号住居址

遺物はきわめて少なく，土師器甕・高坏があるが，いずれも小破片のみである。
詳細時期は不明であるが，出土遺物や重複関係から古墳時代後期に比定される。

㉕ 116号住居址（挿図18，第14図１～６）

ＹＷ60を中心に検出された。117号住居址を切り，約半分が調査区外にかかり未調査である。方形を呈する竪穴住居址であり，南北5.0m，主軸方向N46.5° Wを測る。壁高は６～30cmで，急な立ち上がりを示す。床面はほぼ平坦で，非常に硬い。ほぼ全周して周溝状の掘り込みがあり，幅60～80cm，深さ５～16cmで南壁側が深い。また南壁側は壁より離れる。主柱穴は２本検出され，径約40cmの不整円形と共通するものの，深さは揃わない。北壁ほぼ中央にカマドが設けられている。カマド前面は掘りすぎによりこわしてしまったものの，原形を良好にとどめている。比較的小形の河原礫を用いた石芯粘土カマドで，煙道部分にも石がすえられる。焼土の発達は顕著でない。対面する南壁ほぼ中央壁際に焼土があり，周溝状掘り込みの位置等からカマドの作りかえが考えられる。

出土遺物は土師器甕・高坏・鉢，須恵器壺等があり，遺物量は少ない。土師器甕（１）の頸部は外傾に接合される。高坏（５）は坏部に稜をもち，口縁が外反する。他に弥生時代中期の壺・甕片が混入出土した。

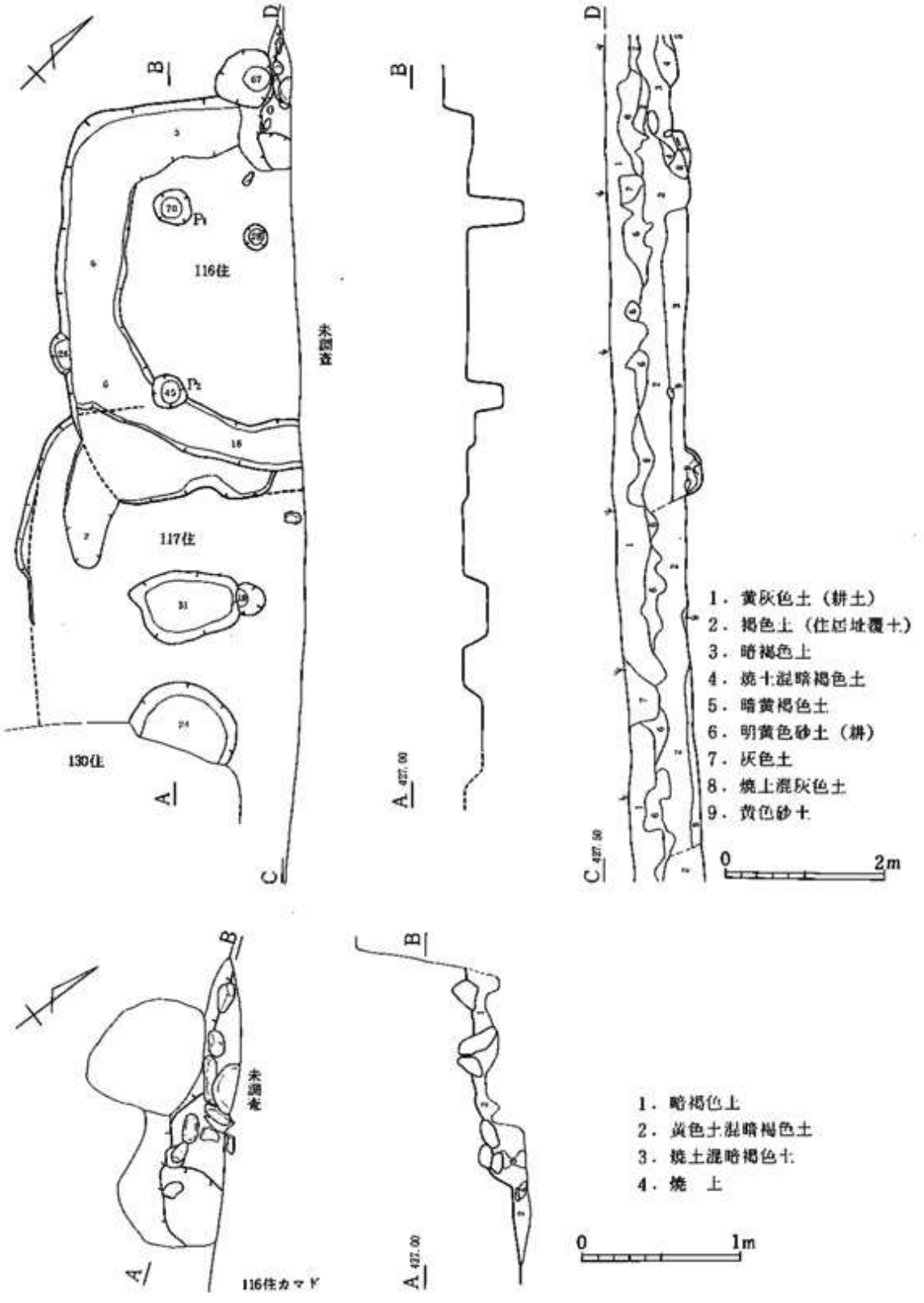
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

㉖ 117号住居址（挿図18，第14図７）

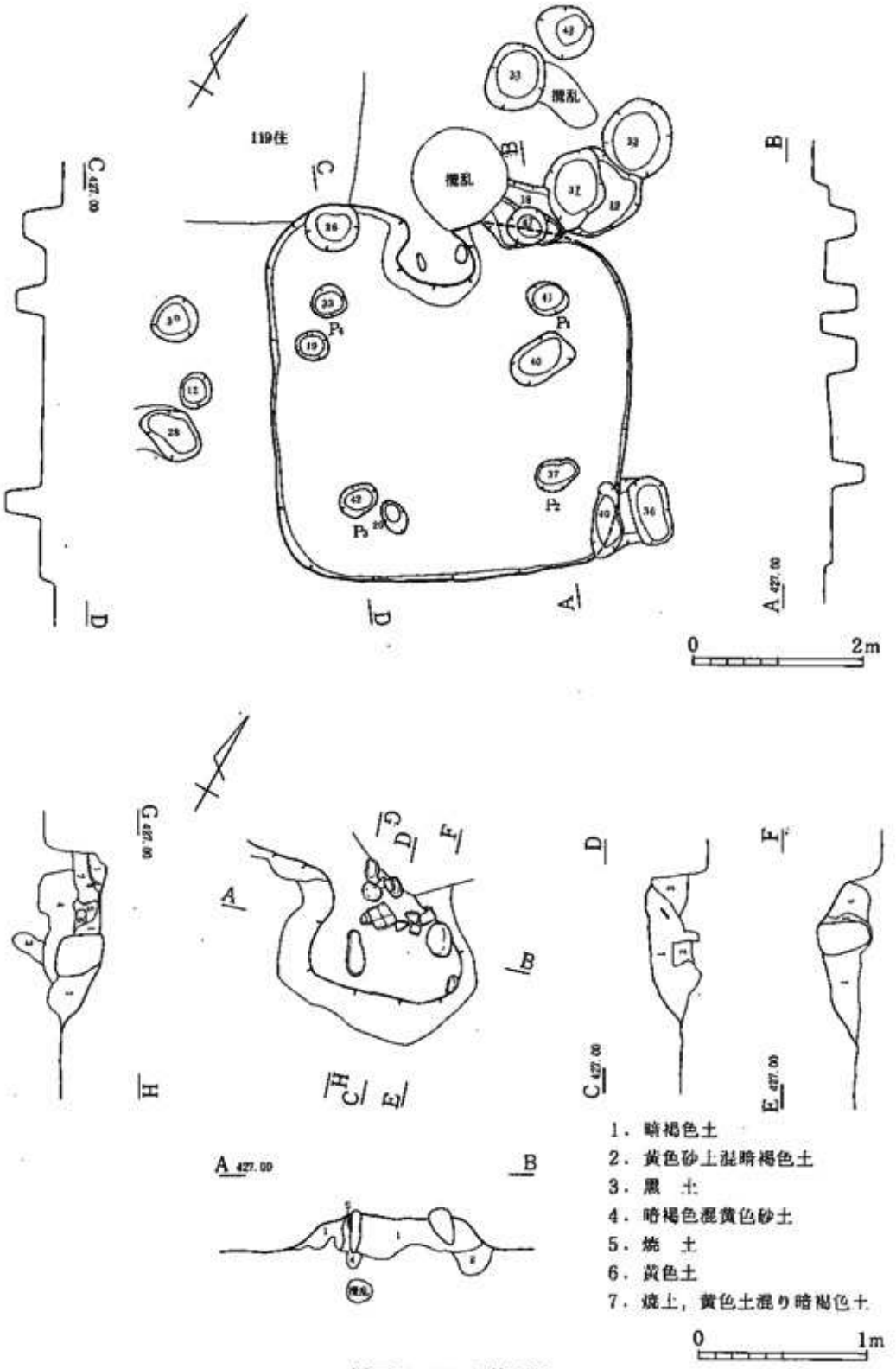
ＹＵ62を中心に検出した。116・130号住居址に切られる。約半分は調査区外にかかり未調査であり，南壁側は上部削平される等，規模その他詳細は不明である。方形を呈すると考えられる竪穴住居址である。床面はほぼ平坦で，硬く締っている。壁高は０～25cmを測り，急な立ち上がりを示す。北西隅に壁よりやや離れて周溝状の掘り込みがあるほか，柱穴をはじめ付属施設は確認できない。

出土遺物は少なく，土師器甕・坏，須恵器蓋・坏等がある。土師器甕が大半を占め，他はいずれも小破片である。土師器坏は小形で口縁が外折するもの，内面黒色処理されるもの等ある。須恵器蓋は小形で内面にかえりのあるもの等がある。

出土遺物・重複関係等より，本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。



挿図18　116・117号住居址



挿図19　118号住居址

㉗ 118号住居址（挿図19，第14図８～13）

ＹＰ58を中心に検出した。119号住居址を切る。東西4.2×南北4.4ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ36.4°Ｗを示す。埋土暗黄褐色土の一層である。地山の礫混り黄褐色砂質土を掘り込んでおり，床面は凹凸がある。カマド前面の住居址ほぼ中央に硬い床面が検出された。壁高は12～20cmを測り，急な立ち上がりの状態を示す。主柱穴は40～50cmの不整楕円形を呈し，４本のうち南側２本は約10cm深い。北壁ほぼ中央にカマドが構築されているが，遺存状態は不良である。石芯粘土カマドで袖石２対と考えられるが，左右それぞれ１個を欠く。焼土が厚く発達しており，相当長期に亘る使用を示すと思われる。カマド前面及び中央付近から土師器甕が出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢等があり，出土量はやや少ない。土師器甕は肩部が張るもの（８），胴部球形を呈するもの，頸部のくびれがほとんどないもの（９）等の器形がある。坏は底部丸底で口縁が外反しており，内面黒色処理されるものとされないものがある。鉢は深さ9.2cmを測り，やや平底状を呈する。

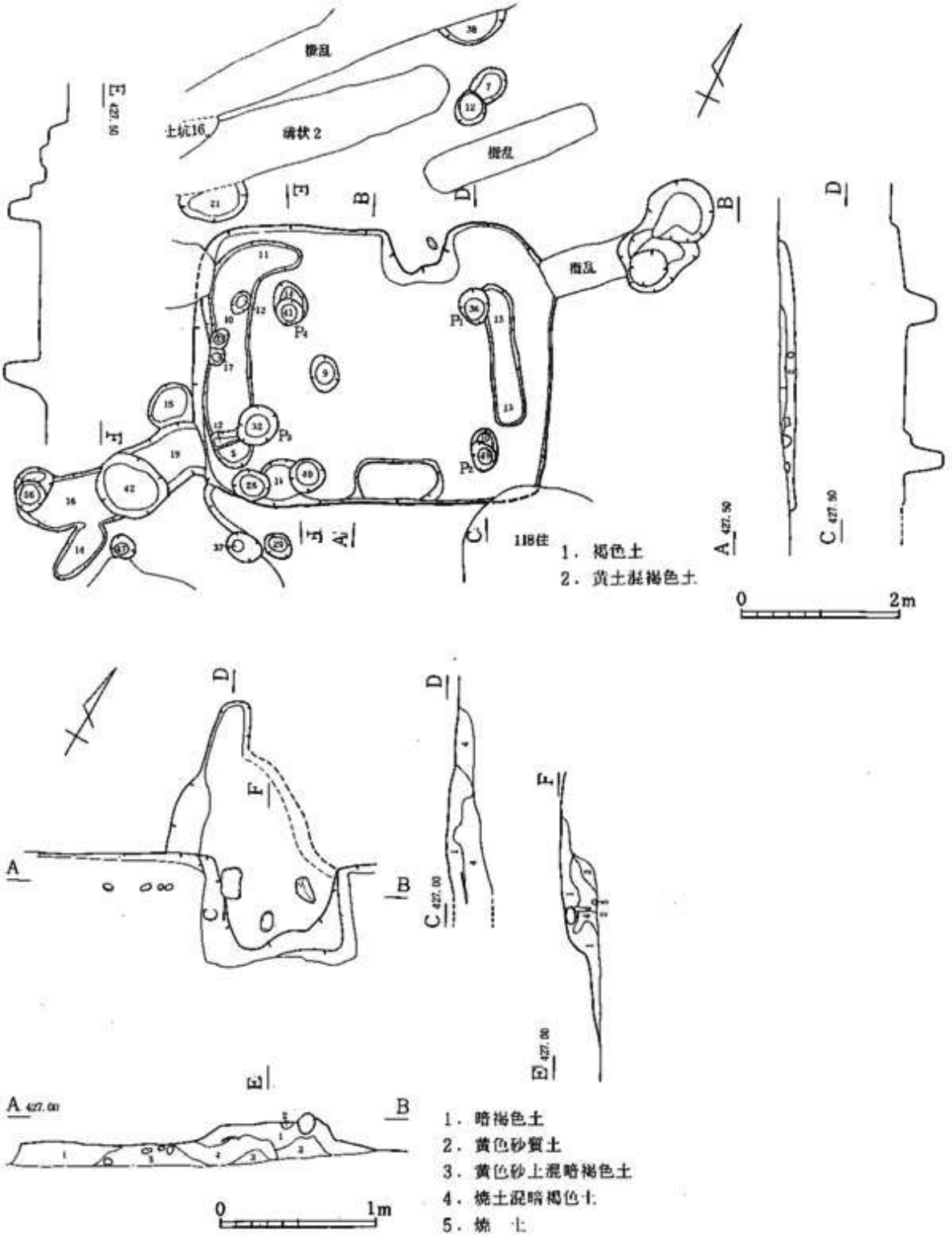
出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

㉘ 119号住居址（挿図20，第15図１～７）

ＹＰ55グリッドを中心に検出した。118号住居址に切られる。東西4.5×南北3.5ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ26.7°Ｗを示す。覆土は褐色土・黄土混褐色土がレンズ状に堆積する。壁高は３～22cmを測り，東半が急な傾斜をみせるのに対し，西半はゆるやかに立ち上がる。周溝は東西壁及び南壁下の一部に検出され，東壁下のみ壁から離れる。深さ５～13cmを測り，底面はほぼ平坦である。床面は暗褐色土の貼り床がなされ，中央部は硬く締まっている。主柱穴は４本確認され，掘り方は径40～50cmの不整円形を呈し，深さ32～49cmでばらつく。南壁下カマドの正面にマウンド状の部分があり，入り口施設と思われる。北壁中央右寄りに位置するカマドは遺存状態は良好でないが，粘土カマドであると思われる。煙道の位置からカマドの中心はやや左側にずれると考えられる。

遺物は土師器甕・坏・高坏・甑，須恵器壺・甕・蓋坏等があり，出土量が多い。土師器甕は胴部中央に最大径をもつ（１）。他に長胴でヘラミガキが施されるもの，小型の甕（２）等がある。坏は浅めの口縁がやや内湾する器形（４）が主で内面黒色処理されるものがある。高坏にも内黒がある。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。



挿図20　119号住居址

㉙ 120号住居址（挿図21，第15図８～11）

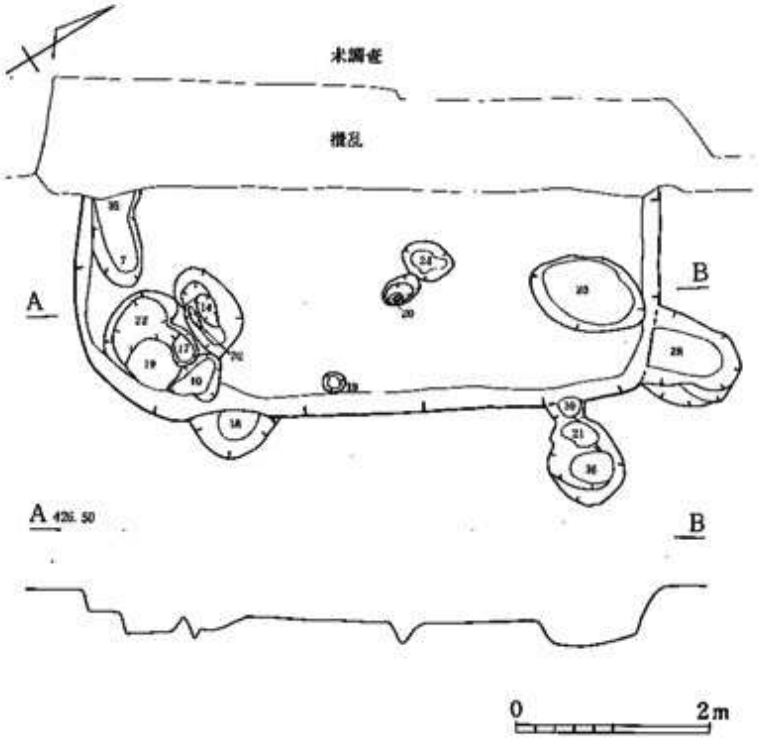
ＹＭ54グリッドを中心に検出した。119号住居址の西側に位置する。調査区外に北半がかかり詳細は不明であるが，東西5.9ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ58.8° Ｗを示す。ほぼ中央部を畑管の埋設により破壊されている。埋土はほとんど黒褐色土の一層である。壁高は20～25cmを測り，急な立ち上がりを示す。西壁下に幅広の周溝があり，底面は凹凸がある。他の部分ではだらだらと壁際に向かって深くなる。床面は貼り床があったが，軟弱であり，地山の礫が顔を出す掘り方まで一気に調査した。地山は礫混りの暗黄褐色の砂質土であり，東壁側は黒色が強まり，主柱穴は確認できなかった。南隅から須恵器甕が出土した。

出土遺物は土師器甕・高坏・甑，須恵器脚付壺・甕・蓋等があり，出土量はやや少ない。土師器甑（８）は平底の中央部に小孔が１ケあけられているものの他，把手が出土した。

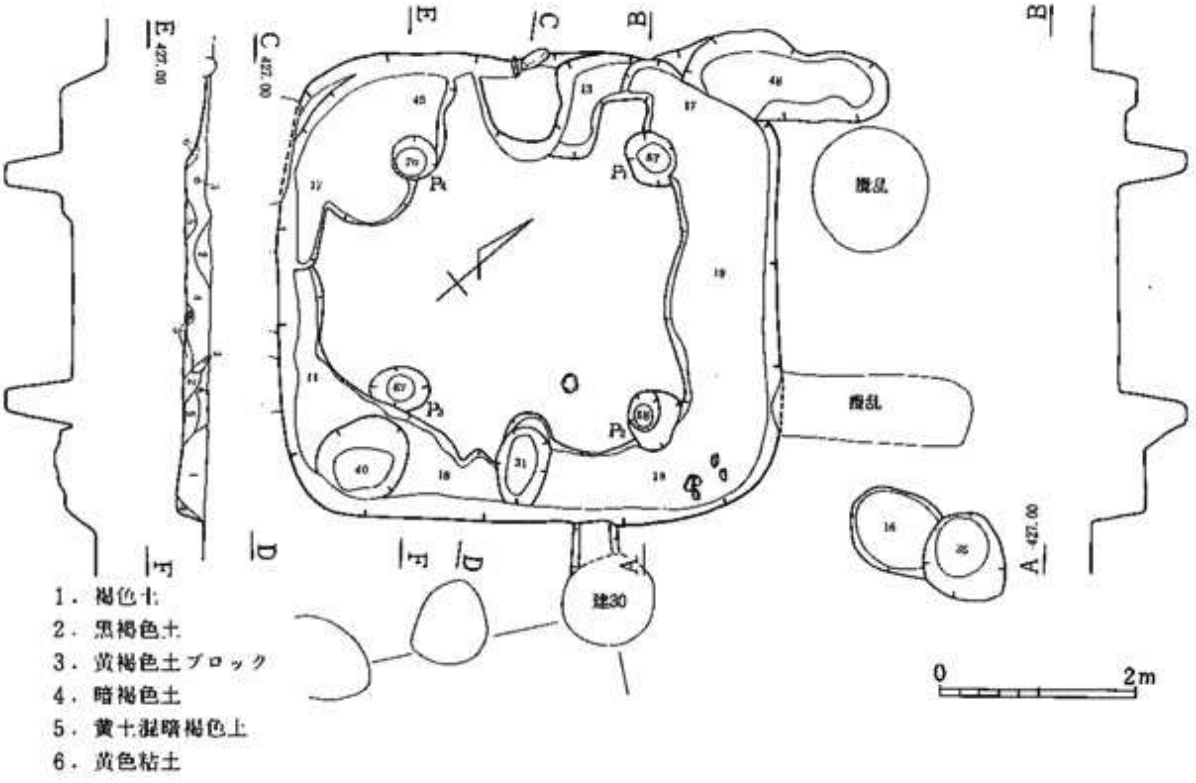
出土遺物から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

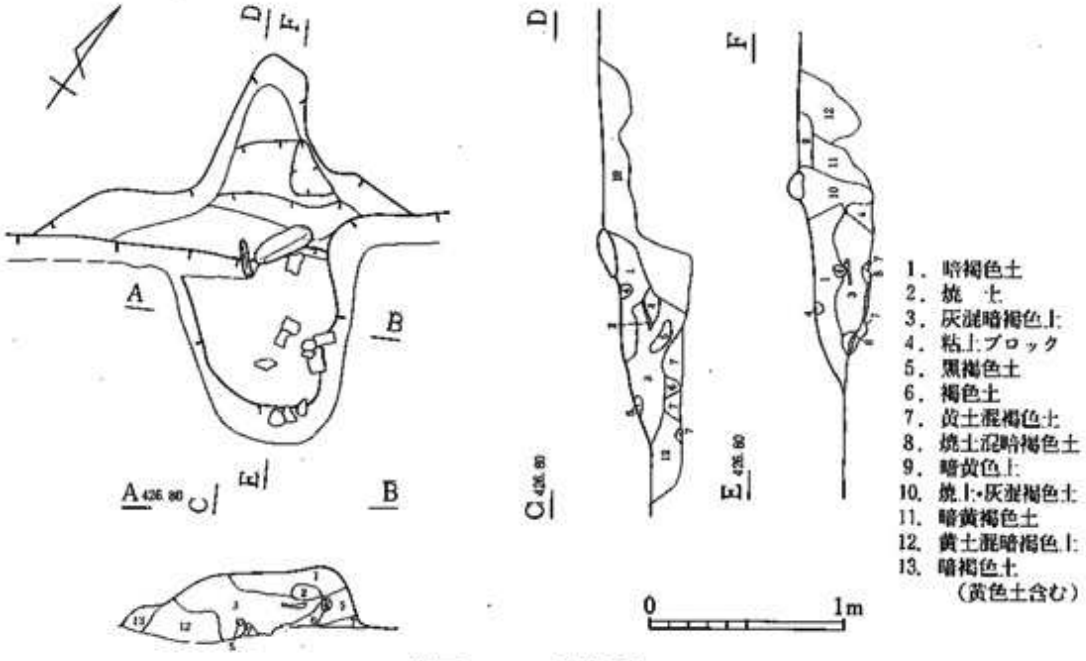
㉚ 122号住居址（挿図22，第16図１～４）

ＹＯ60グリッドを中心に検出した。掘立柱建物址31に切られる。東西5.0×南北4.6ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ49.6° Ｗを示す。覆土は黒褐色土・暗褐色土がレンズ状に堆積する。壁高は40～50cmを測り，西壁側の傾斜はややゆるやかなものの全体的に急に立ち上がる。周溝状の落ち込みがカマド両側を除く壁直下にほぼ全周して検出され，深さ11～19cmを測る。西壁中央でくびれるものの60～100cmと幅広で，底面の状態はほぼ平坦である。床面はき



挿図21　120号住居址



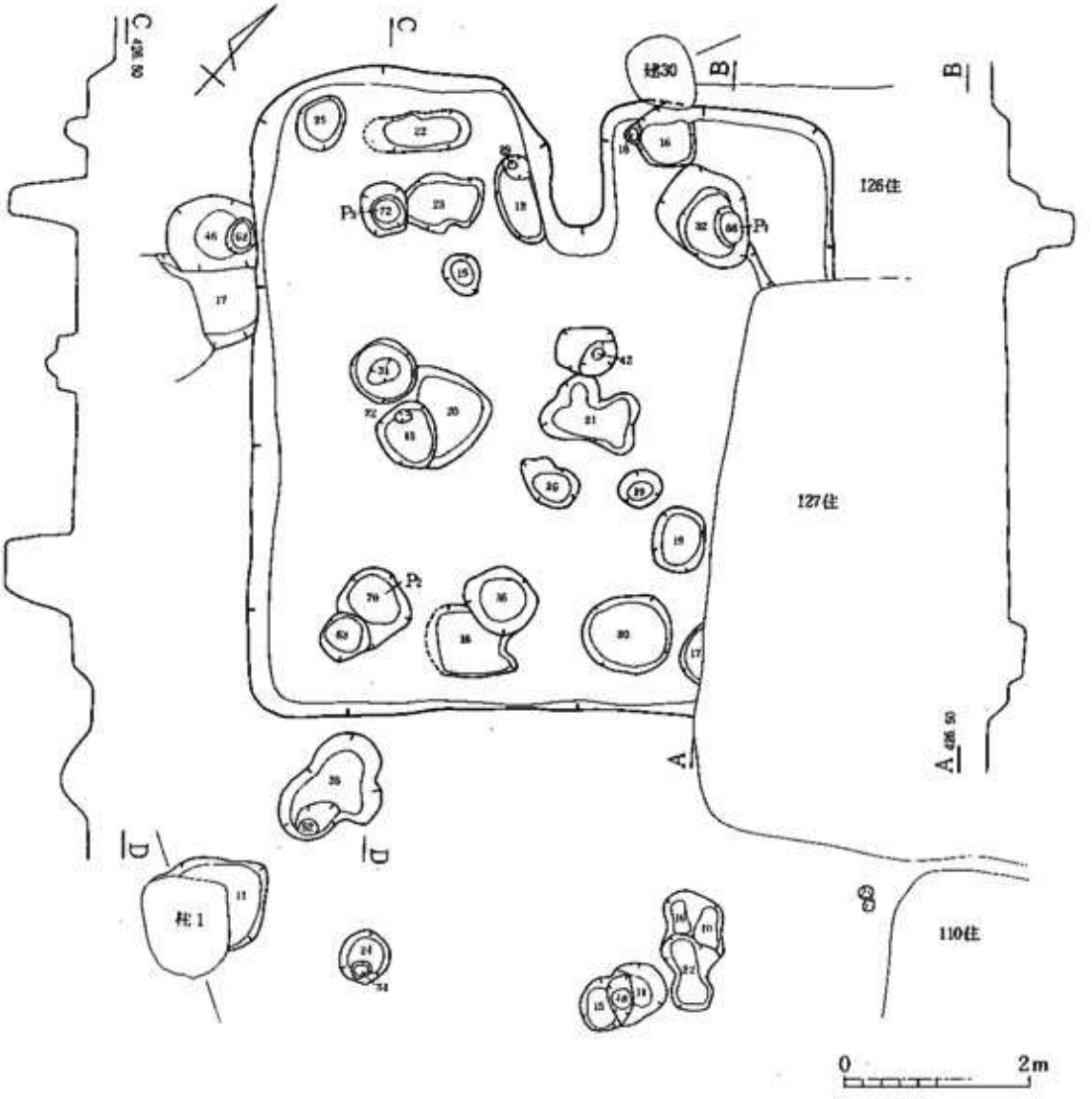


挿図22　122号住居址

わめて硬く締まっている。主柱穴は4本確認され，50～60cmの不整円形を呈する。深さは67～70cmでほぼ揃う。北壁ほぼ中央に位置するカマドは痕跡的に粘土が認められ，粘土カマドと考えられる。

遺物は土師器壺・甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋・坏・高坏等があり，出土量はやや少ない。土師器甕（3）はやや長胴の器形で口縁が直に立ち上がる。坏は内面黒色処理される。須恵器はいずれも小破片である。他に縄文時代中期深鉢片，弥生時代中期壺・甕小片が混入する。

出土遺物等から古墳時代後期に比定される。



挿図23　125号住居址

㉛ 124号住居址（挿図11）

ＹＵ75で104号住居址に切られて検出された。東側は調査区外にかかる。隅丸方形の竪穴住居址であると考えられるが，重複関係により詳細は不明である。壁高は約10cmで壁はゆるやかな立ち上がりを示す。

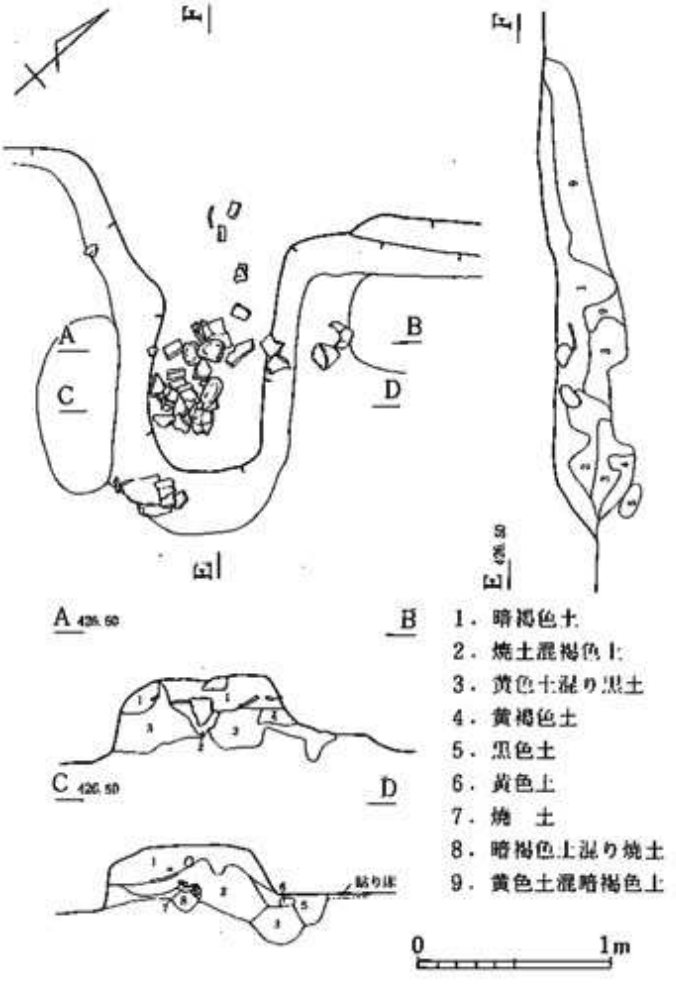
出土遺物は土師器甕・鉢・甑等があり，出土量は少ない。鉢は内外横位のヘラミガキが施され内面黒色処理される。深いボウル状を呈し，口縁部は外反する。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に属する竪穴住居址である。

㉜ 125号住居址（挿図23・24，第16図５～第17図）

ＹＫ63グリッドを中心に検出した。127号住居址・掘立柱建物址30に切られ，126号住居址を切る。東西6.1m×南北6.8mの方形を呈する竪穴住居址である。西北隅は良好に検出できなかったが，円形を呈する。主軸方向はN41.4° Wを示す。壁高は18～30cmを測り，壁の立ち上がりはややゆるやかである。床面はやや軟弱である。東北隅に一段高い部分がある。主柱穴は３本確認され，不整形の掘り方を呈し40～80cmを測る。深さは68～72cmでほぼ揃う。北壁中央に位置するカマドは粘土カマドと考えられる。カマド内より土師器甕，右側から甑が出土した。

遺物は土師器甕・坏・



挿図24　125号住居址カマド

鉢・高坏・甑，須恵器甕・蓋・高坏・鼎等があり，出土量はやや多い。土師器甕（第16図８）は小型で胴上部で最大径を測る。内黒の坏は胴下部に稜があるもの（第17図５～７），やや深めの底がふくらむ器形（８）がある。鉢は橙褐色を呈する。須恵器高坏は透かし孔を４ケもつ。縄文時代中期後半の深鉢片，古墳時代前期壷・甕等が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

㉝ 126号住居址（挿図25）

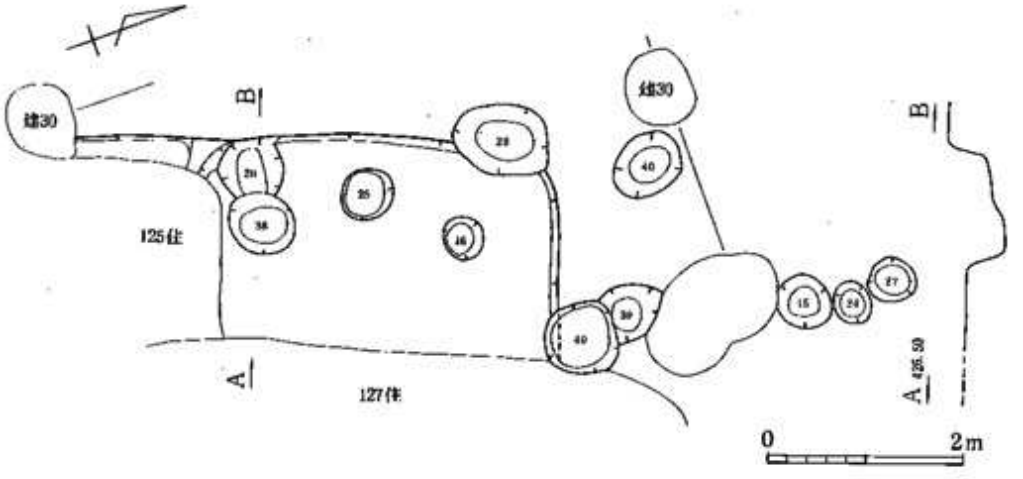
ＹＮ63グリッドを中心に検出した。125・127号住居址に切られる。重複関係のため，規模等詳細は不明である。方形を呈すると思われる竪穴住居址である。覆土中に径10cm程度の礫が多く入る。壁の立ち上がりの状態は急であり，壁高は約20cmを測る。床面は硬くない。125号住居址のコーナー付近にカマドがあったものと考えられ，わずかに焼土が検出された。

遺物は土師器甕・坏・鉢等があり，いずれも小破片で出土量は少ない。土師器甕は外面へラミガキが施される。坏は内黒である。鉢は口縁が外反し，内外面へラミガキが施され，外面に炭化物が付着する。

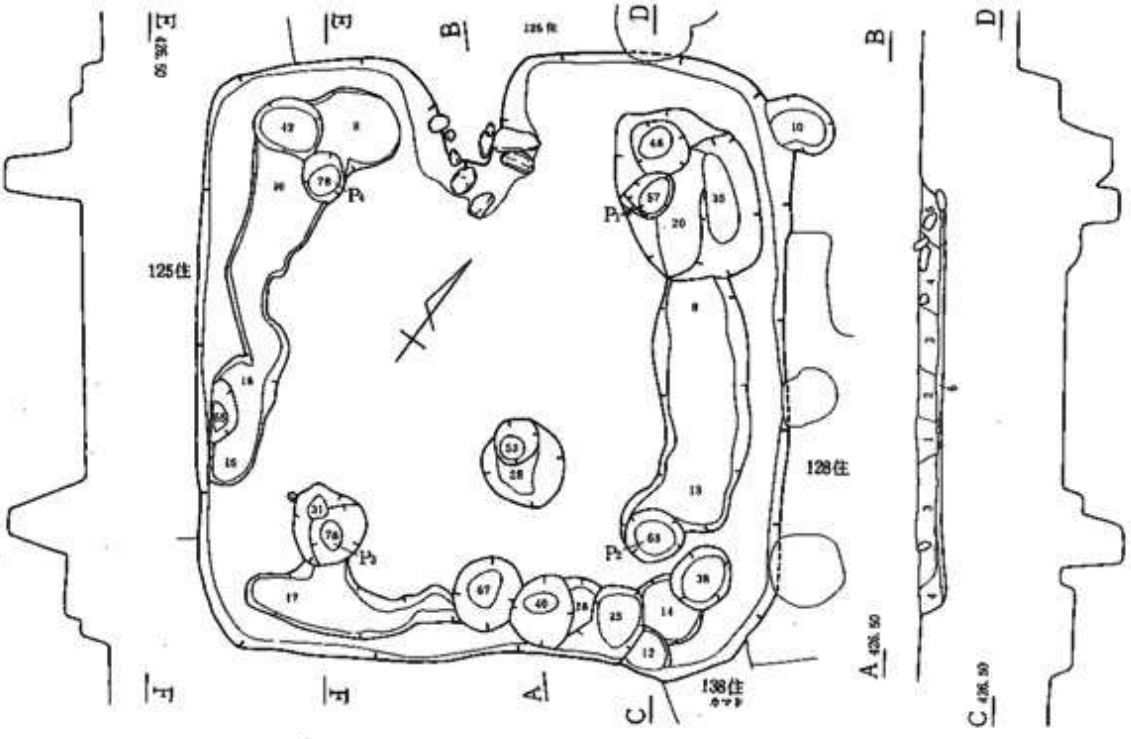
出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

㉞ 127号住居址（挿図26・27，第18図～第20図２，第77図）

ＹＮ65グリッドを中心に検出した。125・126・128号住居址を切り，138号住居址に切られる。東西5.9×南北6.2ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ38.1°Ｗを示す。壁高は



挿図25　126号住居址



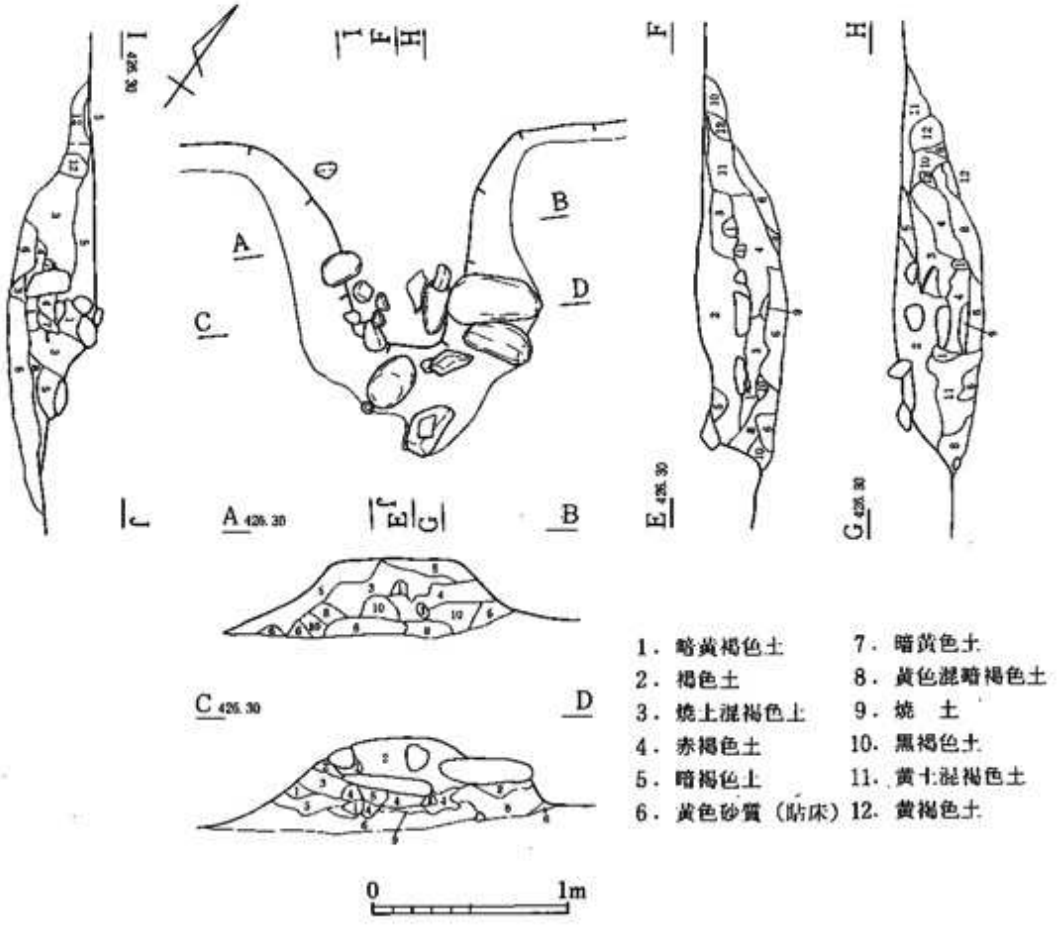
1．黒色土
2．黄褐色土
（黄色砂土がブロック状に混入）
3．暗褐色土
4．褐色土
5．黄色砂土混りの褐色土
（焼土粒，炭化粒子を含む）
6．貼床（黄色味を帯びた褐色土）

挿図26　127号住居址

20～42cmを測り，壁上部まで急な立ち上がりが良好な状態で確認された。壁下やや離れて周溝状の掘り込みがあり，深さ８～18cmを測る。幅30～100cmで，底面の状態は凹凸がある。床面は貼り床され，やや軟弱である。主柱穴は４本確認され，不整円形を呈し径40～60cmを測る。深さは東壁側が57・63cm，西壁側が78cmとやや深い。北壁ほぼ中央に位置するカマドは原形をとどめていないが，袖石がすえられた付近に倒れており，石芯粘土カマドである。

遺物は土師器甕・蓋・坏・高坏・鉢，須恵器甕・蓋・坏・高坏・鼎等があり，出土量はやや多い。土師器甕は長胴形を呈するものが多く，ハケナデ・ヘラミガキが施されるものの他，カキメの施されるものも混入出土している。土師器坏は内面黒色処理されるものがある。鉢（第19図５・６）はボウル状を呈し口縁が開く。内外ヘラミガキが施され，うち１点は内黒（６）である。

出土遺物・重複関係から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。



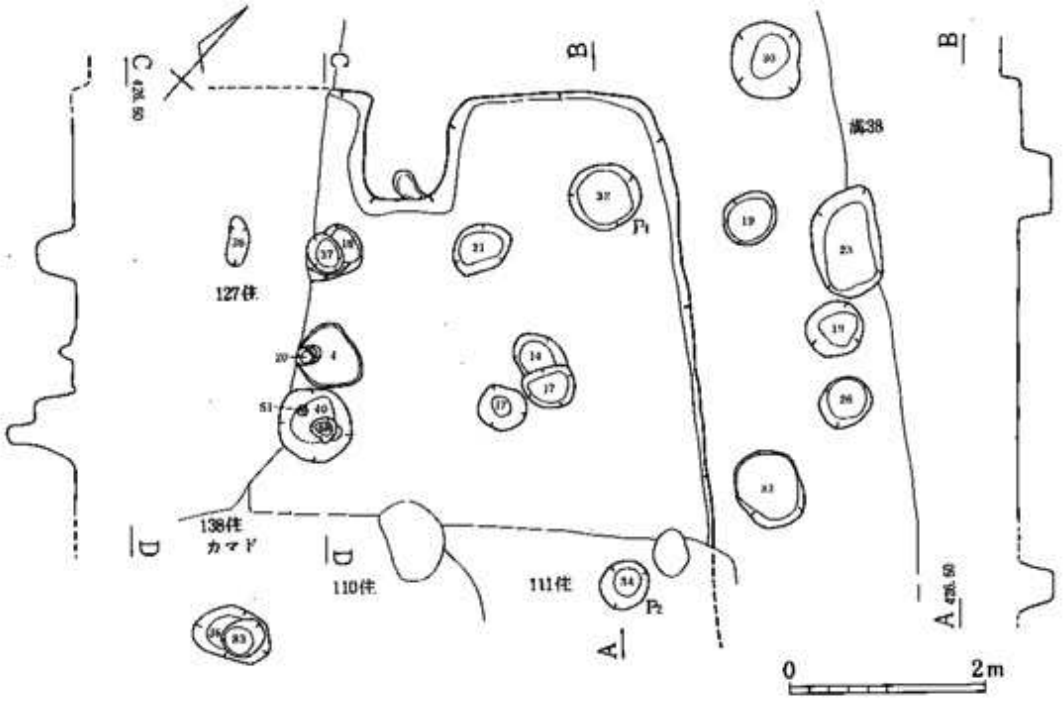
挿図27　127号住居址カマド

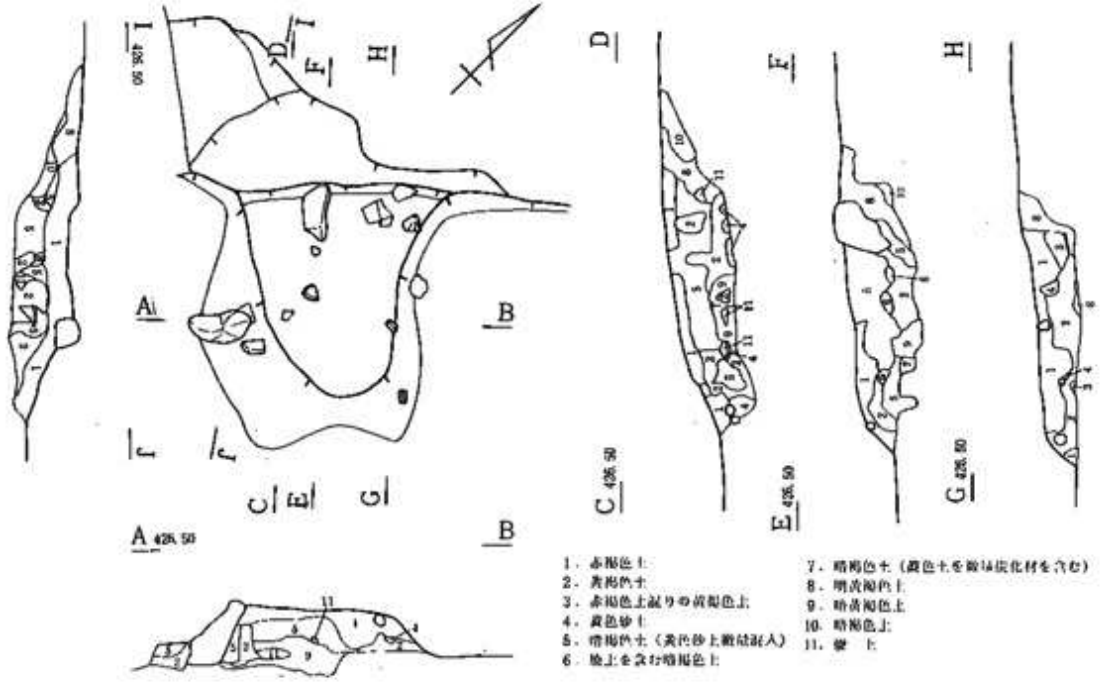
㉟ 128号住居址（挿図28，第20図3～7）

ＹＰ67を中心に検出された。110・111・127・138号住居址に切られる。重複遺構のため，規模等詳細は不明であるが，方形を呈する竪穴住居址である。カマド前面の床面は硬く締る。壁高は19～30cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がる。北壁に構築されたカマドは遺存状態が不良であるが，石芯粘土カマドであると思われる。カマド脇及び東壁際より土師器内黒の坏が出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢・甑，須恵器甕・甕等があるが，遺物量はやや少ない。土師器甕は頸部に暗文風のヘラミガキが施されるものがある。坏・高坏・鉢の一部に内面黒色処理されるもの（4～6）がある。甑(7)は内外面ヘラミガキが施され，単孔で孔が大きい。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。





挿図28　128号住居址

㊱ 129号住居址（挿図15，第21図１・２，第77図）

ＹＲグリッドを中心に検出した。106・110号住居址に切られる。重複のため規模等詳細は不明であるが，隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向は推定Ｎ39.6°Ｗを示す。壁高は17cmを測り，ややゆるやかな立ち上がりを示す。床面は硬く締まっている。カマド右側の柱穴より多量の焼土等が出土しており，灰溜めの穴と思われる。北壁には石芯粘土カマドが設けられているが，焼土はあまり発達していない。

遺物は土師器甕・坏，須恵器甕があり，出土量は少ない。土師器甕は内外ヘラミガキが施され，外面に炭化物が付着する。底部破片（第21図１）はヘラケズリ整形され，丸底である。他に弥生土器壺頸部・甕底部が混入出土した。

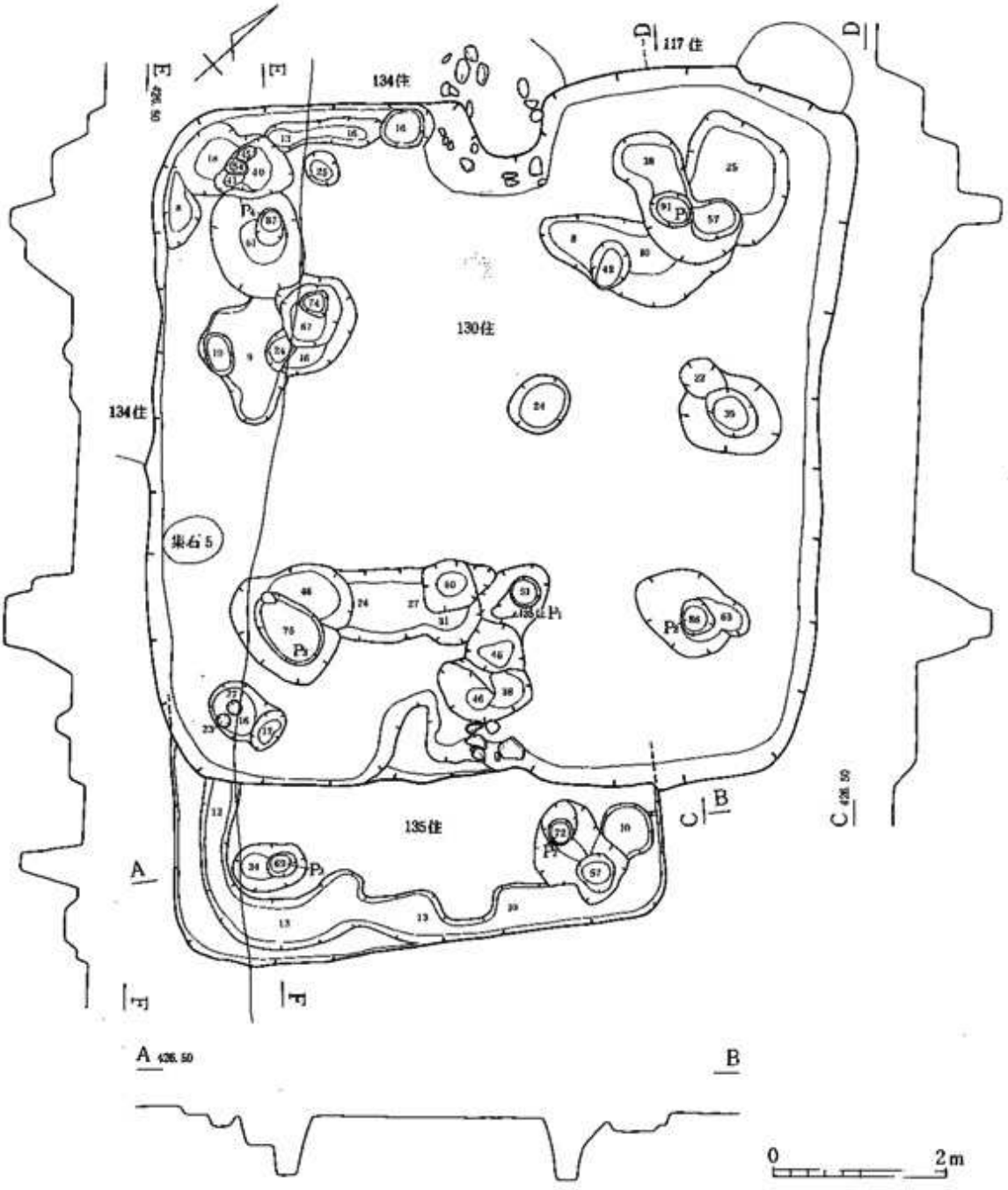
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

㊲ 130号住居址（挿図29・30，第21図３～第23図，第73図12・13，第77図）

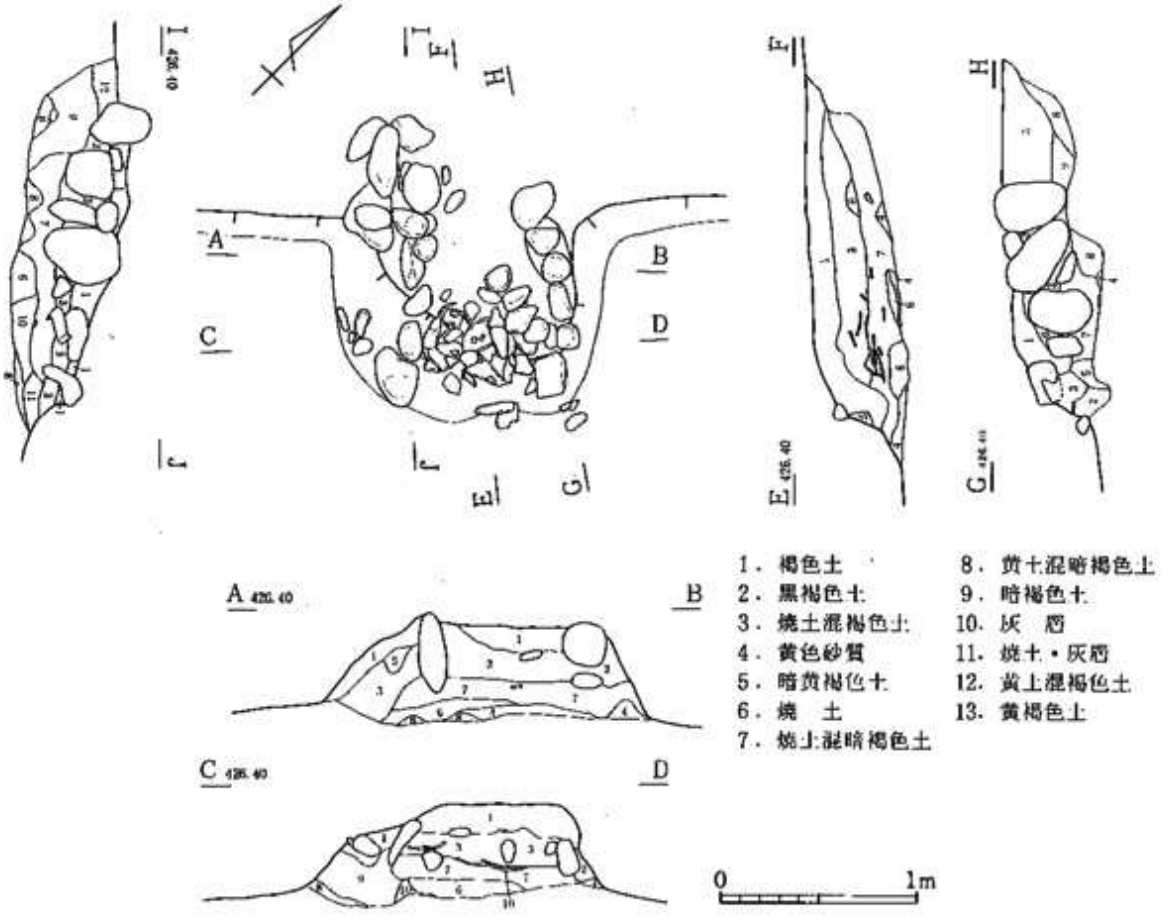
ＹＵ64グリッドを中心に検出した。117・134・135号住居址を切る。東西7.4×南北8.4ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はＮ49.3°Ｗを示す。北壁側がやや広がる。周溝は北西隅の一部に検出したにとどまり，幅30～40cm，深さ８～16cmを測る。床面はやや軟弱である。主柱穴は４本確認され，掘り方は地山が部分的に黄褐色砂で締まっていないため崩れて不整形であるが，深さは75～91cmでＰ₃がやや浅いものの他は揃う。南壁中央にマウンド状の部分があり，東側に礫が集中する。北壁ほぼ中央に位置するカマドは比較的良好な状態で確認された。カマド前方の袖石はやや小型で奥に大きい礫が据えられる。石芯粘土カマドであると考えられる。カマドの焚き口には厚く焼土が発達し，さらにカマド奥まで達する焼土混りの暗褐色土の上に薄く灰層が認められる。この上部に土師器甕片等が集中出土している。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器壺・甕・蓋・坏・高坏等があり，非常に出土量が多い。土師器甕はバラエティーに富み，長胴形の外面ヘラミガキが施されるもの，胴部がやや張り頸部に暗文風のヘラミガキが縦位に施されるもの（第21図３・５・６，第22図１），口縁部の立ち上がりの小さいもの，球形胴を呈するもの等がある。小型の甕（第21図４）は二次焼成を受けもろい。坏・高坏には内面黒色処理されるものがある。須恵器蓋は中型のものと，小型で内面にかえりをもつものがある。蓋（第23図10）は小型で上部が丸い。高坏は身深のもの（20），小型で脚の長いもの（19）がある。他に縄文時代中期の深鉢片，弥生時代中期の壺・甕片等が混入出土している。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期終末に比定される。



挿図29　130・135号住居址



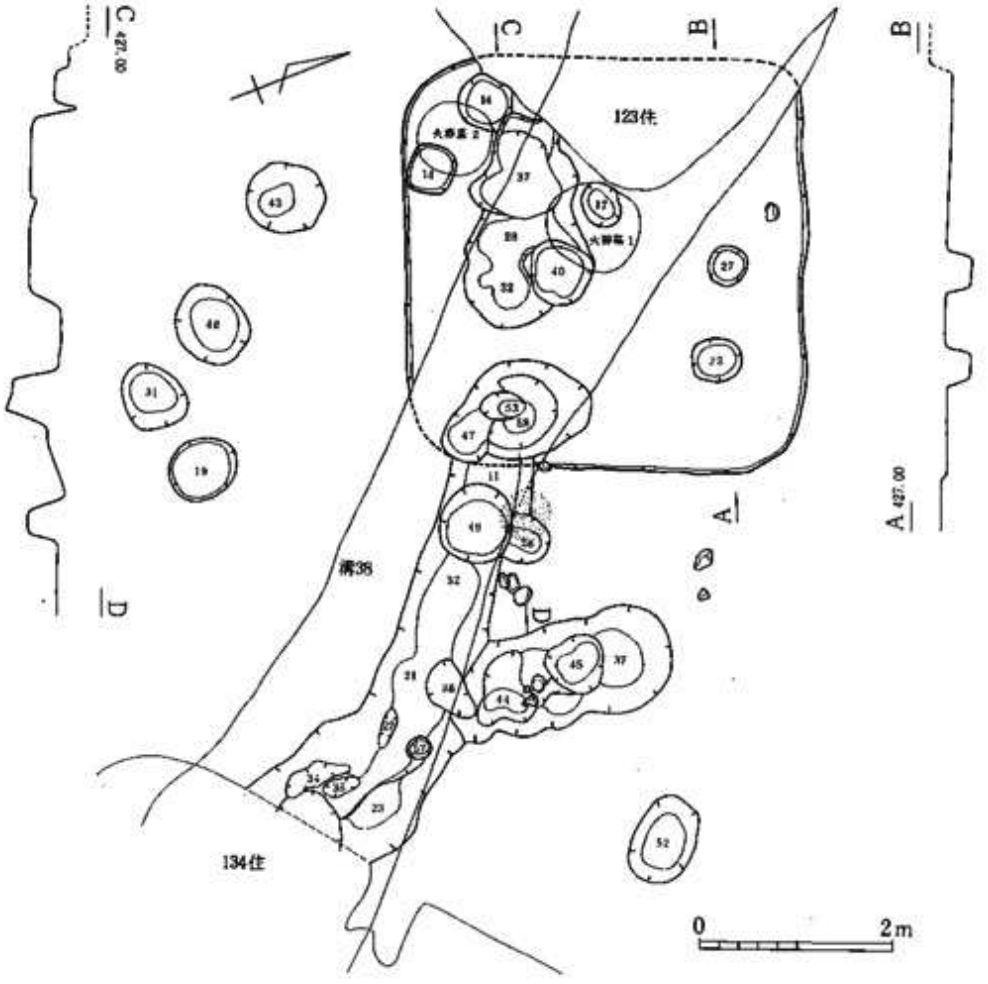
挿図30　130号住居址カマド

㊳　131号住居址（挿図31，第24図1・2）

ＹＴ59グリッドを中心に検出した。123号住居址・溝址38・火葬墓1・2に切られる。東西4.0×南北約4.2mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はN68.4°Wを示す。上部を削平され壁の立ち上がりの状態は不明であるが，壁高は5～23cmを測る。床面は東側が良好に検出された。付属施設等の詳細は重複関係により不明である。

遺物は土師器甕・坏，須恵器甕・蓋等があり，出土量は少ない。土師器甕は球形胴，やや長胴形を呈し頸部の立ち上がりが小さいもの等がある。

出土遺物等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

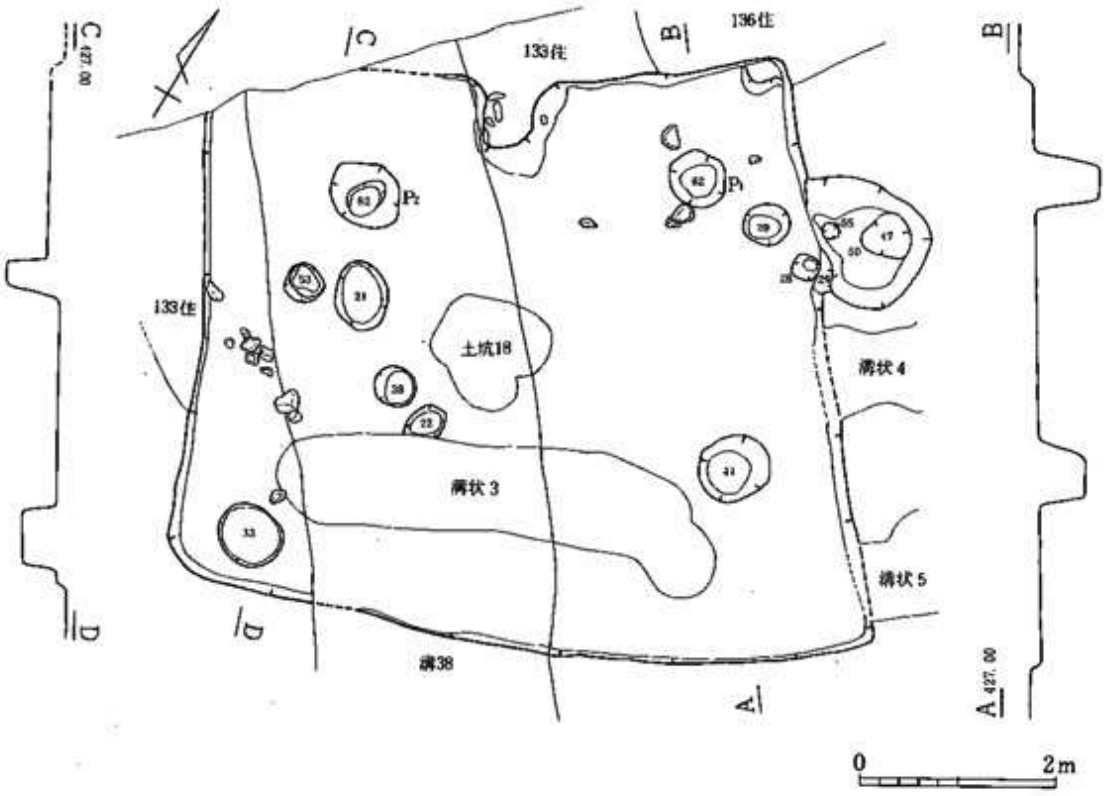


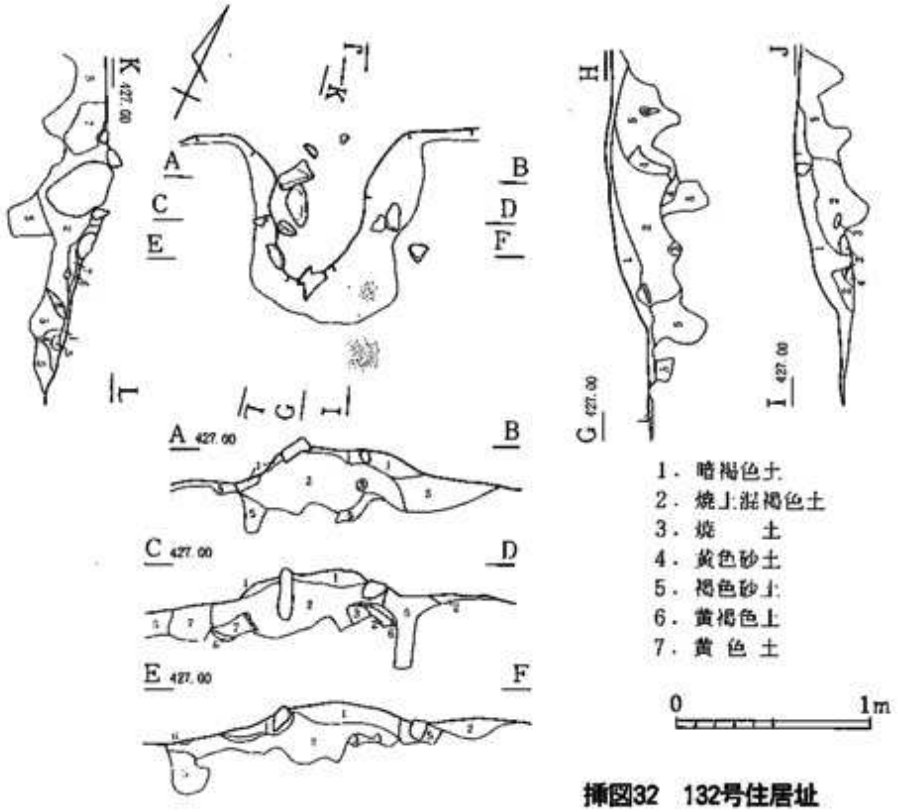
挿図31　131号住居址

㊴　132号住居址（挿図32，第24図３～第25図，第74図１）

ＹＵ54グリッドを中心に検出した。133・136号住居址を切り，溝址38に切られる。また溝状址３～５，土坑18と重複する。東辺6.0m，西辺推定5.2m，南辺7.4m，北辺5.9mの不整形の竪穴住居址である。主軸方向はＮ29.6°Ｗを示す。壁高は10～13cmを測り，上部の立ち上がりの状態は不明である。床面はやや軟弱である。北東隅付近床面よりやや上位に，貼り床状の部分がわずかに認められた。主柱穴は３本確認され，不整円形を呈し径60～75cmを測る。深さは41～62cmでP_2が浅い。北壁中央に位置するカマドは左袖の遺存状態が悪いものの，石芯粘土カマドである。本址のプラン・北東隅の貼り床部分および混入遺物から平安時代住居址と重複した可能性がある。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器壺・甕・蓋・坏・高坏，灰釉陶器等があり，出土量はやや





挿図32　132号住居址

少ない。土師器甕は胴上部に最大径をもち肩の張る器形の他，長胴の細かいカキメの施されるもの（第24図４）がある。底部破片では底面に刺突の施されるもの，木葉痕をとどめるもの（６）がある。坏・高坏ともに内面黒色処理されるものがある。須恵器甕は頸部に波状文が施される。灰釉陶器は小型の皿である。他に弥生時代中期の甕片等が混入出土している。

出土遺物・重複関係から古墳時代後期に比定される。

㊵ 133号住居址（挿図４，第26図１・２）

ＹＴ54グリッドを中心に検出した。132号住居址の西側に位置する。132号住居址に切られるため，比較的硬い床面が検出された他は詳細は不明である。

遺物は土師器甕・高坏等があり，遺物量は少ない。土師器甕（１・２）は長胴の器形で，外面縦位のヘラミガキが施される。うち１はやや丸底状を呈し，内面に粘土紐の痕跡を顕著にとどめる。

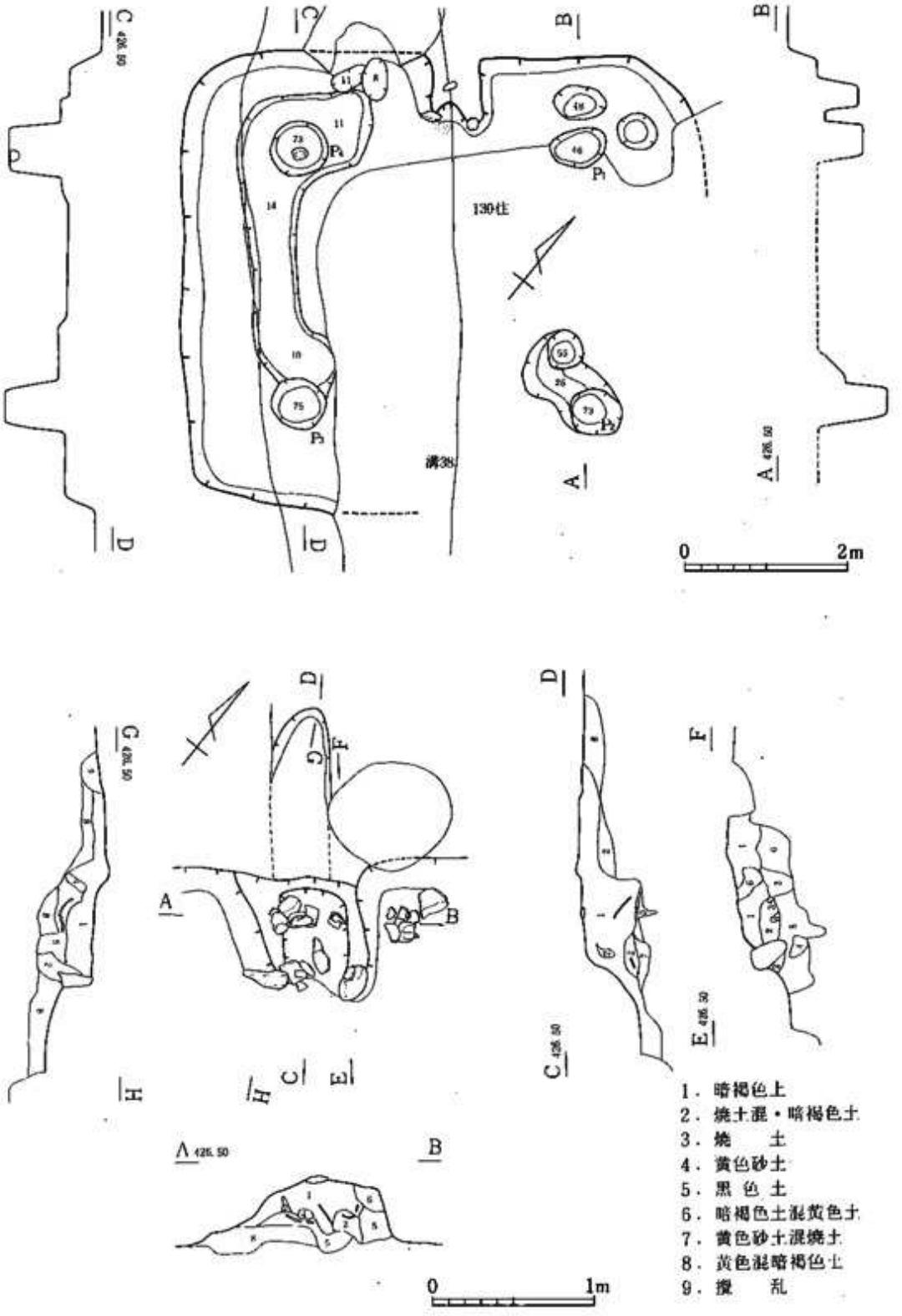
出土遺物・重複関係から古墳時代後期に比定される。

㊶ 134号住居址（挿図33，第26図３～第27図３，第74図２）

ＹＳ63を中心に検出した。130号住居址，溝址38に切られる。隅丸方形を呈する竪穴住居址で重複関係のため規模等詳細は不明であるが，東西約6.4m×南北約5.6mと東西方向が長い。主軸方向はN40.8° Wを示す，床面の検出部分は小さく，地山が黄色砂質土のため，良好な部分は検出できなかった。壁高は約40cmを測り，ややゆるやかに立ち上がる。西壁寄り主柱穴周辺に幅50～100cmの周溝状の掘り込みがあり，底部はほぼ平坦である。130号住居址床面はこれより下位にあたり，重複部分での検出は困難である。主柱穴はP_1～P_4の４本確認され，P_1を除き深さが揃う。径60～70cmの不整円形を呈する掘り方である。北壁ほぼ中央に位置するカマドは，袖石１対の石芯粘土カマドである。焼土の発達は顕著でない。カマド内より土師器甕・坏，カマド右側より土師器甕が出土している。

遺物出土量はやや少ない。土師器甕・坏・高坏・鉢・甑，須恵器甕・蓋・坏等がある。土師器甕は長胴形を呈し内外ヘラミガキを施されるもの，胴が張り胴上部に最大径をもつもの（第26図３）等がある。坏・高坏には内面黒色処理されるもの（７）がある。甑は（第27図２）は，単孔で孔の径がさほど大きくない。他に口縁部が外反するものがある。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。



挿図33　134号住居址

㊷ 135号住居址（挿図29，第27図４）

ＹＴ68グリッドを中心に検出した。130号住居址に半分以上を切られるため詳細は不明である。東西5.6ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向は推定47.5° Ｗを示す。壁高は14～23cmを測り，急な立ち上がりを示す。壁下やや離れて周溝状の掘り込みがあり，幅40～50cm，深さ10～13cmを測る。底面の状態は平坦である。床面は硬く締まっている。主柱穴は３本確認され，不整円形を呈し径約30cmを測る。深さは東壁が76・72cm，西壁側がやや深い。周溝状の掘り込み内より磨製石剣が混入出土した。

遺物は土師器甕・鉢等があり，出土量はきわめて少ない。土師器甕はいずれも小片である。鉢は内面ヘラミガキ，外面ヘラケズリ後ヘラミガキが施される。小型で口縁がわずかに外反する。

出土遺物・重複関係から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

㊸ 137号住居址（挿図34，第27図５）

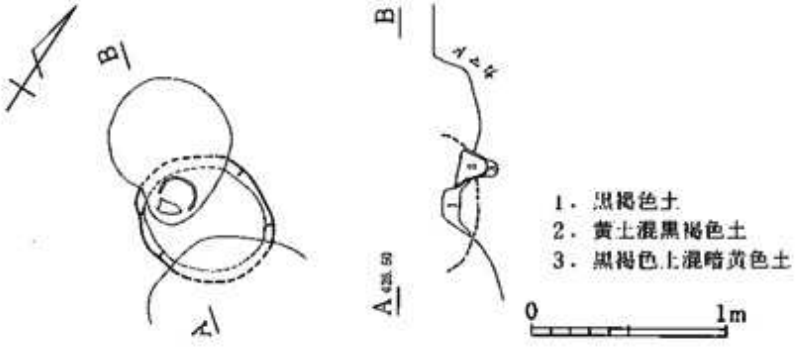
ＹＫ76グリッドから出土した埋設土器とその周辺に広がる。101号住居址・溝址37に切られる。床面レベルは101号住居址と差があまりなく，壁の把握は困難で，このため平面形その他詳細は不明である。

遺物は土師器甕（５）１点のみである。胴中央に最大径をもつ長胴形を呈し，口縁部横ナデ，以下内外面ヘラミガキが施される。

出土遺物等から古墳時代後期に比定される。

㊹ 138号住居址（挿図14，第27図６・７）

ＹＮ68で検出された。110・111・128号住居址を切り，127号住居址に切られる。上部を削平されカマドのみ調査したにとどまり，詳細は不明である。石芯粘土カマドであり，天井石がはずれ落ちる等遺存状態は不良である。焼土は顕著でない。下部から111号住居址貼床が検出された。



137号 住居址埋設土器

挿図34　137号住居址

出土遺物は少なく，土師器甕・甑等が出土している。甕は口縁部に最大径をもつもの（第27図6）の他，長胴形を呈し外面ハケナデ調整が施されるもの（7）がある。

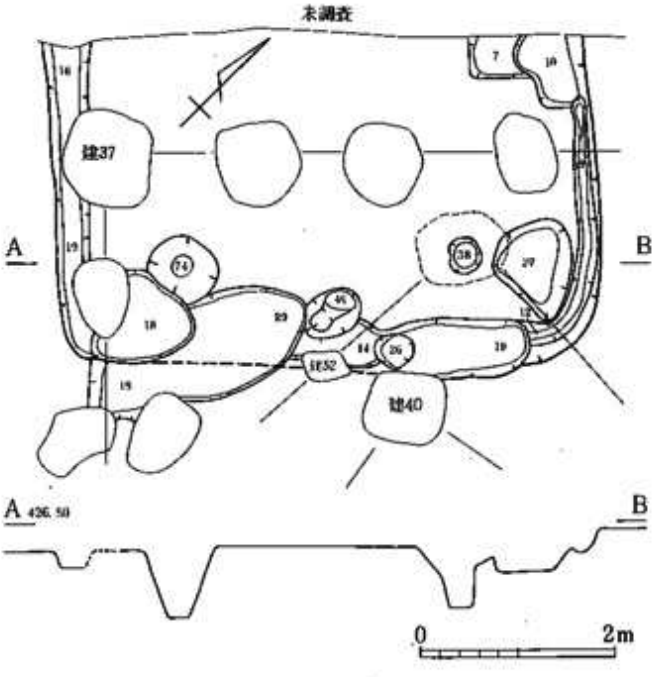
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

㊺ 139号住居址　（挿図35，第28図1～3）

ＹＥ53グリッドを中心に検出した。掘立柱建物址37・52に切られる。北側半分が調査区外にかかるため不明な点が多いが，東西5.5mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向は推定N49.2° Wを示す。覆土は漆黒土である。上部が削平され遺存状態は不良であるが，東壁壁高は約20cmを測り急に立ち上がる。周溝はほぼ全周しており，幅10～50cm，深さ9～19cmを測る。南及び西側周溝は幅広である。床面は軟弱な貼り床であり，掘り方は地山の礫混じりの黄褐色砂質土におよび，この位置まで掘りすぎた。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋等があり，出土量は少ない。土師器甕（第28図1）は胴部球形を呈し，底部はヘラズリされる。坏は口縁部が直立するものと，口縁が外反し胴部もややふくらむものがあり，前者には内面黒色処理されるものがある。高坏も内黒である。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

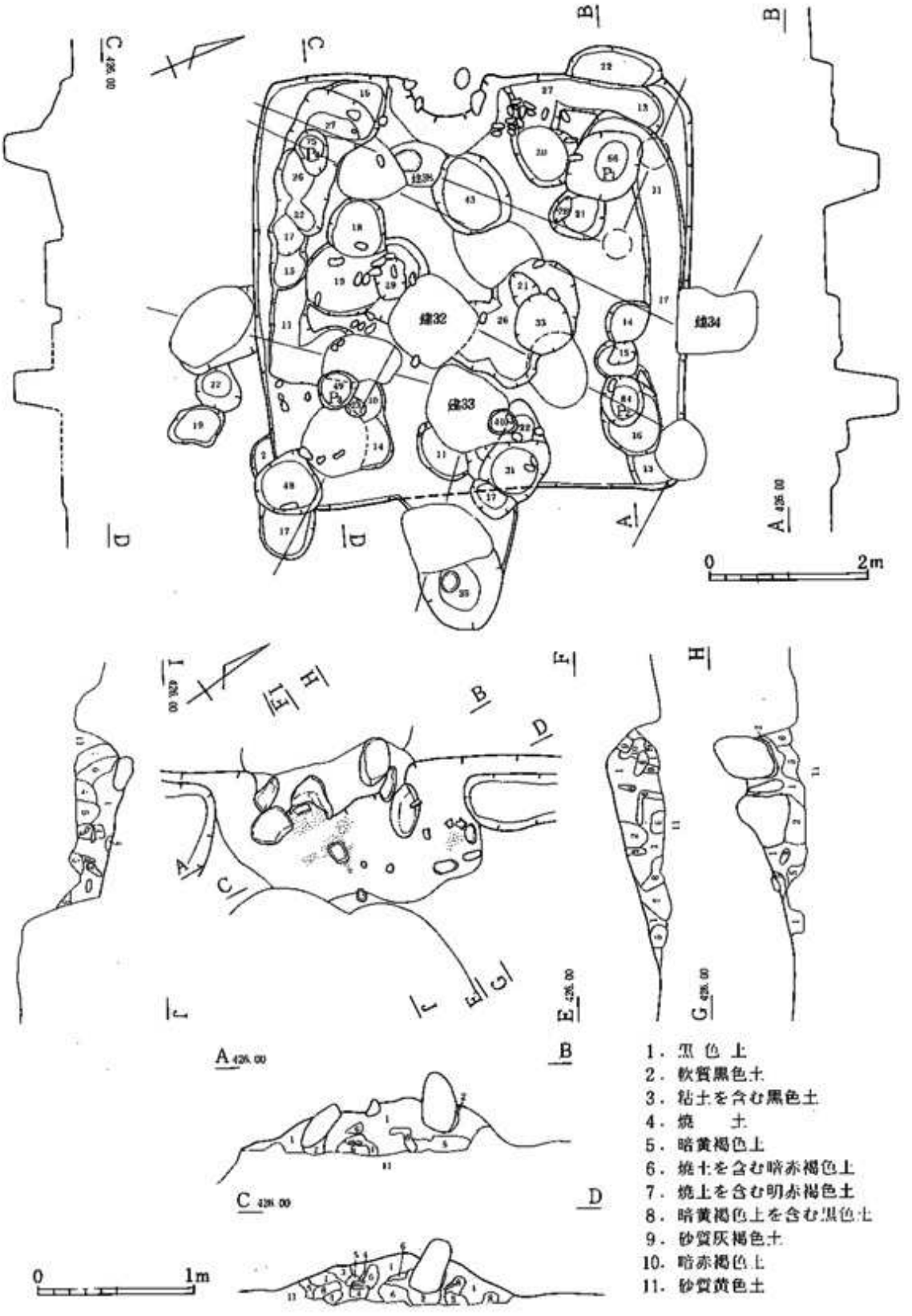


挿図35　139号住居址

㊻ 140号住居址

（挿図36，第28図4～第29図6）

ＸＹ66を中心に検出された。141号住居址，掘立柱建物址32～34・38に切られる。東西5.3m×南北5.2mの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向N72.2° Wを示す。重複する他遺構の為，床面の遺存状態は良好でない。地山が暗黄褐色砂質土のため，床面は軟弱である。壁高は4～15cmを測るが，立ち上がりの状態は不明



挿図36　140号住居址

である。南壁を除く壁下にはやや離れて周溝状の掘り込みがあり，幅40～50cmと幅広で底面は平坦でない。主柱穴は4本確認され，P_1を除く3本は径50～60cmの不整円形を呈する。底部レベルはP_2を除きほぼ揃う。北壁中央やや西寄りにカマドが設置される。カマドの方向は本址の主軸方向とは異なる。石芯粘土カマドであり，右袖石は重機により原位置が失なわれた。カマド右脇および中央西寄りより編物石が集中出土した。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器壺・甕・蓋・坏・高坏等があり，出土量は多い。土師器甕は長胴形を呈するもの，小型のもの（第28図4）がある。坏は暗文の施されるもの，内外赤褐色を呈するもの，内面黒色処理されるものがある。須恵器蓋はつまみをもつ中型のもの（8）と，内面にかえりをもつ小型のものの二種類ある。

出土遺物・重複関係等より本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

㊼ 141号住居址（挿図37，第29図7・8，第74図3・4）

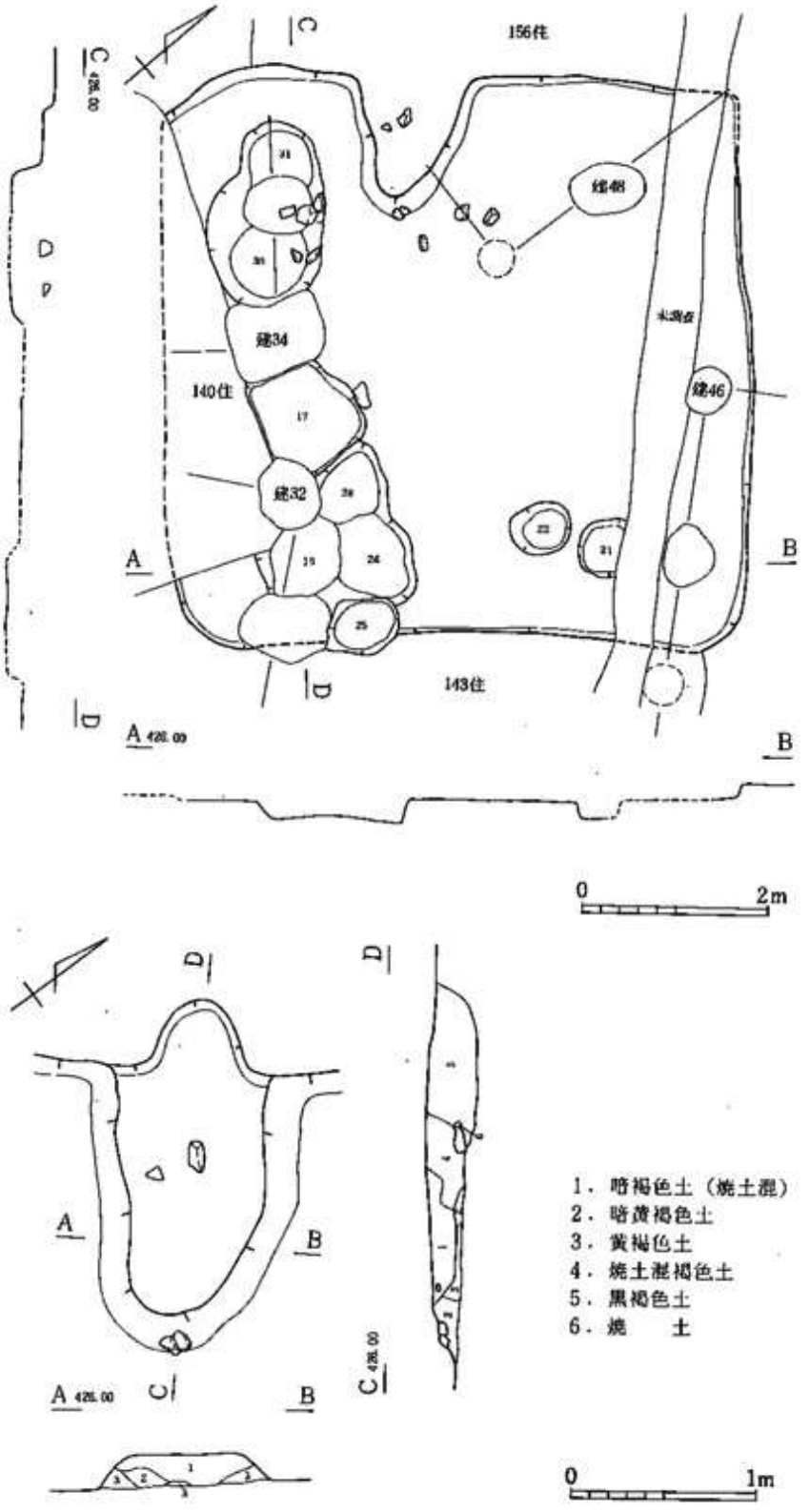
YC64グリッドを中心に検出した。143号住居址を切り，140号住居址および掘立柱建物址32・34・46・48に切られる。東西6.2×南北5.8mの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はN50.1°Wを示す。覆土は検出面から床面までが浅いため，暗褐色土の一層である。壁高は5～15cmを測るが，立ち上がりの状態は不明である。本址付近の地山は褐色の砂質土であり，床面はかなり軟弱である。西壁寄りに柱穴が連続的に掘り込まれており，かつ掘立柱建物址と重複しているため主柱穴は不明である。柱穴は17～31cmと全体的に浅く，地山に制約されてだらだらとした立ち上がりを示し，不整形である。北壁やや西寄りに位置するカマドは遺存状態が不良であり，焼土もあまり発達していない。痕跡的に粘土が確認されており，粘土カマドであると考えられる。カマド前面に礫が散在する。

遺物は土師器甕・小型甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋・坏・平瓶，帯金具等があり，出土量はやや多い。土師器坏は口縁がほぼ直に立ち上がるもの，小さく外反するものがあり，内面黒色処理される。須恵器平瓶（第29図8）の遺存状態はよくないが，肩部に小さな孔が外側から内側に向かって突き通されている。銅製帯金具（第74図4）は2個の鋲をもつ。

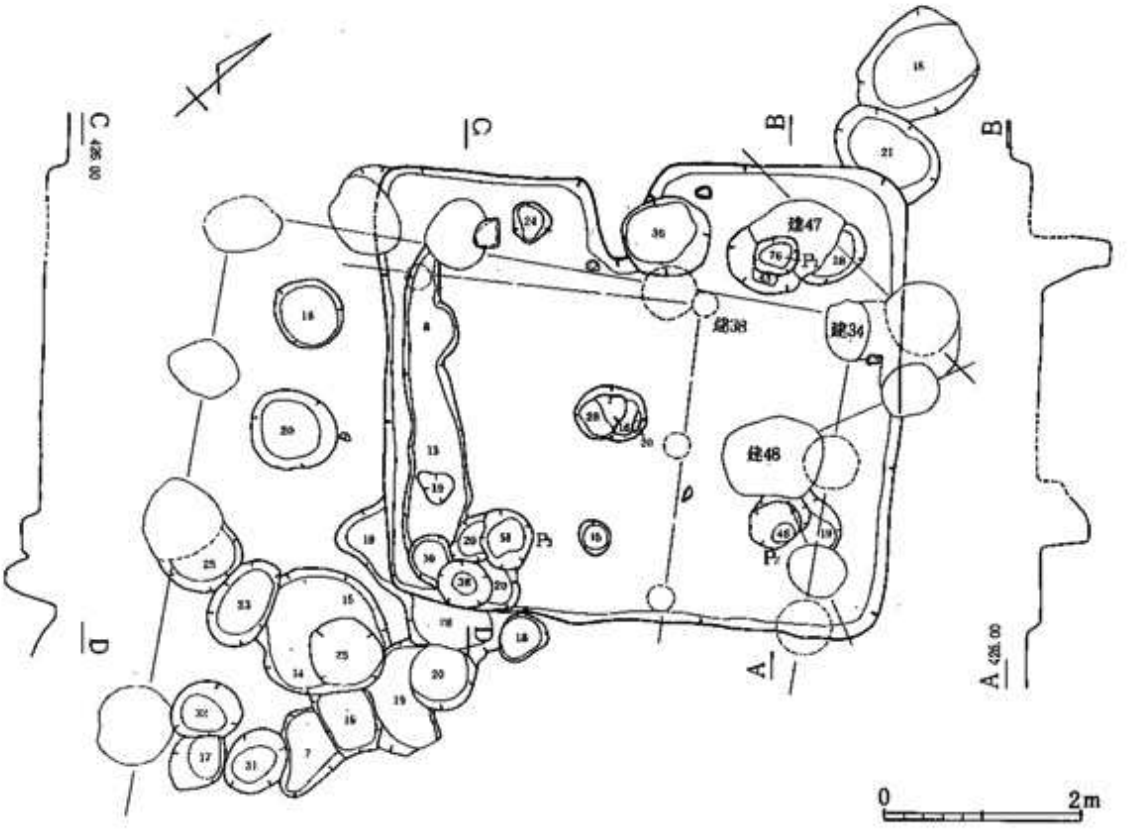
出土遺物等から古墳時代後期に比定される。

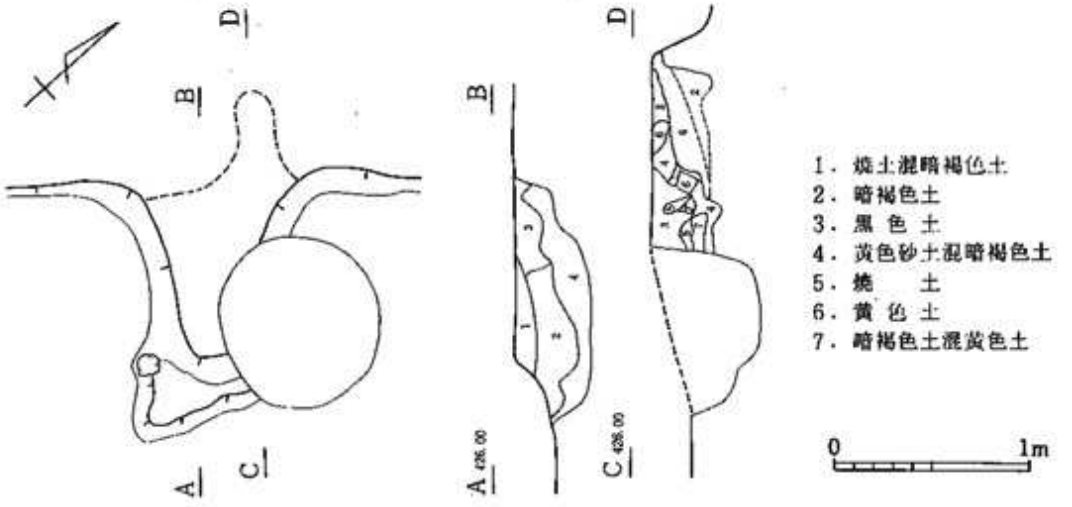
㊽ 142号住居址（挿図38，第30図1～5，第77図）

XY61グリッドを中心に検出した。掘立柱建物址34・38・47・48に切られる。東西5.2×南北4.6mの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はN48.4°Wを示す。壁高は15～20cmを測り全体的に急な立ち上がりをみせる。西壁下やや離れて幅30～50cmの周溝が掘り込まれており，底部の状態は平坦である。床面は礫混でかなり硬く締まっており，ほぼ平坦である。北壁中央に位置す



挿図37　141号住居址





挿図38　142号住居址

るカマドは新しい柱穴により原形の大半は失われているが，粘土カマドであると考えられる。

遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢・甑，須恵器甕等があり，出土量はやや多い。土師器内黒の坏は口唇の内湾するものとわずかに外反するものがある。高坏（第30図２）は内面黒色処理され，坏部外面に稜がある。鉢（３）は胴部中央に細かい縦位のカキメが施される。甑（４）は単孔である。

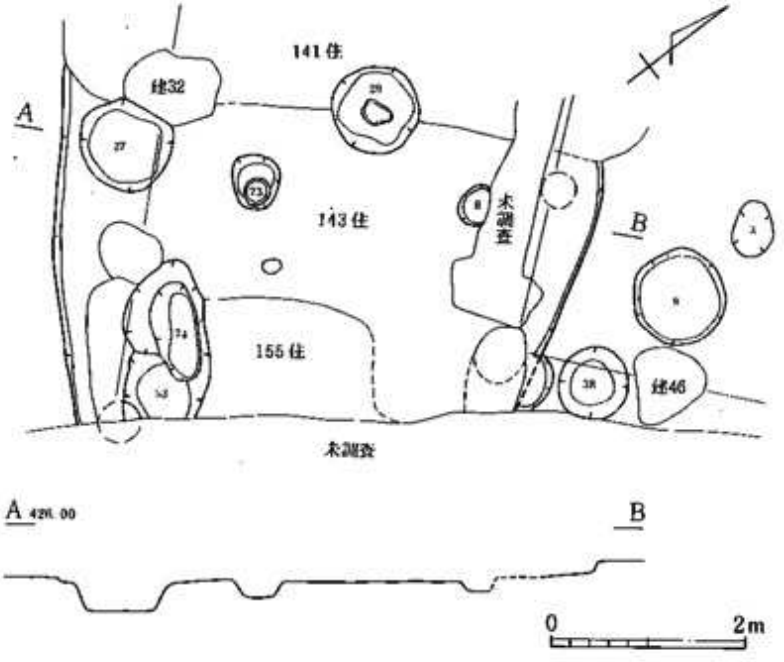
出土遺物等から古墳時代後期に比定される。

㊾ 143号住居址（挿図39）

ＹＣグリッドを中心に検出した。141・155号住居址，掘立柱建物址32・46に切られる。重複のため不明な点が多いが，東西5.3ｍの不整形な竪穴住居址である。壁高は５～10cmを測るが，立ち上がりの状態は不明である。床面はやや軟弱である。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋・坏・高坏・甑等があり，出土量はやや少ない。土師器甕は小破片が多いが，胴部球形を呈するものがある。土師器坏は下半に稜をもち口縁がほぼ垂直に立ち上がる器形で，内面黒色処理される。須恵器高坏は脚付け根からすぐに開く。他に重複する住居址からの混入遺物として，カキメの施される甕，須恵器高台坏，灰釉陶器碗がある。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

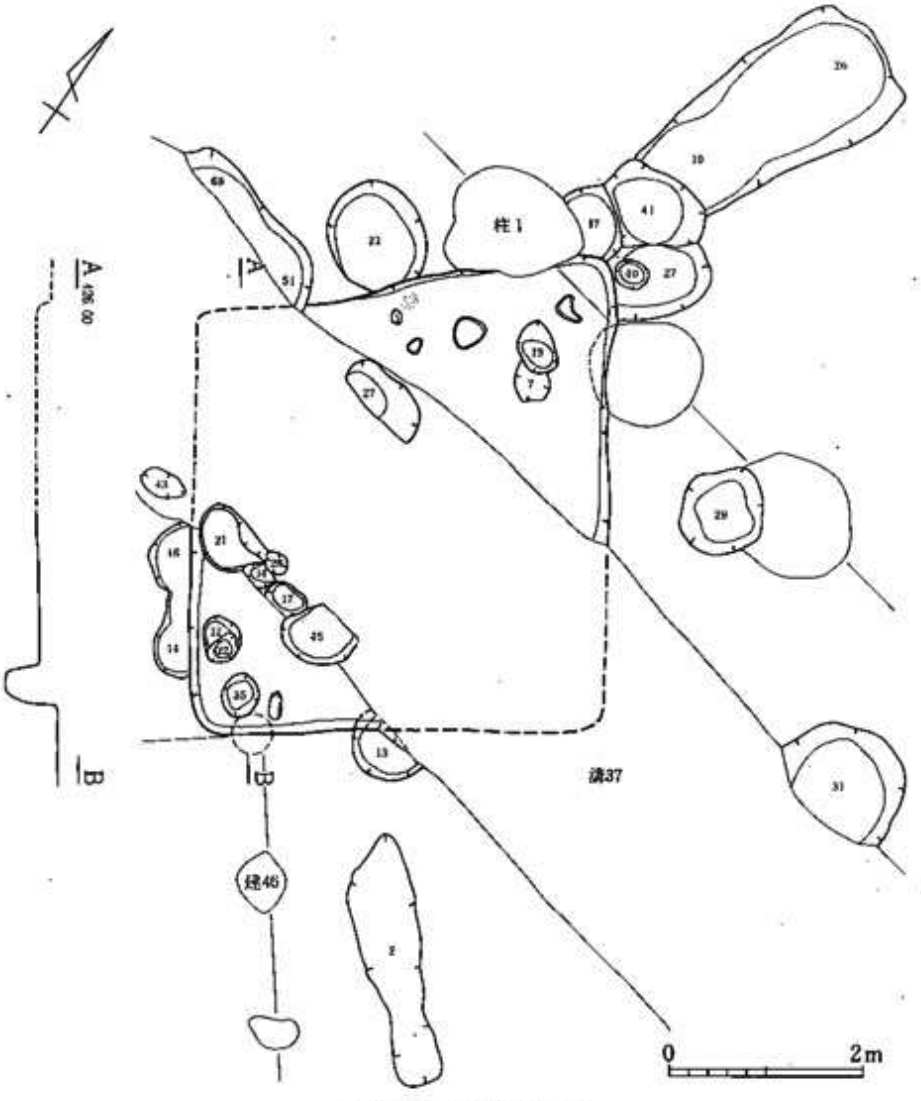


挿図39　143号住居址

⑥ 144号住居址（挿図40，第30図6～8，第31図）

ＹＧ64で検出された。溝址37・柱列址１に切られる。不整方形を呈する竪穴住居址で，東西4.2m×南北4.6m，主軸方向N32.2° Wを測る。中央を溝址に約半分切られる為，不明な点が多いが，硬い床面は検出できない。壁高は12～18cmを測り，ややゆるやかな立ち上がりを示す。北壁ほぼ中央にカマドが設けられていたが，焼土が検出されたのみで，上部はこわされ構造は不明である。

遺物量は多く，土師器甕・坏・高坏・甑，須恵器甕・坏等が出土している。土師器甕は球形胴を呈するもの（第31図２）の他，長胴で胴下半に最大径をもつもの（第30図６・７）が多い。前



挿図40　144号住居址

者は内外赤褐色を呈し，搬入品である。坏（第31図７・８）は下半に稜があり，口縁が外反するもの，やや深く口縁の立ち上がりが小さい小型のもの等がある。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

⑤1 146号住居址（挿図41，第32図１～６）

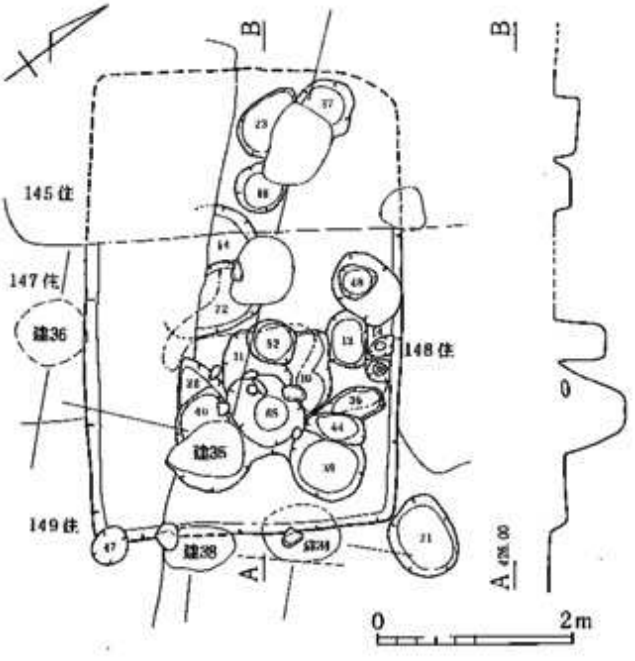
ＸＸ60を中心に検出した。145号住居址・掘立柱建物址34～36・38に切られ，147～149号住居址を切る。不整方形を呈する竪穴住居址で，東西3.2m，南北は床面遺存部分で4.6mを測る。主軸方向はN52.5° Wを示す。重複遺構が多く，主柱穴・付属施設等詳細は不明である。床面は非常に硬く締っており，壁は急な立ち上がりを示す。東壁際に検出された焼土は東側の小柱穴に伴なうものであるが，カマドの痕跡を示すとは考えられない。平面形態等から工房址である可能性もある。

出土遺物はやや少なく，土師器甕・坏・高坏・鉢，須恵器壺・坏等がある。土師器坏は内面黒色処理される。高坏は坏部に稜をもつ（２）。鉢は外面ヘラケズリ整形される。他に縄文時代中期・弥生時代後期・平安時代後期の混入遺物がある。

出土遺物・重複関係等より古墳時代後期に比定される。

⑤2 147号住居址（挿図42，第32図７～９）

ＸＷ59グリッドを中心に検出した。149号住居址を切り，145・146号住居址に切られる。他住居址との重複関係や西壁側が調査区外にかかるため，平面形・規模等詳細は不明である。南北4.1mを測り，主軸方向はN50.1° Wを示す。壁高は9～25cmを測り，ややゆ

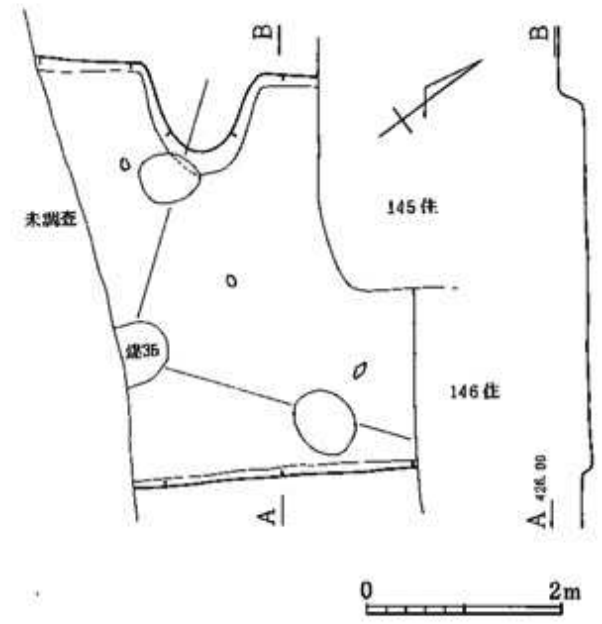


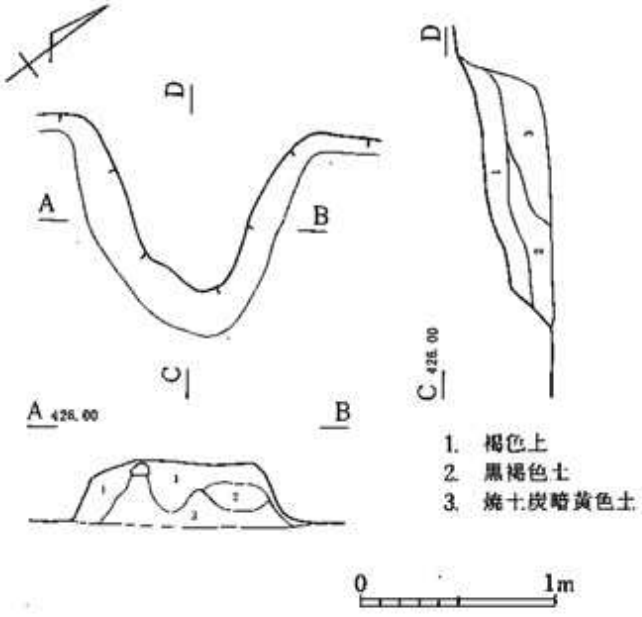
挿図41　146号住居址

るやかな立ち上がりを示す。床面は軟弱である。カマドは北壁ほぼ中央に設けられたと考えられるが，焼土・炭が壁際下位に認められる他遺存状態は不良で，構造等不明である。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・甑，須恵器壺・蓋・甕等があり，出土量はやや多い。土師器甕は口縁部の立ち上がりのほとんどないもの，小さく外半するもの，頸部に暗文風の縦位のヘラミガキが施されるもの（7）等がある。坏には内面黒色処理され，やや丸底状のものがある。わずかに縄文時代中期深鉢片，平安時代の土師器甕片が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。





挿図42　147号住居址

㊸ 148号住居址

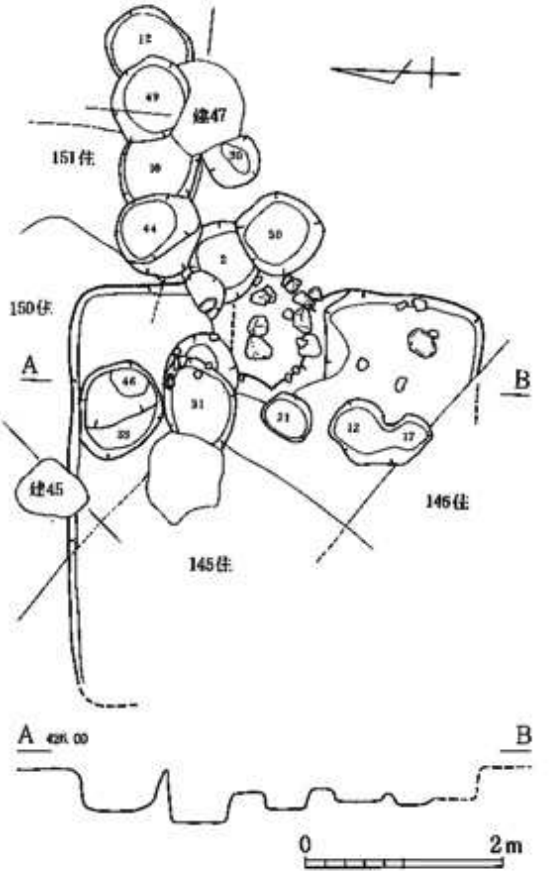
（挿図43，第74図5，第77図）

YA59を中心に検出した。145・146号住居址・掘立柱建物址に切られ，150・151号住居址を切る。南北4.1mの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向は他の住居址と大きく異なりN84.4°Eを示す。床面は非常に硬く締っており，また壁の立ち上がりの状態はややゆるやかである。カマドは東壁ほぼ中央に構築され，石芯粘土カマドである。左袖第1列目の袖石を欠くものの，遺存状態は良好であり，燃焼部付近に崩れ落ちた礫が多数

認められた。比較的焼土が発達しており，長期にわたる使用を物語るといえる。

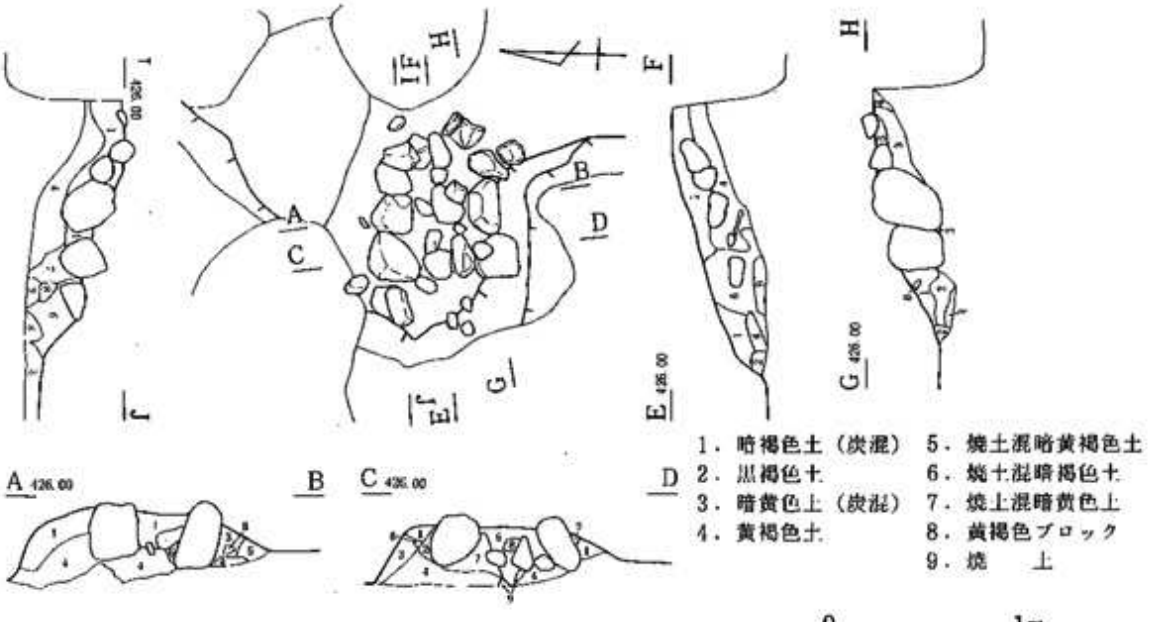
出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢・甑，須恵器壺・甕・蓋等があり，出土量はやや少ない。土師器甕は口縁部の立ち上がりが小さいもの等がある。坏は内面黒色処理されるものの他，細かい暗文の施された内外赤褐色を呈するものがある。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

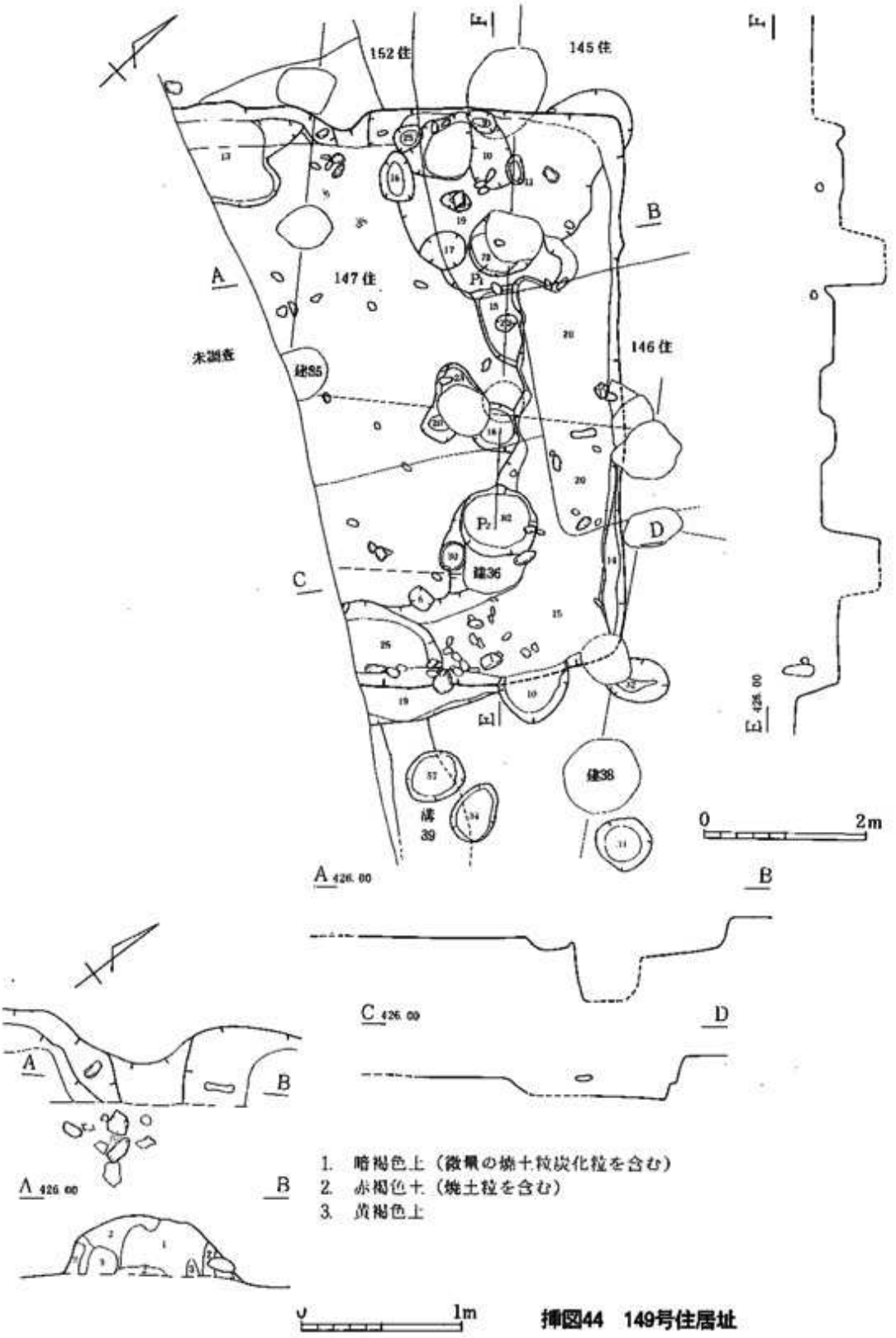


㊹ 149号住居址（挿図44，第32図10～第33図7，第73図3，第74図6～9）

XW59グリッドを中心に検出した。145～147号住居址，掘立柱建物址35・36・38，溝址39に切られる。西壁側は調査



挿図43　148号住居址



挿図44　149号住居址

区外にかかり，東西方向の規模は不明であるが，南北7.1mのやや大形の方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN46.1° Wを示す。壁高は29〜52cmを測り，急な立ち上がりが良好に検出された。床面は地山が暗黄褐色の砂質土のためやや軟弱である。カマドを除きほぼ全周して周溝状の掘り込みがあり，幅100〜130cm，深さ13〜25cmを測る。主柱穴は2本確認され，不整円形を呈し径80〜90cmを測る。深さは72・82cmでP₂が深い。P₁西側周溝状部分には焼土が多量に混入し，灰溜めである可能性もある。この部分の底面は一部硬く締まっていた。北壁中央に位置するカマドは147号住居址に切られ，遺存状態が不良で構造等は不明である。

遺物は土師器甕・坏，須恵器甕・蓋・蓋坏・高坏・●等があり，出土量は多い。土師器甕は底部に木葉痕をとどめるもの（第32図11・12）がある。坏はごく薄手のもの，浅い鉢状のものがあり，後者には内面黒色処理されるものがある。須恵器甕は中型のものと小型のものがあり，小型のものは内側にかえりがある。

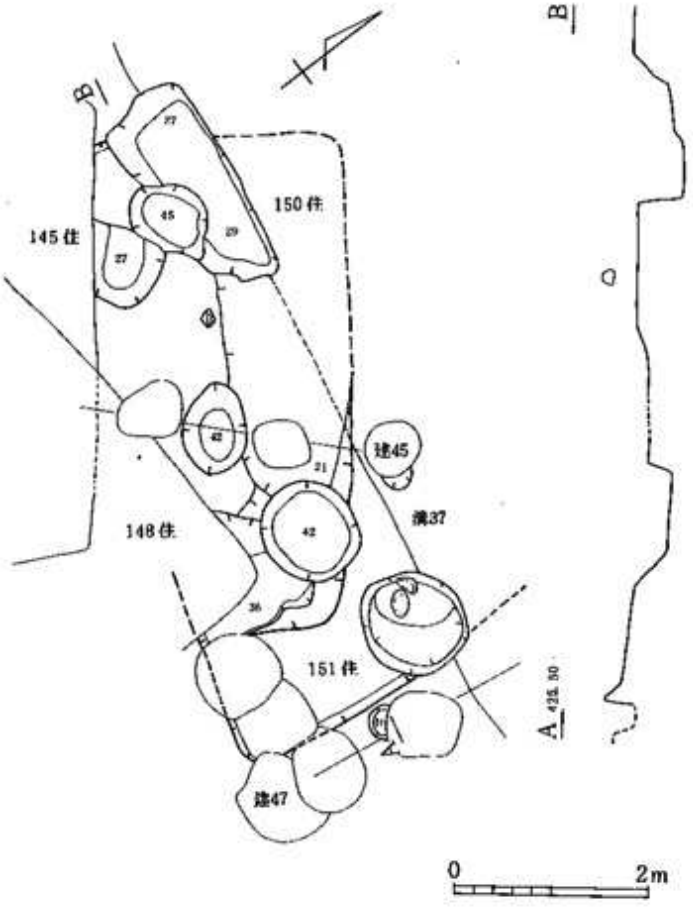
出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

㊺ 150号住居址

（挿図45，第77図）

YBグリッドを中心に検出した。151号住居址を切り，145・148住居址，掘立柱建物址45・溝址38に切られる。他住居址等との重複関係のため，詳細は不明であるが，南北5.0mを測り，主軸方向はN53.1° Wを示す方形の竪穴住居址である。壁高は16〜19cmを測る。床面の遺存する部分はやや軟弱である。

遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器甕・蓋・坏等があり，出土量は少ない。土師器甕は口縁部が



挿図45　150・151号住居址

直立する。坏は浅く小型でやや厚く，内面黒色処理される。高坏も内黒である。灰釉陶器皿が混入出土した。

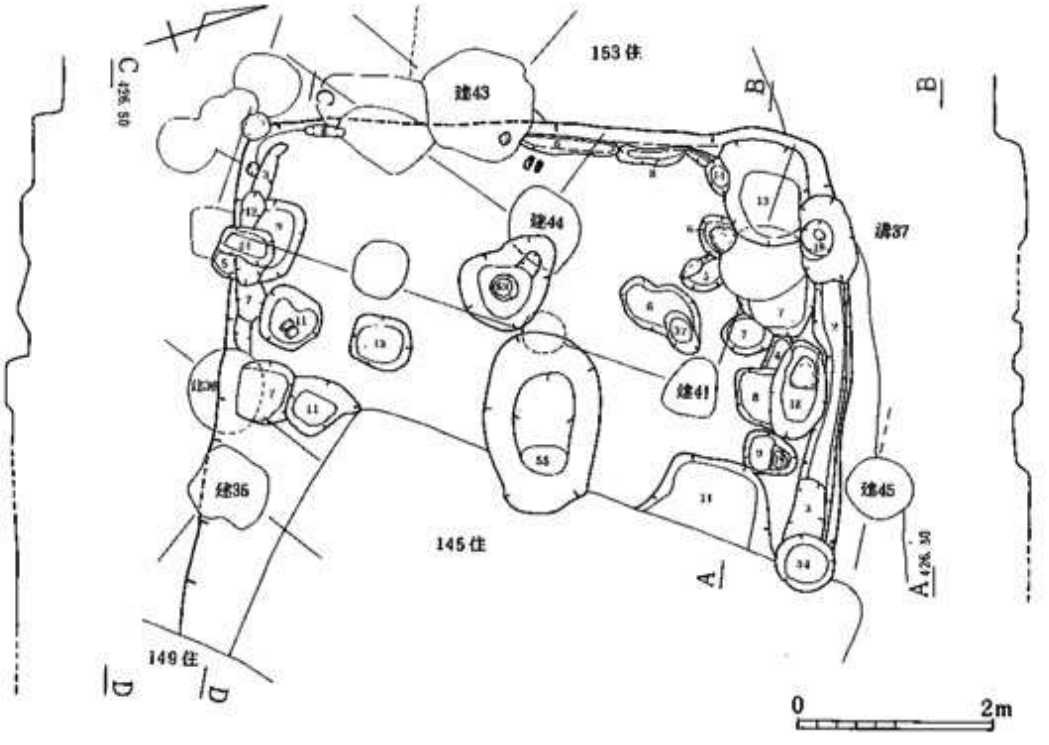
出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。

⑤⑨ 151号住居址（挿図45）

ＹＢ59を中心に検出された。148・150号住居址，掘立柱建物址47，溝址37に切られる。方形を呈すると考えられる竪穴住居址であるが，その重複関係のため詳細は不明である。壁高は12～19cmを測り，ゆるやかな立ち上がりの状態を示す。床面は硬く締まる。

出土遺物は土師器甕・坏，須恵器甕・蓋・坏等であり，出土量は少ない。いずれも小破片で器形の知れるものは少ない。土師器甕は頸部の立ち上がりが小さい。坏は内面黒色処理されるものがある。

出土遺物・重複関係等から本址の所属時期は古墳時代後期に比定される。



挿図46　152号住居址

㊼ 152号住居址（挿図46，第33図８～第34図４）

ＸＸ56グリッドを中心に検出した。153号住居址を切り，145・149号住居址，掘立柱建物址35・36・41・43・44，溝址37に切られる。東西6.4mの方形を呈すると思われる竪穴住居址で，主軸方向は推定67.2° Wを示す。覆土中及び床面上に焼土・炭が多量にあり，火事にあった住居址である。壁高は12～20cmを測り，全体的に急に立ちあがる。周溝はほぼ全周して検出され，幅10～30cm，深さ２～11cmを測る。床面は焼けてやや硬いが，地山が暗黄褐色砂のため，締りはない。主柱穴は確認できなかった。カマドは北壁に位置したと考えられるが，掘立柱建物址と重複し遺存しない。

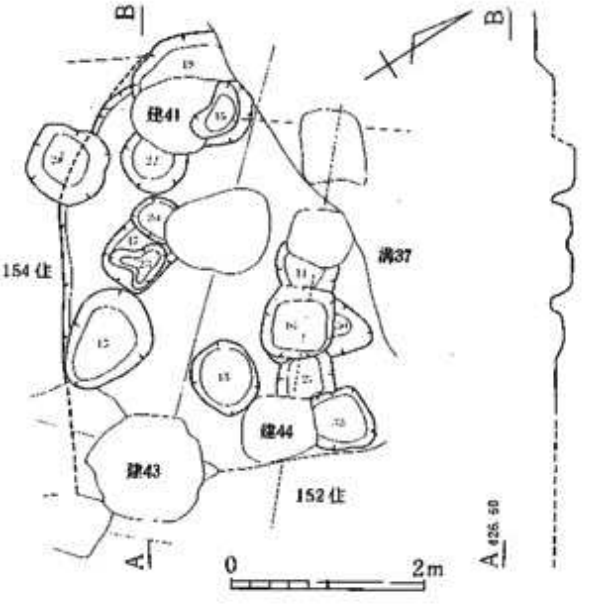
遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢，須恵器壺・甕・蓋・坏等があり，遺物量は多い。土師器甕は口縁端がさらに外反するもの，頸部に間隔をおいた縦位のヘラミガキの施されるもの，小型で口縁が内湾するもの等がある。高坏（第33図12）は粘土紐の貼り付けにより稜が作出される。鉢は薄手で内外面ヘラミガキされる。須恵器壺（第34図１）は口縁が直立し胴が張る。蓋坏はヘラ切りされる。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

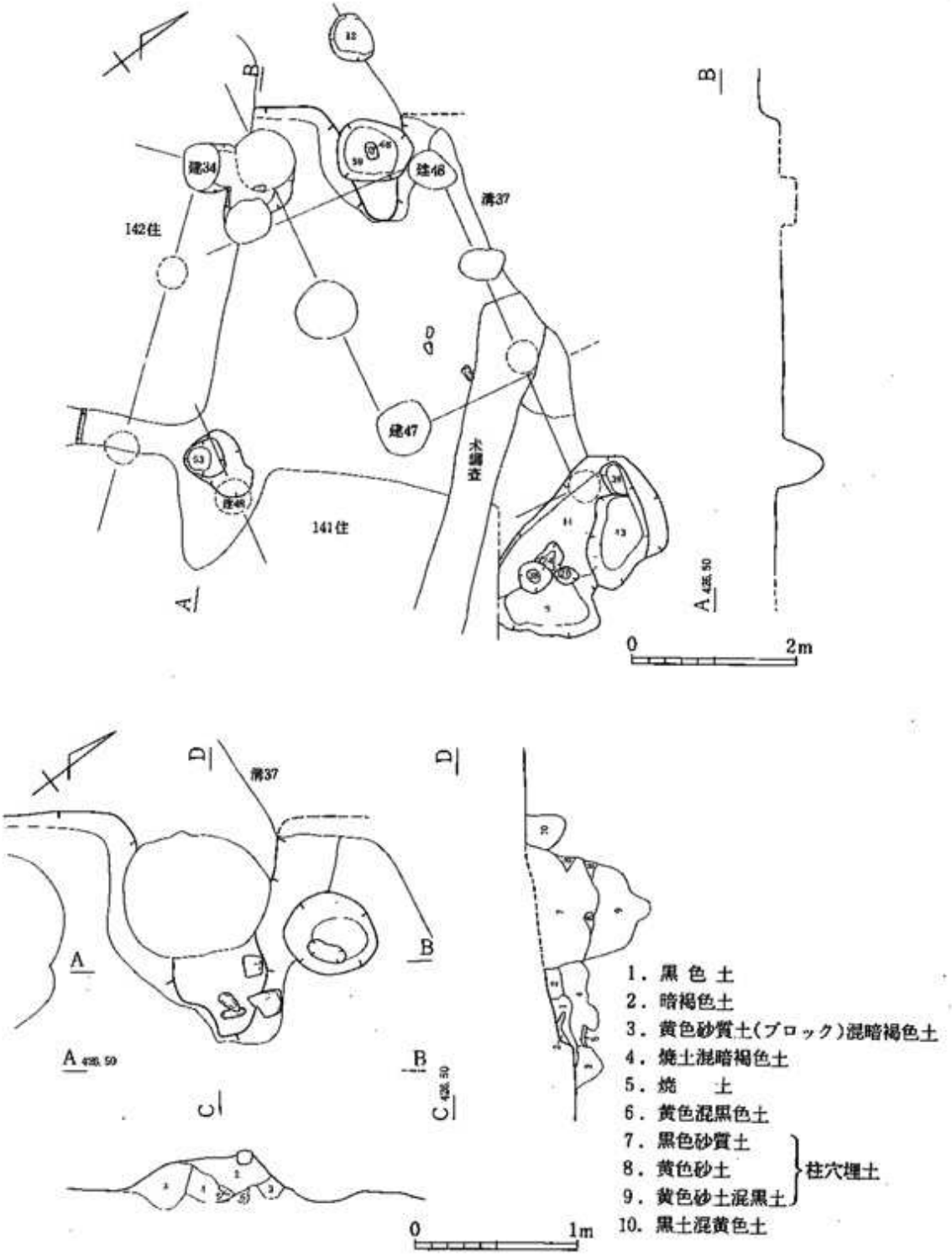
㊽ 153号住居址（挿図47，第34図５）

ＸＸ54を中心に検出した。152号住居址・溝址37，掘立柱建物址41・43・44に切られる。隅丸方形を呈すると考えられる竪穴住居址であるが，重複遺構により規模・主軸方向・諸施設等不明である。床面は全体的に軟弱で，南側がわずかに低い。壁はゆるやかな立ち上がりを示し壁高は約20cmを測る。

出土遺物は少なく，土師器甕・坏・不明土製品，須恵器壺・坏等がある。土師坏で内面黒色処理されるものには口縁がわずかに外折するものと，浅く小型で部厚いものがある。前者は内面に籾痕が認められる。他に口縁



挿図47　153号住居址



挿図48　156号住居址

部が肥厚する器形がある。須恵器坏は器壁が急な立ち上がりを示し，平底を呈する。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期に比定される。

⑲ 156号住居址（挿図48，第34図6～8，第35図1～5）

ＹＣ63を中心に検出された。141・142号住居址，掘立柱建物址34・47・48，溝址37に切られる。重複遺構のため，規模等詳細は不明であるが，方形を呈する竪穴住居址と考えられる。本址掘り方は地山の礫混り黄色砂土に達しており，貼り床されたと考えられるが，軟弱であり検出できなかった。壁高は5～31cmを測り，ゆるやかな立ち上がりの壁である。北壁ほぼ中央に位置するカマドは中央部に柱穴が掘り込まれる等遺存状態は不良である。カマド左脇より土師器甕が出土している。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢，須恵器壷・坏・盤等があり，出土量は多い。須恵器の量は少ない。土師器甕は胴下半に最大径をもつ大形の甕（第34図7，第35図1），小型の甕がある。高坏は坏部に稜をもつ。他に縄文時代中期後半深鉢片，弥生時代後期甕片等が混入出土した。

出土遺物・重複関係等から古墳時代後期の竪穴住居址である。

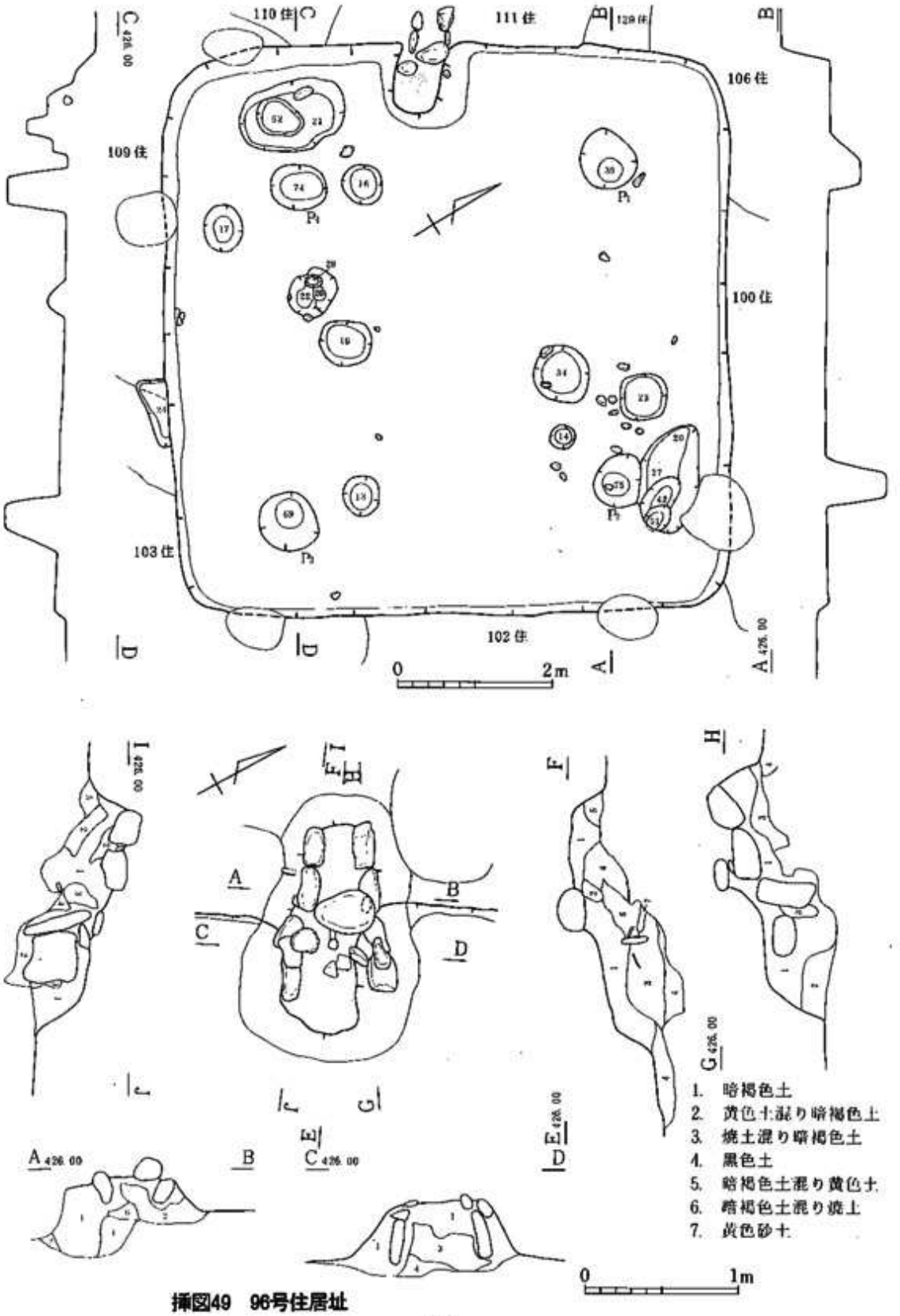
(3) 平安時代

① 96号住居址（挿図49，第35図6～第37図，第74図10～12）

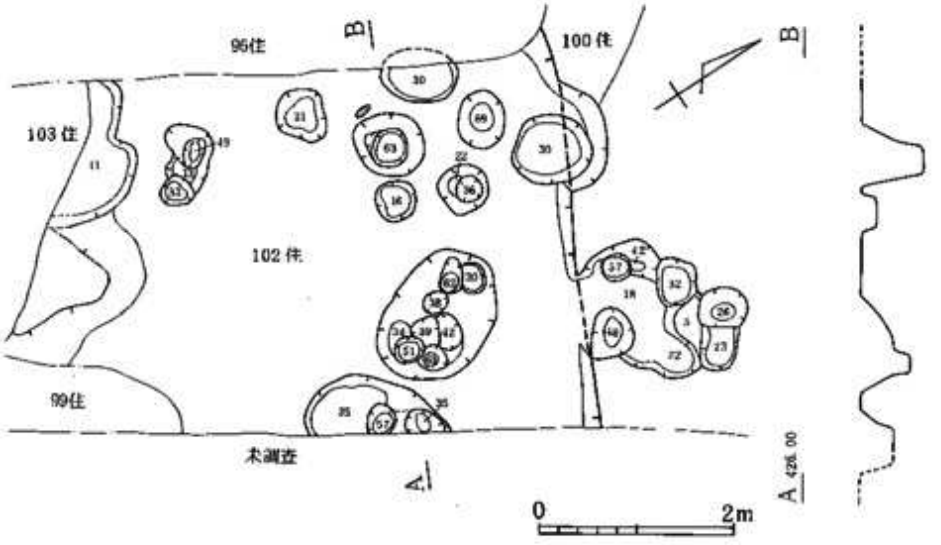
ＹＰ72グリッドを中心に検出した。100・103・106・109～111・129号住居址・掘立柱建物址28を切る。東西7.2×南北7.3mの方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向はN58.0° Wを示す。壁高は14～61cmを測り，南壁・東壁南半・北壁西半はゆるやかなものの，他の部分の壁は急な立ち上がりを示す。床面は貼り床されやや軟弱である。周溝は掘り込まれていない。主柱穴は4本確認され，径70～80cm，深さ39～75cmを測る。P_1のみ浅く揃わない。北壁ほぼ中央にカマドが設けられており，袖石・煙道部の石組が良好に遺存しており，石芯粘土カマドである。焚き口付近に焼土はあまり発達していない。東壁下より須恵器提瓶，カマド右側より同高台坏が出土している。

遺物は土師器甕・坏，須恵器壷・甕等があり，他に重複住居址からの混入遺物として土師器高坏・甑，須恵器壷・甕・蓋・坏・高坏・甕・提瓶等がある。出土量は多い。土師器甕はカキメの施される長胴形，小型甕等がある。坏は浅めで口縁が内湾し，内面黒色処理される。高坏には内黒がある。須恵器高坏脚部には透かし孔が3ケある。

出土遺物・重複関係等から平安時代前期に比定される。


110住
111住
129住
106住
109住
100住
103住
102住
0
2m
1. 暗褐色土
2. 黄色土混り暗褐色土
3. 焼土混り暗褐色土
4. 黒色土
5. 暗褐色土混り黄色土
6. 暗褐色土混り焼土
7. 黄色砂土
0
1m

挿図49　96号住居址



挿図50　102号住居址

② 102号住居址（挿図50，第38図１～５，第74図13）

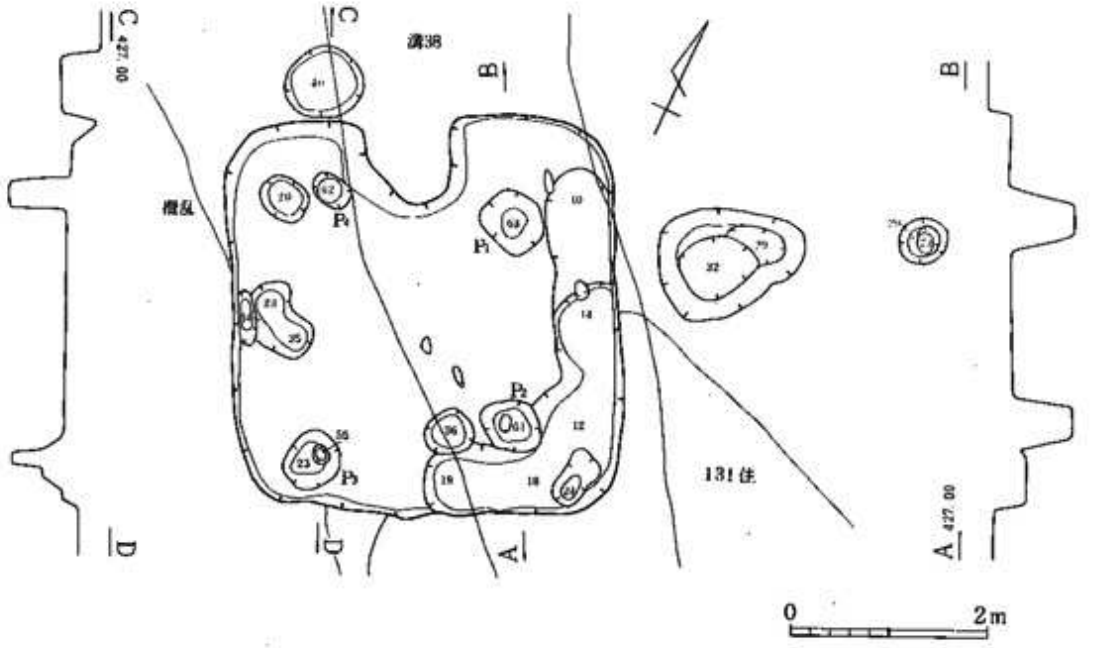
ＹＱ75で検出された。96・99・103号住居址を切り，南側は調査区外にかかる。東壁を検出したのみで規模・主軸方向等不明であるが，方形を呈すると考えられる。埋土は褐色土の一層である。全体的に床面はやや柔らかい。壁はゆるやかな立ち上がりを示し，20～27cmの壁高を測る。99・103号住居址に重複してマウンド状の部分がある。

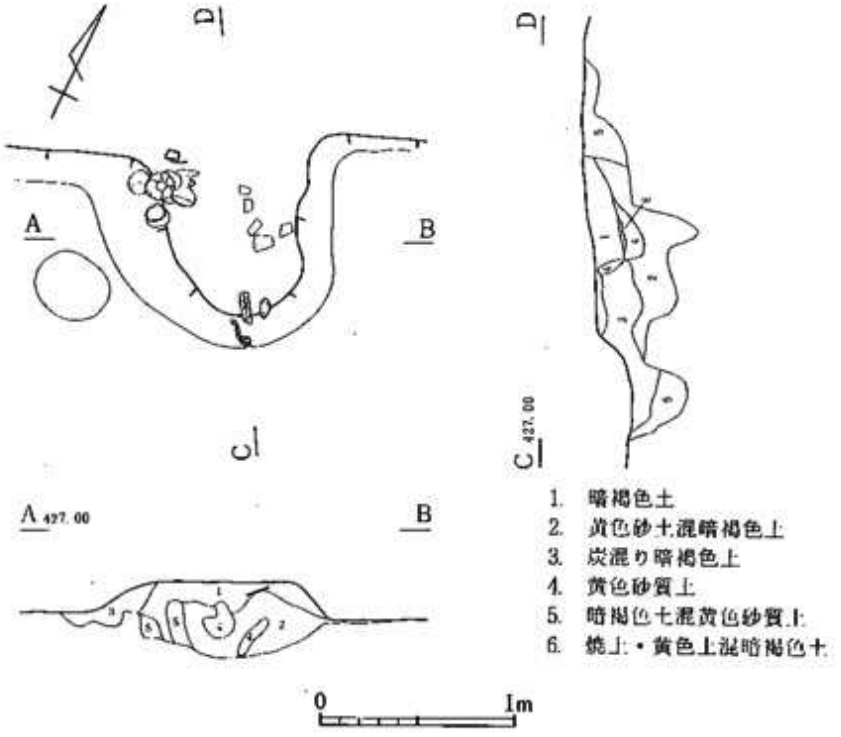
土師器甕・坏・高坏・甑・小型皿，須恵器・坏・盤，灰釉陶器碗，不明土製品がある。土師器甕（１）は内外カキメが施される。小型皿（２・３）及び須恵器坏は糸切り底である。不明土製品（５）は縦位にカキメが施されているもので，用途は不明である。他に縄文時代中期後半の深鉢片が多数混入出土した。

出土遺物から平安時代後期に比定される。

③ 123号住居址（挿図51，第38図６・７，第29図）

ＹＳ57グリッドを中心に検出した。131号住居址を切り，溝址38に切られる。東西3.9×南北4.0mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で，主軸方向は推定N27.9° Wを示す。壁高は４～27cmを測り，急な立ち上がりを示す。床面は硬く焼け締まっている。中央からカマド付近に炭化材が多く出土した。火災にあった住居址である。東壁及び南壁東半の壁下に周溝が掘り込まれる。幅約60cmと広く，深さ10～18cmと南側にいくほど深い。東壁下より骨片が出土した。主柱穴は４本確認され，径20～60cm，深さ55～63cmを測る。東側の柱穴は西側に比べて大形である。北壁ほぼ中央にカマドが設けられているが，遺存状態は悪く焼土もあまり発達していない。カマド内より土師





挿図51　123号住居址

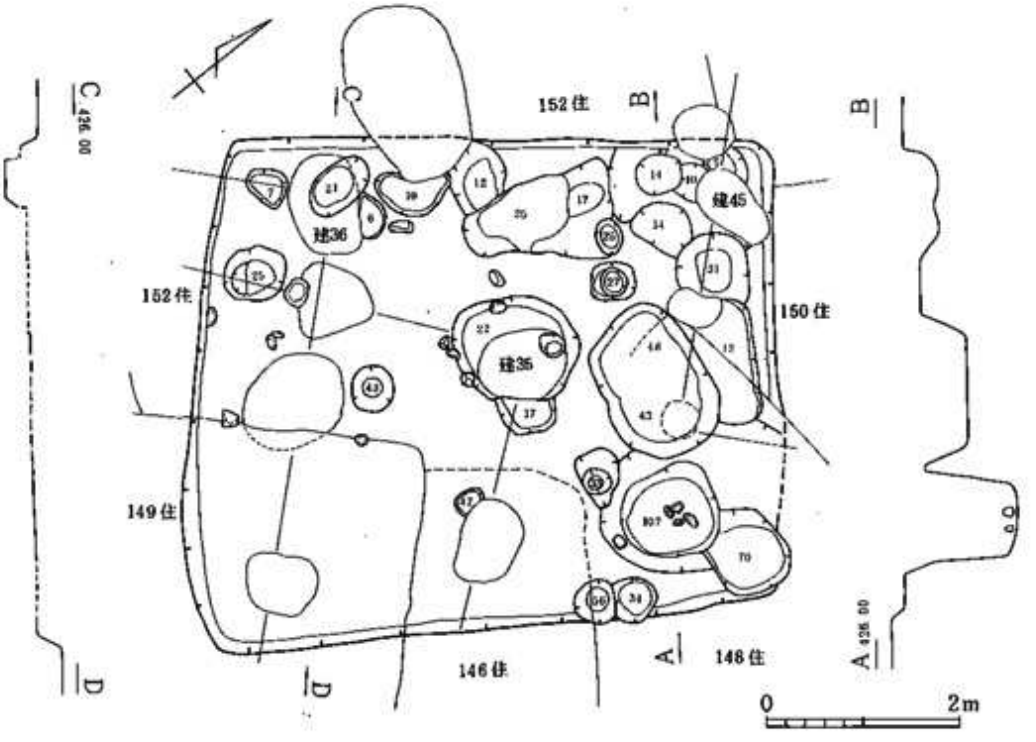
器甕・高坏・鉢等が出土している。カマド右側の住居址上部に貼り床状の部分があり，本址北東に時期の新しい住居址が存在したと考えられるが，上部が残存せず詳細は不明である。本址カマド右脇から平安時代の土師器甕が集中出土することから，貼り床のみの住居址も平安時代の住居址である可能性がある。

遺物は土師器甕・坏・高坏・鉢，須恵器高坏等があり，出土量は多い。土師器甕は長胴形（第38図６・７），小型の長胴形，丸底に近い球形胴，小型甕等の器形がある。小型甕は内面黒色処理される。頸部破片には縦位の暗文風のヘラミガキの施されるもの（第39図３）がある。坏は浅めで口縁がやや内湾する。鉢（９・10）は内外ヘラミガキが施される。

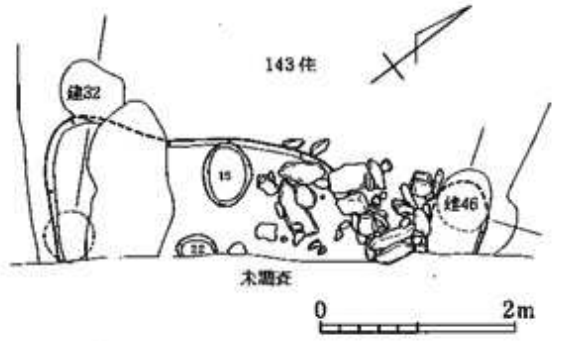
出土遺物・重複関係等から平安時代に比定される。

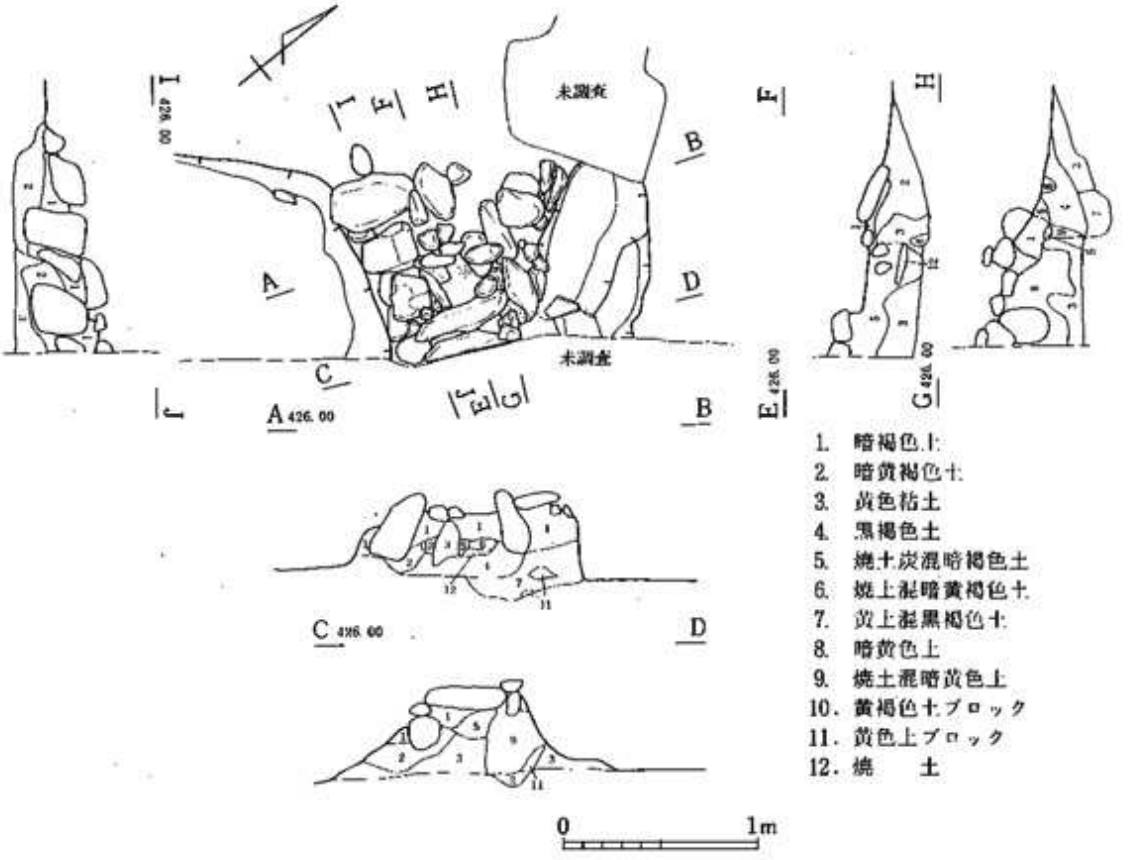
④　145号住居址（挿図52，第40図，第75図１～３）

ＸＹ57を中心に検出した。146・148・149・150・152号住居址，掘立柱建物址35・36・45を切る。東西6.0m×南北5.0mの不整方形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はN52.5°Wを示す。重複遺構のため床面の遺存状態は悪いが，地山が黄褐色の砂質土のため全体的に軟弱である。壁



挿図52　145号住居址





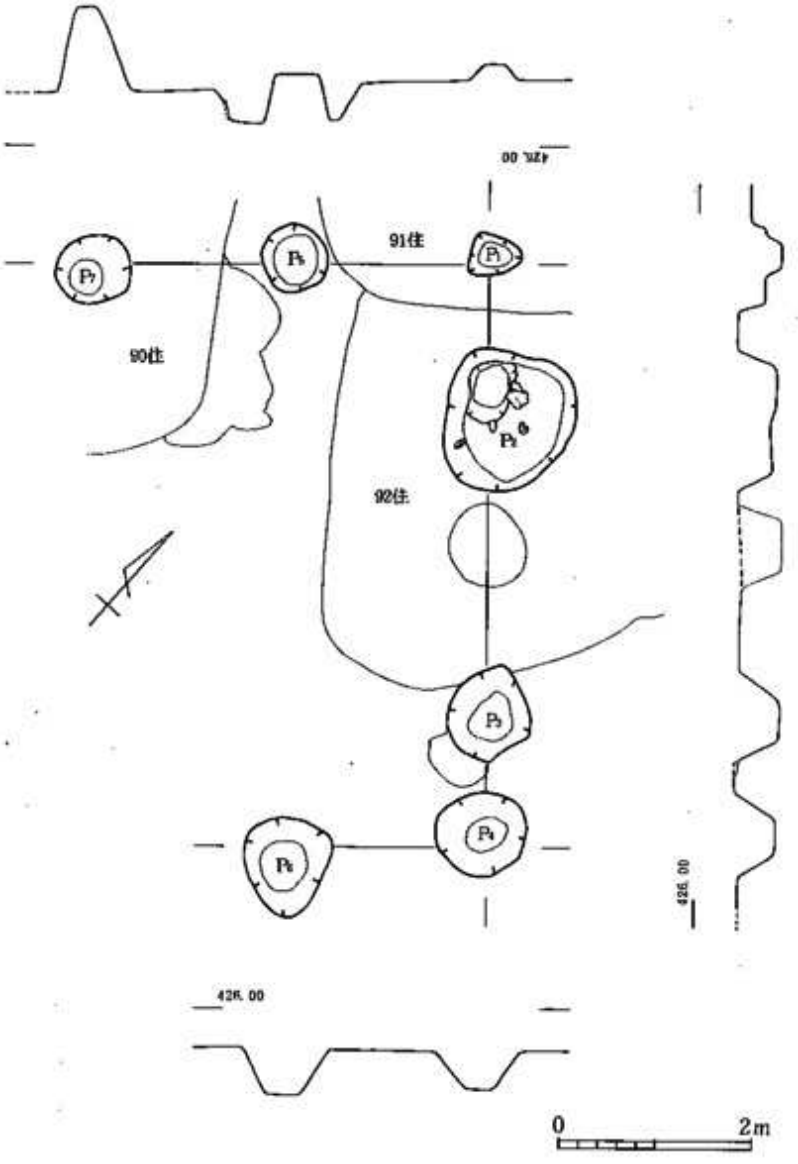
1. 暗褐色土
2. 暗黄褐色土
3. 黄色粘土
4. 黒褐色土
5. 焼土炭混暗褐色土
6. 焼土混暗黄褐色土
7. 黄土混黒褐色土
8. 暗黄色土
9. 焼土混暗黄色土
10. 黄褐色土ブロック
11. 黄色土ブロック
12. 焼　　土

挿図53　155号住居址

は急な立ち上がりを示し，壁高は6～20cmを測る。周溝・主柱穴・カマドは確認できない。

遺物出土量は多いが重複遺構からの混入が主体を占める。本址に伴なうものは土師器甕・坏，須恵器甕・甕・坏，灰釉陶器碗等がある。

出土遺物・重複関係等から平安時代の竪穴住居址である。

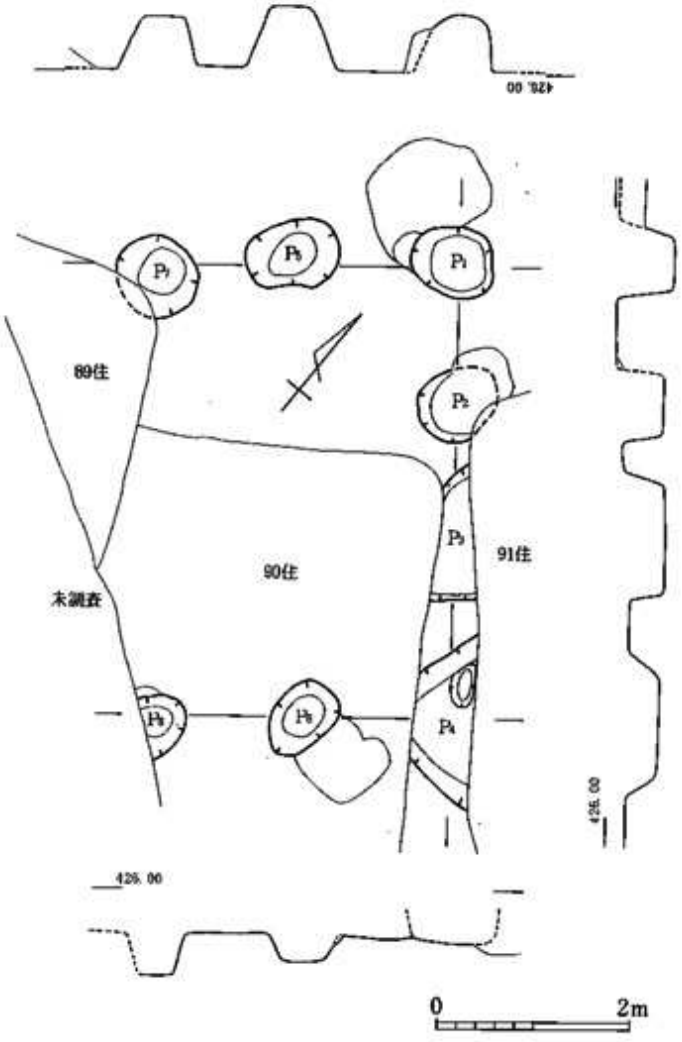


挿図54　掘立柱建物址25

⑤　155号住居址（挿図53，第41図１～３）

ＹＢ68を中心に検出した。143号住居址・掘立柱建物址32を切り，掘立柱建物址46に切られる。大部分が調査区外にかかり未調査のため詳細は不明であるが，東西4.4mの不整方形を呈する竪穴住居址である。検出部分の床面の状態は軟弱であり，壁高は13～19cmを測る。カマドは北壁東寄りに構築されており，カマドの向きと壁の方向が整合しない。石芯粘土カマドであり，燃焼部付近に中・小形の礫が混入出土する。

出土遺物・重複関係等から平安時代に比定される。



挿図55　掘立柱建物址26

2）掘立柱建物址

① 掘立柱建物址25（挿図54）

ＡＢ74を中心に検出した。90～92号住居址を切り，一部調査区外にかかる。桁行４間，梁行２間以上の側柱の掘立柱建物址で，桁行6.6m桁行方向N42.4° Wを測る。柱間は桁行140～160cm，梁行210cmで，径70～100cmの不整円形を呈する。底部レベルはほぼ揃う。

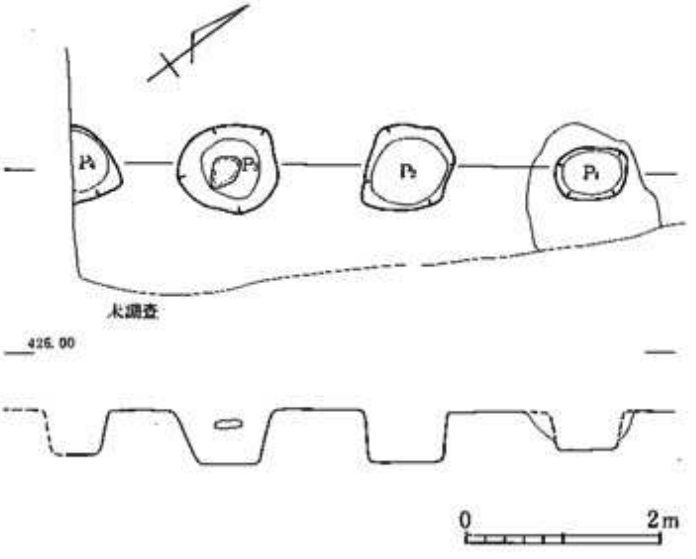
出土遺物は少なく，重複する竪穴住居址からの混入と考えられる。

時期は重複関係等から古墳時代後期以降に位置づけられる。

② 掘立柱建物址26（挿図55）

掘立柱建物址25の北西，ＡＡ71を中心に検出された。89～91号住居址を切る。東西２間以上，南北３間の側柱のみの掘立柱建物址で南北5.4mを測る。柱間は東西方向，南北方向とも150cmで南北の方向軸はN37.5° Wを示す。90・91号住居址中間の柱穴の掘り方が他より大きいのは重複する柱穴によるものと思われる。深さはほぼ一定であり，埋土は褐色土である。

出土遺物から時期の決定は困難であるが，重複関係から古墳時代後期以降に比定される。



挿図56　掘立柱建物址27

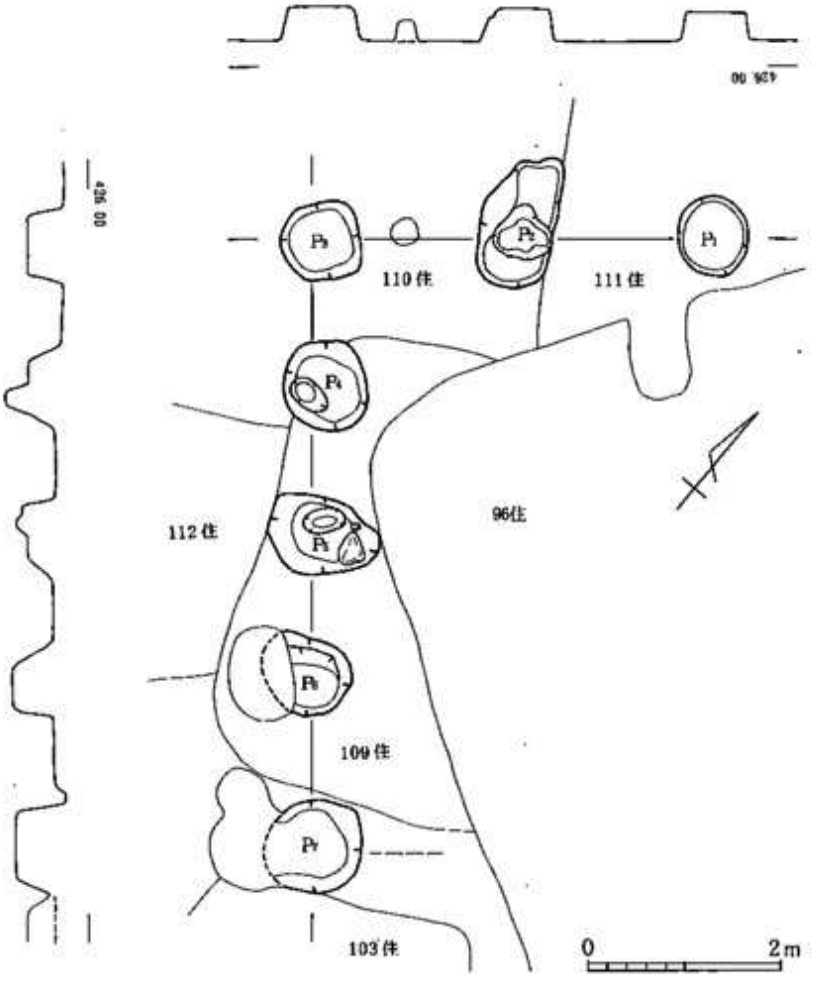
③ 掘立柱建物址27（挿図56）

掘立柱建物址32・33と重複してＸＸ69で検出された。大部分が調査区外にかかり詳細は不明であるが，東西方向３間，柱間180cmで方向軸はＮ27.2° Ｅを示す。隅柱は他の掘立柱建物址柱穴と重複するため径が小さいが，径90～100cmの円形を呈する。底部レベルは揃わない。

詳細時期は不明である。

④ 掘立柱建物址28（挿図57）

調査区の南側，ＹＯ71を中心に検出した。109～111号住居址を切り，96号住居址に切られる。桁行４間，梁行は96号住居址との重複のため２間を検出したにとどまる。柱間は桁行1.5m，梁



挿図57　掘立柱建物址28

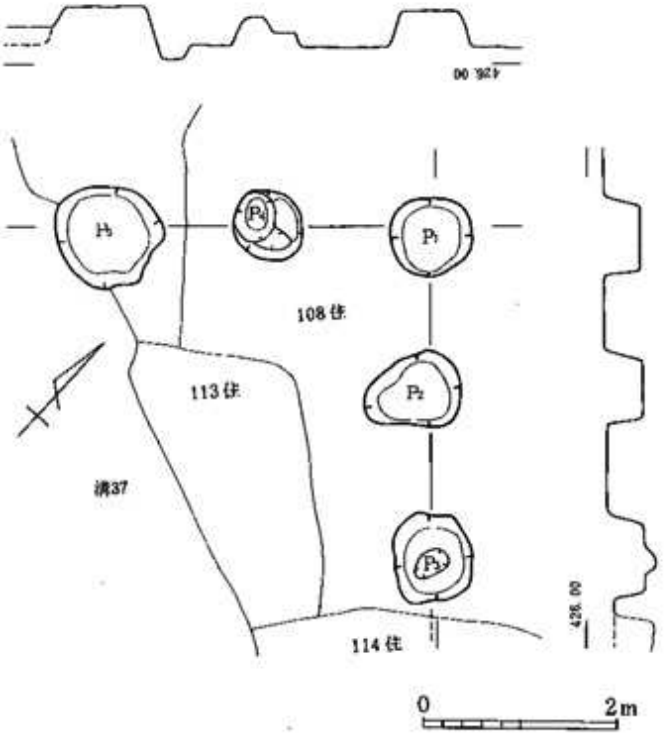
行2.0m桁行方行はN41.5° Wを示す。80〜100cmの不整円形を呈する柱穴が主であるが，底部の状態は凹凸があり深さも一定しない。掘立柱建物址29と方向をほぼ揃える。

時期は重複関係等から古墳時代後期以降，平安時代以前に位置づけられる。

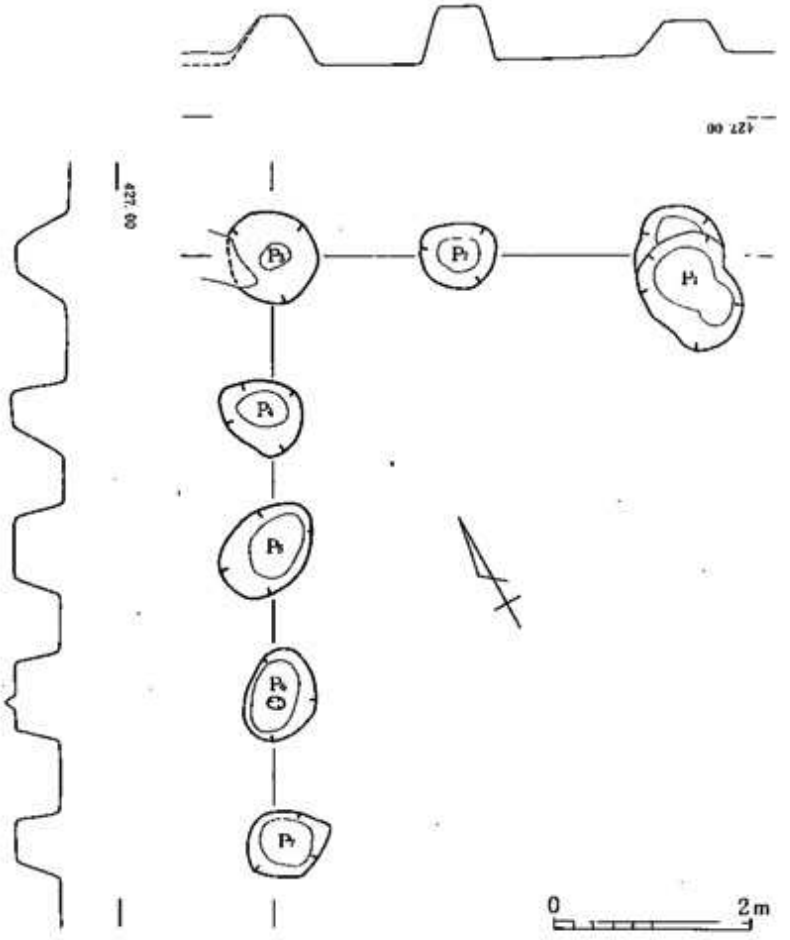
⑤ 掘立柱建物址29（挿図58）

調査区南側，ＹＪ70を中心に検出した。108・114号住居址を切り，溝址37と重複する。桁行・梁行それぞれ２間が確認された。南北方向はN42.2° Wを示す。径80〜100cmの不整円形を呈する掘り方で，底部レベルはばらつきを見せる。埋土は暗褐色土である。掘立柱建物址28とほぼ方向が揃い，平面形，埋土等も似通う。

重複関係等から時期は古墳時代後期以降に比定される。



挿図58　掘立柱建物址29

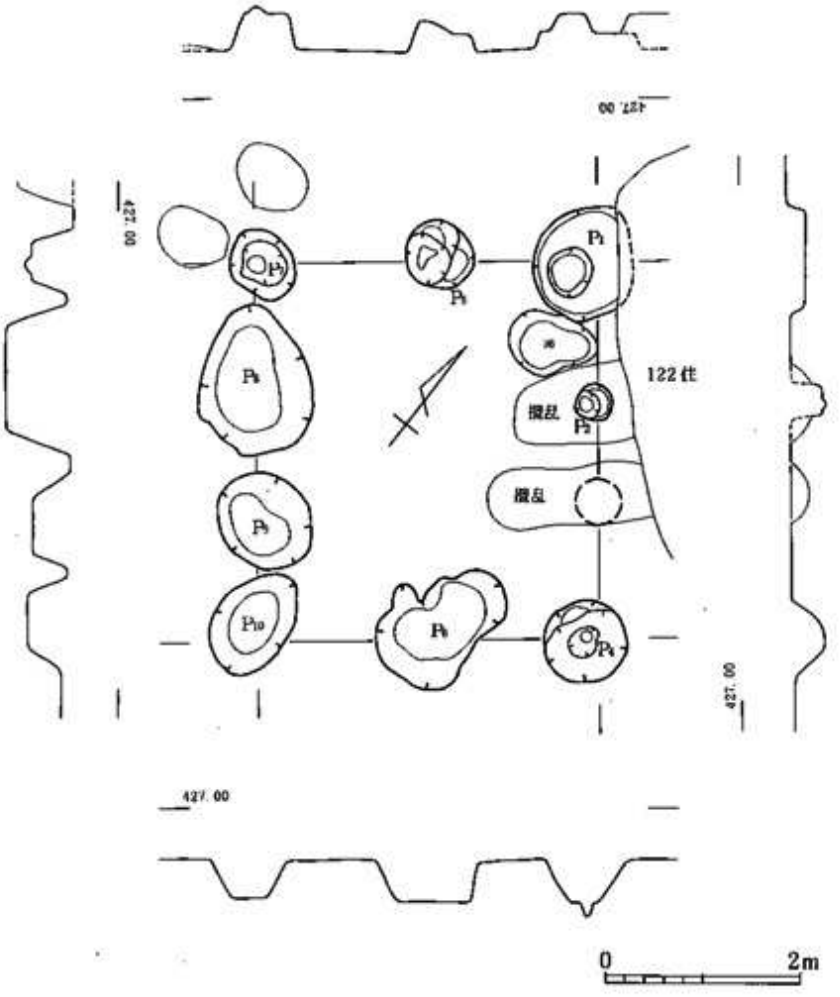


挿図59　掘立柱建物址30

⑥　**掘立柱建物址30（挿図59）**

調査区中央付近，ＹＮ63を中心に検出された。125・126号住居址を切る。桁行４間以上，梁行180・220cmで梁行方向はばらつきを見せる。平面形，大きさ，深さともに差異がある。掘立柱建物址37とともに桁行の方向軸を他と大きく異にする。

詳細時期は不明であるが，重複関係から古墳時代後期以降の建物址である。



挿図60　掘立柱建物址31

⑦　掘立柱建物址31（挿図60）

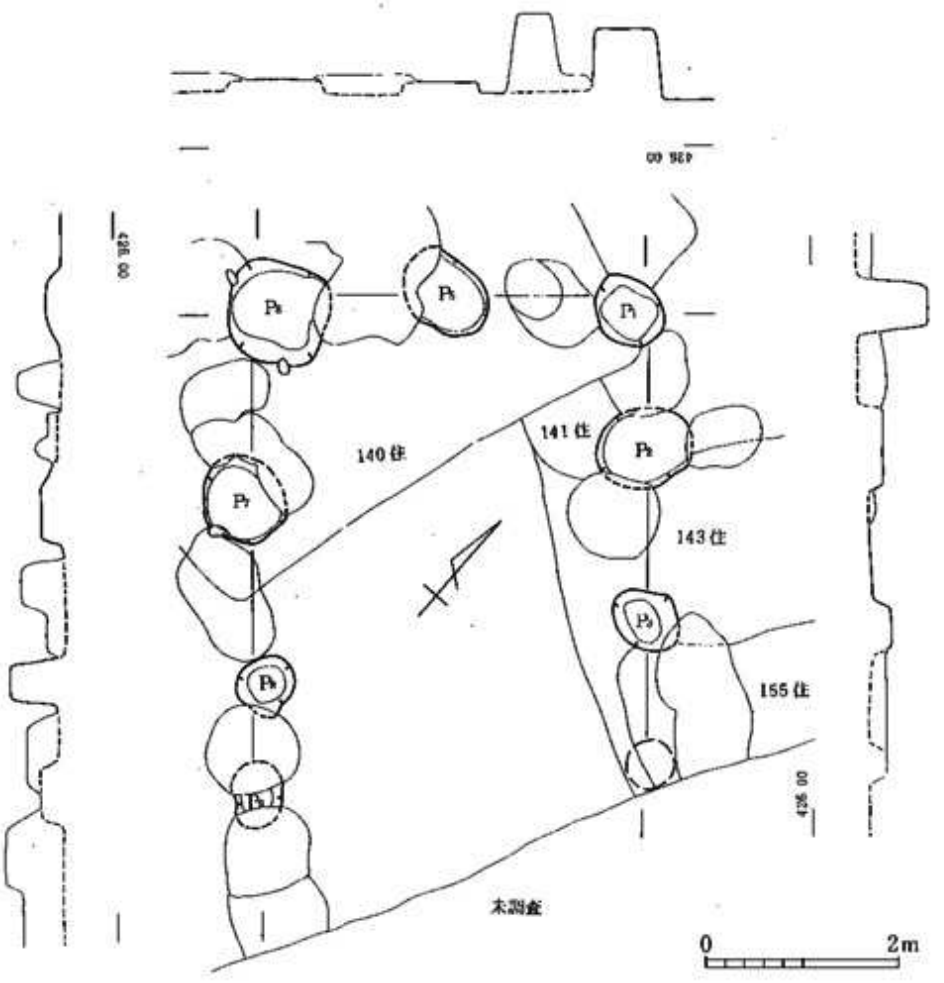
掘立柱建物址30の西側，ＹＭ60を中心に検出した。122号住居址を切る。桁行３間×梁行２間，4.8m×4.3mの方形を呈する側柱のみの掘立柱建物址で，桁行の方向軸はN38.8°Ｗを示す。掘り方が不整形の柱穴は掘りすぎによるものであり，およそ径70～90cmの円形を呈するものと考えられる。底面レベルはばらつきをみせる。

時期は古墳時代後期以降である。

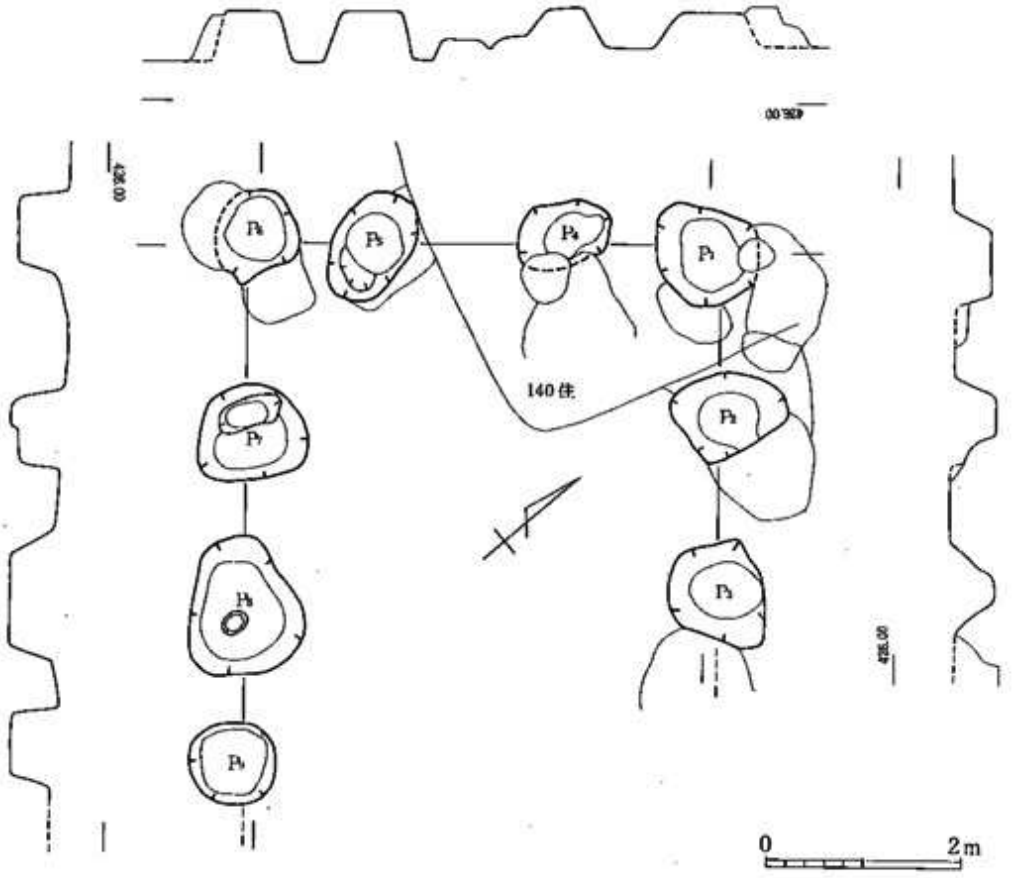
⑧　掘立柱建物址32（挿図61）

調査区南西隅，ＹＡ65を中心に検出した。140・141・143号住居址を切り，155号住居址に切られる。また，掘立柱建物址27・33と重複する。南側は調査区外にかかる。桁行３間以上，梁行２間の建物址で桁行の方向軸はＮ40.4°Ｗを示す。柱間は桁行160・200cm，梁行200cmを測る。径60～100cmの不整円形を呈し，底部レベルはばらつきをみせる。出土遺物の大半は重複する柱居址からの混入遺物と考えられる。

時期は重複関係等より古墳時代後期以降平安時代前期の間に位置づけられる。



挿図61　掘立柱建物址32



挿図62　掘立柱建物址33

⑨　掘立柱建物址33（挿図62，第41図４）

調査区南西隅，XX67を中心に検出した。140号住居址を切り，掘立柱建物址27・32と重複する。南側は調査区外にかかるため桁行３間を確認したのみで，梁行は４間である。柱間は桁行180，cm梁行130・200cmで，梁行中間の間隔は広い。90～120cmの不整形を呈する掘り方であるが，底部レベルはほぼ揃う。

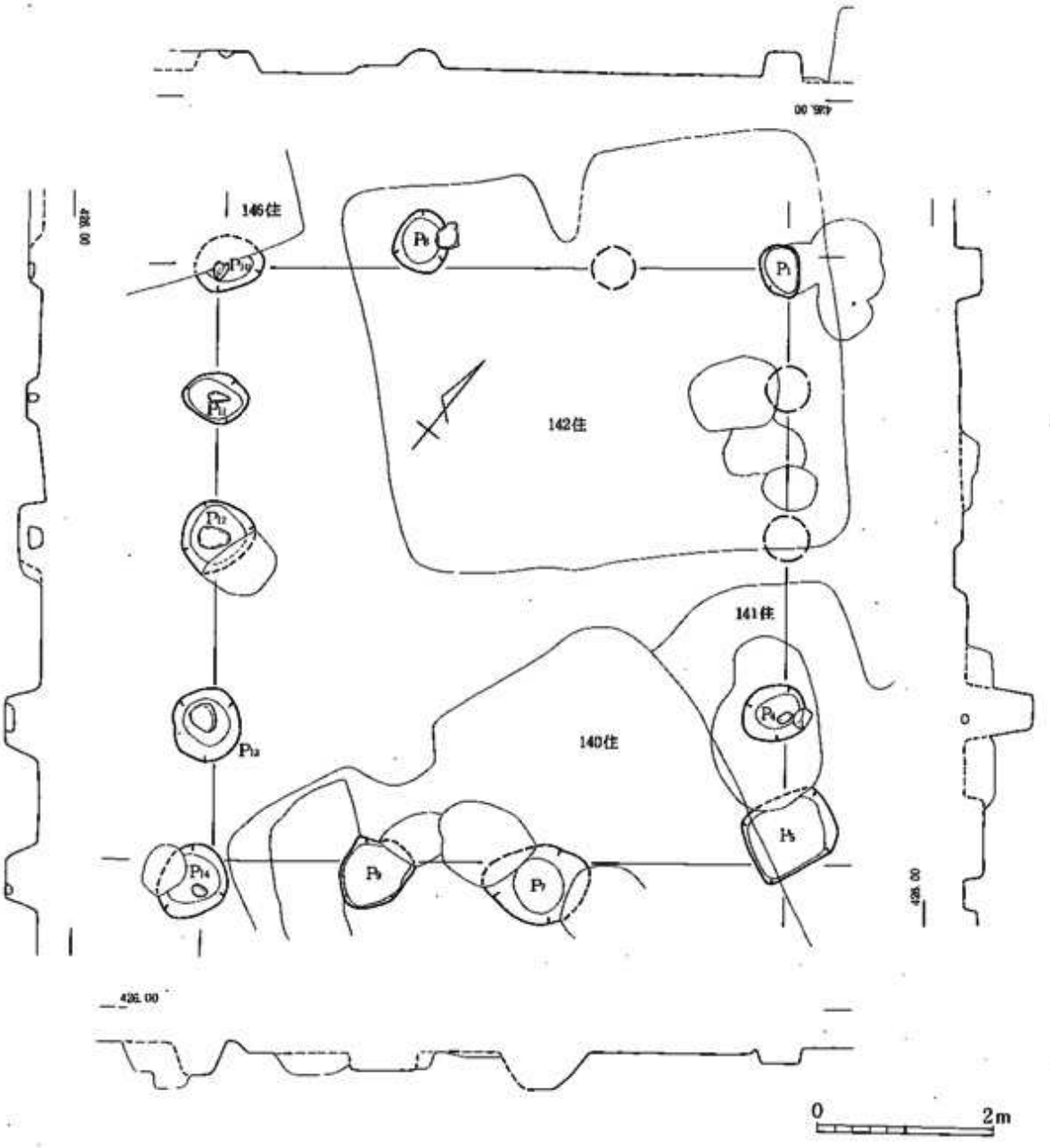
詳細時期は不明であり，重複関係から古墳時代後期以降である。

⑩　掘立柱建物址34（挿図63）

ＹＡ62を中心に検出した。140～142号住居址を切り，掘立柱建物址38・48と重複する。側柱のみの建物址で，桁行４間×梁行３間である。桁行の方向軸はN37.6°Wを示し，柱間は桁行方向

140～200cm，梁行200～220cmでばらつく。掘り方は径60～90cmの不整円形を呈し，西側の柱穴には径20～40cmの礫が入る。柱止めの石と考えられる。

重複関係や礫が入る等の点から平安時代前期の建物址と考えられる。

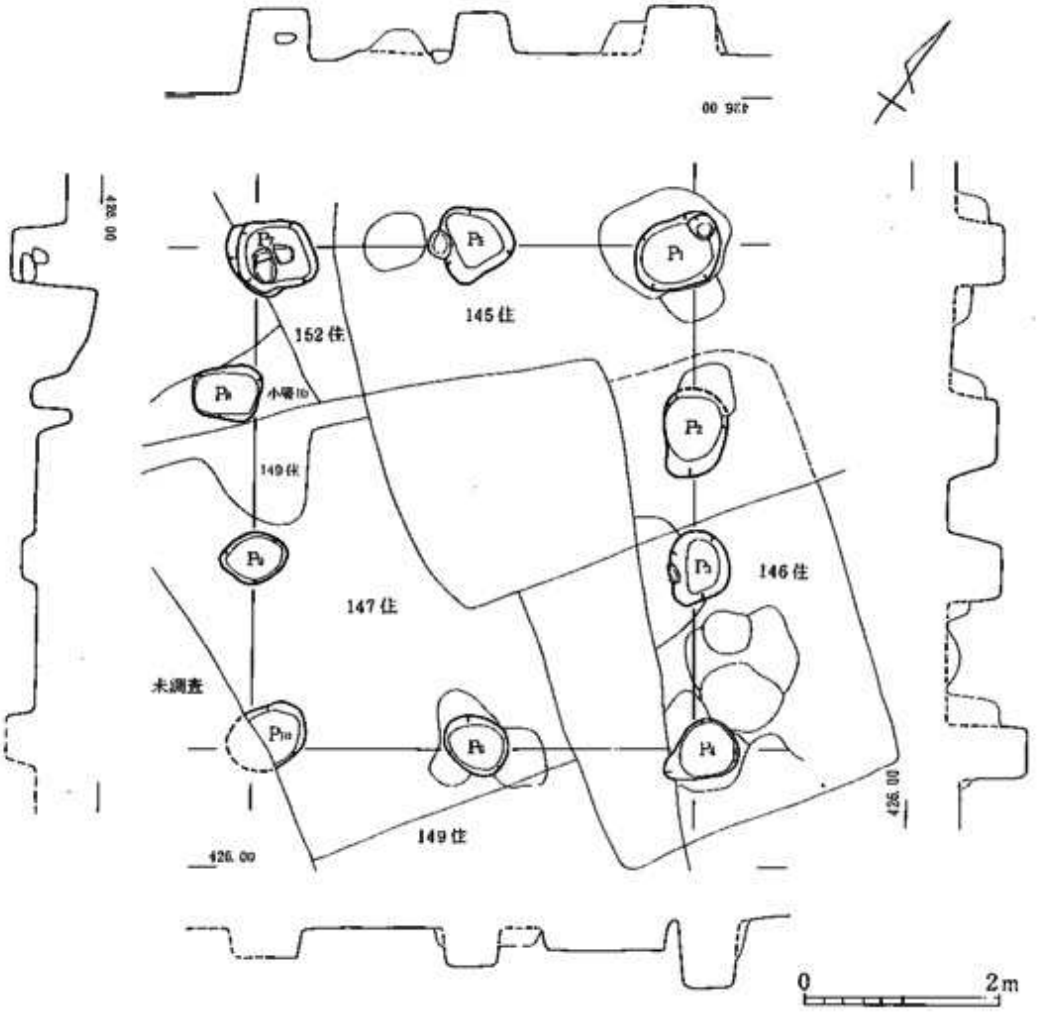


挿図63　掘立柱建物址34

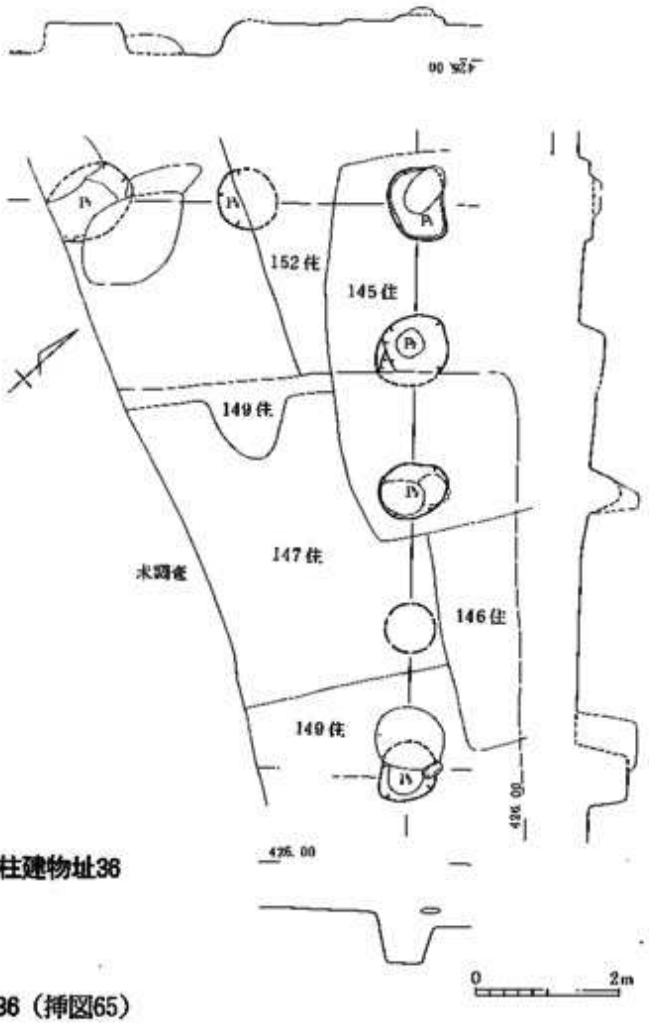
⑪　掘立柱建物址35（挿図64，第41図５）

調査区の西側，XX58を中心に検出した。146・147・149・152号住居址，小竪穴10を切り，145号住居址に切られる。掘立柱建物址36と重複する。側柱のみの建物址で，桁行３間×梁行２間，桁行の方向軸はN35.4°Wを示す。5.9m×5.2mの方形を呈し，柱間は桁行170cm，梁行220cmを測る。掘り方は60～90cm程度の不整形であるが，方形に近いと考えられる。底部レベルは隅柱が他の柱穴より深い。

他の建物址と桁行方向をほぼ揃える等，他と同時期の古墳時代後期以降平安時代前期に属すると考えられる。



挿図64　掘立柱建物址35



挿図65　掘立柱建物址36

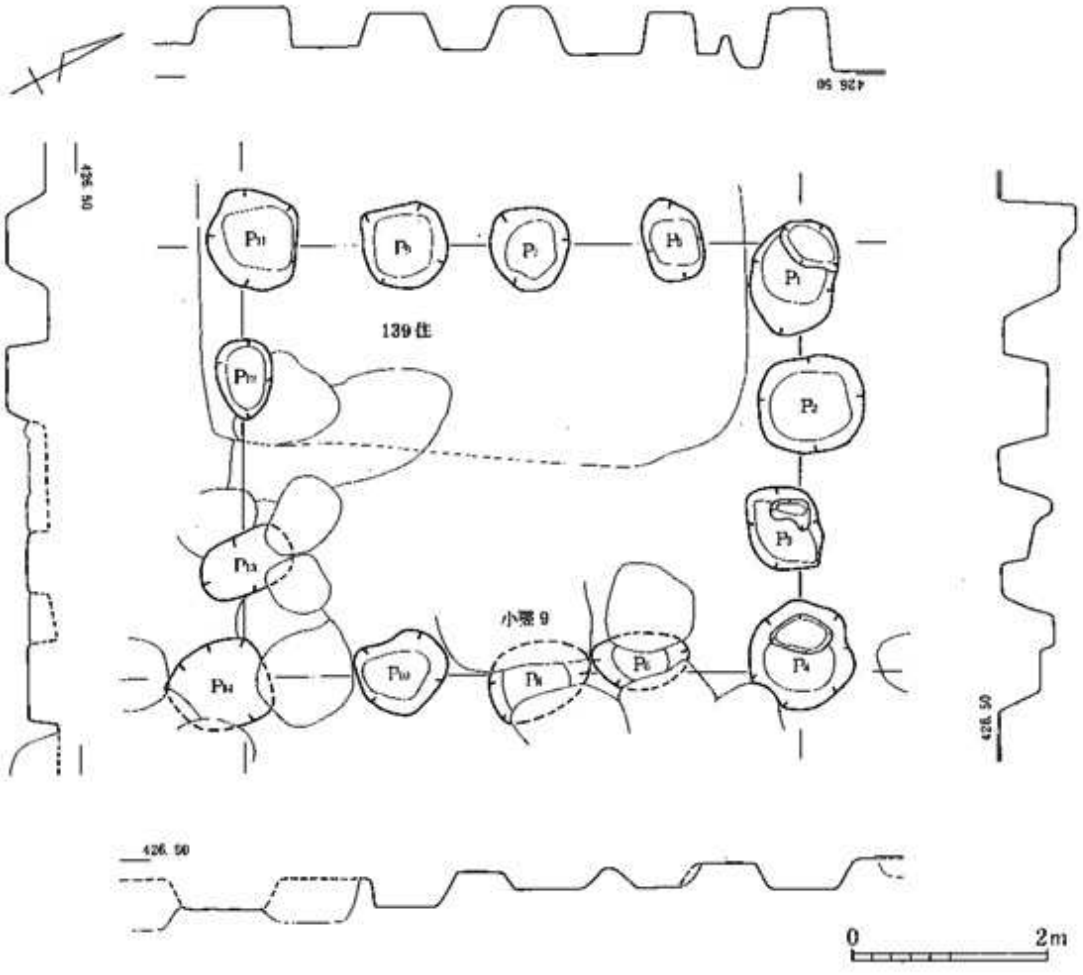
⑫　掘立柱建物址36（挿図65）

調査区西端，ＸＶ58を中心に検出し，西側は調査区外にかかる。146・147・149・152号住居址を切り，145号住居址に切られる。また掘立柱建物址35と重複する。桁行４間，梁行２間以上で，桁行の方向軸はＮ43.4°Ｗを示す。柱間は桁行方向200cm，梁行方向225cmを測り，やや大形の建物址である。重複遺構のため柱穴の平面形はかなり変形しているが，むしろ方形に近い形状をとると考えられる。

詳細時期は不明であるが，重複関係等から古墳時代後期以降平安時代前期の間に比定される。

⑬　掘立柱建物址37（挿図66）

調査区北西端，ＹＥ54を中心に検出した。139号住居址を切り，掘立柱建物址39・40・51・52，小竪穴９と重複する。桁行４間×梁行３間の側柱のみの建物址で，桁行方向はＮ43.8°Ｅを示す。柱間は桁行140cm，梁行140cmを測る。70～100cmの不整方形を呈する掘り方で，隅柱は他の柱穴より深く掘り込まれている。出土遺物の大半は139号住居址からの混入の考えられる。



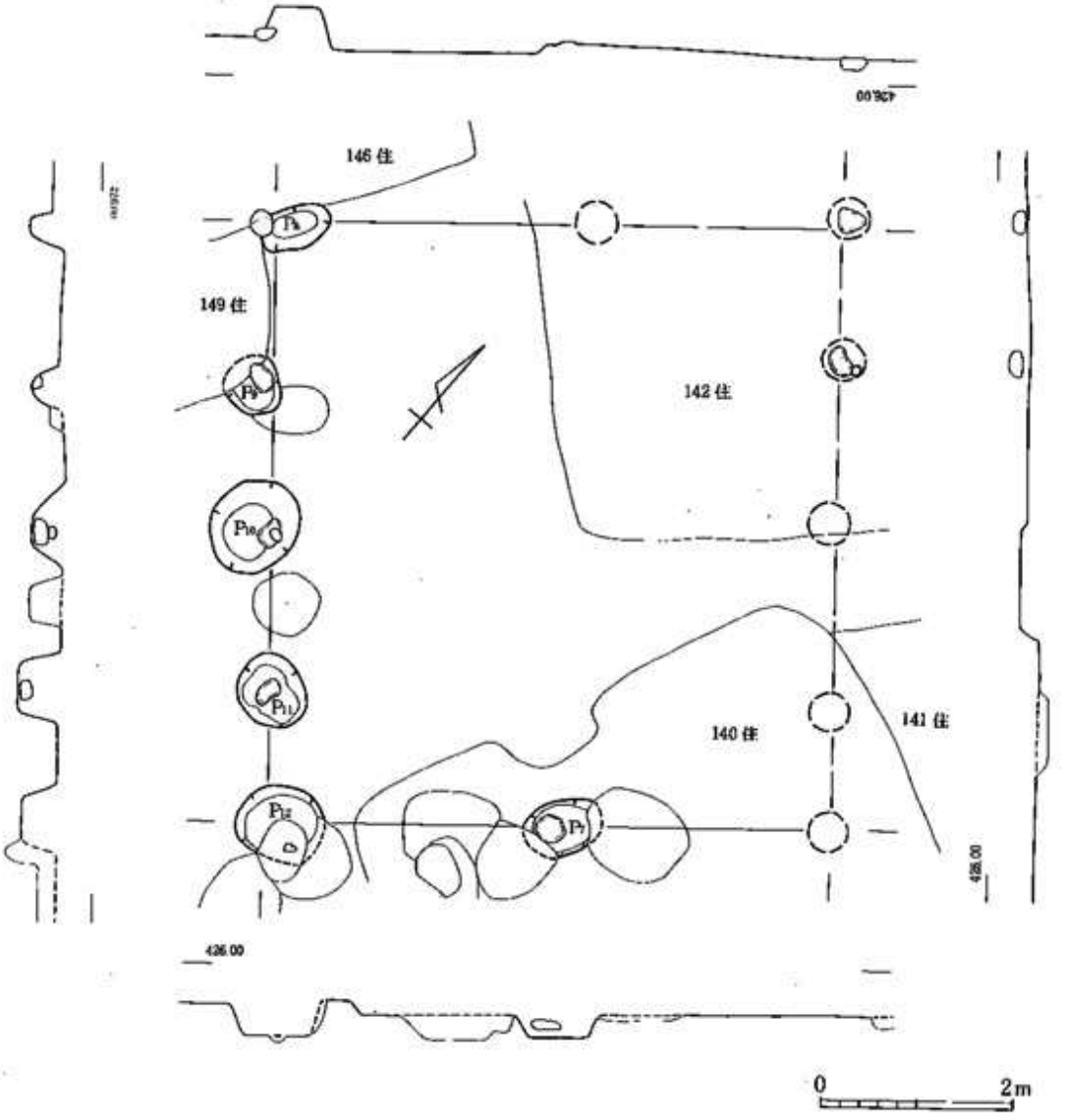
挿図66　掘立柱建物址37

桁行方向を他の掘立柱建物址と異にしており，規模こそ異なるものの平面形，棟方向等隣接する一般国道153号座光寺バイパス路線内で調査された掘立柱建物址群に類似する。

詳細時期は不明であるが，奈良時代に位置づく可能性がある。

⑭　掘立柱建物址38（挿図67）

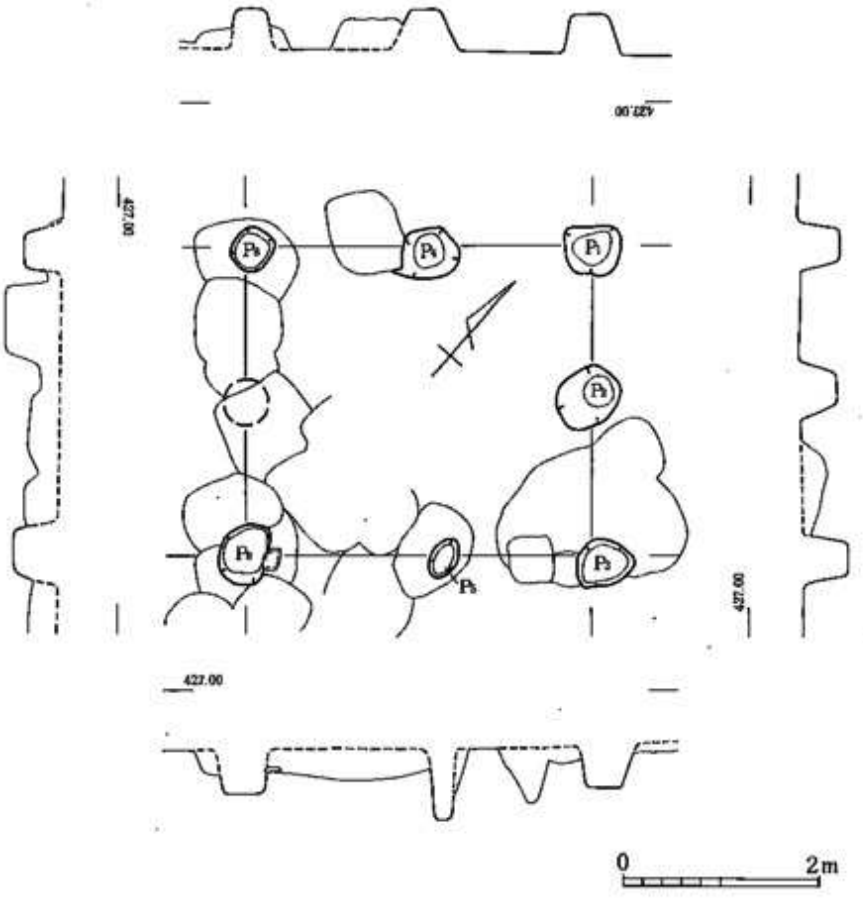
ＸＹ62を中心に検出した。140・142・146・149号住居址を切り，掘立柱建物址34と重複する。桁行４間×梁行２間の建物址で，桁行方向はＮ40.0°Ｗを示す。柱間は桁行155cm，梁行290cmを



挿図67　掘立柱建物址38

測る。重複関係のため東側の遺存状態は良好でない。60～100cmの不整形な平面形を呈し，底部付近に柱止めと考えられる径20～30cmの河原礫が入る。

時期は建物址34と同様に礫が入る等の点から平安時代前期に比定される。



挿図68　掘立柱建物址39

⑮　掘立柱建物址39（挿図68）

ＹＦ55を中心に検出された。掘立柱建物址37・40・52と重複する。２間×２間，東西4.0ｍ×南北3.7ｍの方形を呈する建物址で，東西方向はＮ48.9°Ｅを示す。50～60cm程の不整方形を呈する掘り方で，底部レベルは揃わない。建物址37とほぼ棟方向を揃えており，近接した時期の遺構である可能性が指摘できる。

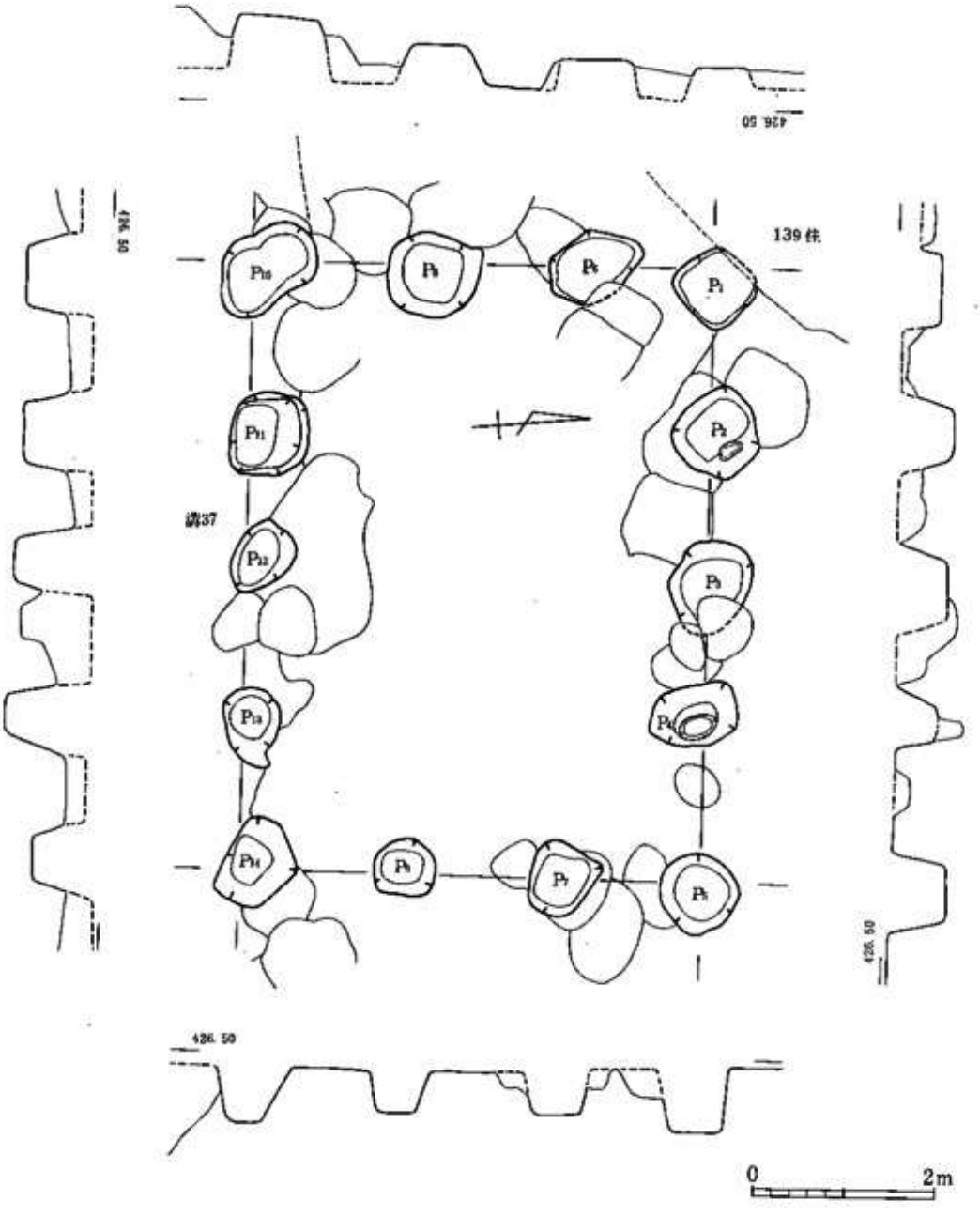
詳細時期は不明であるが，奈良時代頃の建物址と考えられる。

⑯　掘立柱建物址40（挿図69，第41図６）

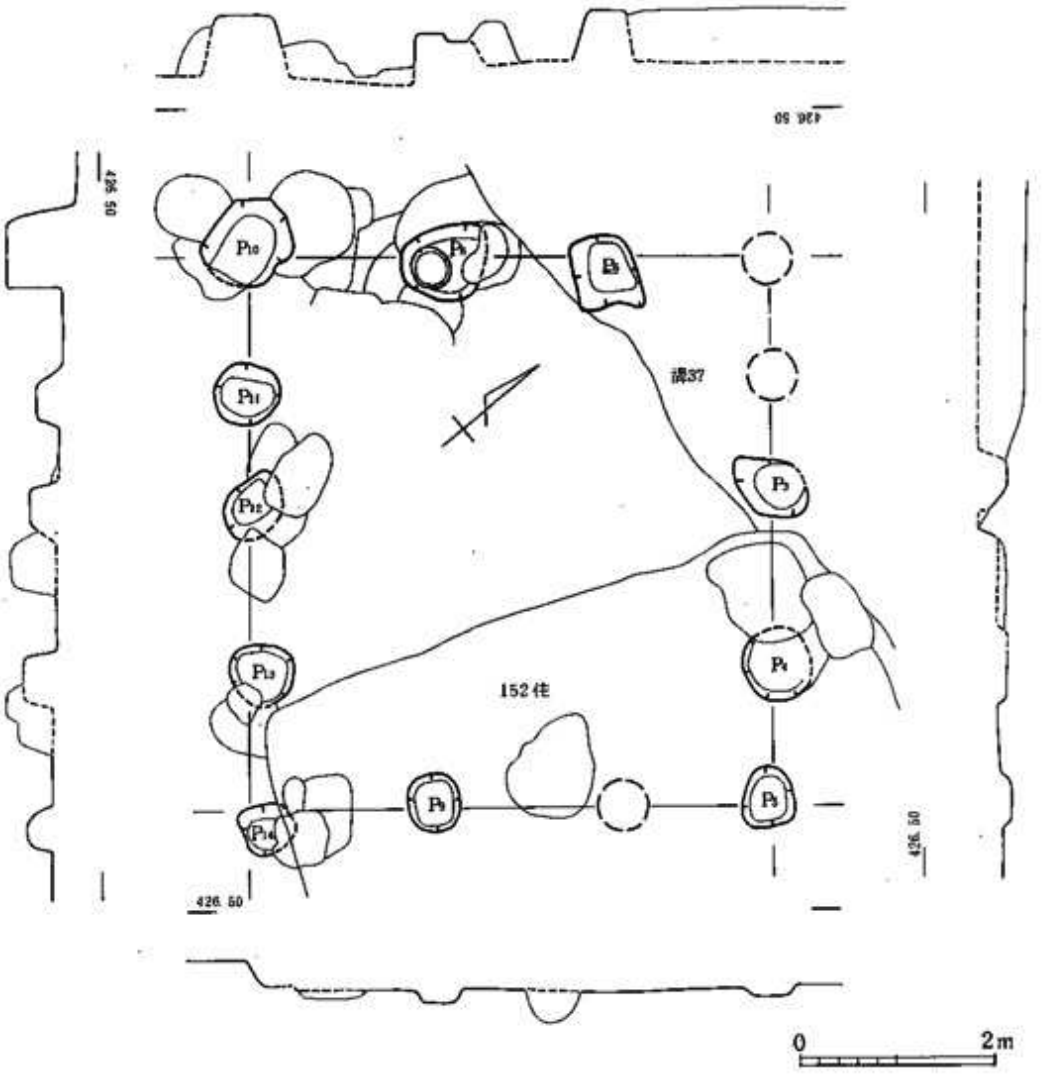
ＹＤ56を中心に検出された。139号住居址を切り，掘立柱建物址37・39・51・52，小竪穴９，

溝址37，柱列址１と重複する。桁行４間×梁行３間の側柱のみの建物址で，桁行方向N84.4° Wを示す。柱間は桁行・梁行とも165cmを測る。掘り方は70～100cmの不整方形を呈し，桁行方向の柱穴の深さが梁行方向に比べ深い。

時期不明であるが，重複関係から古墳時代後期以降の建物址である。



挿図69　掘立柱建物址40



挿図70　掘立柱建物址41

⑰　掘立柱建物址41（挿図70）

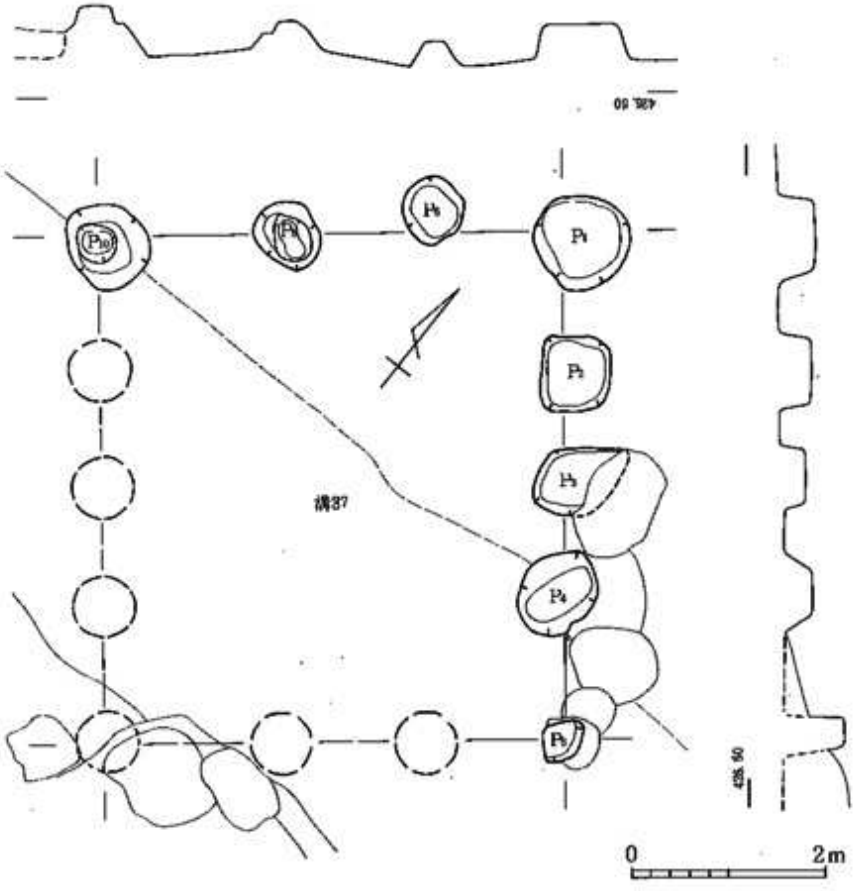
ＸＸ54を中心に検出された。152号住居址を切り，掘立柱建物址43・44，溝址37と重複する。桁行４間×梁行３間，桁行方向N50.2°Ｗの建物址である。柱間は桁行140cm，梁行170cmを測り，掘り方は50〜70cm程度の大きさで比較的小形である。平面形はむしろ方形に近い。

時期不明であるが，古墳時代後期以降に位置づけられる。

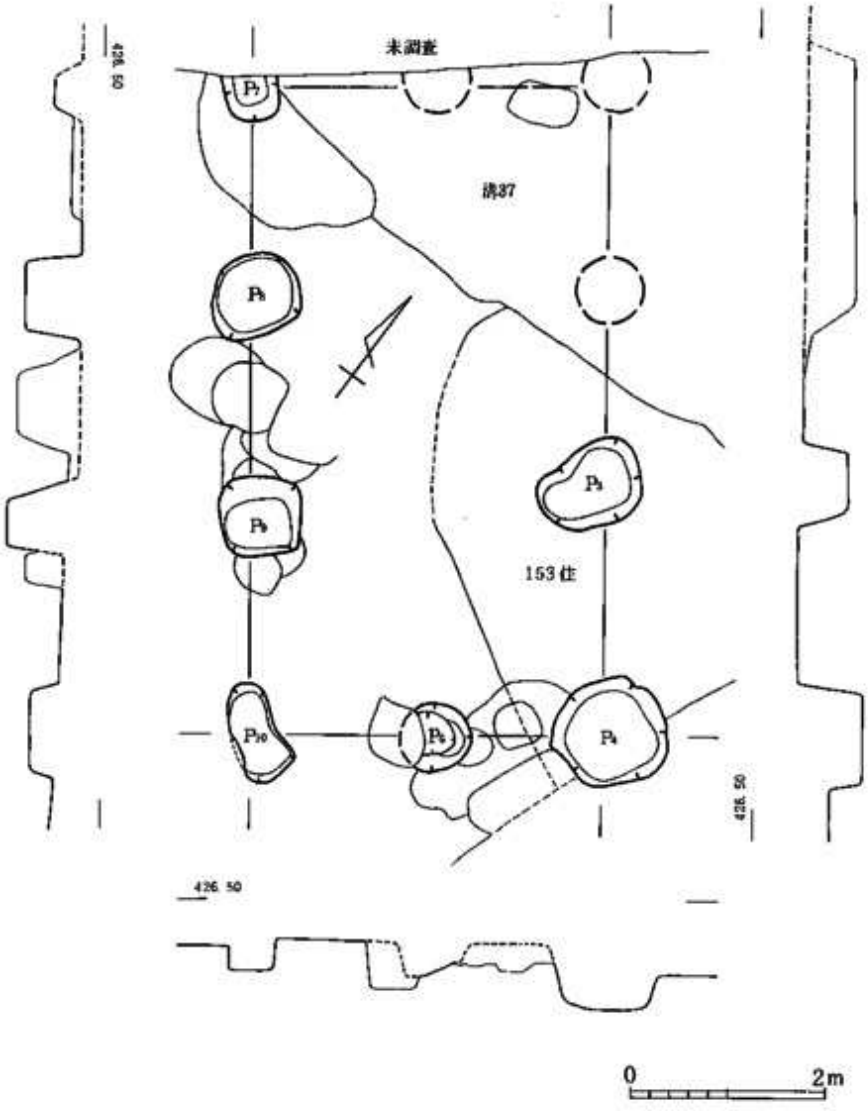
⑱ 掘立柱建物址42（挿図71）

調査区の西端，ＹＡ53を中心に検出した。掘立柱建物址51・溝址37・柱列址１と重複する。溝址37と切り合った部分では確認できず，約半分を検出したにとどまる。桁行４間×梁行３間，桁行方向Ｎ39.5°Ｗを示す建物址で，柱間は桁行120～140cm，梁行150～160cmを測る。桁行方向両端の柱間はやや広い。大きさ60～100cmの不整形を呈する掘り方で，深さともにばらつく。

詳細時期は不明であるが，他の建物址と棟方向を揃える等の点から古墳時代後期～平安時代前期の間に位置づくと考えられる。



挿図71　掘立柱建物址42



挿図72　掘立柱建物址43

⑲　掘立柱建物址43（挿図72）

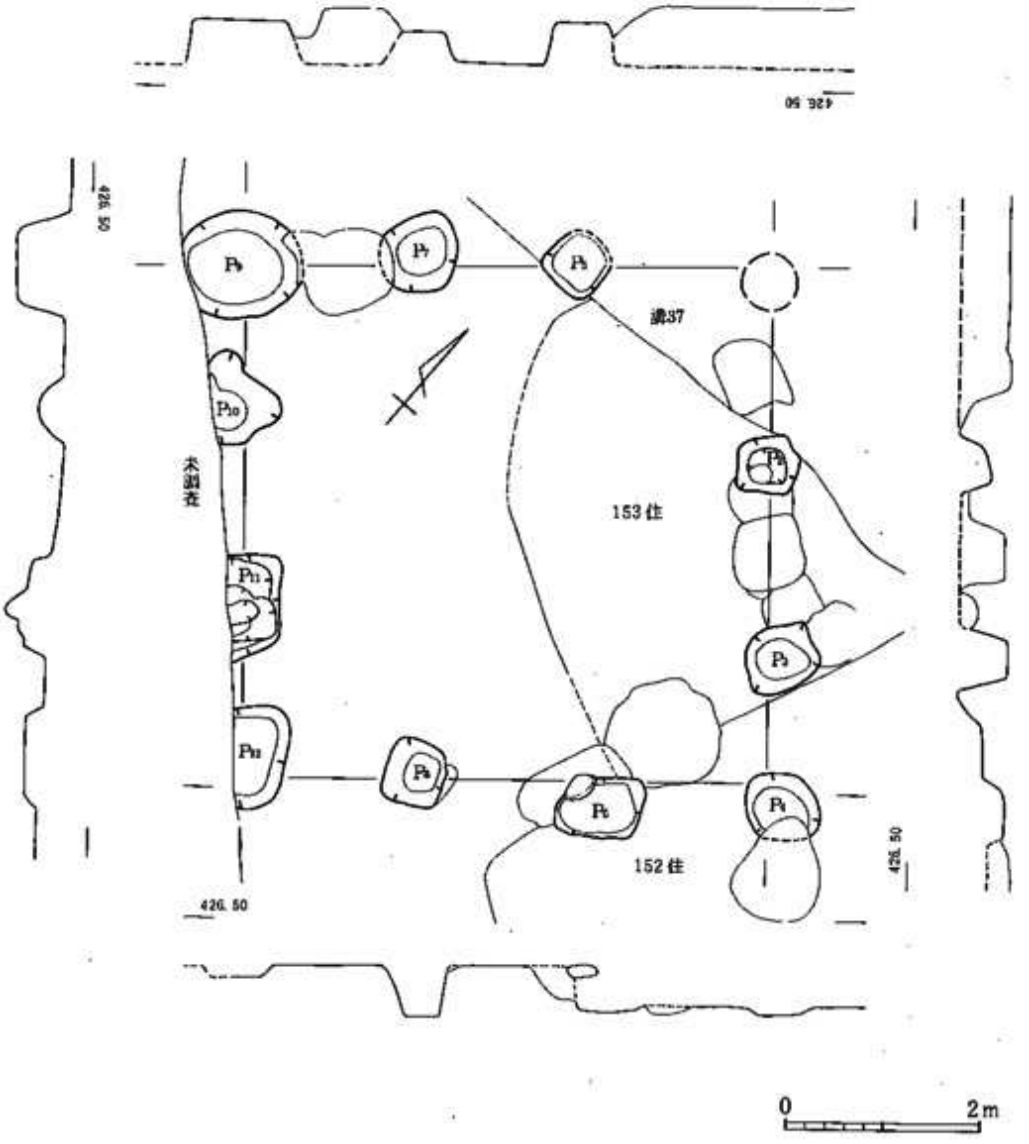
調査区西端，ＸＷ52を中心に検出した。152・153号住居址を切り，掘立柱建物址41・44，溝址37と重複する。桁行３間×梁行２間，桁行方向Ｎ36.6°Ｗを示す。柱間は桁行220cm，梁行180cmを測り，他の建物址と異なり桁行の柱間が大きい。梁行の間数が増える可能性はないとはいえないが，東側にこれに組み合う柱穴は検出できなかった。掘り方は不整形であるが，方形を主とするようであり，大きさ70～100cm程度である。

時期は不明であり，重複関係から古墳時代後期以降の建物址である。

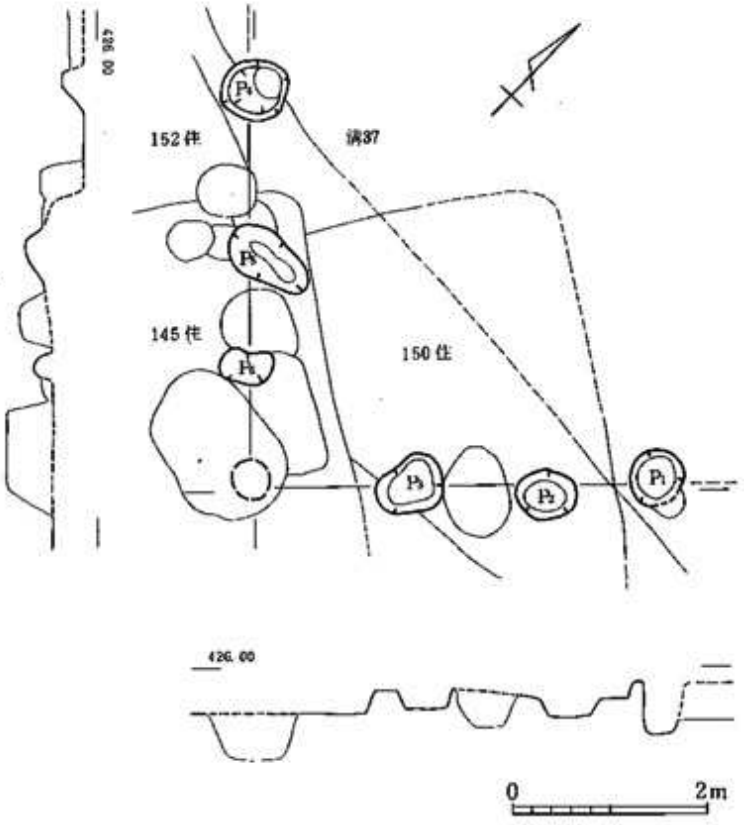
⑳ 掘立柱建物址44（挿図73）

XW53を中心に検出された。152・153号住居址を切り，掘立柱建物址41・43，溝址37と重複する。東西3間×南北3間の建物址で，柱間はそれぞれ160cm，180cmを切る。南北の方向軸はN40.2° Wを示す。掘り方は不整方形を呈するものが多く，大きさ60〜100cmで深さともばらつく。

時期は重複関係等から古墳時代後期〜平安時代前期と考えられる。



挿図73　掘立柱建物址44



挿図74　掘立柱建物址45

㉑　掘立柱建物址45（挿図74）

ＹＡ57付近で検出された。148・150号住居址，145号住居址に切られる。約半分は溝址37と重複し，桁行・梁行とも各３間を確認したにとどまる。南北方向はN44.2°Ｗを示し，柱間130～160cm，柱穴の大きさ約60cmとやや小形の建物である。

詳細時期は不明であるが，古墳時代後期以降平安時代前期の間と考えられる。

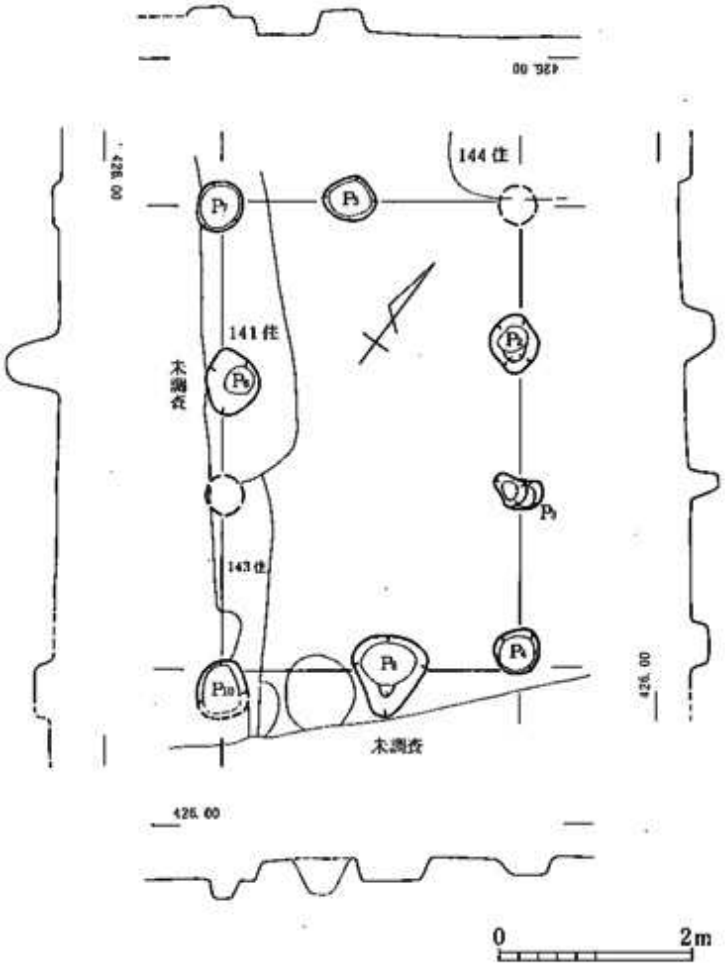
㉒　掘立柱建物址46（挿図75）

ＸＥ67を中心に検出された。141・143・144号住居址を切り，155号住居址に切られる。桁行３間×梁行２間，桁行方向N37.4°Ｗの側柱のみの建物址である。柱間はそれぞれ150cmであり，

径40～60cmの小形の掘り方を呈する。径が小さい点から他の建物址より新しいと考えられる。
出土遺物もなく時期不明であるが，中世の建物址であろう。

㉓ 掘立柱建物址47（挿図76，第41図７）

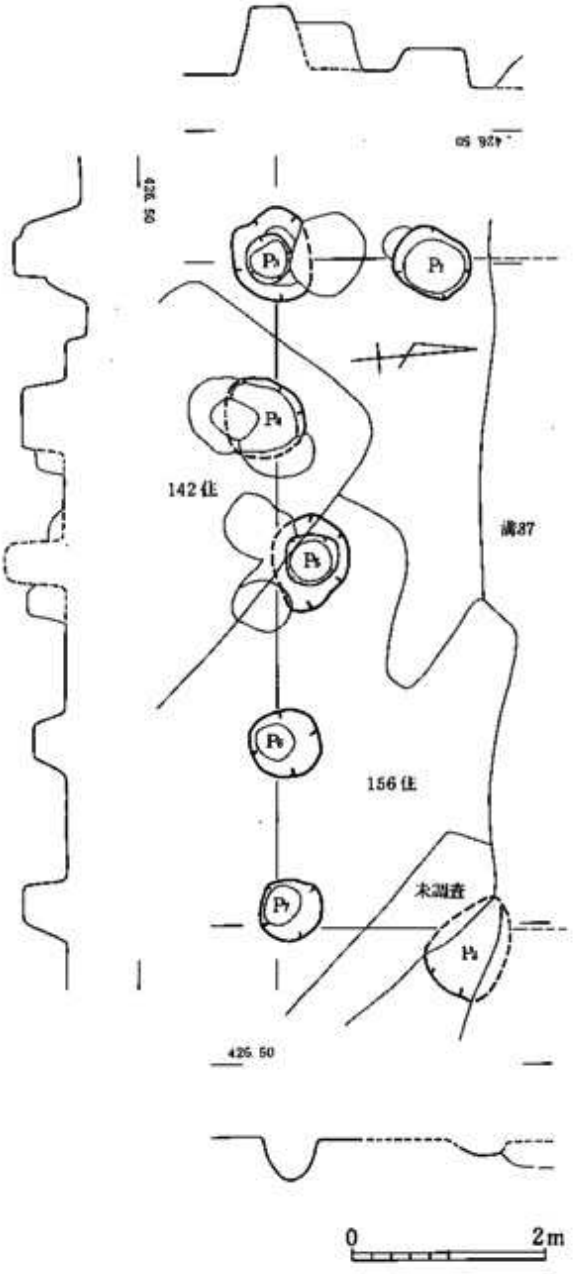
ＹＣ61を中心に検出された。142・156号住居址を切り，掘立柱建物址48，溝址37と重複する。溝址37と重複する部分は柱穴を確認できなかったが，桁行は４間，方向はN82.8° Wを示す。柱間は桁行170cm，梁行約160cmである。棟方向は他の建物址と大きく異なり，溝址37とほぼ同一方



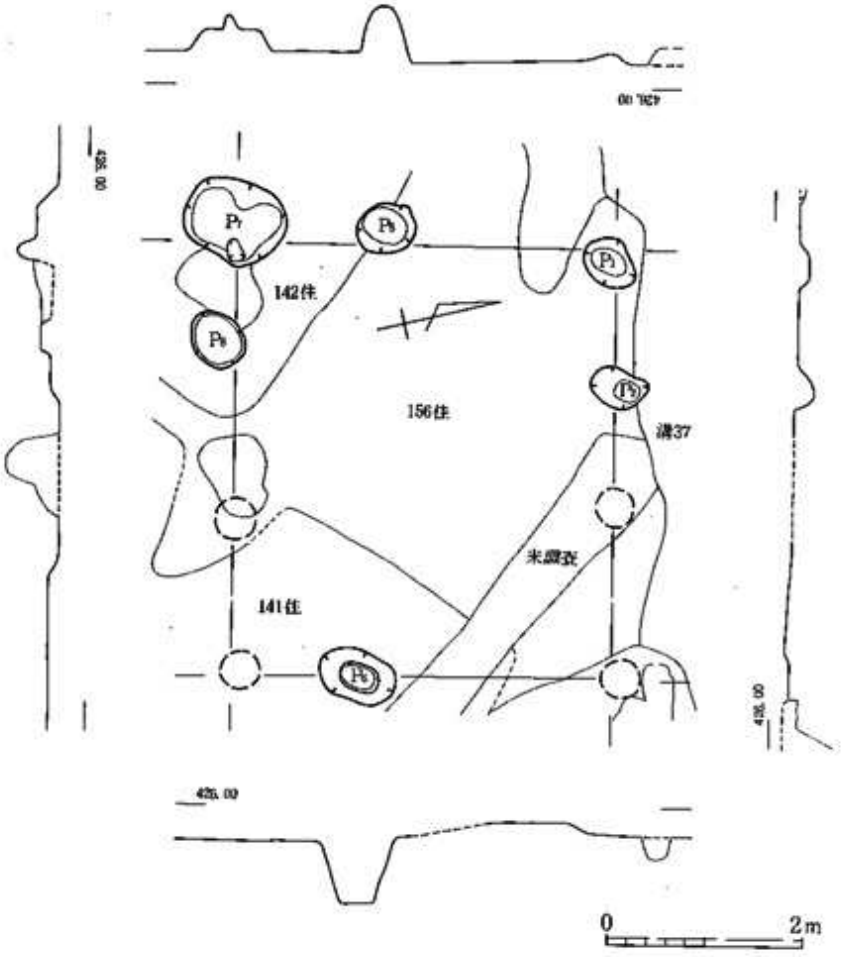
挿図75　掘立柱建物址46

向をとる。この重複部分で溝址37の幅が狭いことと何らかの関係をもつとすれば，溝址に関連した施設である可能性もある。

時期は重複関係から古墳時代後期以降に比定される。



挿図76　掘立柱建物址47

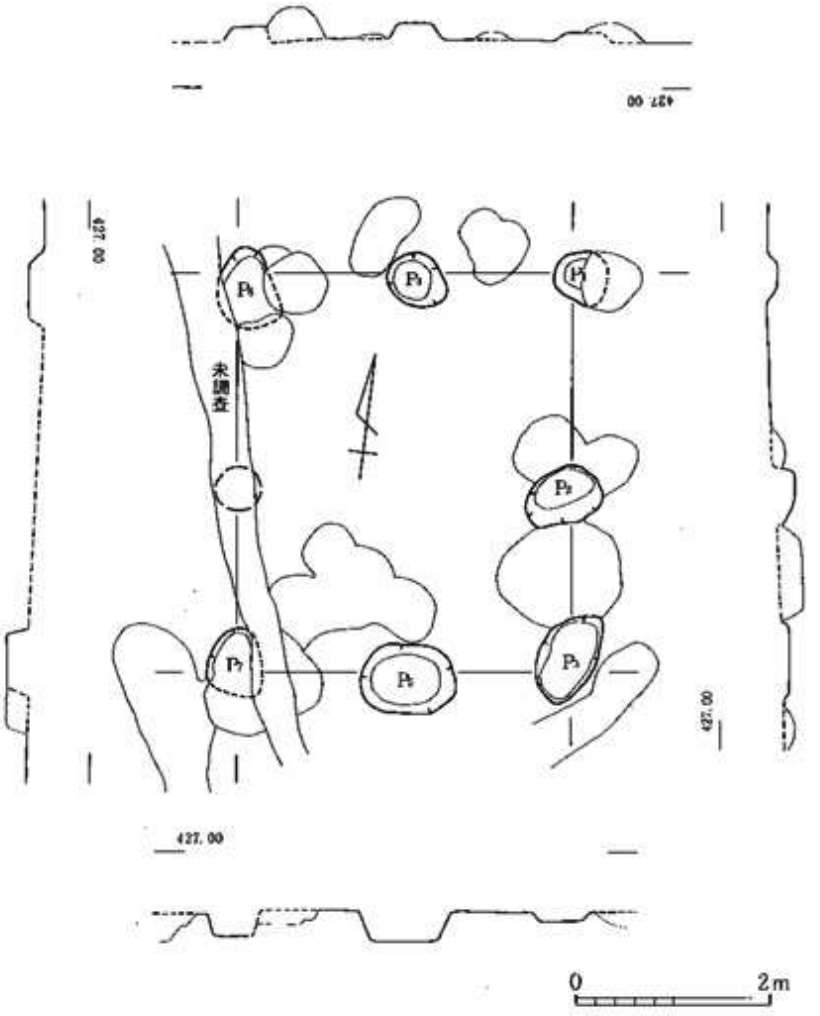


挿図77　掘立柱建物址48

㉔　掘立柱建物址48（挿図77）

ＹＤ63を中心に検出された。141・142・156号住居址を切り，掘立柱建物址34・47，溝址37と重複する。桁行３間×梁行２間，桁行方向N75.0°Ｗの建物址である。柱間及び柱穴の平面形はばらつく。建物址47と同様，他の建物址と棟方向を大きく異にする。

詳細時期は不明であるが，重複関係から古墳時代後期以降に位置づけられる。



挿図78　掘立柱建物址49

㉕　掘立柱建物址49（挿図78）

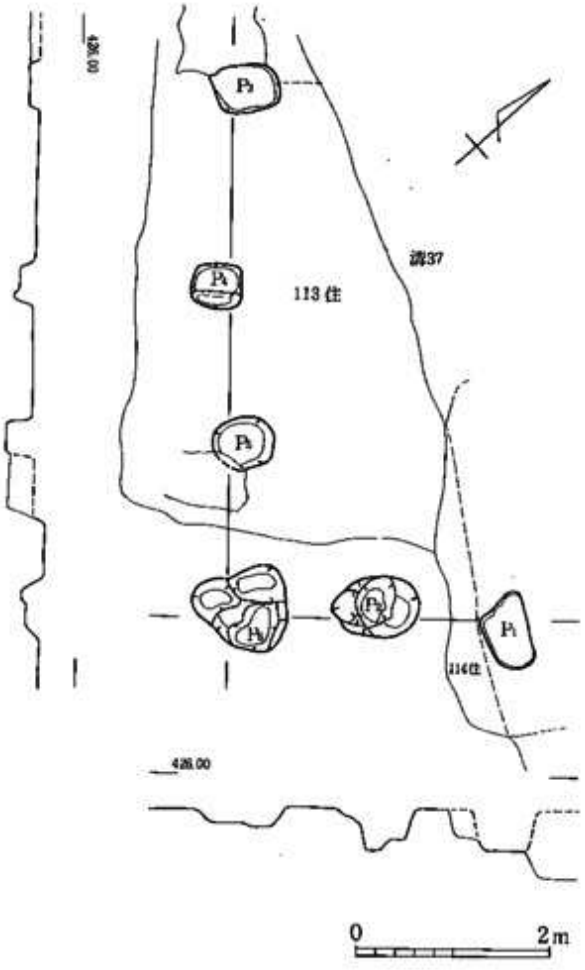
ＹＧ59付近で検出された。西辺は畑管にかかり未調査であるが，２間×２間の側柱のみの建物址である。柱間は東西170cm，南北210cmを測り，南北の方向軸はN7.4°Ｗである。掘り方は60～90cmの不整形をなし，深さは全体が浅い。他の建物址と棟方向を大きく異にする。

出土遺物もほとんどなく，時期不明である。

㉖ 掘立柱建物址50（挿図79）

調査区南隅，ＹＨ72を中心に検出した。113・114号住居址，溝址37を切る。溝址37と重複する部分が多く，規模は不明である。柱間は桁行180cm，梁行160cmを測り，桁行方向はＮ47.0° Ｗを示す。柱穴の規模が約60cmと小さく浅いことから，時期が他の建物址よりやや新しいと考えられる。

詳細時期は不明であるが，中世に位置づく可能性が高い。



挿図79　掘立柱建物址50

㉗ 掘立柱建物址51（挿図80，第41図８）

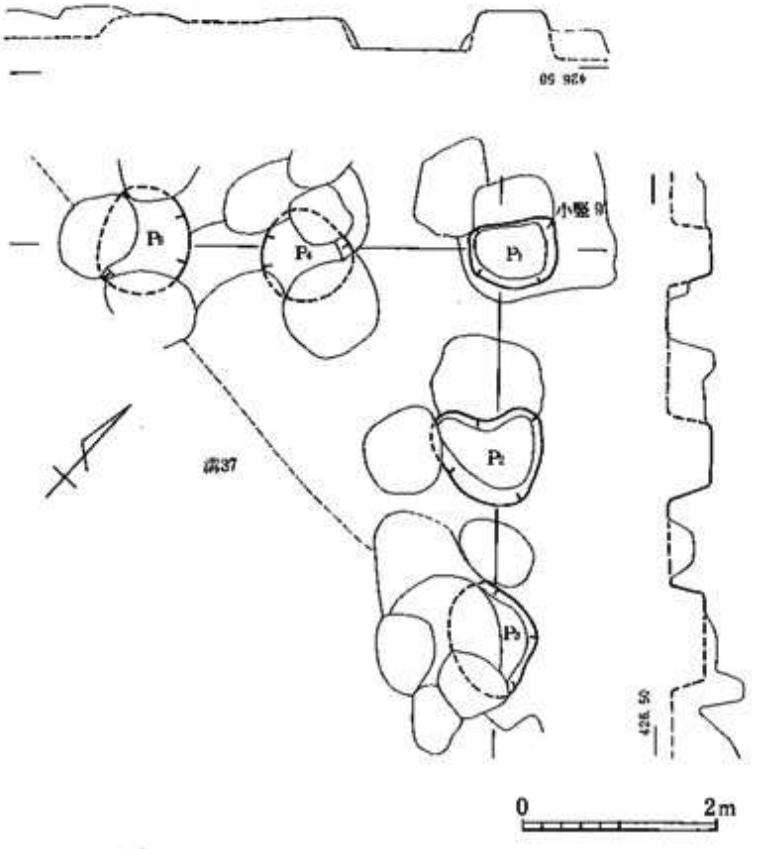
ＹＣ56を中心に検出された。掘立柱建物址40・42・50，小竪穴９，溝址37，柱列址１と重複する。溝址37と大半が重複するため規模等不明であるが，柱間は東西180cm，南北200cmを測り，南北の方向軸はＮ42.4°Ｗである。掘り方は90～100cmの不整形を呈し，深さはほぼ揃う。

掘立柱建物址33・36・38・44・50と棟方向が揃う等，これらと同時期の建物址と考えられる。

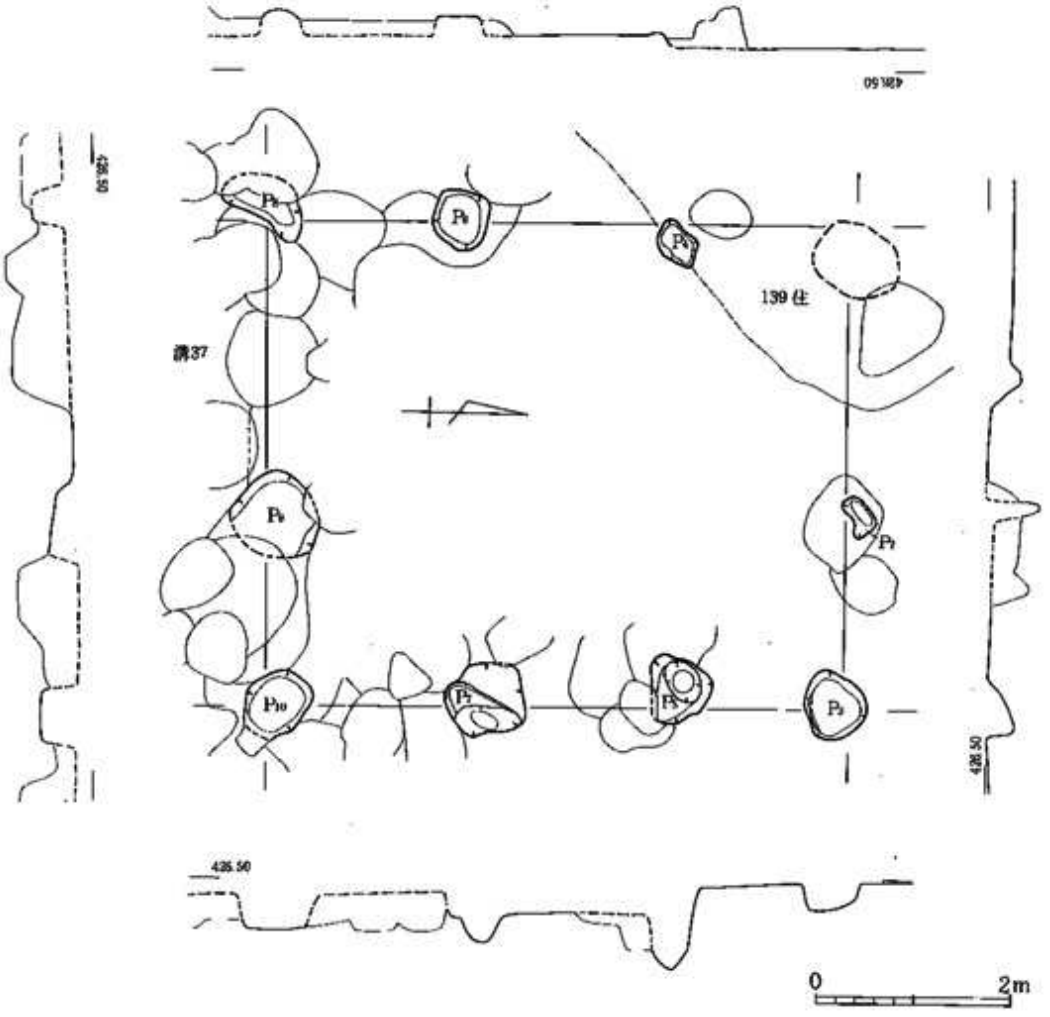
㉘ 掘立柱建物址52（挿図81）

ＹＤ55を中心に検出された。139号住居址を切り，掘立柱建物址37・39・40・51，小竪穴９，溝址37，柱列址１と重複する。桁行３間×梁行２間，桁行方向Ｎ0.9°Ｅを示す側柱のみの建物址である。柱間は桁行160～200cm，梁行200・300cmとばらつきがある。

時期は不明であるが，重複関係から古墳時代後期以降に位置づけられる。



挿図80　掘立柱建物址51



挿図81　掘立柱建物址52

3）土　坑

① 土坑16（挿図82）

調査区北西端，ＹＯ53で検出された。溝状址２と重複し，北西側半分は攪乱によりこわされる。長さ135cmを測り，不整楕円形を呈すると考えられる。だらだらと掘り込まれ，底部は平坦である。

出土遺物はなく，時期不明である。

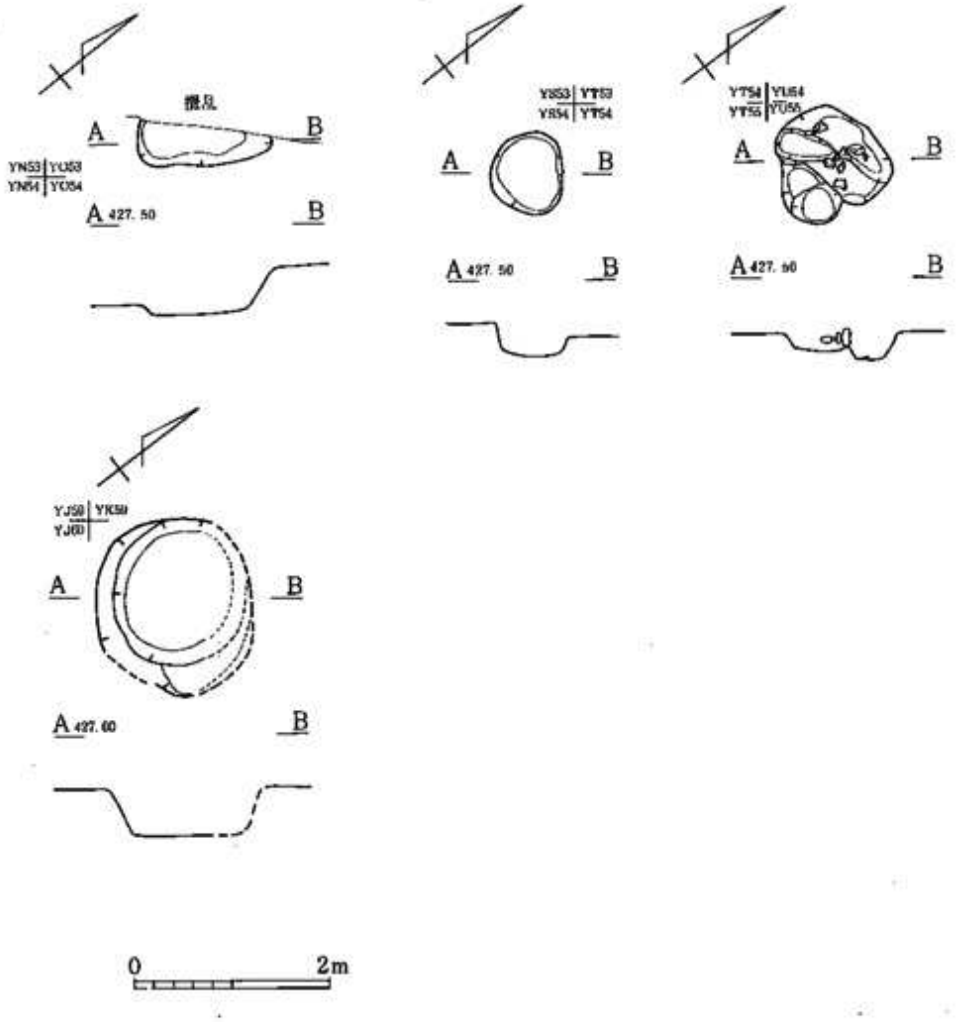
② 土坑17（挿図82）

調査区北西端，ＹＳ54で検出された。133号住居址と重複する。85×70cmの不整円形を呈し，深さ32cmを測る。底部はゆるやかな丸底状を呈し，壁は急に立ち上がる。重複住居址からの混入した土師器甕２片のみであり，時期等詳細は不明である。

③ 土坑18（挿図82）

ＹＵ55で検出された。132号住居址を切る。120×110cmの不整形を呈し，底部は凹凸があり，最深部で深さ27cmを測る。内部に礫および住居址より混入した土師器甕がある。

時期等詳細は不明である。



挿図82　土坑16～19

④ 土坑19（挿図82）

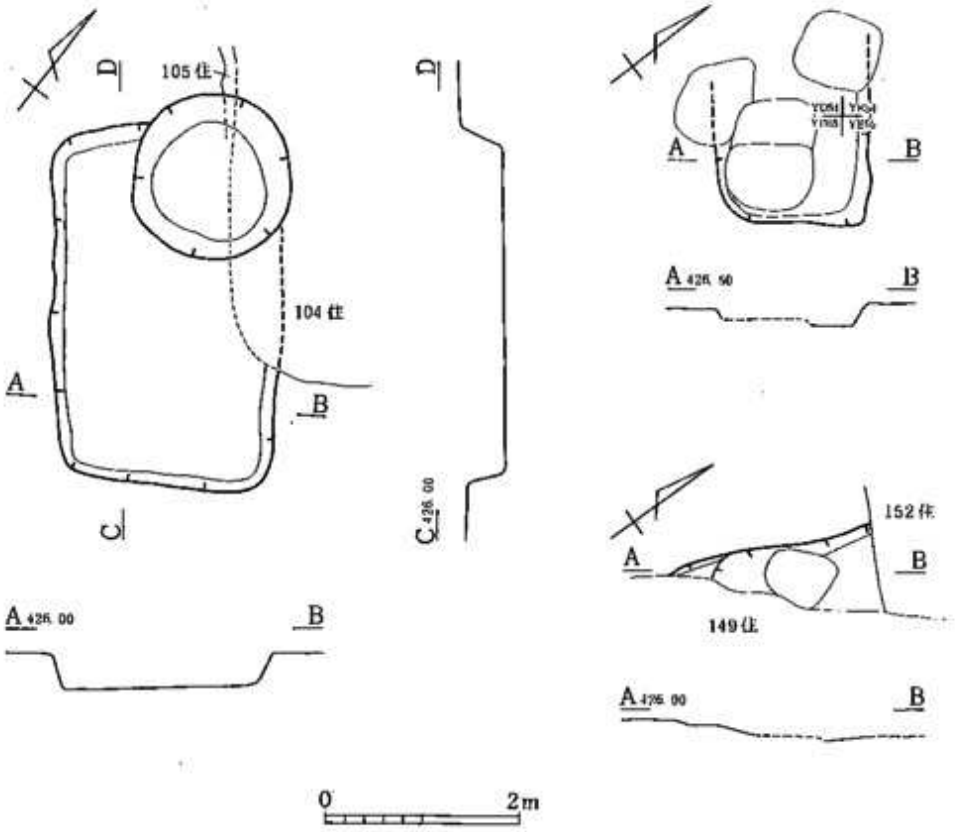
調査区中央やや西寄り，ＹＫ60で検出された。180×160cmの不整円形を呈し，深さ49cmを測る。底部は平坦であり，中段まで急に立ち上がり上半はややゆるやかな壁である。

出土遺物はなく，時期等詳細は不明である。

4）小 竪 穴

① 小竪穴８（挿図38）

調査区東隅，ＹＳ75付近で検出された。104号住居址を切る。東西2.4m×南北3.7mの方形を呈し，長軸方向はN37.0° Wを示す。壁の立ち上がりの状態はやや急であり，隅の遺存状態も柱



挿図83　小竪穴８～10

穴と重複する北側を除き良好である。底部は平坦であるが，全体的に軟弱である。埋土は暗黄褐色土の一層であり，焼土等の混入は認められない。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器蓋等があり，出土量はやや少ない。土師器坏は口縁部がやや内湾するものとわずかに外折するものがあり，いずれも丸底状を呈する。内面黒色処理されるものがある。

時期は重複関係・出土遺物等から古墳時代後期に比定される。

② 小竪穴9（挿図38，第77図）

調査区西側，ＹＤ54を中心に検出された。139号住居址，掘立柱建物址37・40・51・52と重複する。東西1.55mの方形を呈する掘り方で，地山が礫混りの黄色砂土のため，隅の遺存状態は悪い。壁もこうした検出状況のため最終的にゆるやかな立ち上がりとなったが本来は急な立ち上がりを示すものと思われる。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器蓋・坏等があり，出土量は少ない。土師器坏は内外赤褐色を呈する暗文が施されるもの，内面黒色処理されるもの等ある。須恵器蓋は大形で内面にかえりがあり，外側に自然釉がかかる。また蓋坏がある。坏は身深でほぼ直立する。

出土遺物等から奈良時代に位置づくと考えられる。

③ 小竪穴10（挿図83）

調査区南西端，ＸＪ58付近で検出された。147・149・152号住居址，掘立柱建物址35と重複する。重複遺構のため詳細は不明である。だらだらと掘り込まれており，底部は平坦でなく締まりもない。

出土遺物は土師器甕・鉢があり，僅少である。鉢は小型薄手であり，内外面ともヘラミガキが施される。

詳細時期は不明であるが，古墳時代後期に比定される。

5）溝　　址

① 溝址37（付図2，第43～48・73・75・77図）

調査区の南側で検出された。97・101・113・114・144・150～153号住居址を切り，掘立柱建物址29・41～45・47・50・51と重複する。一般国道153号座光寺バイパス路線内の阿弥陀垣外地籍溝址4と連続する。総延長57m，中央付近は2.3mと幅狭であるが，大部分は幅3.0mを測る。

113号住居址付近で方向を変え，これより西側でN82.2° W，東側はN64.8° Wを示す。深さは50～100cmを測り，西端と東端の比高差は65cmと勾配1.1%で東側にゆるやかに傾斜している。断面形をみると中段まではゆるやかで以下ほぼ垂直に掘り込まれており，底部は平坦である。底部での幅は160～200cmで，中央付近は地山が礫混りの黄色砂土で，固く締っているためか150cmとやや狭い。黄色ロームを掘り込んで，黄色砂質ロームに達する。埋土は主に上層が暗黄褐色土，下層が暗褐色土で，上層の細分は困難である。本址の東半は上層上部に，径20cm程の花崗岩を主とする河原礫がほぼ同じレベルで一面的に集中している。この付近で砂等の水の流れた痕跡は認められず，自然に礫が混入したと考え難いことから，人為的に投げ込まれたことが考えられる。断面形が特異であるのは砂質ロームまで達する掘り方の崩落を防ぐためと考えられる。形態等から用水とは考え難く，並行して検出された柱列址1とともに区画施設として機能したと考えられる。遺物の出土は上層が多いが，上層，下層の間に時期差は見い出せない。

出土遺物は土師器甕・坏・高坏，須恵器壺・甕・蓋・坏・高坏・平瓶・盤等があり，出土量は非常に多い。土師器甕は頸部の立ち上がりの小さい胴部球形を呈するもの，小型甕がある。坏（第43図9・10）・高坏（11～13）は内面黒色処理されるものがあり，坏は胴下部に稜をもつ。須恵器長頸瓶（15・18）は頸部が直立する。甕は肩部が高く張る（第44図1）。蓋は中形のつまみをもつもの（第46図1・2・4）の他，小形で内面にかえりをもつもの（3），壺の蓋（9），大形の蓋等がある。坏は身深で器壁が急に立ち上がるもの等あり，そのうち底部に窯印をもつもの（16）がある。

時期は出土遺物・重複関係等から奈良時代に比定される。

② 溝址38（付図3，第49～51・75図）

調査区北東側で検出された。東側は表土除去の際削平し，検出できなかった。96・100・102・106・123・129～135号住居址，溝状址3，土坑18を切り，集石5，火葬墓1・2に切られる。延長44m，幅1.1～2.5mを測り，西側ほど遺存状態が良好である。だらだらと凹んでおり，底部は平坦である。埋土は暗褐色砂質土の一層であり，埋土上部からほぼ連続して5～40cm程度の河原礫が密集している。長軸方向は西半がN39.8° W，東半はN50.6° Wでほぼ傾斜に沿い，勾配が2.6%程度であることから自然流路と考えられる。

出土遺物は弥生時代以降の各時代にわたっており，出土量は多い。弥生時代中期の壺・甕は胴部にクシ状工具による条痕があり，壺は底部に木葉痕，甕は櫛描鋸歯文（6・7）が施される。古墳時代から平安時代にかけては土師器壺・甕・坏・甑・須恵器甕・蓋・坏・甕等がある。土師器坏は内面黒色処理されるもの（12）があり，甑は複数穿孔される。須恵器蓋は中・小形の二種類あり，小形のものは内面にかえりがある（17・18）。中世の遺物としては青磁碗の他，壺・甕・摺鉢等の陶器片がある。遺物の大半は重複する遺構からの混入品と考えられる。

時期は平安時代後期の102号住居址より上位に位置することや出土遺物等から中世に比定され，その廃絶した時期も集石・火葬墓との新旧関係から中世のうちに求められる。

③ 溝址39（挿図84，第51図５・６ ）

調査区の南西端，ＸＶ63を中心に検出された。149号住居址と重複する。長さ６ｍを確認し，幅60～80cm，長軸方向Ｎ54.5°Ｗを測る。深さ約30cmで底部は平坦である。東端が途切れ，埋土中にも水の流れた痕跡が認められないことから，小規模な区画施設と考えられる。

出土遺物は少なく須恵器甕等がある。

詳細時期は不明であるが，古墳時代後期以降の遺構と考えられる。

6）溝 状 址

① 溝状址２（挿図85）

調査区北西端，ＹＰ54を中心に検出された。土坑16と重複する。長さ4.2m，幅0.8m長軸方向Ｎ45.4°Ｅを示す。壁はだらだらと落ち，底部はゆるやかに凹む。

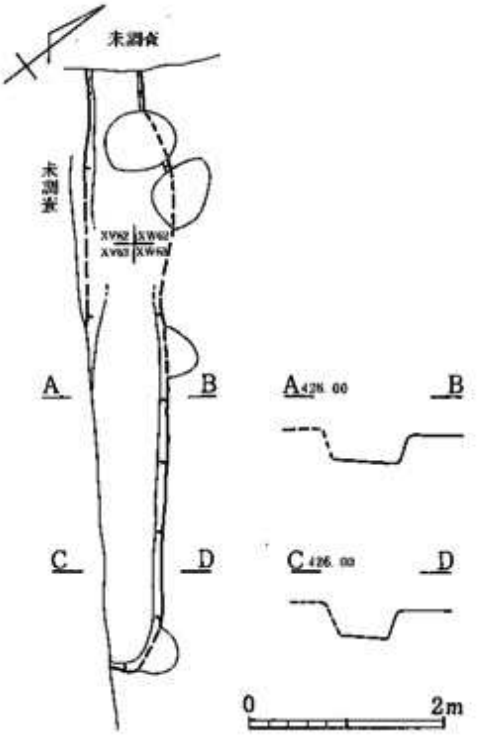
出土遺物は少なく，大半が小片である。土師器甕・内黒の坏等がある。

時期は遺物等から古墳時代後期に比定される。

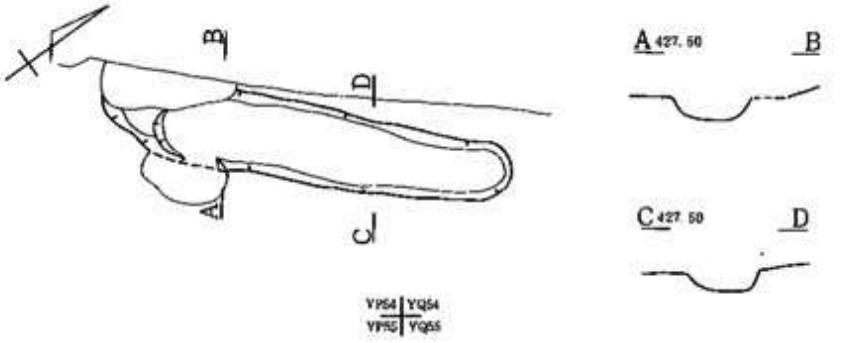
② 溝状址３（挿図85）

調査区北端，ＹＴ55付近で検出された。132号住居址を切る。長さ4.6m，幅1.0m長軸方向Ｎ63.8°Ｅを測る。わずかに南側に湾曲する。底部平底状を呈するが，２ケ所に落ち込みが認められる。壁はゆるやかに立ち上がる。

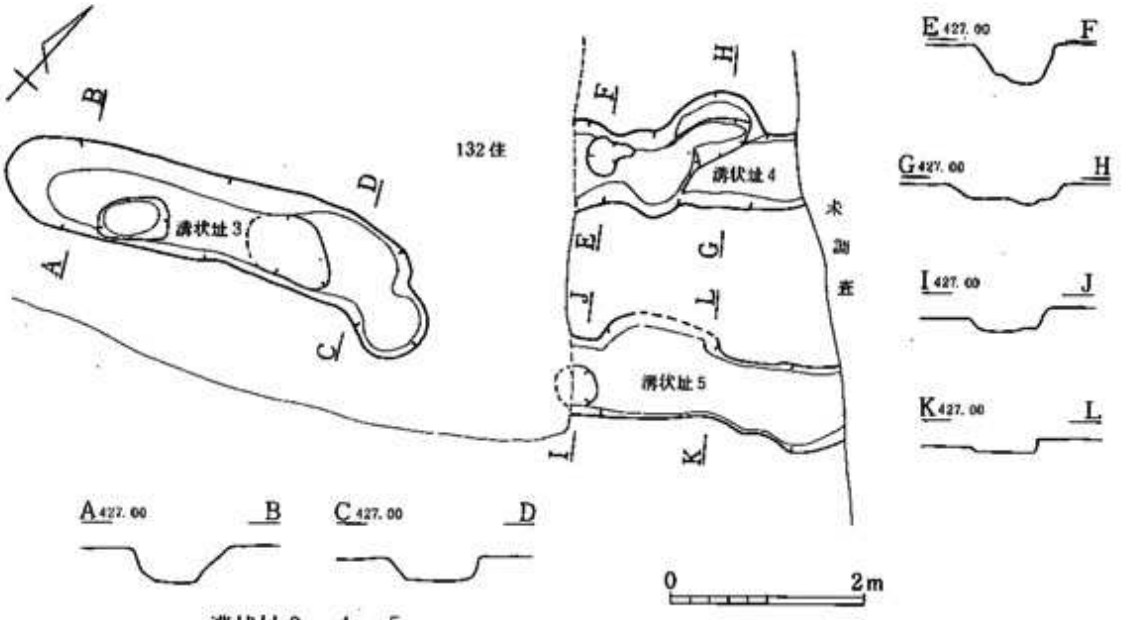
出土遺物は土師器甕片のみと僅少であり，大半が132号住居址からの混入と考えられる。



挿図84 溝址39



溝状址 2



溝状址3・4・5

挿図85　溝状址2～5

詳細時期は不明であるが，他の溝状址とほぼ同時期と考えられ，古墳時代後期に比定される。

③　溝状址4（挿図85）

調査区北端，ＹＷ56を中心に検出された。132号住居址を切り，東側は調査区外にかかる。幅0.8m，長軸方向N49.0°Ｅを測る。柱穴と重複するため平面形は不整形で底部は凹凸がある。

出土遺物はなく時期不明であるが，他の溝状址と同時期の古墳時代後期の遺構と考えられる。

④　溝状址５（挿図85）

溝状址４に隣接して検出された。132号住居址を切り，東側は調査区外にかかる。幅0.9m，長軸方向N54.5°Eを測る。溝状址２・３とは底部レベルが異なり長軸方向もわずかながら異にするが，ほぼ直線的に並んでおり，何らかの関係を有すると考えられる。

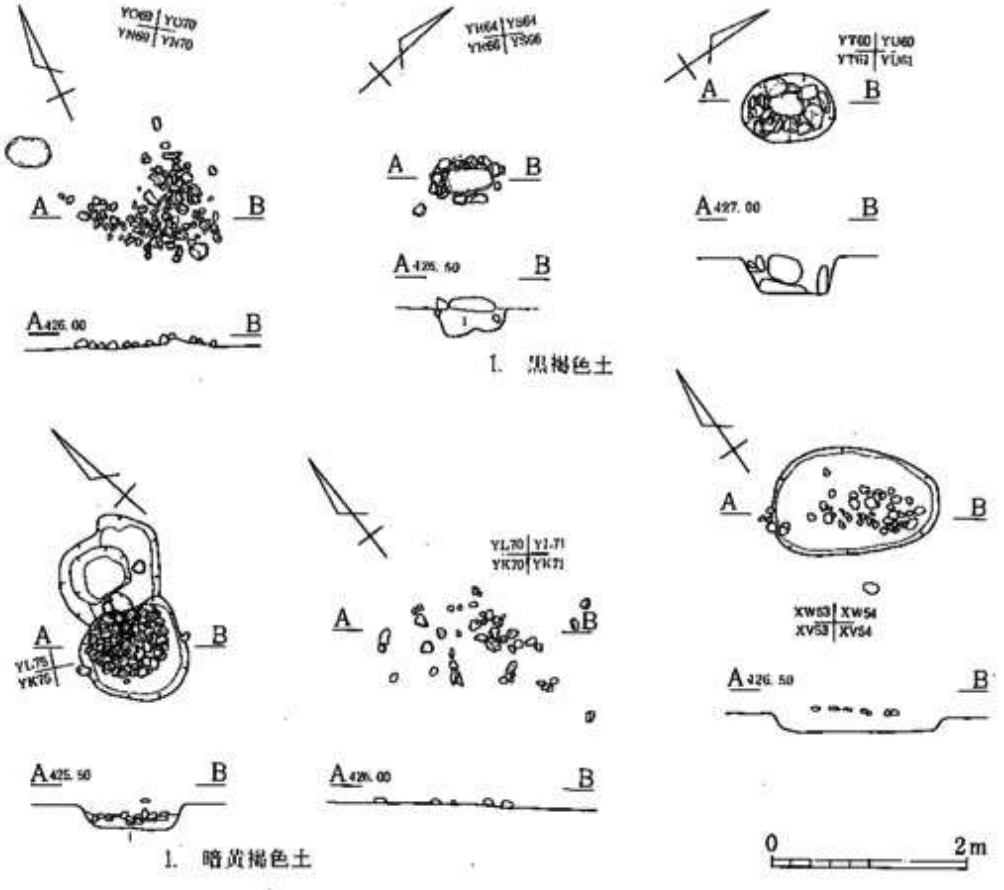
出土遺物は土師器甕，須恵器蓋片等僅少である。

時期は遺物等から古墳時代後期に比定される。

７）集　　石

①　集石４（挿図86）

ＹＮ69・70で検出した。110号住居址の埋土中に位置し，住居址より新しい。140×120cmの範囲に小礫が集中し，ほぼ同一レベルで並ぶ。住居址床面までは達していない。焼けた花崗岩が目



挿図86　集石４～９

立ち，礫下部に炭及び炭素分が凝着していたが，焼骨・焼土等は認められない。重複遺構からの混入として土師器高坏，須恵器甕，打製石斧等が出土したほか，時期のわかる遺物はない。

検出状況から中世の火葬墓と考えられる。

② 集石5（挿図86）

ＹＳ66で検出された。溝址38を切っている。中央に長さ50cm程度の扁平礫が据えられ，周囲に2段ににぎり拳大の礫が詰められていた。礫の下部は埋土黒褐色土の落ち込みが確認された。礫上部から底まで40cmを測る。埋土中に焼土・炭等は認められない。出土遺物は土師器甕・内黒の坏等少量で，混入遺物である。

詳細時期は不明であるが，中世の墓壙と考えられる。

③ 集石6（挿図86）

調査区東側中央，ＹＴ61で検出された。中央に人頭大の礫と，50cm程の扁平礫が重ねてすえられ，周囲に10～20cm程の礫が詰められる。礫には火を受けた痕跡は認められず，また焼土・炭は認められなかった。掘り方底部は平坦である。形態等集石5と類似しており墓壙と考えられる。

時期はやはり不明であるが，中世に位置づくと考えられる。

④ 集石7（挿図86）

調査区南端中央，ＹＫ76・ＹＬ76で検出された。101・103号住居址と重複する。80×70cmの範囲にほぼ円形に集中する。長さ15cm程度の編物石状の硬砂岩ばかりで，およそ2段分の厚さがある。性格等不明であるが，同一形態の礫が集中することから，埋納されたものと考えられる。位置が103号住居址の南西隅にあたることから，あるいはこれに伴う施設の可能性もある。

出土遺物は重複遺構からの混入である土師器甕および須恵器蓋坏の2片のみであり，時期不明である。

⑤ 集石8（挿図86）

ＹＫ70・71で，108号住居址上部で検出された。200×100cmの範囲に10～20cm程度の礫が平面状に分布する。掘り方はなく，焼土・炭等も認められない。重複する住居址からの混入遺物が少量あるのみで，時期・性格等一切不明である。

⑥ 集石9（挿図86）

XW53・54で検出され，153号住居址を切る。170×110cmの不整楕円形を呈する掘り方に径10cm程度の礫が集中する。掘り方底部から礫まで10～15cmを測り，浮いた状態である。花崗岩を主とし，火を受けて著しくもろい。礫上及び礫下面に炭が多いが，以下の埋土中には少ない。埋土は黒褐色である。底部中央付近に若干の焼土が認められるほか，北西壁寄りから骨片が出土した。出土遺物は土師器甕・坏，須恵器蓋・坏等重複住居址からの混入であり，他に時期の知れる遺物はない。

詳細時期は不明であるが，中世の火葬墓であると考えられる。

8）柱 列 址

① 柱列址1（付図2）

調査区南側で検出された。溝址37の北側に位置し，103・108・144号住居址を切り，掘立柱建物址29・40・42・51・52と重複する。総延長約54mを測る。144号住居址付近で方向を変え，西側はN86.3° W，東側はN78.0Wを示す。中央付近の柱穴は径100～130cmと大形であるのに比して，両側は径80cm程度とやや小ぶりである。ほぼ並行する溝址37のこの部分は幅が狭くなっており，何らかの関係を有すると思われる。

出土遺物はほとんどなく，詳細時期は不明であるが，溝址37と同時期の奈良時代と考えられる。

9）火 葬 墓

① 火葬墓1（挿図87）

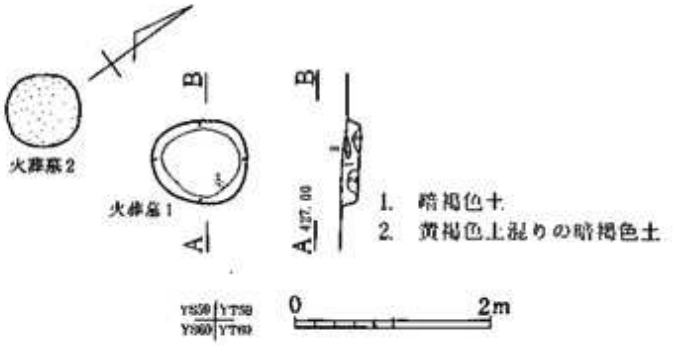
YS59付近で検出された。131号住居址・溝址38を切る。85×95cmのほぼ円形に焼土が上部に認められ，下部に深さ16cm程の掘り込みが検出された。

出土遺物はなく，重複関係から中世の火葬墓と考えられる。

② 火葬墓2（挿図87）

火葬墓1に隣接して検出された。131号住居址を切る。径75cmのほぼ円形に焼土が認められ，状態等から火葬墓と判断された。

時期は火葬墓1と同様，中世に位置づく。



挿図87　火葬墓1・2

10）そ　の　他

①　柱　　穴（挿図88～92）

調査区のほぼ全面にわたって多数の柱穴が分布する。出土遺物はほとんどなく，いずれも時期・性格等不明である。

②　遺構外出土遺物

A. 土　　器

a　縄文時代

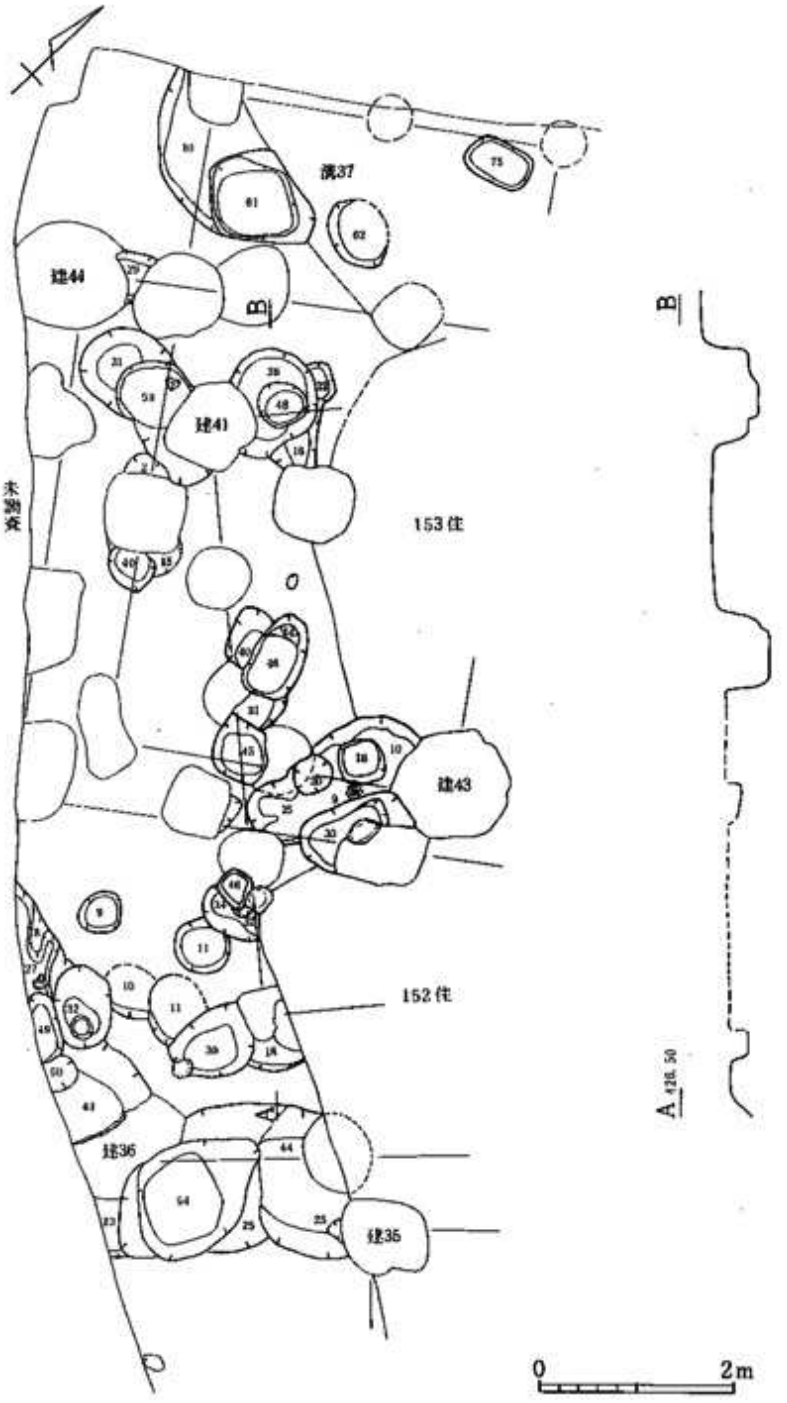
早期の遺物が若干出土したのみで，大部分は中期中葉から後葉に位置づけられる。

ⓐ 早　　期

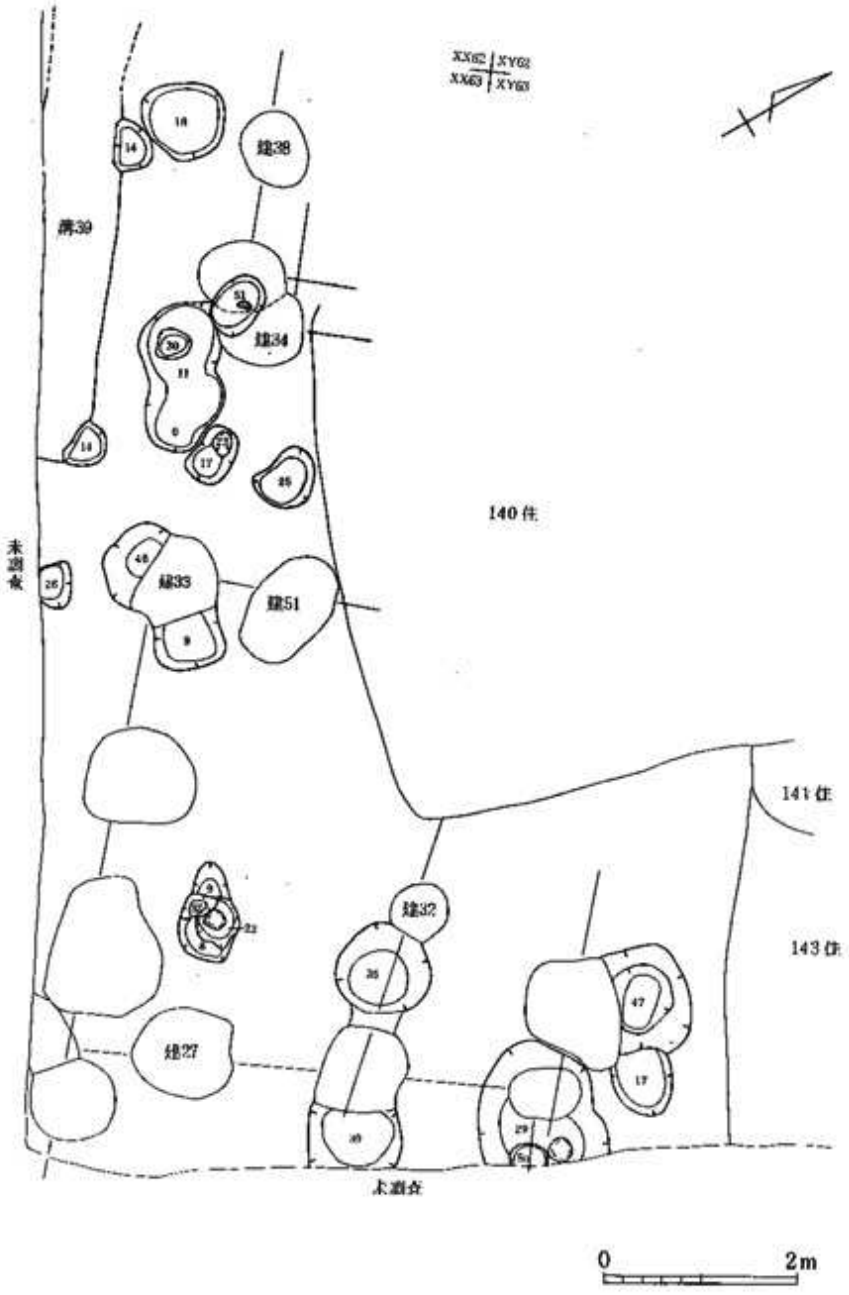
第52図1は縦位に密接施文される山形押形文で胴部やや下半寄りの破片である。原体の直径が約1cmとやや後出的な様相を示すが，胎土等精良であり細久保式に比定される。

ⓑ 中　　期

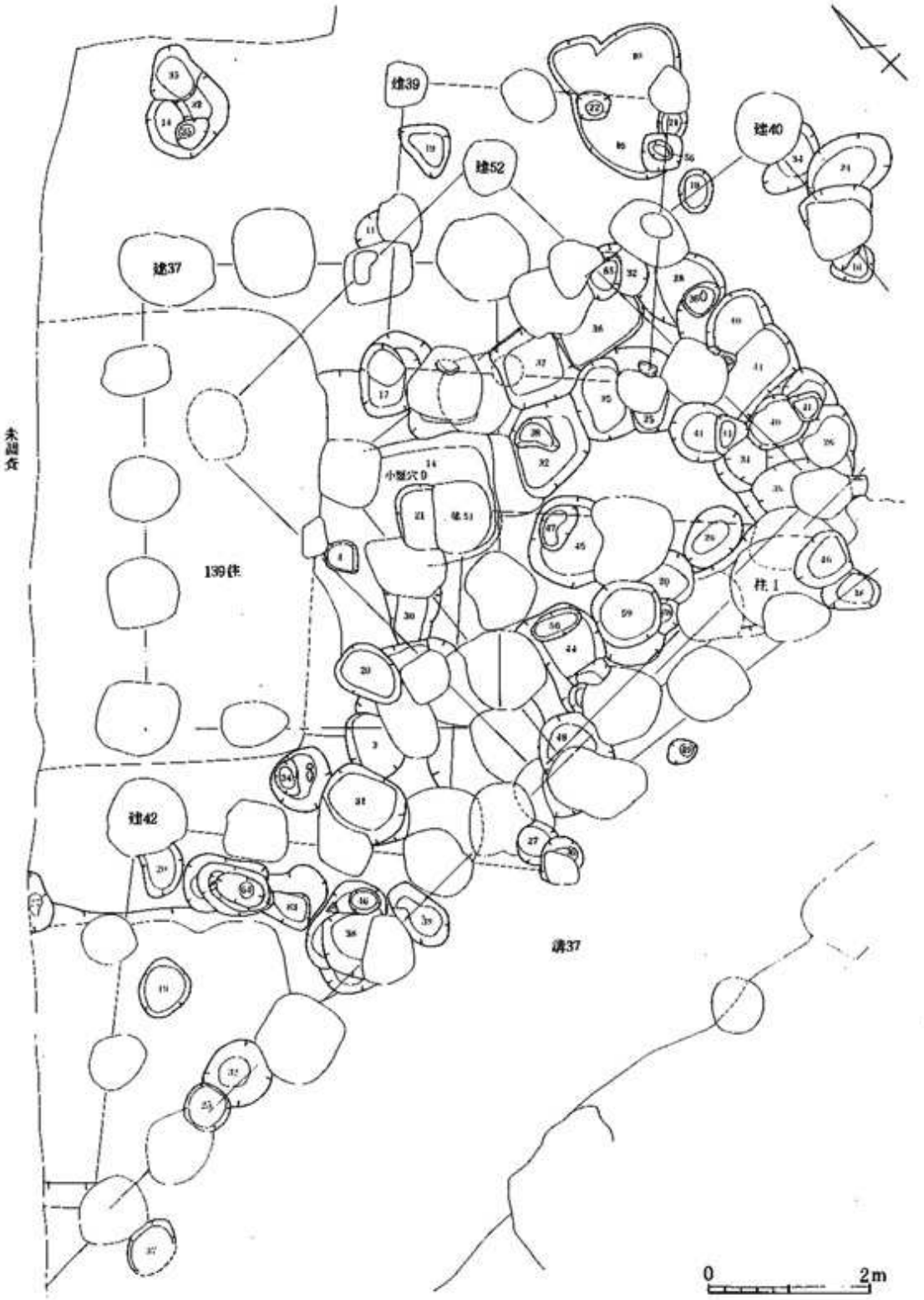
1はＲＬ縄文が横位施文される。5～9は隆沈線による区画文の下縁に角押文が施され，内部に縦位の沈線が充填される。10は横位の貼付文間に波状の貼付文がなされ，下位は隆沈線による腕骨文と斜行沈線が施される。13は口縁部に隆沈線による渦文がめぐらされ内部に縦位の沈線が充填される。22・23は縄文施文後沈線で渦文が描かれる。53図1～4は隆沈線による区画内に縄文が施文され，4はさらに幅広な工具による蛇行沈線が懸垂する。5・10は円形区画文内に沈線



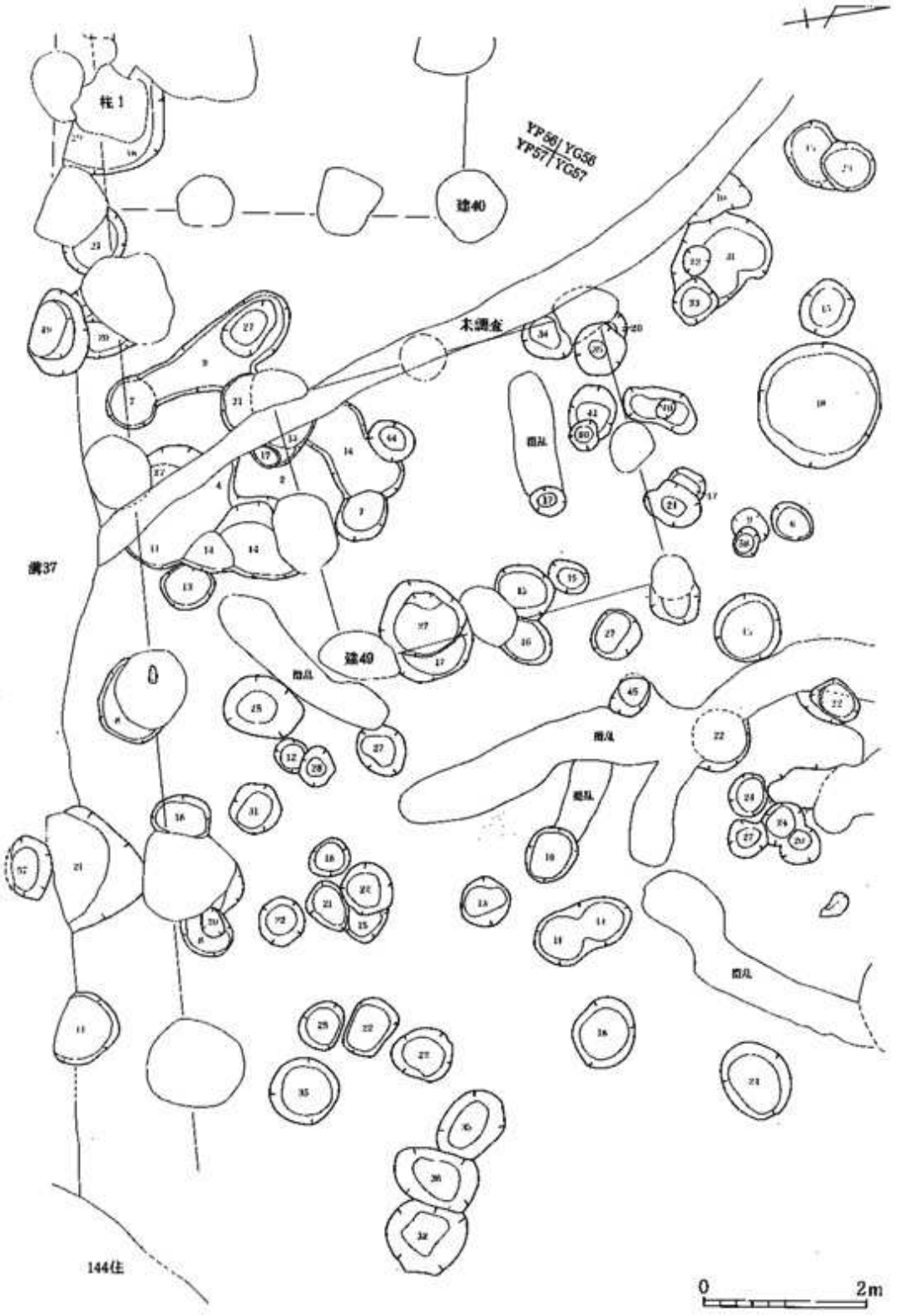
挿図88　柱穴平面図(1)


XX62 XY62
XX63 XY63
建38
溝39
建34
140住
未調査
建33
建51
141住
建32
143住
建27
未調査
0
2m

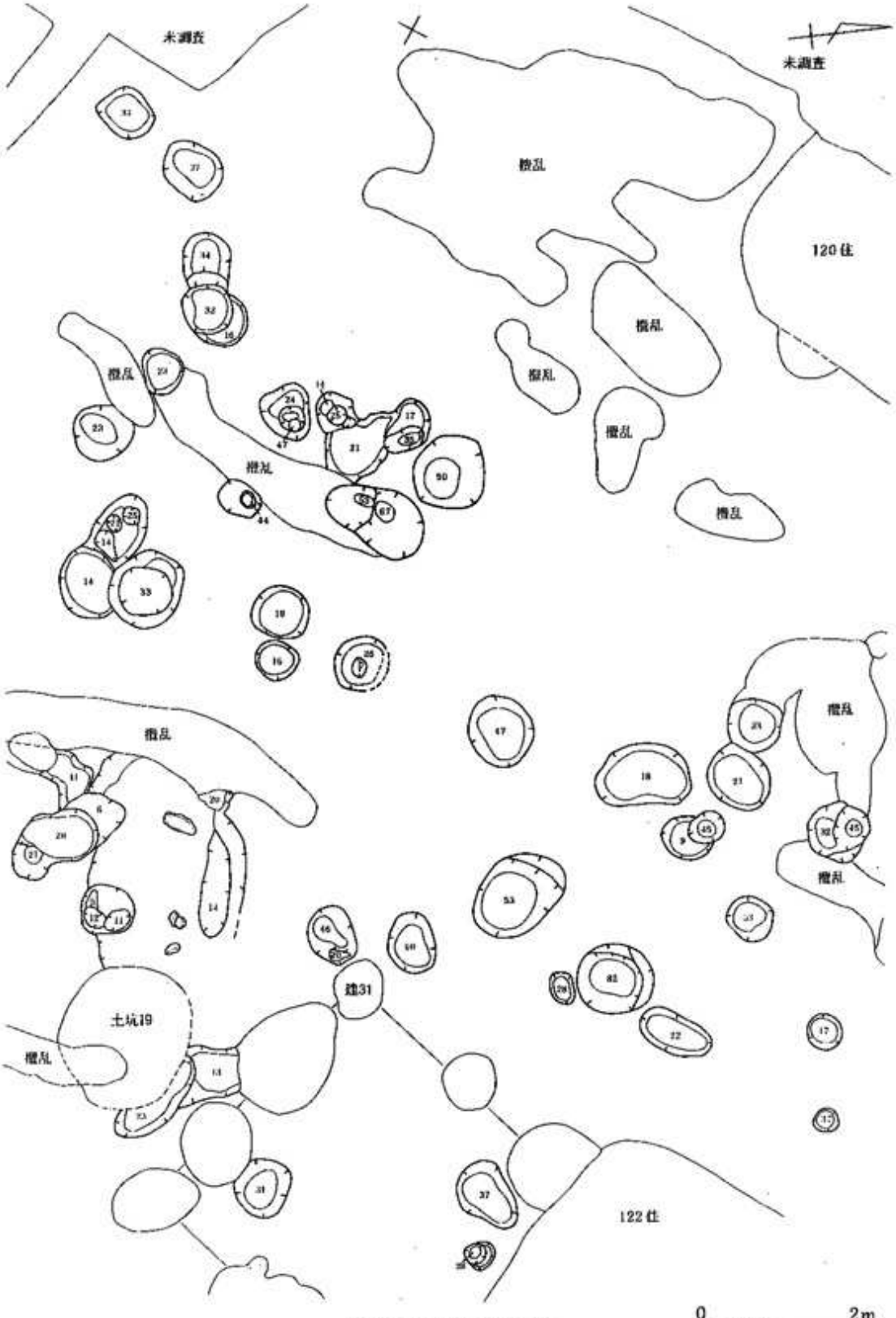
挿図89　柱穴平面図(2)



挿図90　柱穴平面図(3)



挿図91　柱穴平面図(4)



挿図92　柱穴平面図(5)

が充填される。8・9は縦位のやや細かな条線文，11は2条の連弧文が施文される。16・17・23は隆沈線による区画内に縄文及び結節縄文が，27は沈線による区画内に蛇行沈線文が施文される。28は土偶の右手であり，前面上下に2列ずつ1列4点の刺突が施される。また掌に相当する部分には中央に1点，前面寄り，後面寄りそれぞれ4点の刺突が施され，「4」を基準にした刺突配置がなされる。

b　弥生時代

今次調査地点出土の弥生土器は中期後半から後期後半にかけてのもので，中期後半のものが主体を占める。器種は壷（第54図1～8）・甕（9～28）が多い。

ⓐ 中　期

1は口唇部に波状文施文後円形浮文を貼付し，中央部に篦状工具による刺突が施される。壷の頸部文様は横線文（2），列点文＋横線文（3），篦描連続山形文の中に縦線文を充填するもの（6・7）等がある。4は底部に細かい織布痕が付着する。甕は上半に羽状条線文が施文されるもの（13・16～18），頸部に簾状文が施文されるもの（15），細かい波状文施文のもの（20～23）がある。20は内外面，21・23は外面刷毛目調整される。

ⓑ 後　期

該期の遺物は甕がほとんどである。9は外面に丁寧なミガキが施され，後期後半に位置づく。10は外面刷毛目調整が施される。胴上半に施文される文様は波状文＋斜走短線文（25・26），斜走短線文（27），斜走条線文（28）等であり，器面調整は粗く後期前半に比定される。

c　古墳時代後期

遺構外出土遺物の多くが該期に属する。

土師器甕（第55図1）は，頸部の屈曲がほとんどなく，内外面ともヘラナデ調整が施される。2も同じく頸部の立ち上がりが小さいが，内面に明瞭な稜をもつ。3は胴部球形を呈すると考えられる器形で，頸部に暗文風のヘラミガキが施される。内外面ハケナデ後，内面口縁部及び外面胴部はヘラミガキされる。やや時代が新しくなる可能性がある。第57図は甕底部を一括した。やや急な立ち上がりを示すもの（1～11），ゆるやかに立ち上がり胴部球形を呈すると考えられるもの（12～15），ほぼ直に立ち上がり小型のもの（20）等がある。坏は胴部下半に稜をもつもの（第58図2），口縁部がやや内湾した丸底状を呈するもの（3）等あり，内面黒色処理されるものがある。高坏4は坏部下半に段があり，内外面ヘラミガキされる。また脚部内面上端にヘラあて

痕が認められる。鉢9は口縁部横ナデ，以下横位のヘラミガキが施され，内面は朱彩される。外面底部付近には黒斑が認められる。他に内面黒色処理される鉢がある。ミニチュア土器（10）は内外ナデ調整され，黒褐色を呈する。須恵器は壷・甕（11～第59図5）・蓋（6～10・12・13）・坏（第60図1・2）・甑（8～11）・提瓶等がある。甕（第59図1～4）は内面に同心円の叩き目が残る。蓋は短頸壷の蓋と考えられるもの（6），小型で内面にかえりをもつ終末期の蓋（7～9・13）等あり，10は内面上部に窯印がある。甑（11）は大形である。

d　奈良時代

該期に属すると判断される遺物は少ない。須恵器蓋（11）のつまみは上部が平坦である。坏（4・5）は浅く口縁部が開く。鉢（7）は肩部及び内面下半に灰がかぶり，また内外に黒色の発泡がある。

e　平安時代

竪穴住居址の数が5軒と古墳時代後期に次いで多いことと関連してか，該期の遺構外出土遺物はやや多い。出土遺物は土師器甕・坏，須恵器壷・甕・蓋・坏，灰釉陶器碗・皿等がある。

土師器甕（第55図4～第56図，第57図24）が該期遺物の主体を占める。第55図4は細かいカキメが施され，外面は器面が著しく剥落する。5は長胴形を呈し口縁部に最大径がある。カキメは内面では細かく，外面は浅い。6は内面胴部までカキメが施される。第56図5は底部付近の破片であり，内面もこの位置までカキメ調整される。第57図24も内面底部までカキメが施される。須恵器坏（第60図3）は回転糸切りされ，ロクロ右回転である。灰釉陶器は僅少であり，碗（12），皿（13）がある。

f　中世

中世に属すると考えられる遺物は土師質の羽釜・皿，青磁・白磁等がある。羽釜（第60図14）はうつ伏せ状態で置かれたと考えられ，底部を中央上向きにひしゃげて出土した。15～17は橙明皿と考えられ，16は糸切り後ヘラナデされる。15・17は内外面赤褐色を呈する。

B．石　器

遺構外から出土した石器は多量であり，形態に基づいて記述する。

打製石斧（第61図１～第64図３）は大形のいわゆる「石鍬」と呼ばれるもの（第61図１～第62図３）と小形の「打製石斧」と呼び分けられたものがあるが，ここでは一括した。大形のものは硬砂岩製で刃部及び基部を著しく欠損する。背面に大きく自然面を残し，両側縁につぶしが施される。刃部を中心に摩滅が認められる。（第61図１・２・７・９，第62図３）。小形の打製石斧は量的に多く，形状に規格性が強く認められる。素材は硬砂岩及び緑泥岩が多く，硬砂岩製のものが比較的多く自然面を残すのに対し，緑色岩製のものは剥離がほぼ全面に及ぶ。石材の特質に根ざす製作過程の相違と考えられる。使用による摩滅が広範に及ぶものが認められる。

第64図４～第66図２は横刃型石器及び横刃型石庖丁である。硬砂岩が多く，残りは緑泥岩である。前者が自然面を多く残すのに対し，後者は打製石斧と同様剥離が及ぶ割合が大きい。横刃型石庖丁は硬砂岩素材で，形態・大きさ等に斉一性が強い。第65図７～９・12・17，第66図２は刃部にロー状光沢が認められる。第66図１はえぐりに近い側縁の調整が施される。横刃型石庖丁は弥生時代に比定される。

不定形な石器類はほとんど二次調整が加えられない剥片（３～10），背面側に多くの剥離が施され，大きさ・形態が揃わないもの（11～第67図３），円ないし方形を呈するもの（４～７）等あり，石器の大半を占める。主として硬砂岩を素材とする。

８～10は縦長の緑色岩小礫の両側及び下端に片面剥離が施される。９・10は剥離の施される側に擦痕が認められる。

11は黒曜石製の石匙で，基部を欠損する。

石錘（12～第68図６）は自然礫の両端ないし四方にえぐりを入れた礫石錘で，縦長のやや扁平な硬砂岩礫を素材とする。おおむね長軸６cm程度の礫を使用しており，斉一性が強いといえる。６は他の石錘の倍の大きさをもち，特殊な使用が考えられる。石匙・石錐は縄文時代中期後半の遺物と考えられる。

有肩扇状形石器（７）は両側のえぐりが深く入り，刃部に比べ基部の幅が広い。８は刃部が作出されていないが，形態は有肩扇状石器に近い。弥生時代の遺物である。

９～第69図22は磨製石器を一括した。第68図９・10は大型の両刃と考えられる石斧で，剥離面を残す等未製品である。11は刃部を欠損するが，短冊形を呈する扁平の片刃の石斧である。13・14はいわゆる扁平片刃石斧であるが，刃部のごく一部のみ遺存する。第69図１・２は大型蛤刃石斧で遺存部分の全面にわたって丁寧な研磨が施されている。３は平ノミ形の石器で，側縁及び裏面まで研磨が及ばない。以上は弥生時代中期に属すると考えられる。５は磨製石剣の先端付近と考えられる。石庖丁（７～９）は直線刃半月形を呈しており，７はやや内湾気味である。表裏面とも丁寧に研磨され，刃部に光沢が認められる。８は研磨が刃部付近のみで，剥離を大きく残す。いずれも紐孔は単孔と考えられる。弥生時代後期の遺物と考えられる。10～22は磨製石鏃の未製

品であり，粗割されたもの，剥離調整されたもの，研磨されたもの，穿孔されたもの（第72図20）等磨製石鏃製作の各段階を示す資料が出土している。

第69図23は環状石器であり，硬砂岩の剥片素材で両面中央部に敲打で穿孔される。その後表面に調整剥離が施される。弥生時代後期の遺物であろう。

敲打器（第70図1～8）は棒状自然礫を素材としており，斉一性が強い。硬砂岩が大半を占める。5は全面に敲打が施され，ほぼ中央で折断する。緑色岩製である。9は全面に敲打が施される。

砥石（第71図）は小形の当擦型のもの（3・4）と中・大形の据置型がある。1は作業面の中央が著しく凹み，長期にわたって使用されたと考えられる。3は目の粗い荒砥で，ホルンフェルス化した砂岩を使用している。6は両側縁を打ち欠いて直方体形の形状を用意している。

打製石鏃（第72図1～15）は無茎の凹基鏃が大半を占め，他に無茎平基鏃及び有茎の凹基鏃がある。黒曜石製がほとんどで玻璃質安山岩製（1・13）もある。大半が縄文時代中期のものであろう。

16～19はいずれも黒曜石製で18・19は基部付近にえぐり部が用意される。19は表・裏面に擦痕が認められる。

C．金属製品（第76，77図）

第76図1・2は鉄鏃であり，1はやや内反りである。2は小形で先端を欠く。いずれも銹化が著しく進む。3～8は刀子と考えられる。4・8は茎に木の組織片が付着する。4は銹化が進んでおり区は確認できないが，木部の遺存状態から茎との境がおよそ把握される。7は4と同様区が銹のため確認できず，茎との境が不明である。9・10は鉄鏃と考えられる。9は刃部五角形を呈し凹基の平根鏃である。11～14は不明鉄製品であり，いずれも銹化が著しい。12は鉄釘，13は飾り金具とも考えられる。

銭貨は嘉元通宝及び元祐通宝の2点があり，前者は100号住居址より混入出土した。

D．玉類

滑石製の臼玉3点が出土した。1点は上下端が丁寧に擦られ，小型で薄い。他2点は粗大な作りで，うち1点は一端に工具で切り離された痕跡がある。

Ⅳ　ま　と　め

昭和51年度にバイパス路線内の調査に着手して以来15年の歳月が経過した。この間，路線内から多数の官衙的遺構・遺物が検出されたのを皮切りに，昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している重要遺跡範囲確認調査やバイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果，古代伊那郡衙の存在を裏づける数多くの事実が積み重ねられてきた。個々の調査の総括も十分とは言えないのが現状であり，なお遺跡群全体を見通した官衙の構造や歴史的経過といった諸々の事実の解明にはまだ手がついたばかりと言っても過言でない。一方，バイパス周辺で進行する諸開発の流れの中で，十分な保護措置を講ずる上で官衙中心部の把握と遺跡群内の各地点が果たした役割の解明は急務であり，今次の調査結果も一定の成果が上がったと確信する。

調査された遺構・遺物はこれまで述べてきたとおりであり，一応の整理が終わった段階で十分な分析・考察はなお行ない得ないのが現状であるが，時代毎概観することで今次調査報告書の総括としたい。（挿図93・94）

(1)　縄文時代早期

断片的な資料の検出にとどまり，該期に比定される遺構はない。バイパス路線調査時に遺構・遺物が確認されていることや，今次の出土量が僅少であることからすれば，周縁的な分布状況を示すといえる。

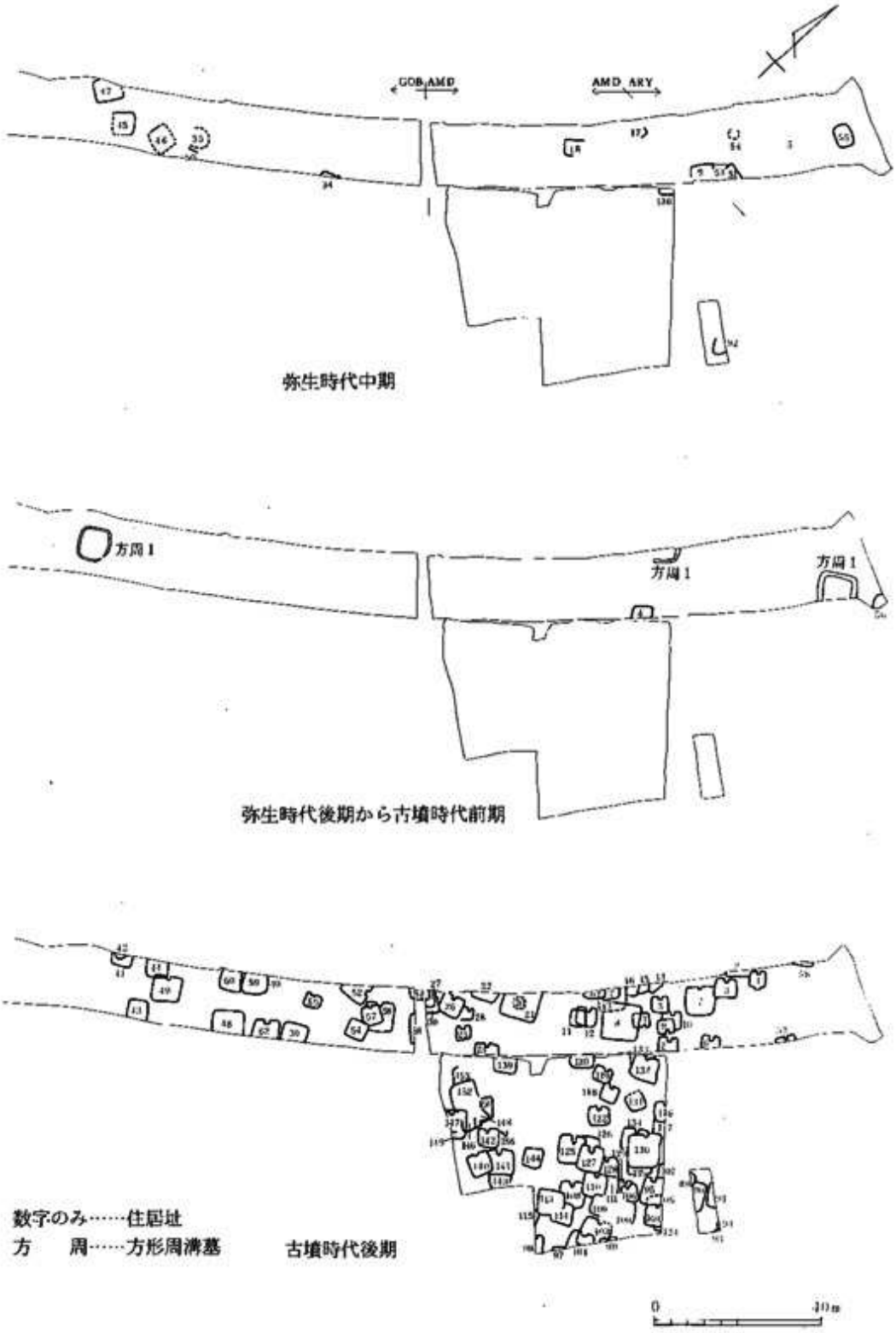
(2)　縄文時代中期

中期後葉の遺物が大半であり，やはり明確に遺構に伴うものはない。遺物の分布は調査区の南東側に集中しており，該期集落の中心部が調査地南東の段丘縁辺に求められる可能性がきわめて高い。

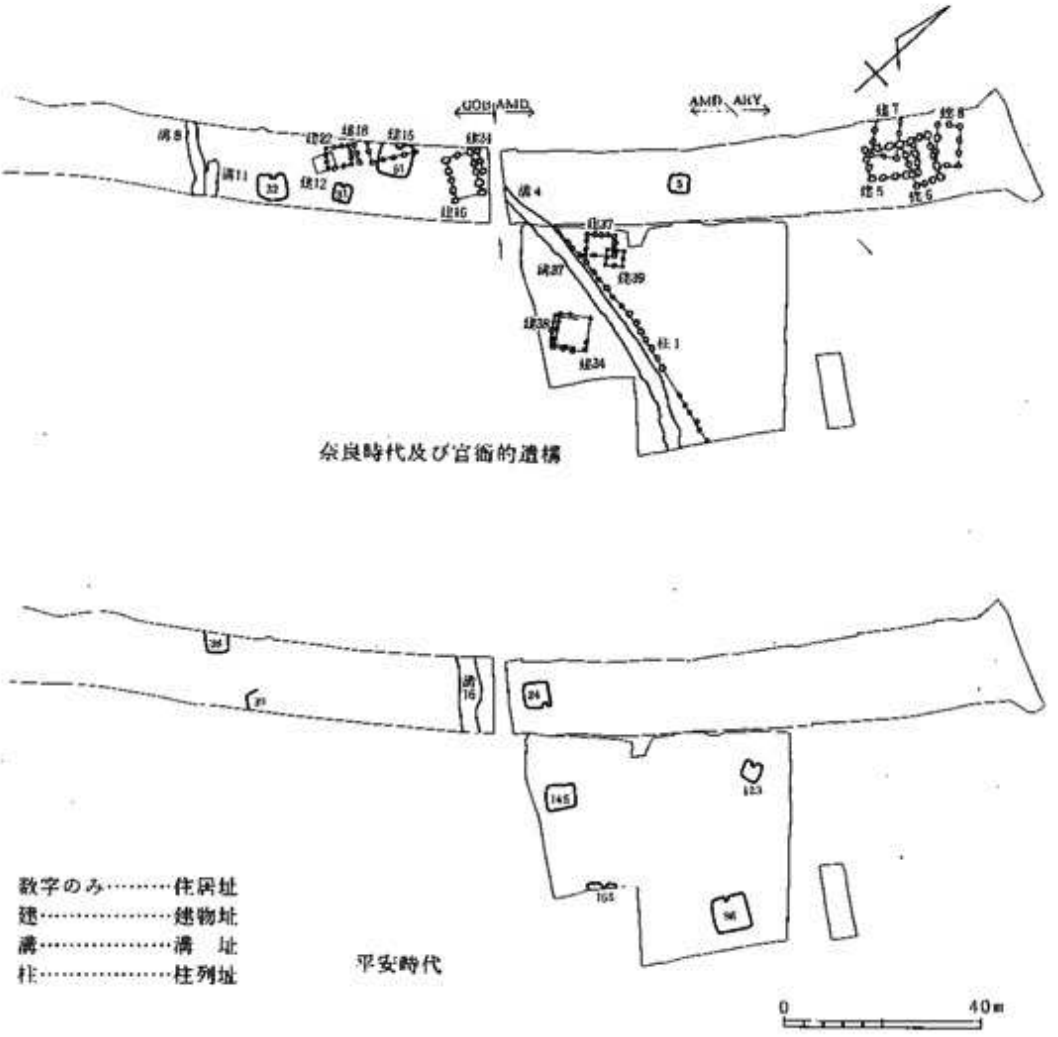
(3)　弥生時代中期

該期の竪穴住居址は２軒調査したのみであるが，調査区の北側部分で遺物がまとまって出土した部分があり，住居址の掘り込みが比較的浅いことから削平された住居址もあると考えられる。２軒の住居址からは定型化した磨製石器のセットが得られており，稲作にからんで生産技術とともに生産用具も一式導入された様子が伺える。

該期の集落はこれまでの他地点の調査から段丘上の広範に及んでいることが把握されており，同時代の他の集落と様相の異なる大規模な集落であったことがわかる。この卓越した集団を支える背景となったものは，東南側の段丘崖下に展開する肥沃な天竜川の氾濫原と湧水地であったことはこれまで指摘されてきたとおりである。以後古代末まで伊那谷全体の中で中心的役割を果た



挿図93　調査地点周辺集落変遷図(1)



挿図94　調査地点周辺集落変遷図(2)

していたわけで，古代社会確立の過程を解明する上で欠くことができない。

(4)　弥生時代後期～古墳時代前期

今回の調査において該期資料としては，弥生時代後期の土器片が少量出土したのみであり，遺構等の存在は確認されなかった。しかしバイパス用地内では隣接地において弥生時代後期，古墳時代前期とも一定の範囲に限定しての集落址の存在が確認されており，今次調査地点が居住域以外の土地として利用されていたと判断され，遺跡全体での時代復元の中で，耕作地等の所在する場所を推定も可能といえる。

(5) 古墳時代後期

今次調査地点で調査された竪穴住居址66軒のうち約9割が該期に比定される。調査区内でも分布にかたよりが見られ，東側及び溝址37南側に濃密に分布する。重複関係等を整理すると5期の変遷が確認され，該期がさらに4小期程度に細分されると思われる。各小期毎の遺構分布は比較的散在しており，すでにバイパス路線調査時に指摘されたように，終末期の住居址が今次調査地点周辺に集中する傾向が追認された。同時に今次調査地点でも竪穴住居址数が減少する傾向が読み取れ，遺跡群内での変化と軌を一にすることから，古代伊那衙成立の前段の政治的・社会的背景や何らかの規制を暗示するものと考えられる。いずれにせよ，該期の集落変遷が詳細に復元されることにより，続く郡衙の中で本地点がいかなる役割を果たしたかも解明される糸口も与えられるといえる。

(6) 奈良時代

本遺跡を最も特徴づける時代であることは誰しも是認するところであり，今次調査でも新たな知見を提供している。

まず溝址37と柱列址1の確認があげられる。溝址37はこれまで遺跡群内で調査された溝址の中では規模・構造等傑出しており，ほぼ一直線に延びている。該期初頭に位置づけられるが，埋め戻された状況が観察され，存続期間は短い。柱列址1とともに区画施設としての役割を備え，方向を揃える等の点，郡衙成立期において官衙域のなんらかの境界に位置していたと考えられる。

28棟を数える掘立柱建物址は大部分が古墳時代後期以降平安時代前期の間に属し，少なくとも4棟以上の重複がある。出土遺物から時期を明確にできなかったものの，規模・主軸方向等から奈良時代及び平安時代の建物址である可能性が高い。なかでも溝址37の北側で検出された建物址37はバイパス路線内で確認された奈良時代の建物址群と棟方向を揃えており，時期は奈良時代初頭と考えられる。現段階では建物址群の所属時期・変遷はなお明らかでないが，建物址及び他遺構の分布状況から相当長期にわたり建物址が存続したと言っても過言ではない。

建物址群の存続期間に比して溝址37・柱列址1の廃絶が早期にしかも人為的に行なわれていることは，郡衙が早い段階で大きく変貌したことを示唆する。そもそもこのことがいかなる要因によるものなのか推測の域を出ないが，なお郡衙が存続することから，当時の政治情勢等の外的な要素が大きく働いたことが考えられる。

推定伊那郡衙の中で今次調査地点周辺がどのような役割を果たしたか明らかにするにはまだ早急であると言わざるを得ないが，他地点の遺構分布と比較する時際立った対照を見せる。すなわち，該期遺構の最も多く分布する倉垣外地籍周辺では掘立柱建物址と竪穴住居址が併存するのに対し，本地点では竪穴住居址が欠如する。当時，当地方における一般的な居住形態である竪穴住居を排除し，溝址37・柱列址1といった他と隔絶した区画施設が存在することを考慮すると，官

衙域の中でかなり重要な意味を有する建物群が位置していた可能性が高いといえる。しかしその具体的な内容の確定は今次調査結果のみでは不可能といえ，周辺一帯における建物配置状況が整理される中で自ら明らかになるといえる。

(7) 平安時代

前述のように該期の前段は郡衙の一画として機能しており，該期前半段階においては礎石を伴う建物址もあり，官衙址の継承した姿が明らかである。後半になると，遺跡郡内他地点と同様，竪穴住居址を主体とする集落が営まれ，比較的規模の大きな住居址が多いが，各住居址の保有する遺物が他遺跡と大差ない等官衙的な性格は希薄といえ，倉垣外地籍周辺と異なる状況を読み取れる。

(8) 中　世

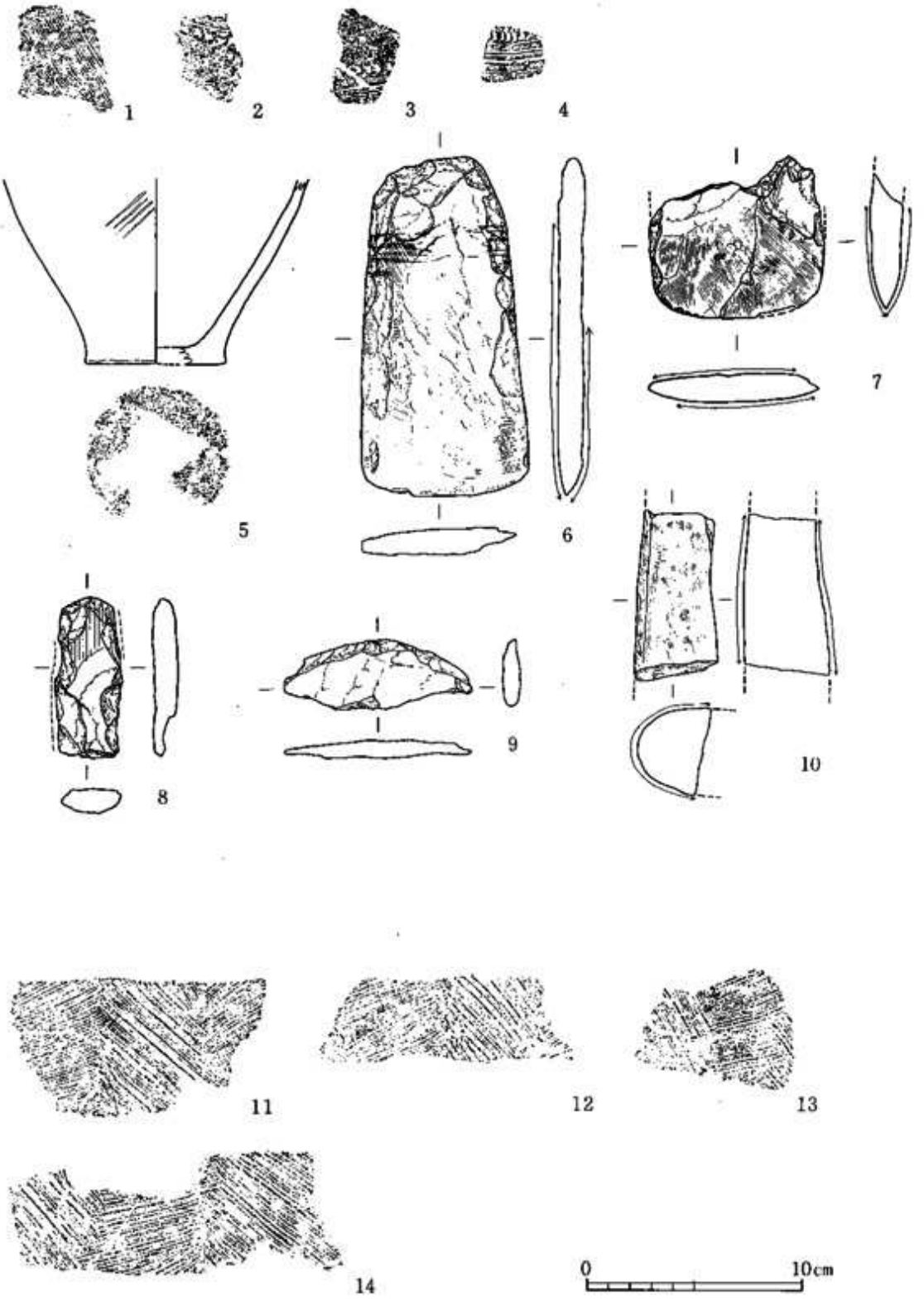
該期の遺構は掘立柱建物址の一部と溝址38・集石・火葬墓等と少数の確認にとどまり，集落の具体的な姿は言及困難といえるが，遺跡群内他地籍でみられる傑出した遺物出土もなく，周辺的な位置づけがなされる場所といえる。

これまでの調査の結果，推定伊那郡衙に関連した数多くの遺構・遺物が確認され，様々な歴史的事実が積み重ねられたわけであるが，今次の調査は既調査地点に比べ調査範囲が広範であり，さらに多くの知見を提供したといえる。同時にいくつかの問題も指摘されたのであり，今後遺跡群全体の検討が進むなかで解決されるべきといえる。

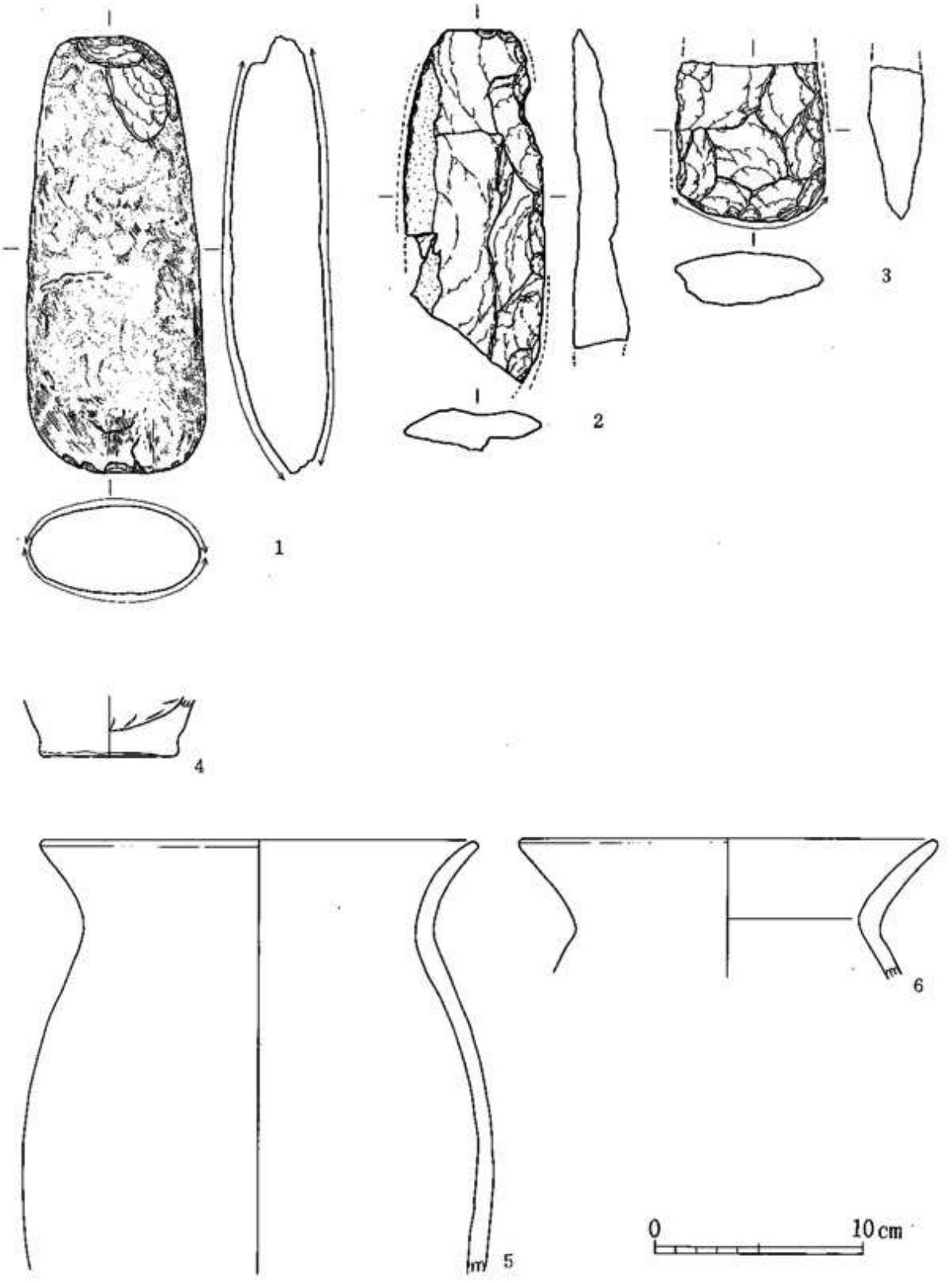
＜参考文献＞

1955	市村咸人編	『下伊那誌　第二巻』
1978～90	飯田市教育委員会	『恒川遺跡群　範囲確認調査概報』
1986	〃	『恒川遺跡群』
1988	〃	『恒川遺跡　田中・倉垣外地籍』
1990	〃	『恒川遺跡　平成元年度緊急調査概報』

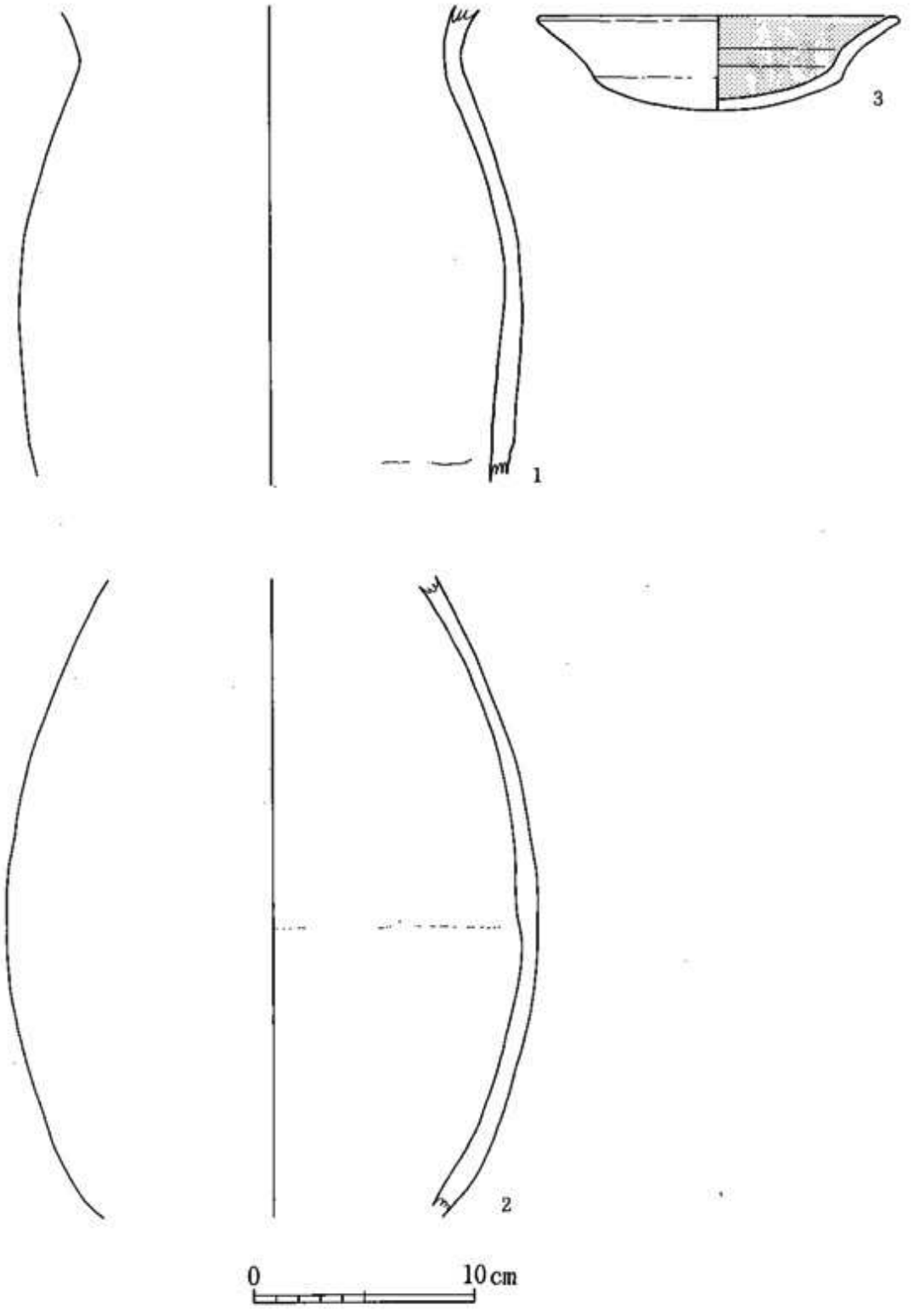
図　　版



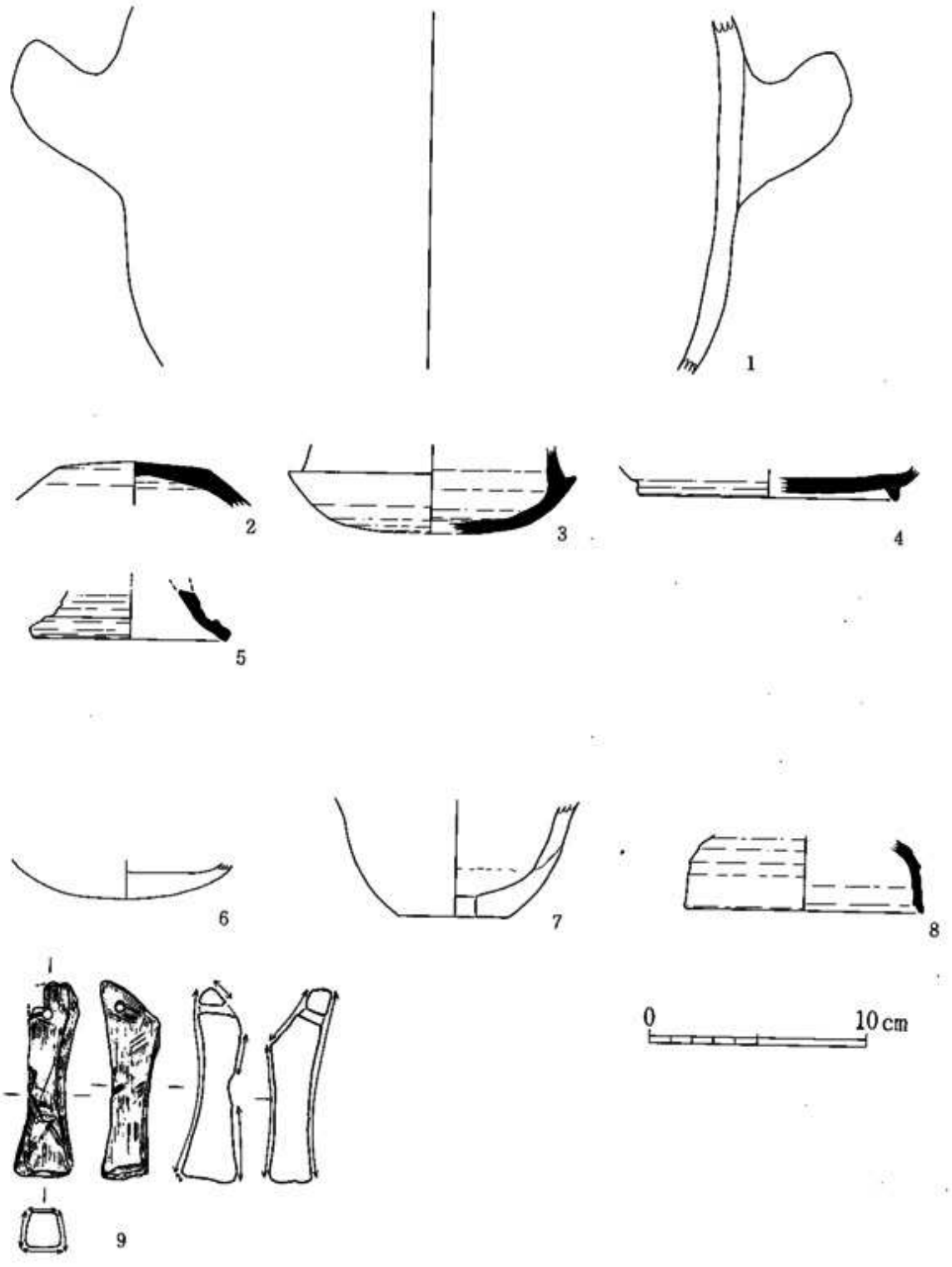
第1図　92・136号住居址出土土器・石器（1～10　92住，11～14　136住）



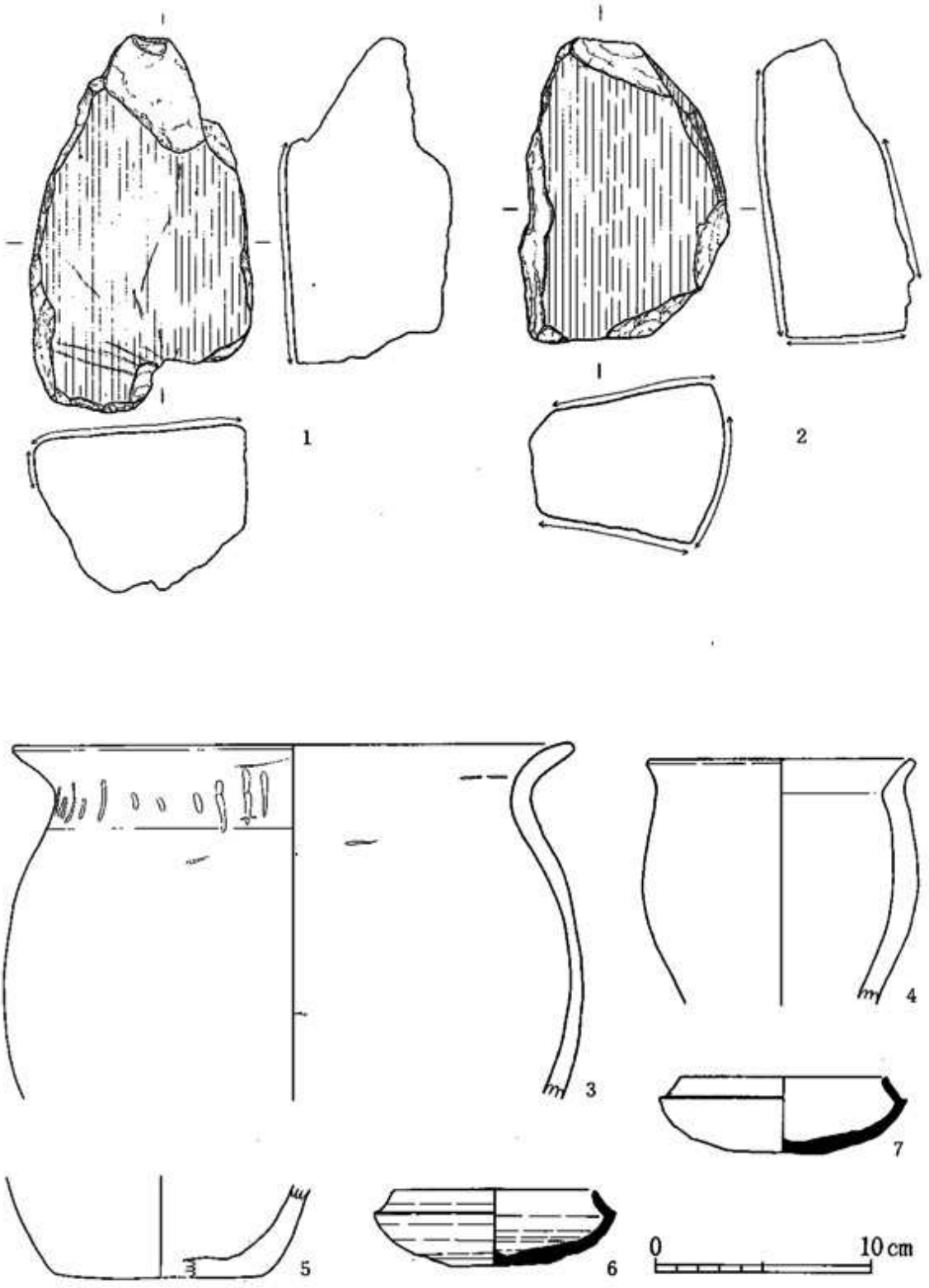
第2図　136・89・90号住居址出土土器・石器（1～3 136住，4 89住，5・6 90住）



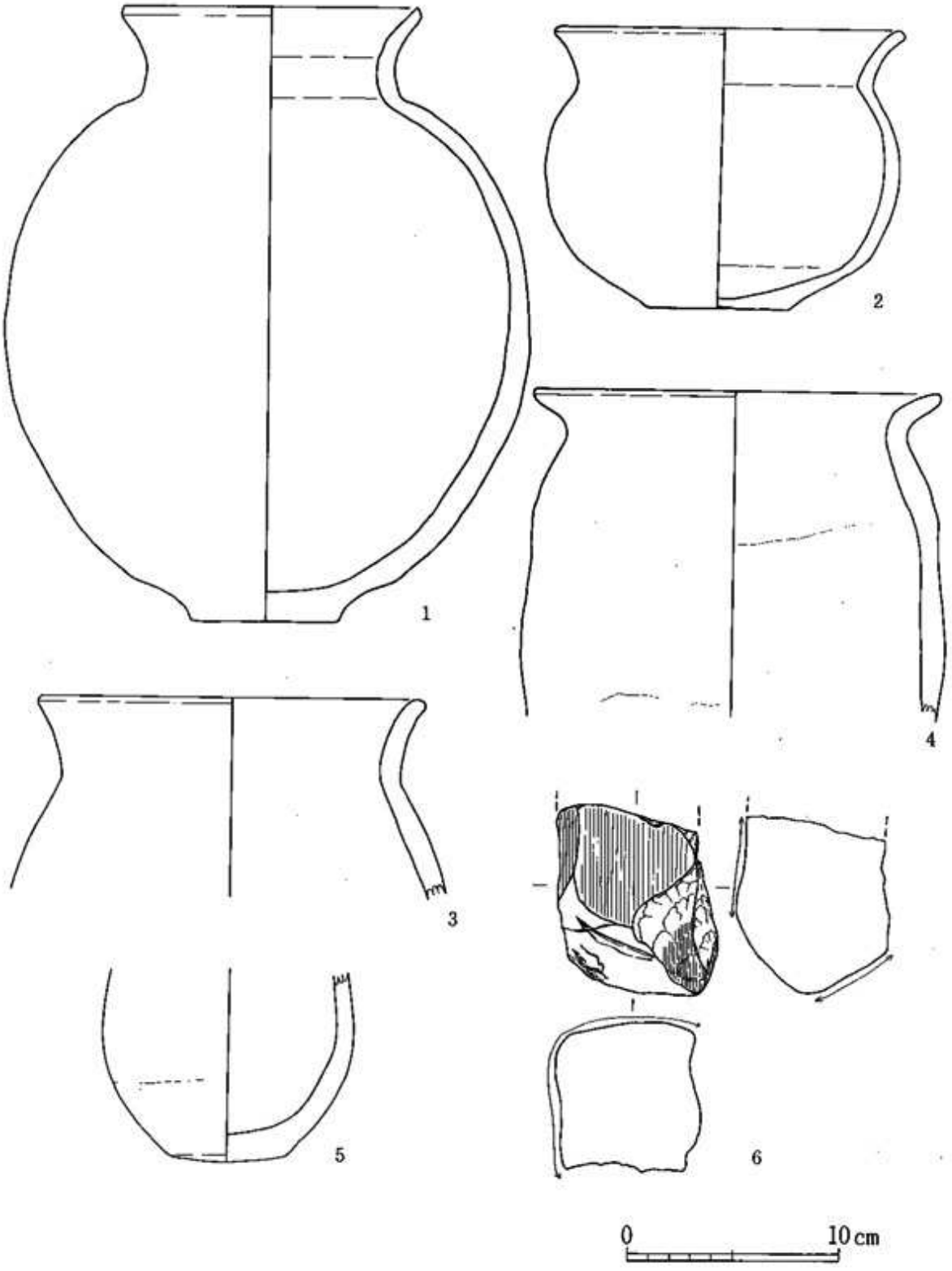
第3図　90号住居址出土土器



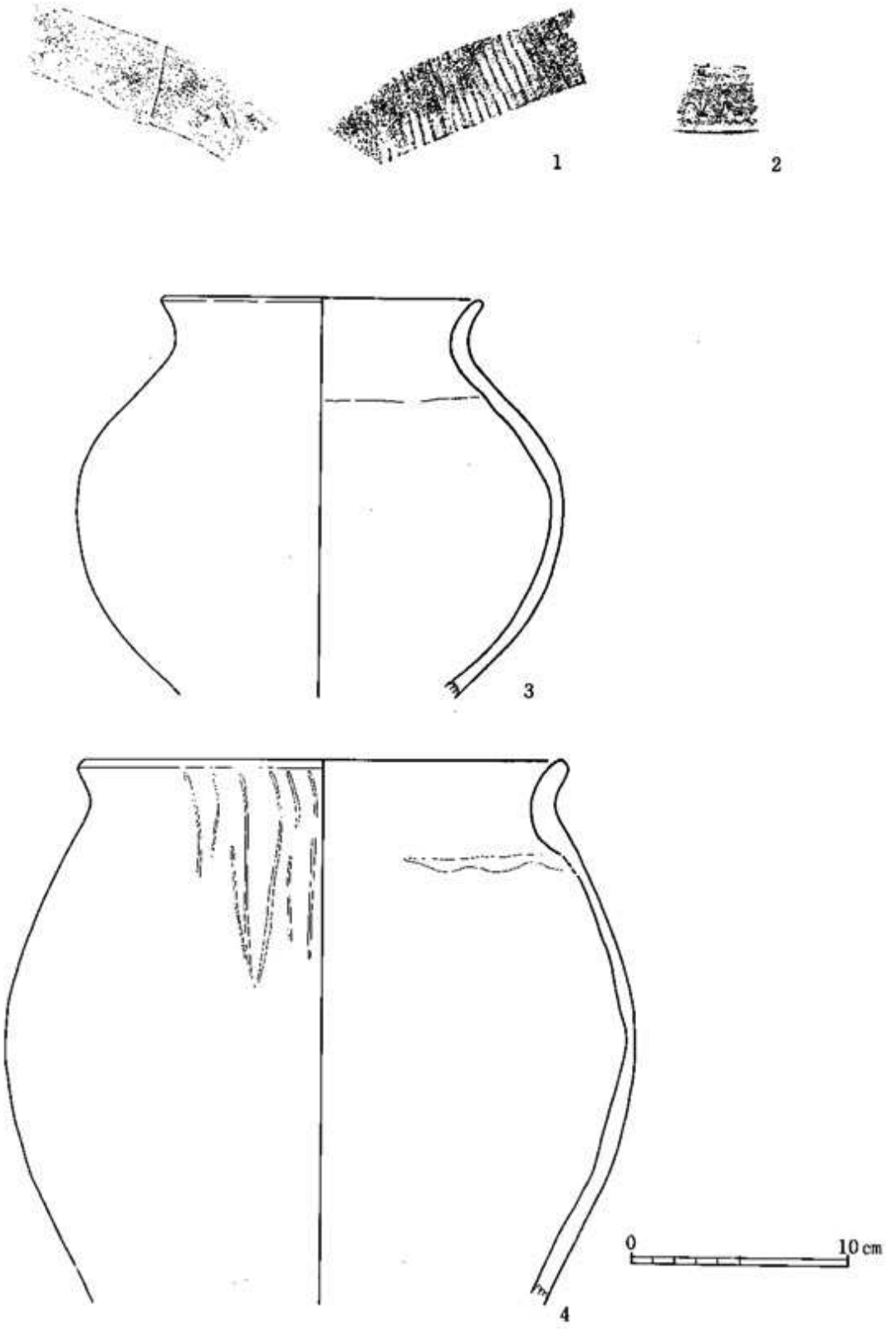
第4図　90・91号住居址出土土器・石器（1～5 90住，6～9 91住）



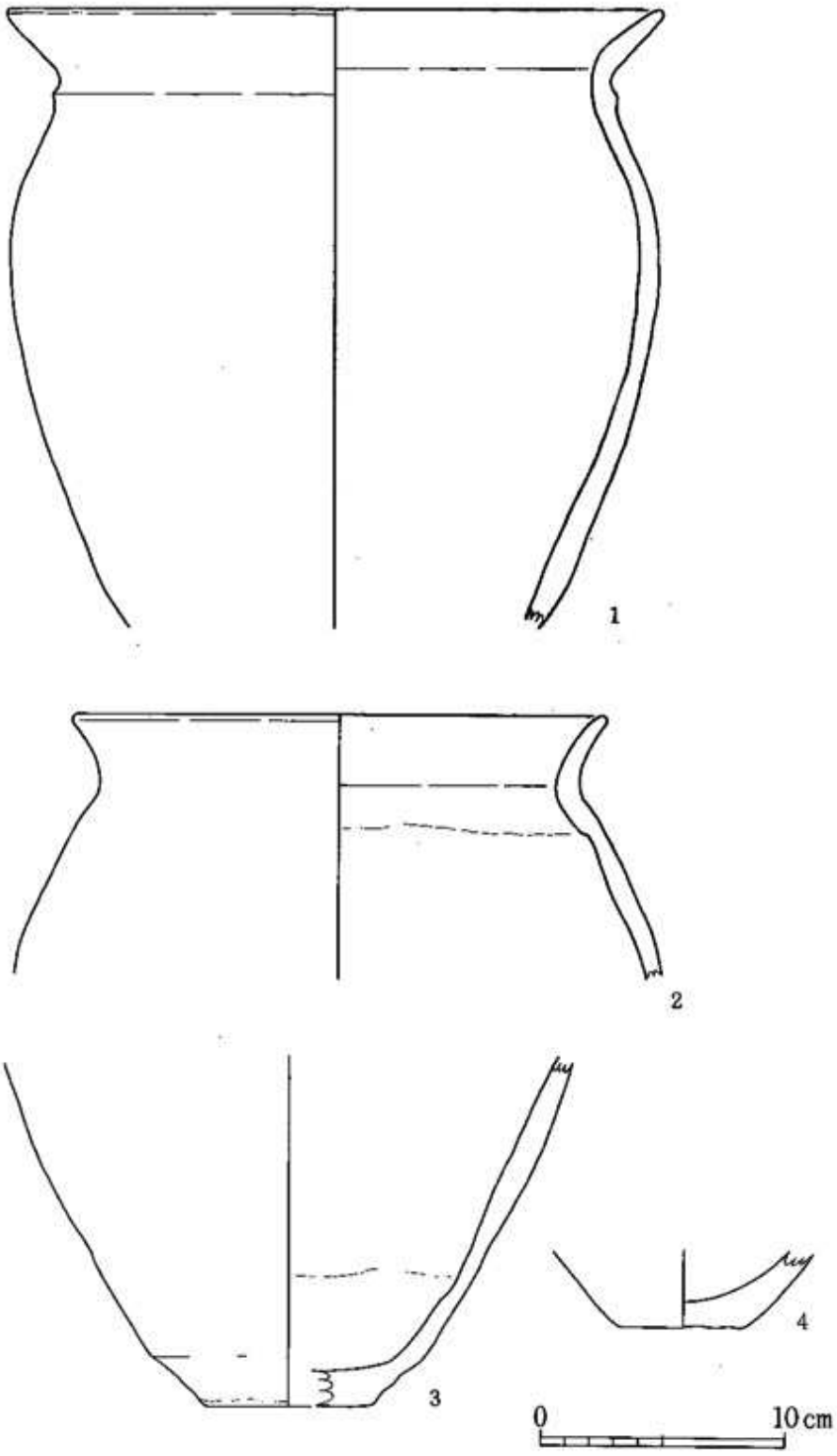
第5図　91・95号住居址出土土器・石器（1・2 91住，3～7 95住）



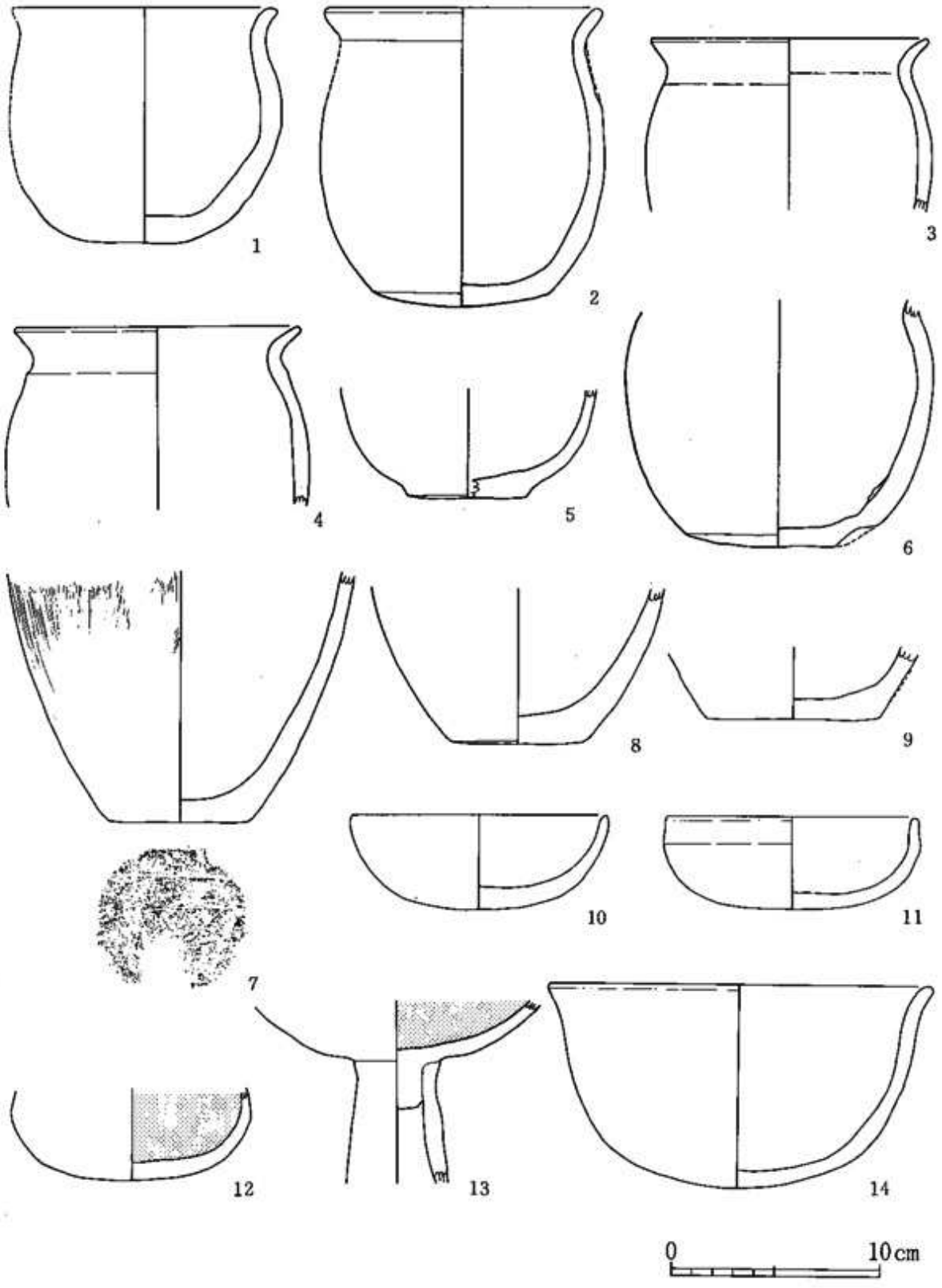
第6図　98号住居址出土土器・石器



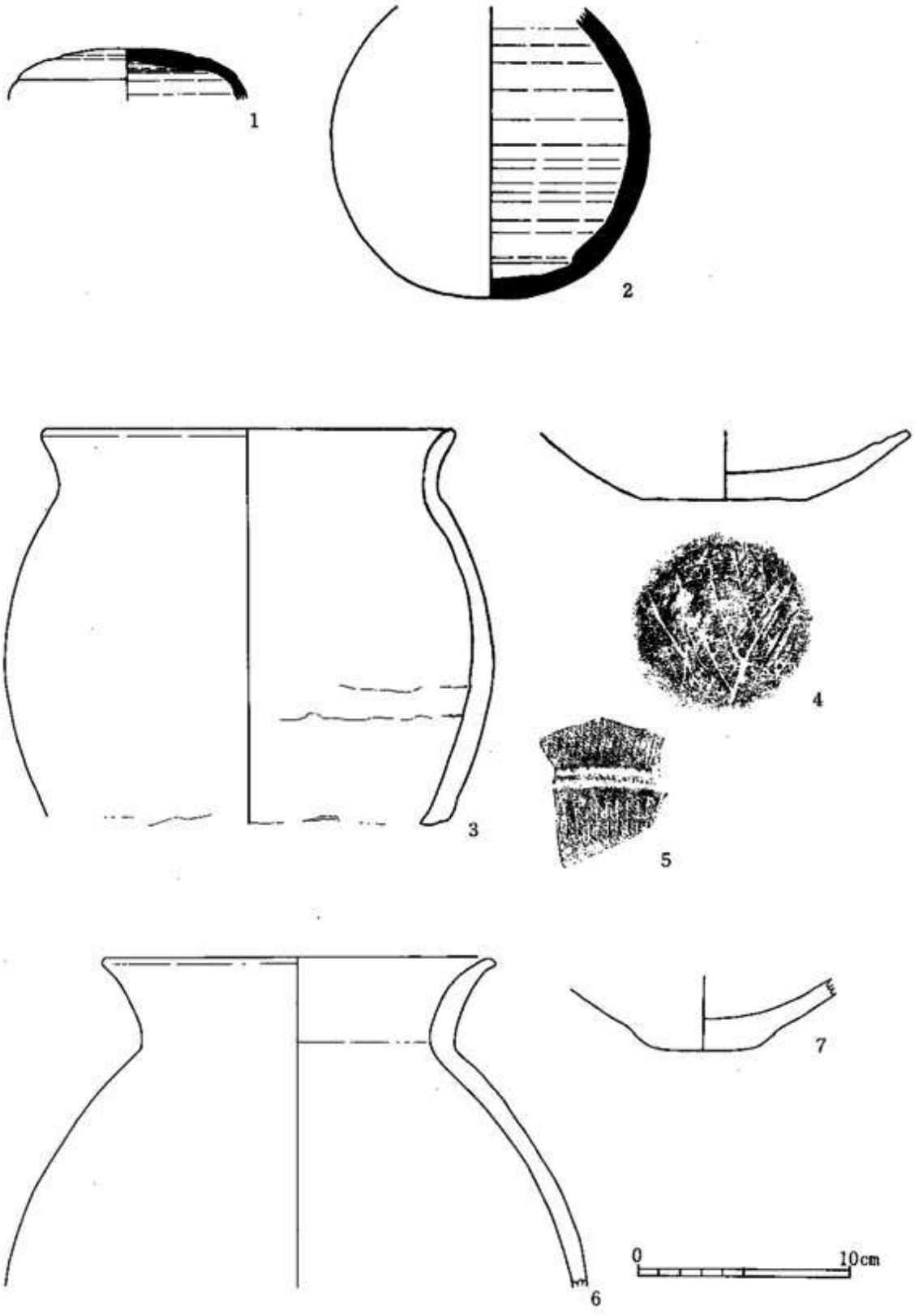
第7図　101・103号住居址出土土器



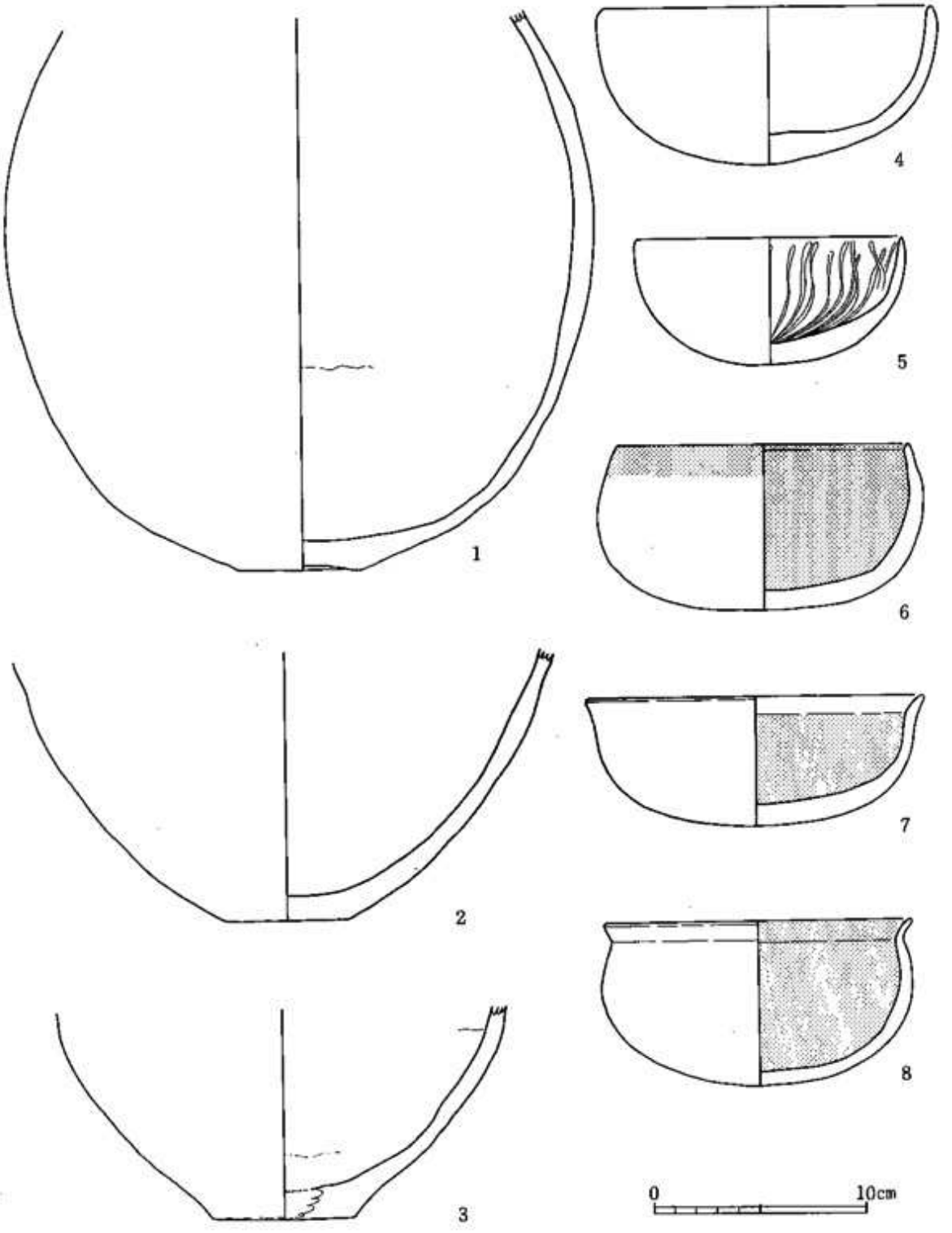
第8図　103号住居址出土土器



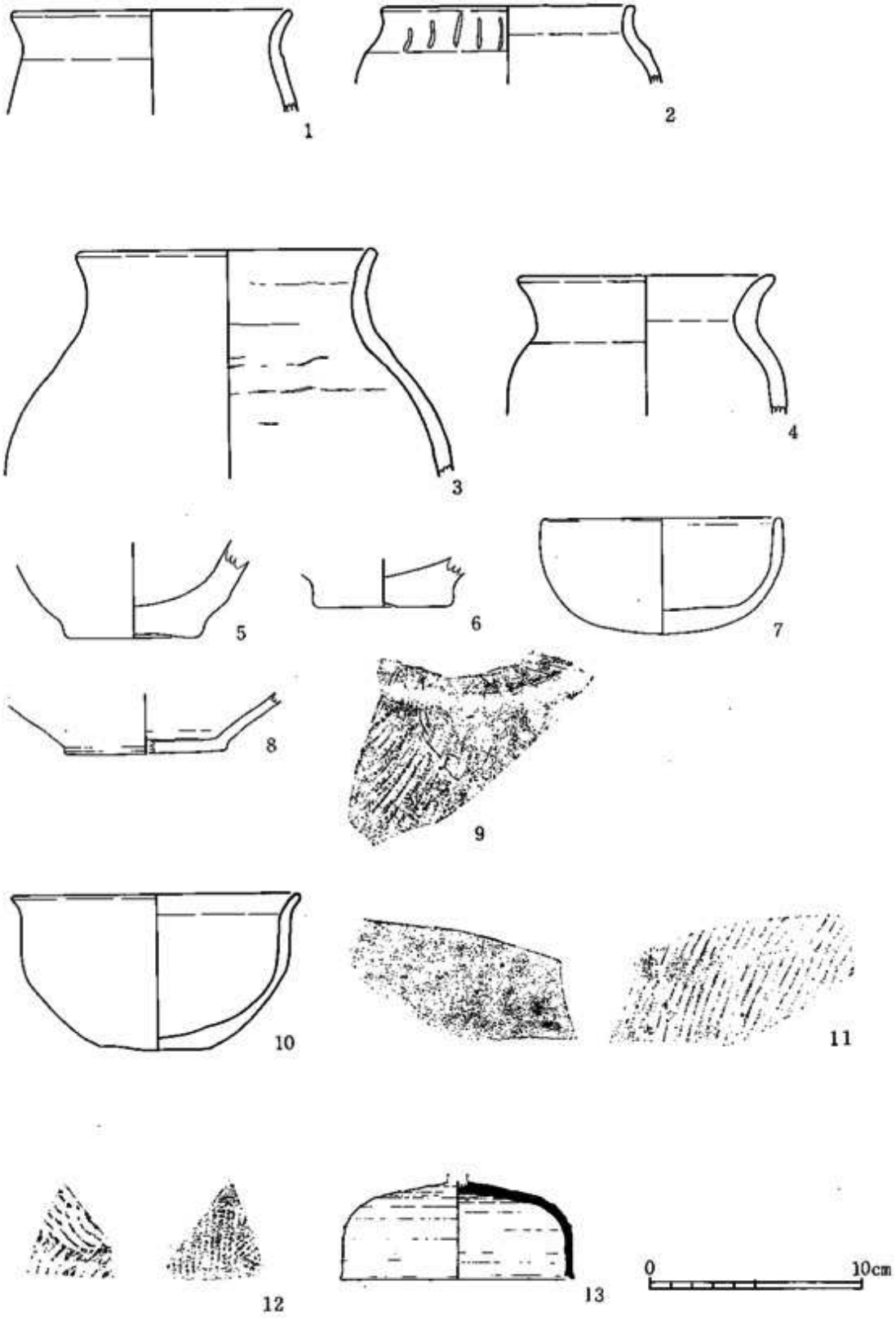
第9図　104号住居址出土土器



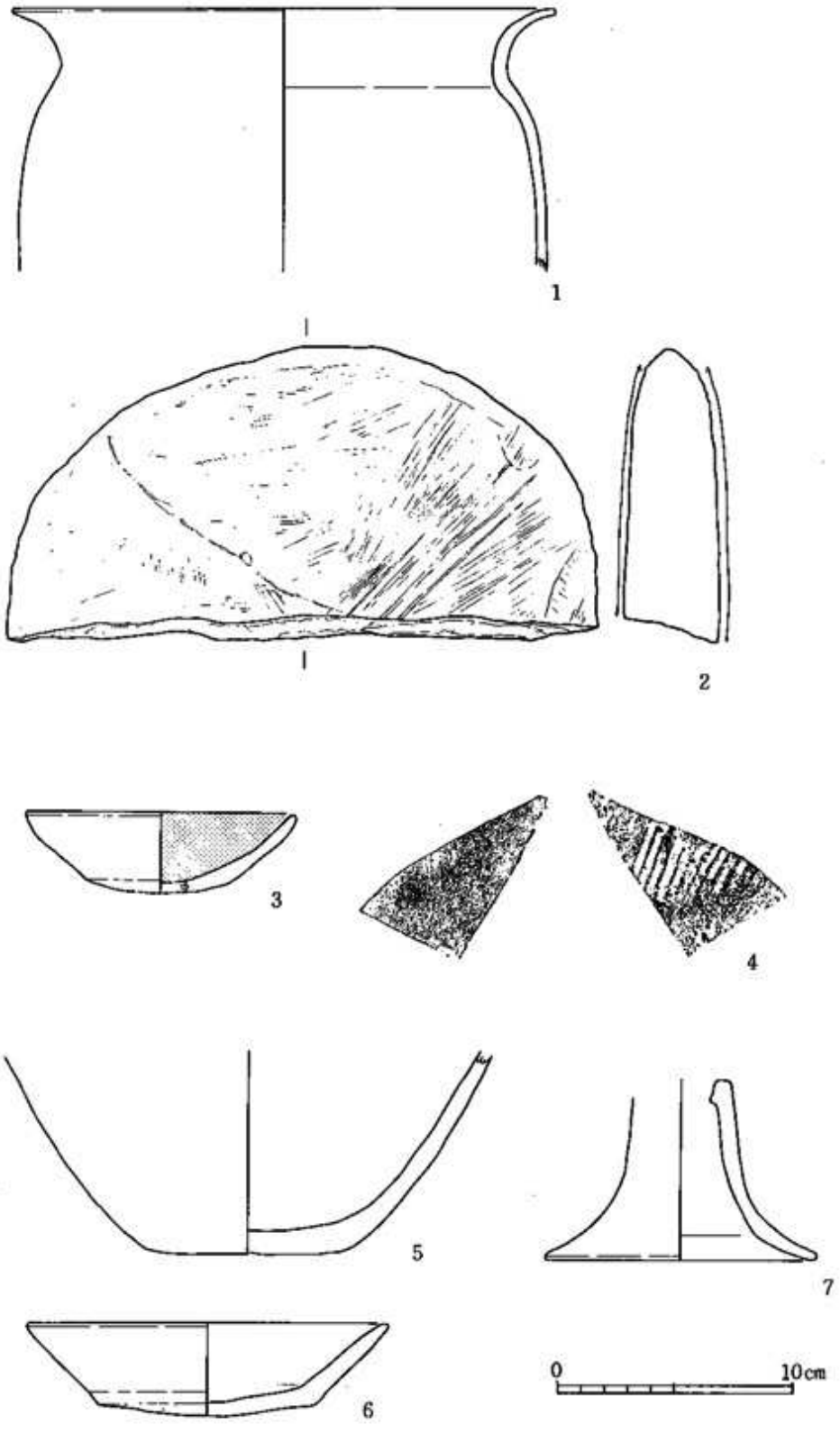
第10図　104～106号住居址出土土器（1・2 104住，3～5 105住，6・7 106住）



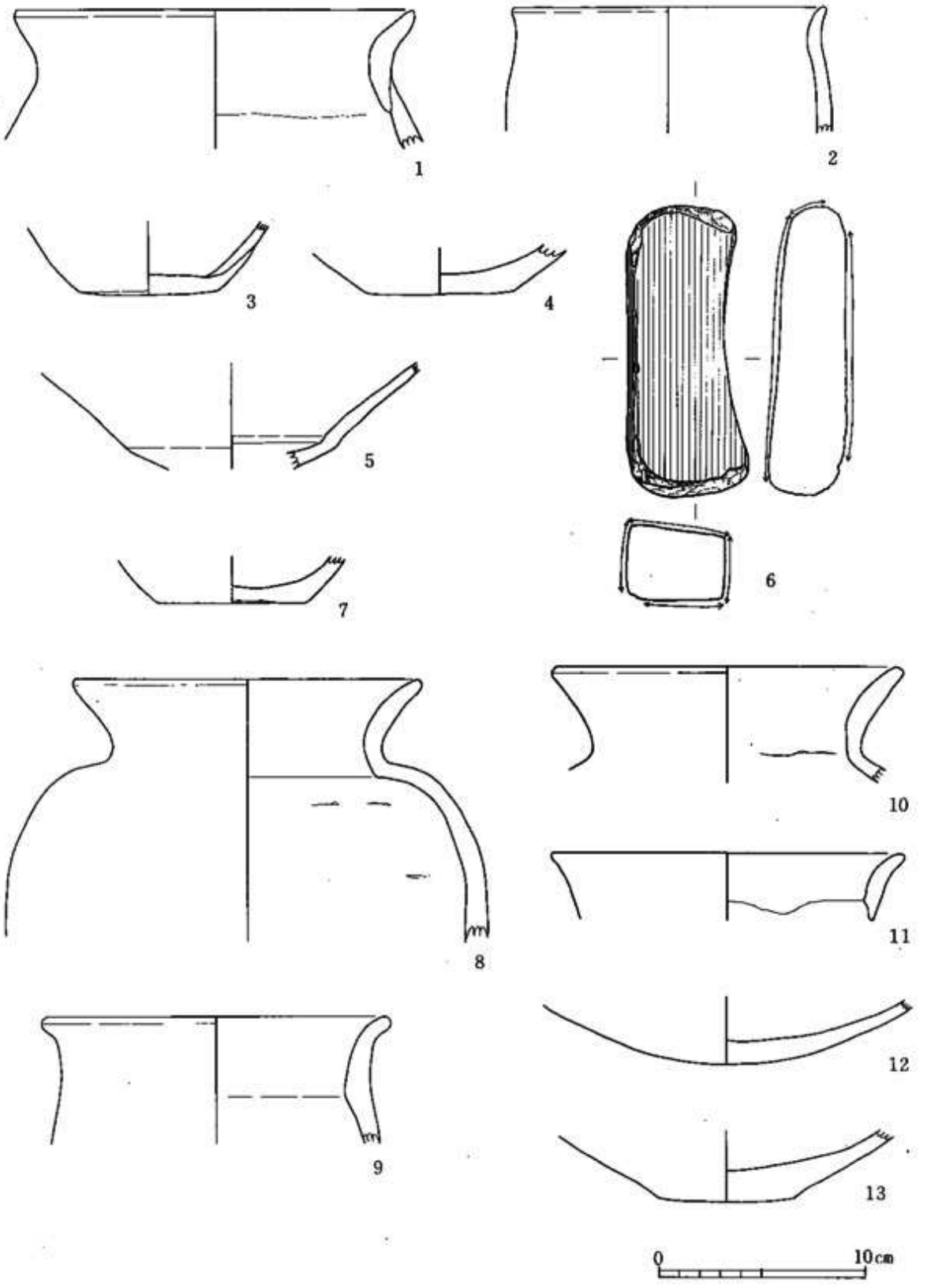
第11図　106号住居址出土土器



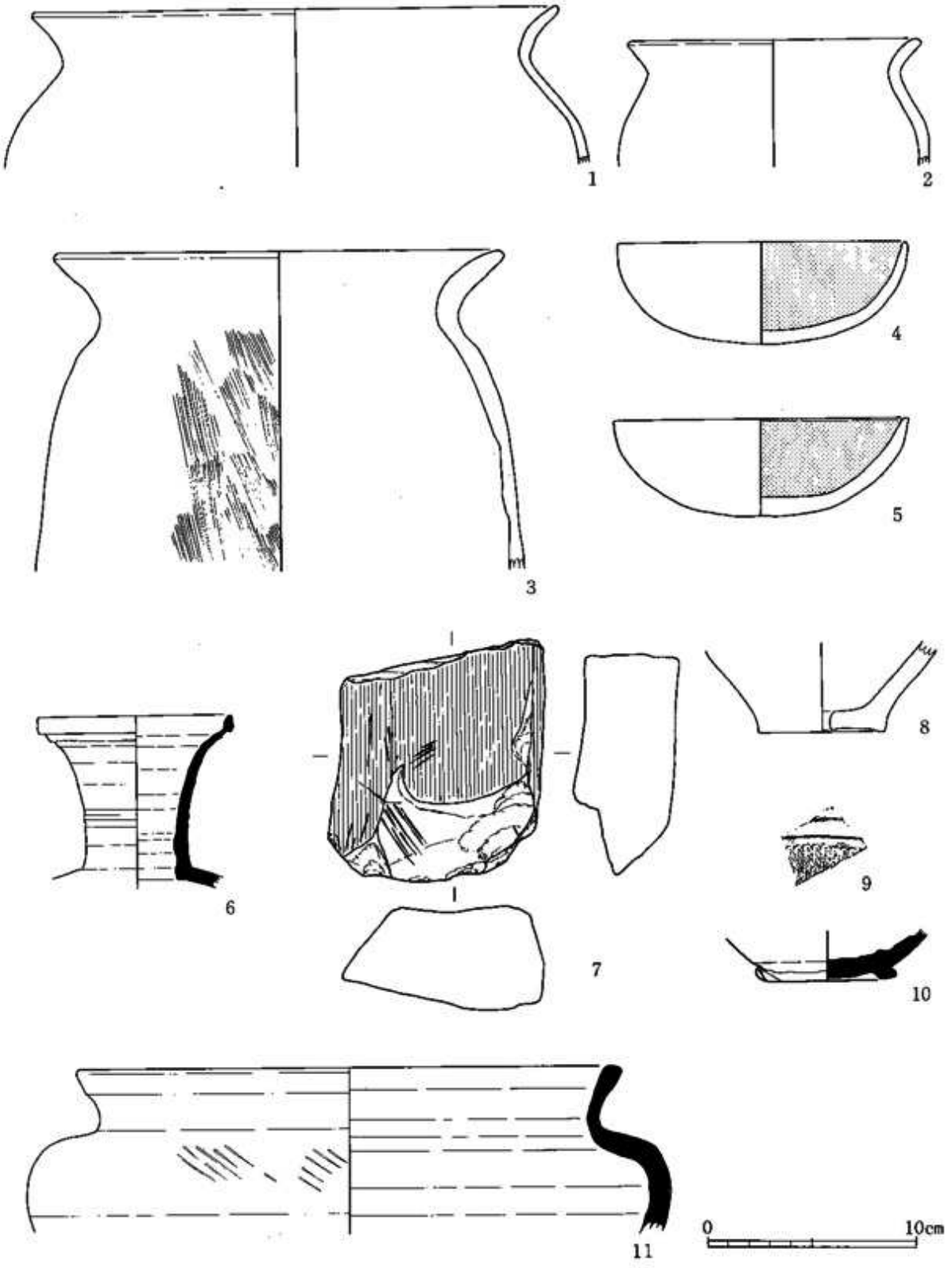
第12図　107～110号住居址出土土器（1・2 107住，3～9 108住，10・11 109住，12・13 110住）



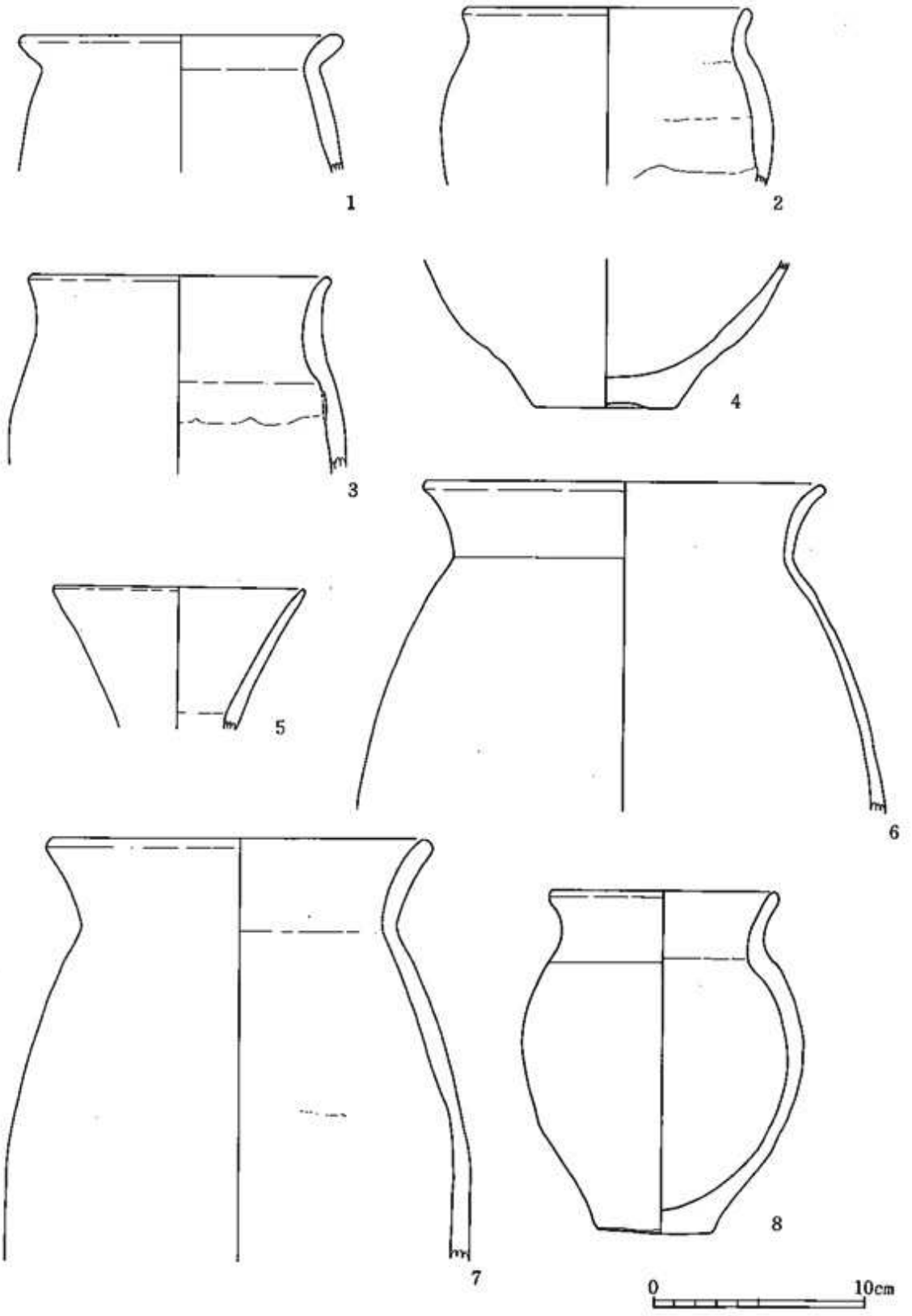
第13図　111・112・114号住居址出土土器（1・2 111住，3・4 112住，5～7 114住）



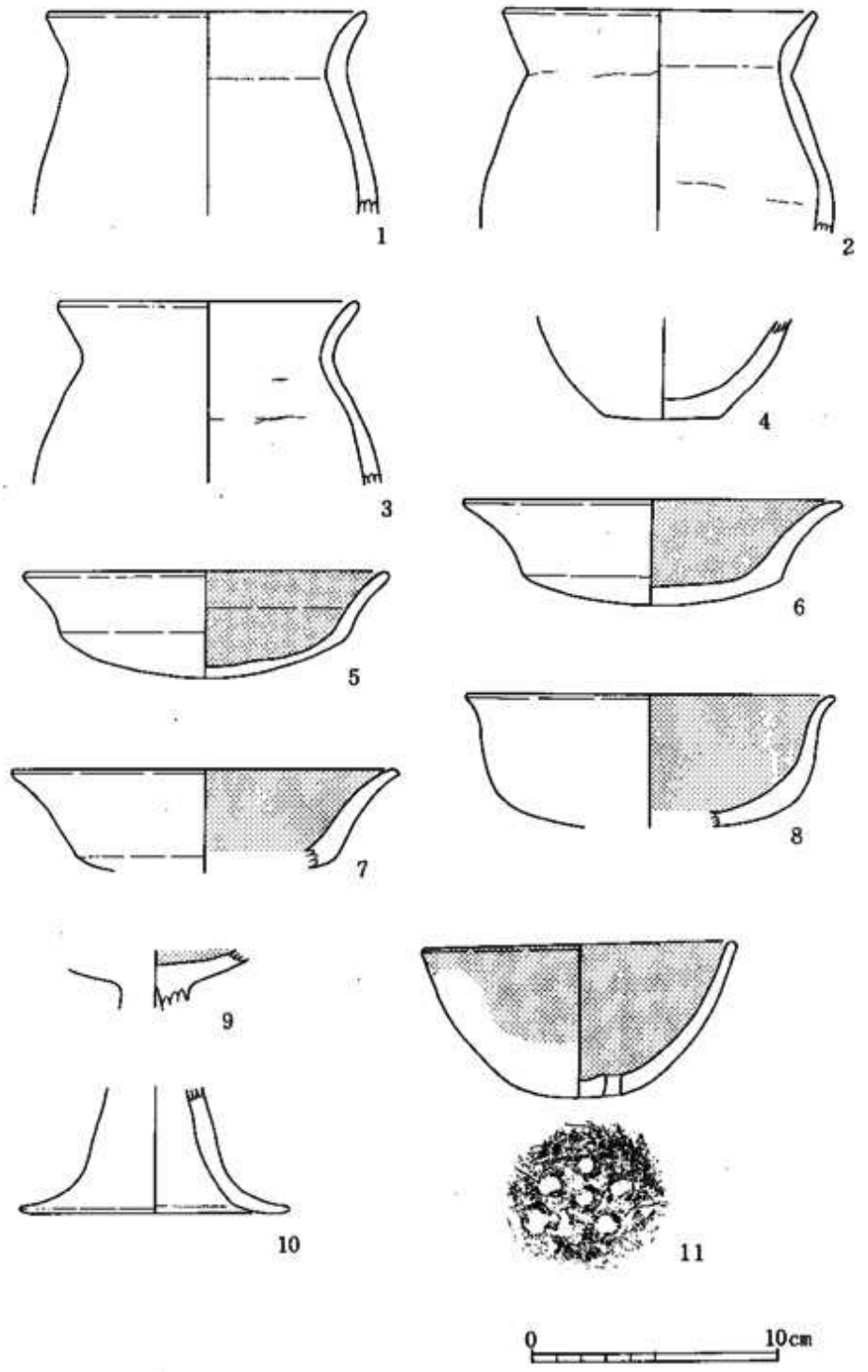
第14図　116～118号住居址出土土器・石器（1～6 116住，7 117住，8～13 118住）



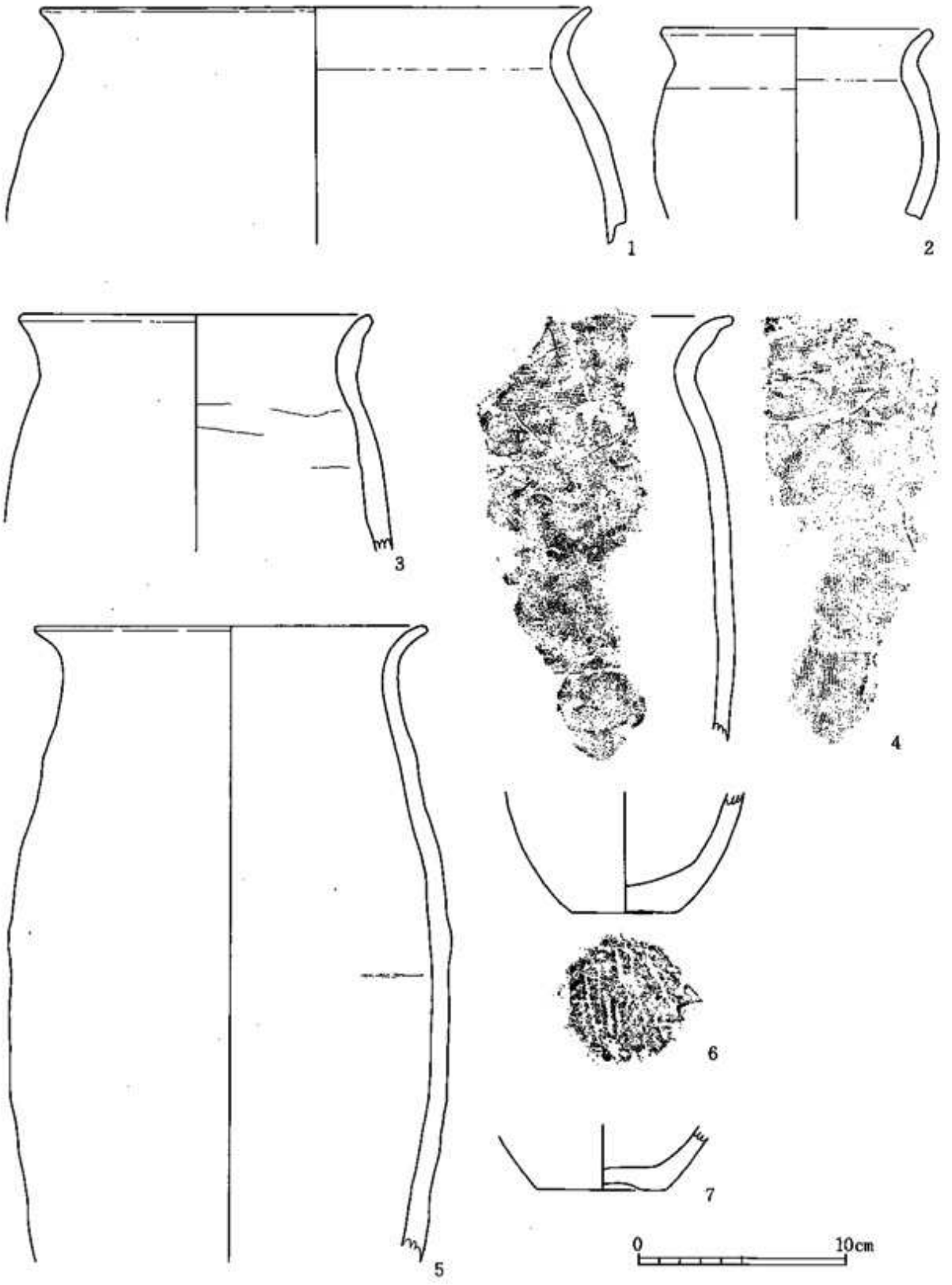
第15図　119・120号住居址出土土器・石器（1～7 119住，8～11 120住）



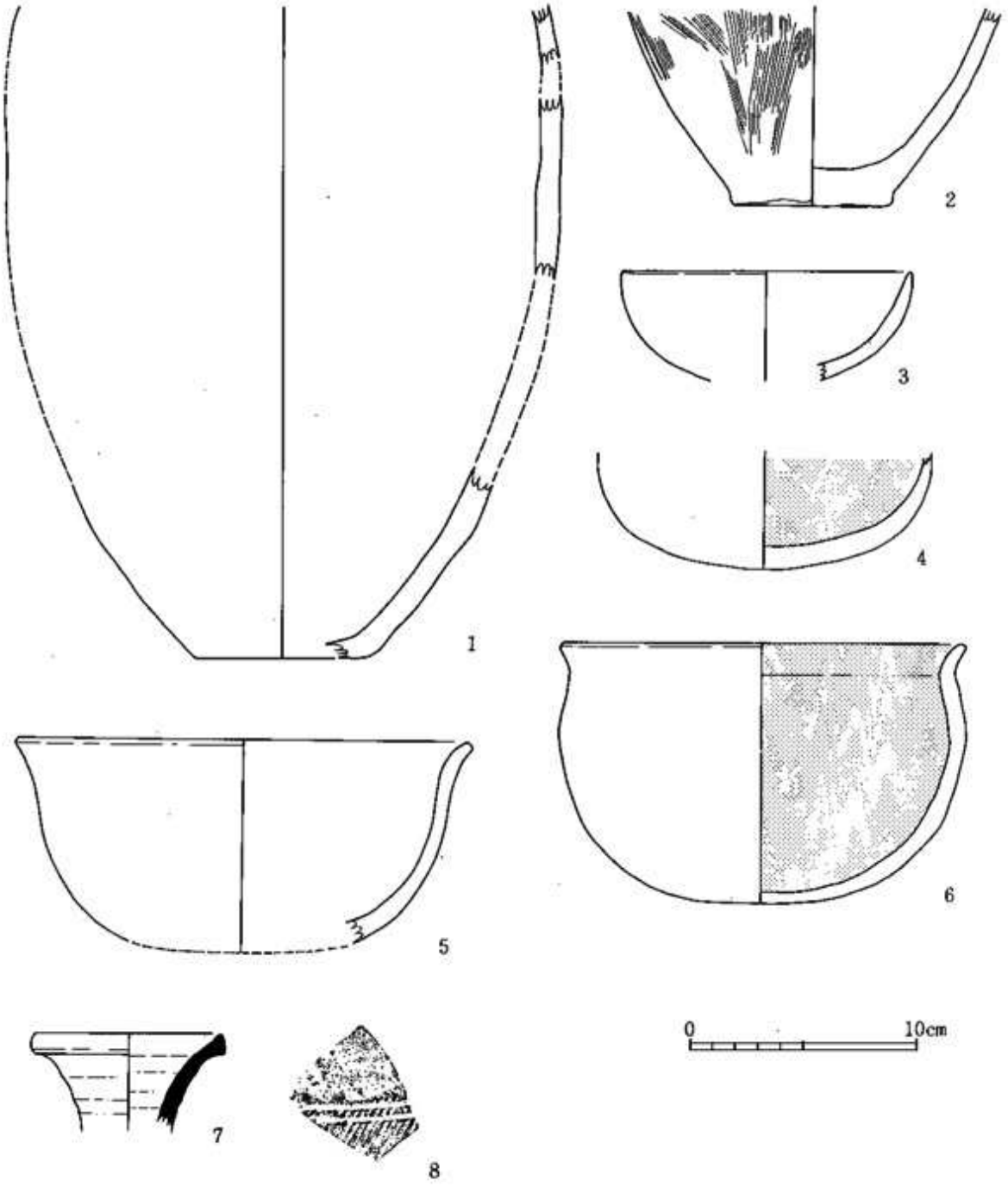
第16図　122・125号住居址出土土器（1～4　122住，5～8　125住）



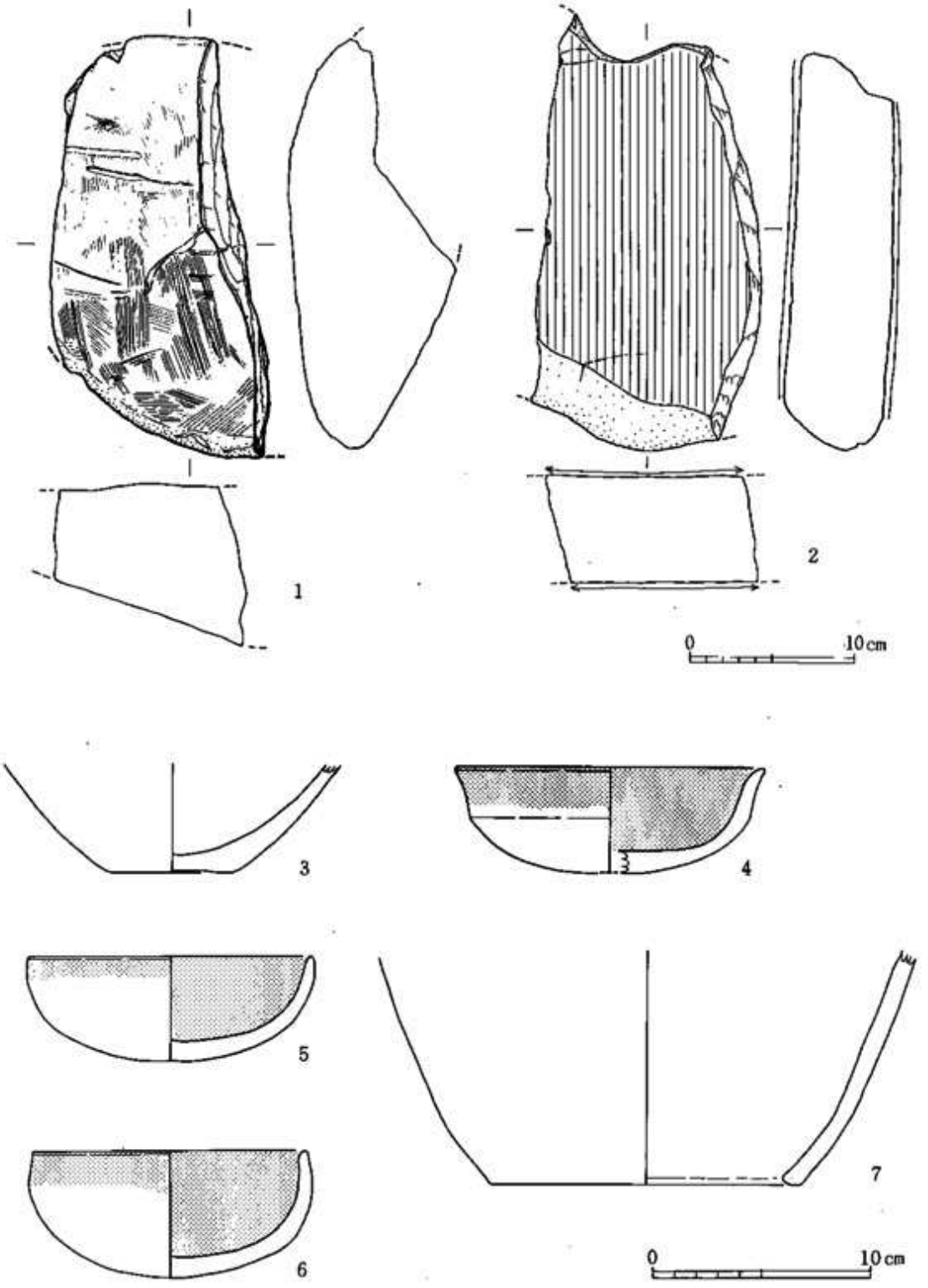
第17図　125号住居址出土土器



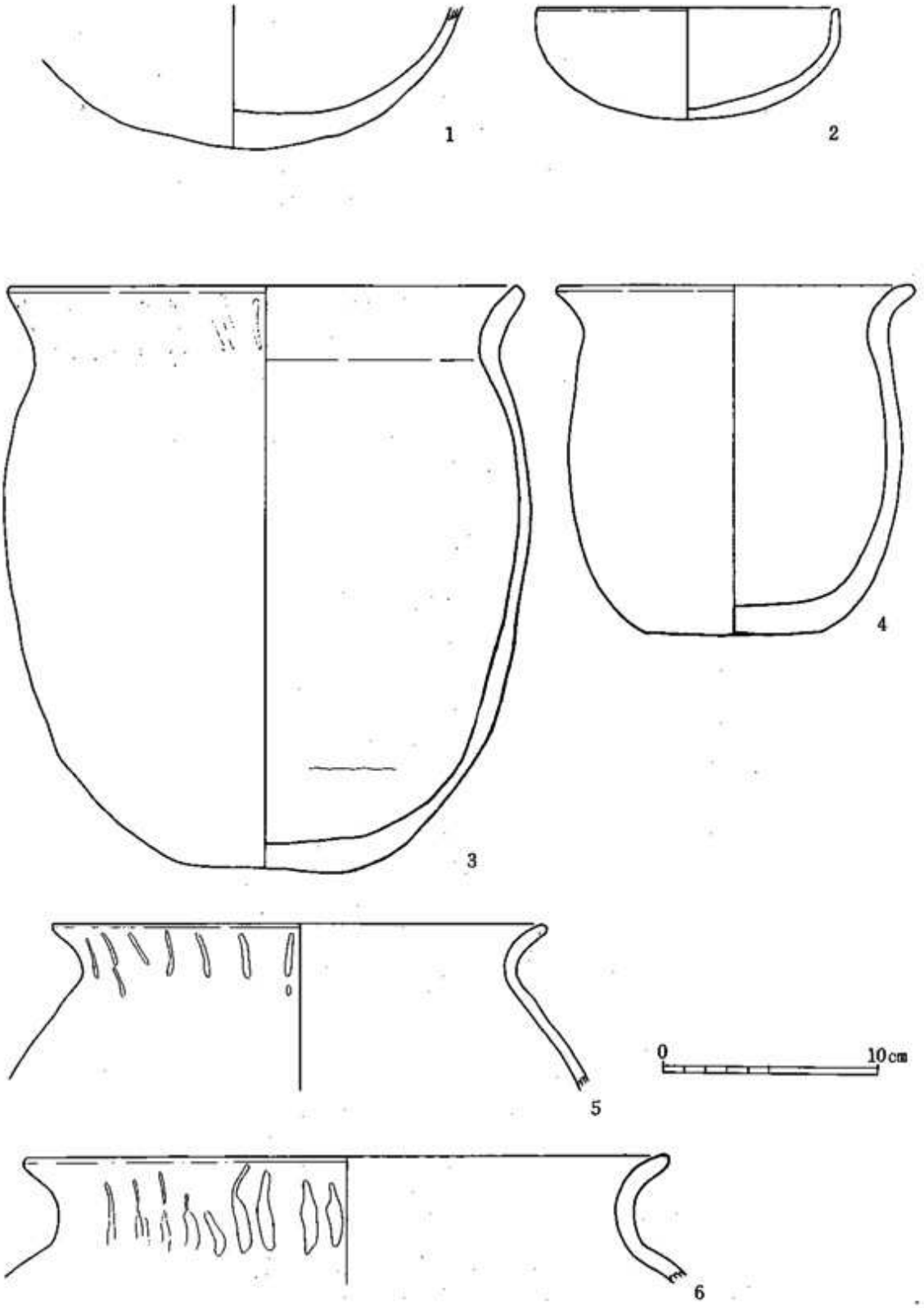
第18図　127号住居址出土土器



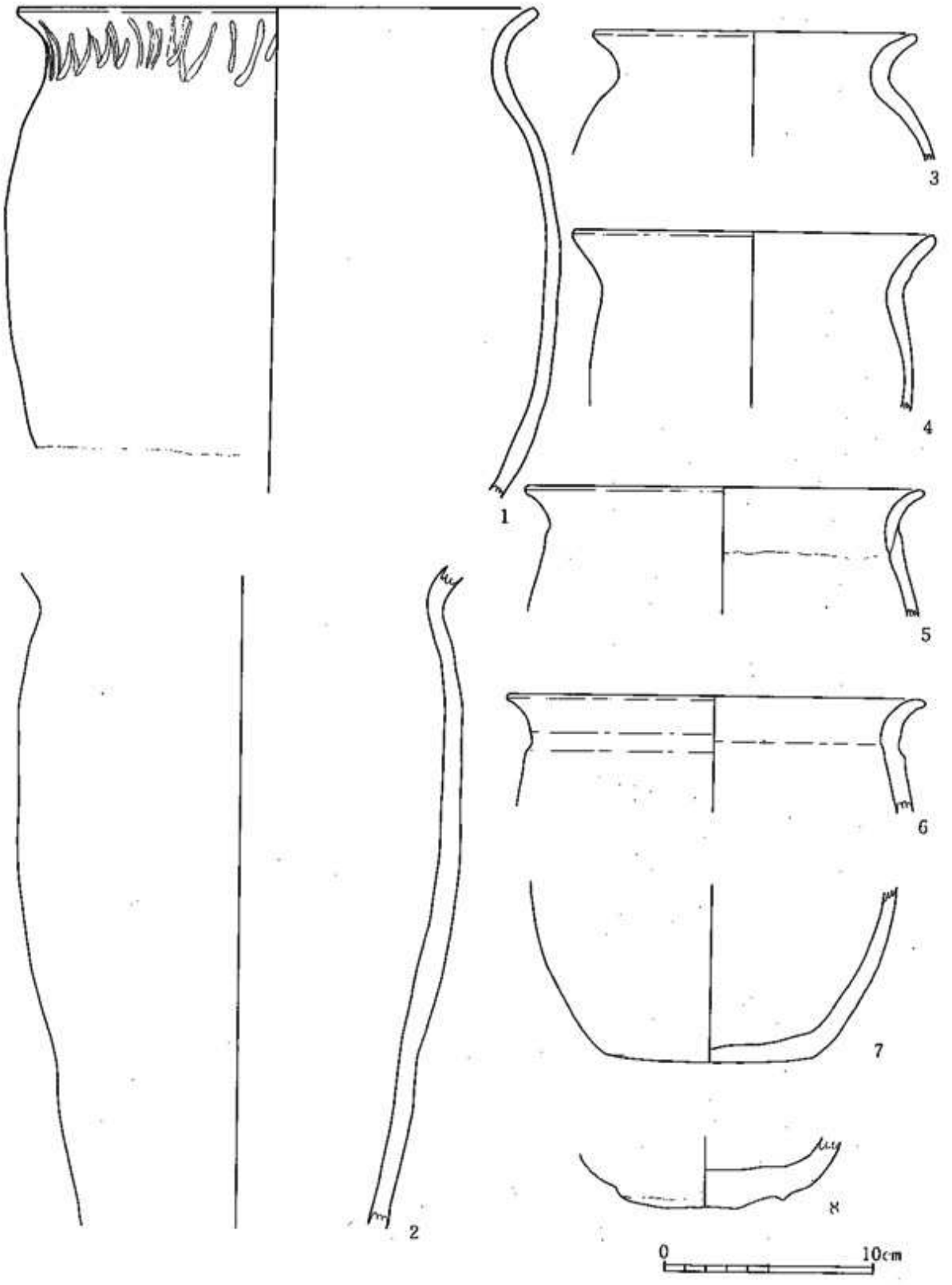
第19図　127号住居址出土土器



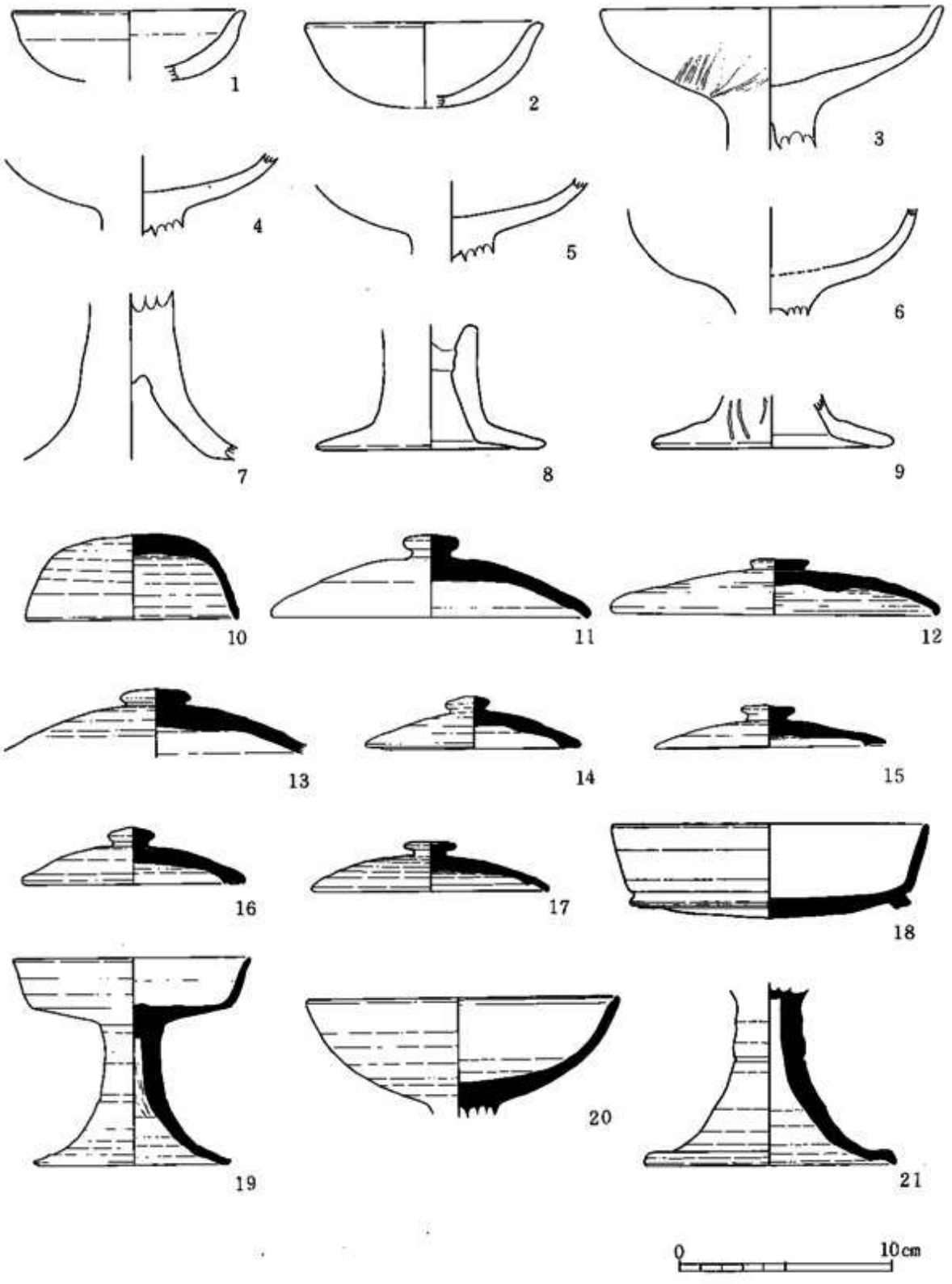
第20図　127・128号住居址出土土器・石器（1・2 127住，3～7 128住）



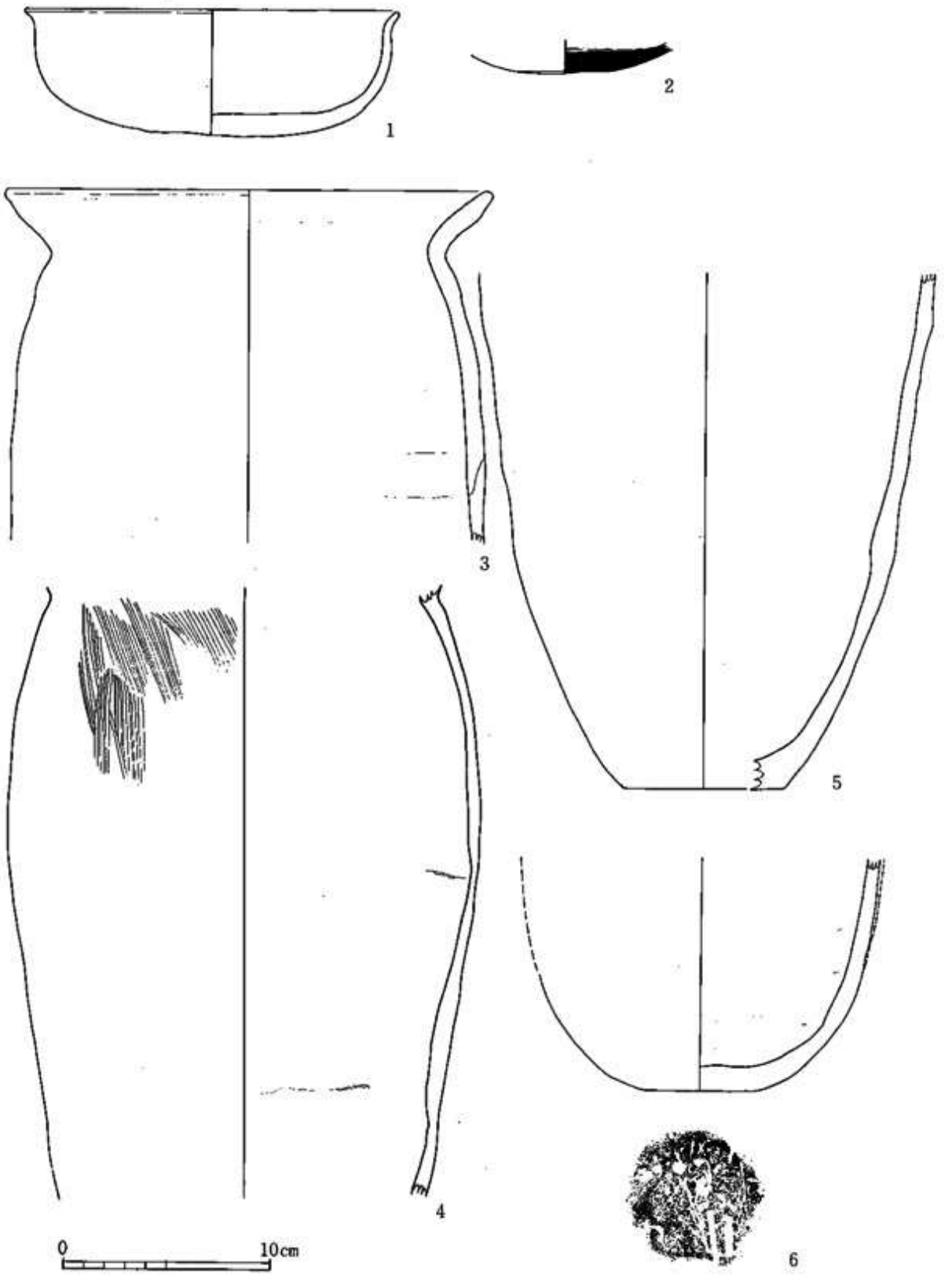
第21図　129・130号住居址出土土器（1・2 129住、3～6 130住）



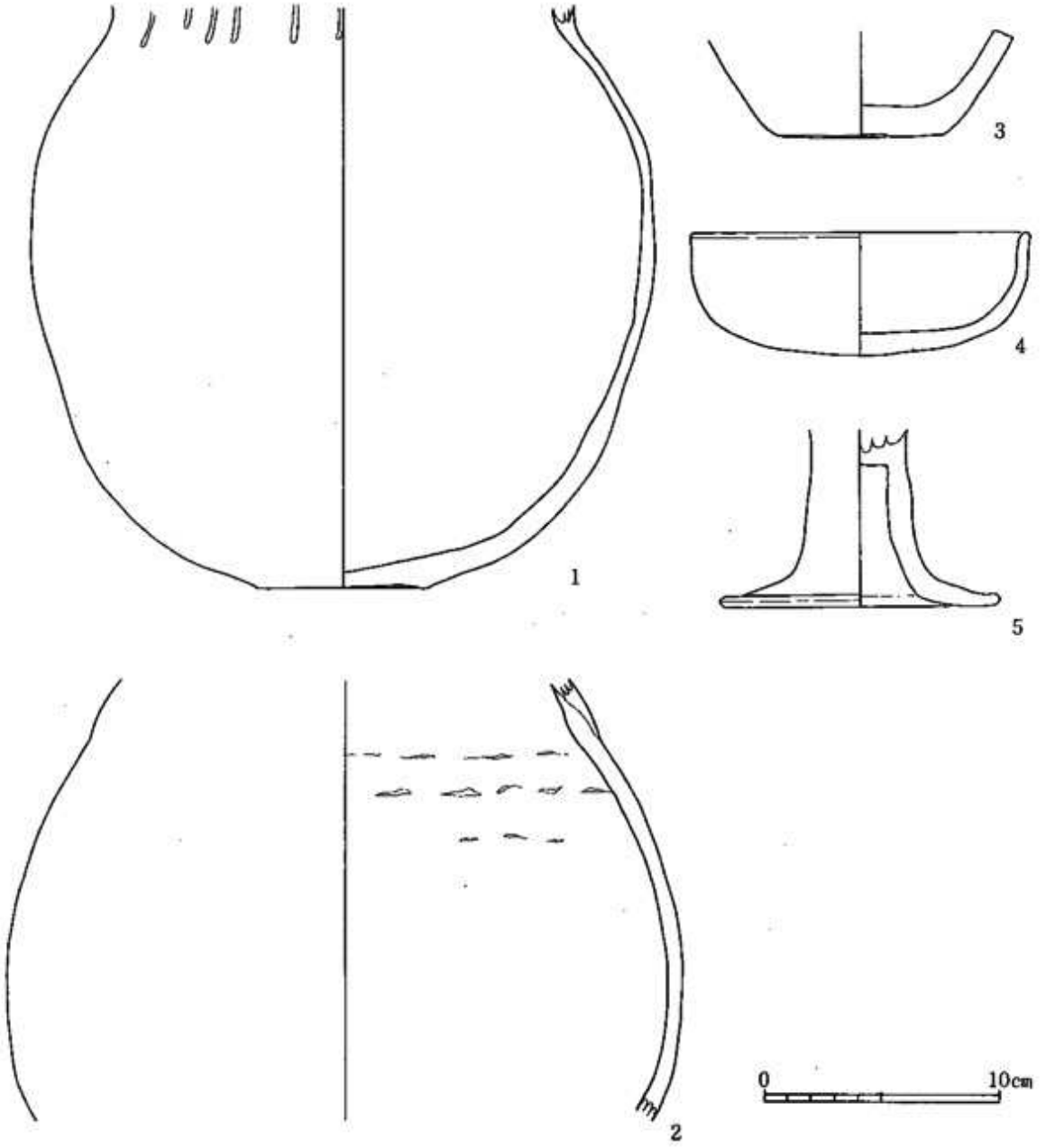
第22図　130号住居址出土土器



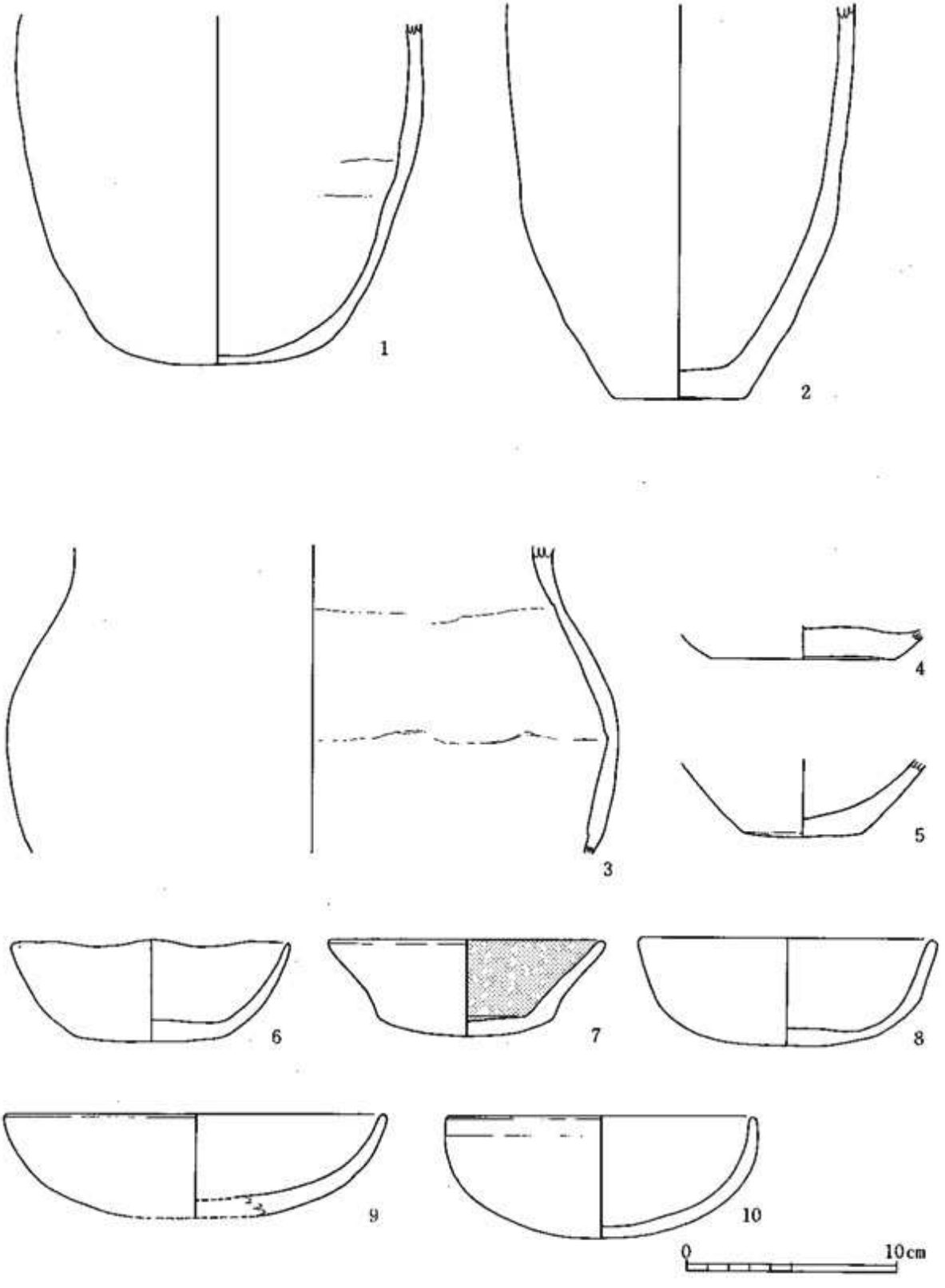
第23図　130号住居址出土土器



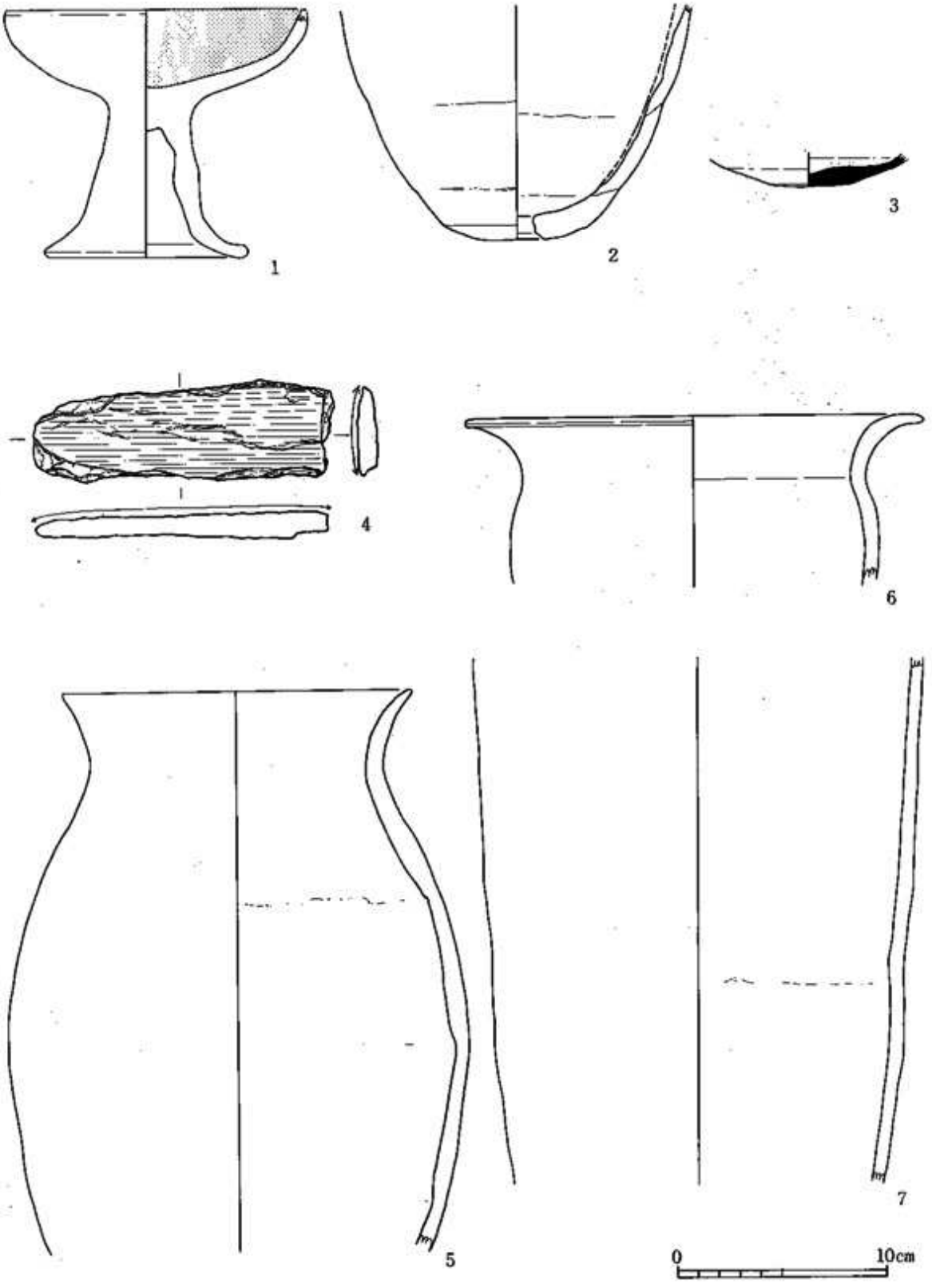
第24図　131・132号住居址出土土器（1・2 131住，3～6 132住）



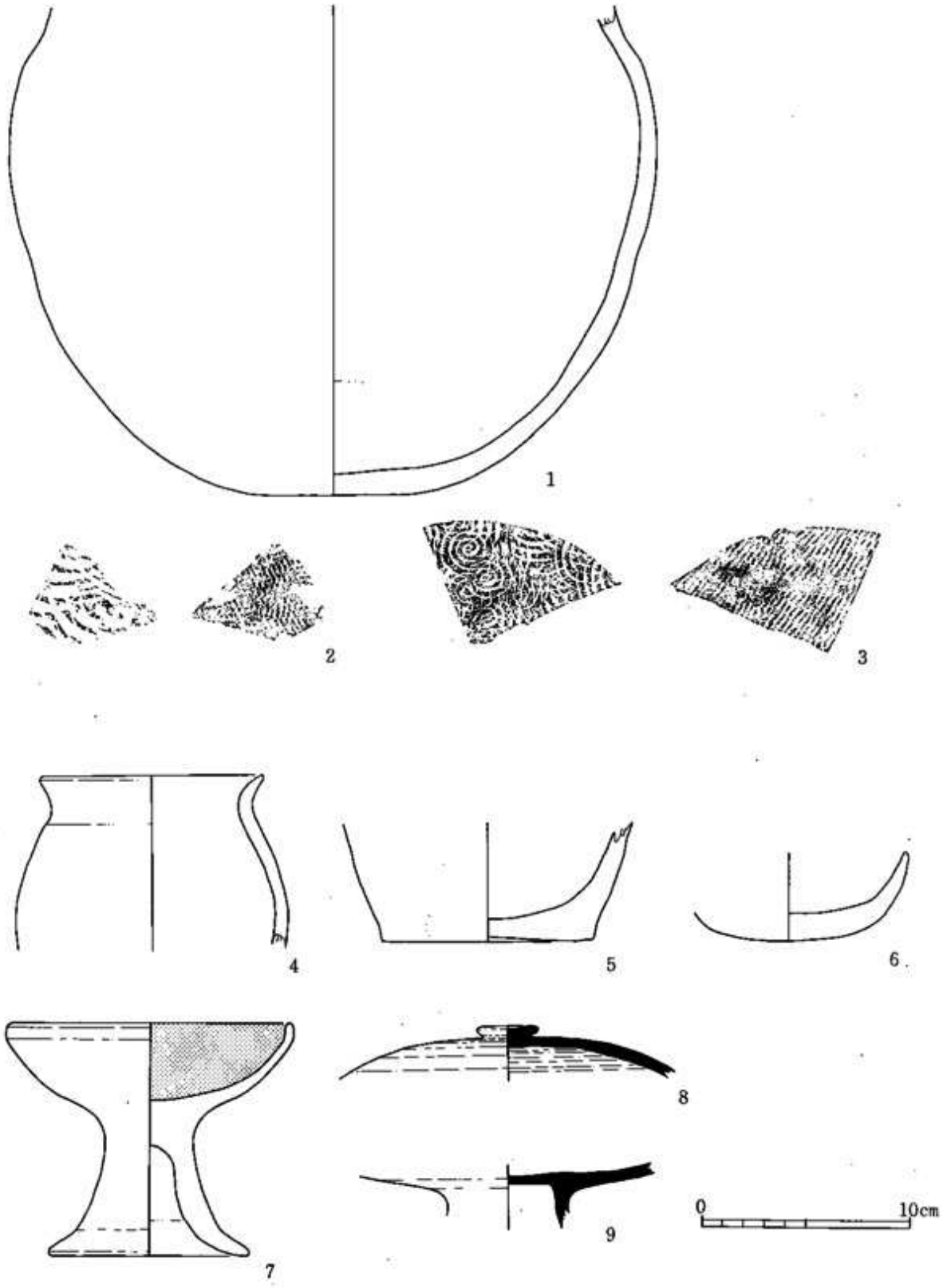
第25図　132号住居址出土土器



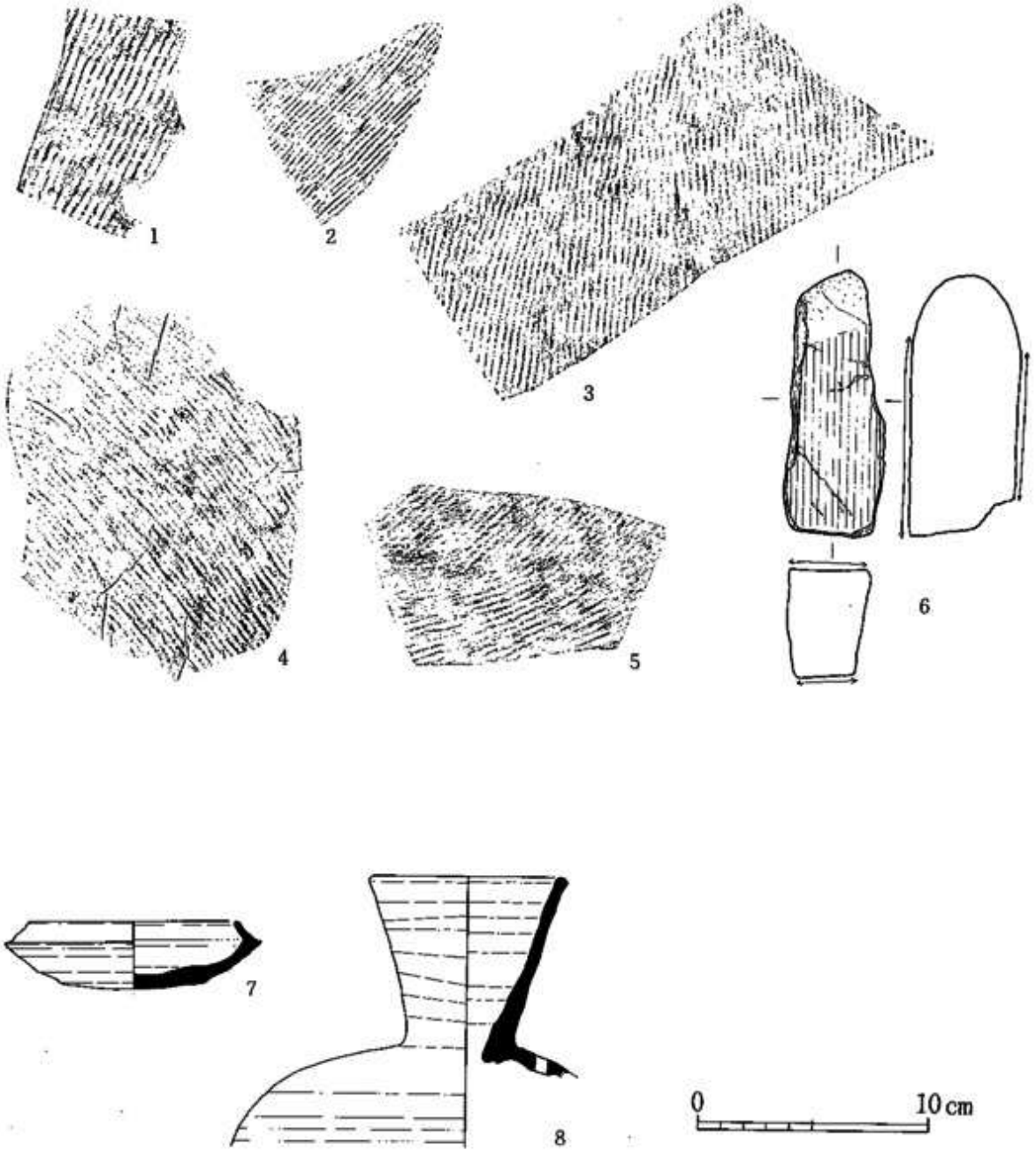
第26図　133・134号住居址出土土器（1・2 133住，3～10 134住）



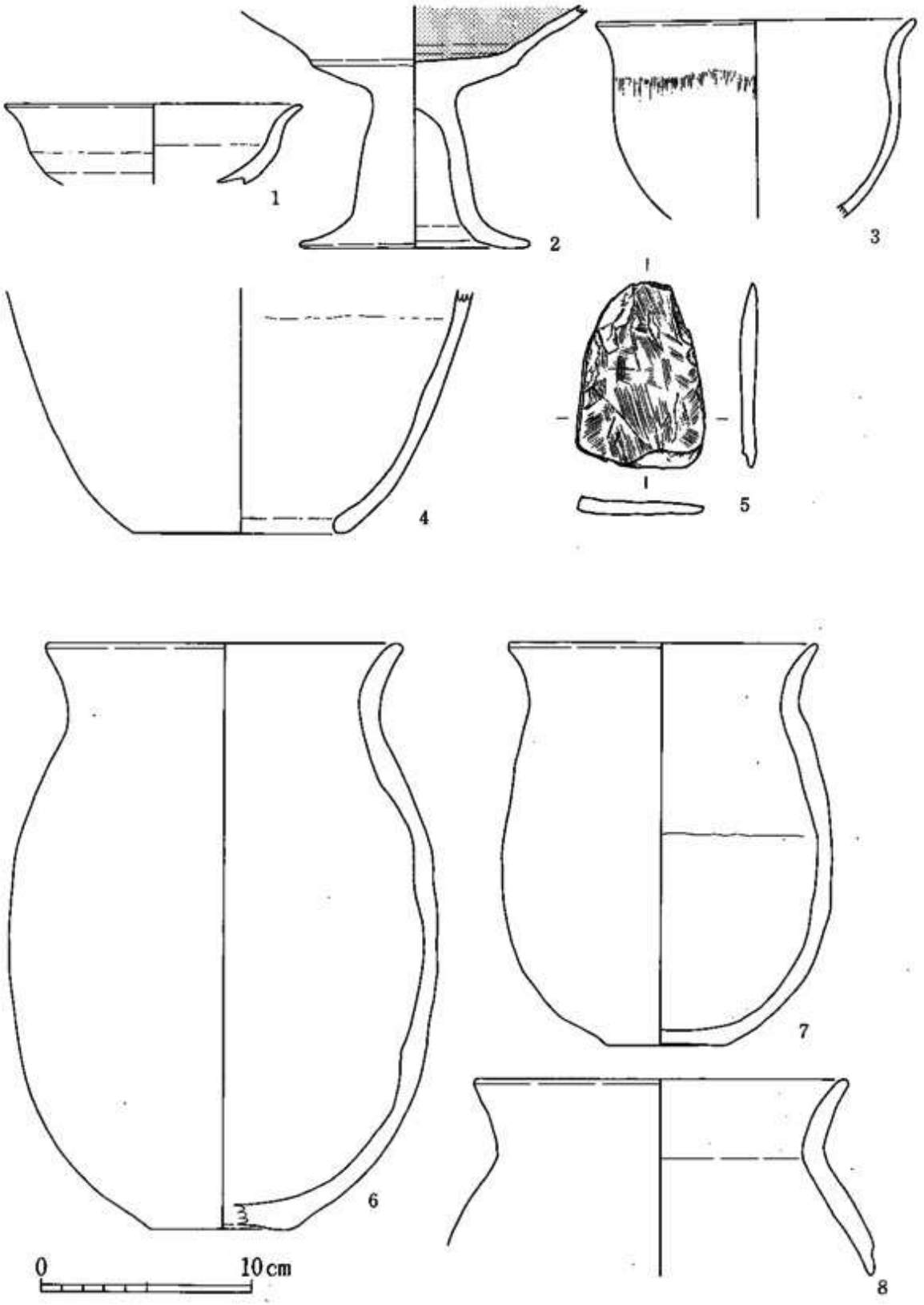
第27図　134・135・137・138号住居址出土土器（1～3 134住，4 135住，5 137住，6・7 138住）



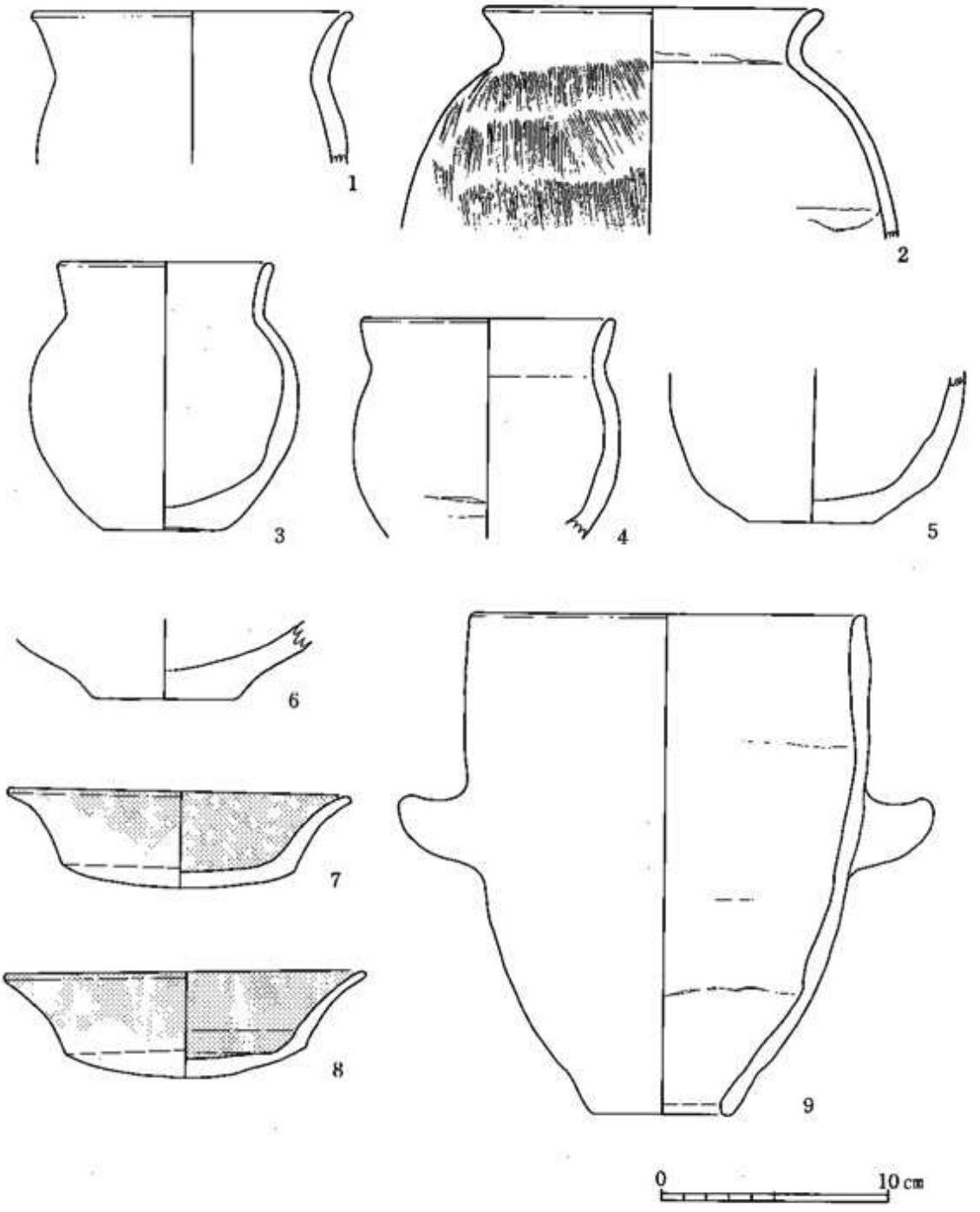
第28図　139・140号住居址出土土器（1～3 139住，4～9 140住）



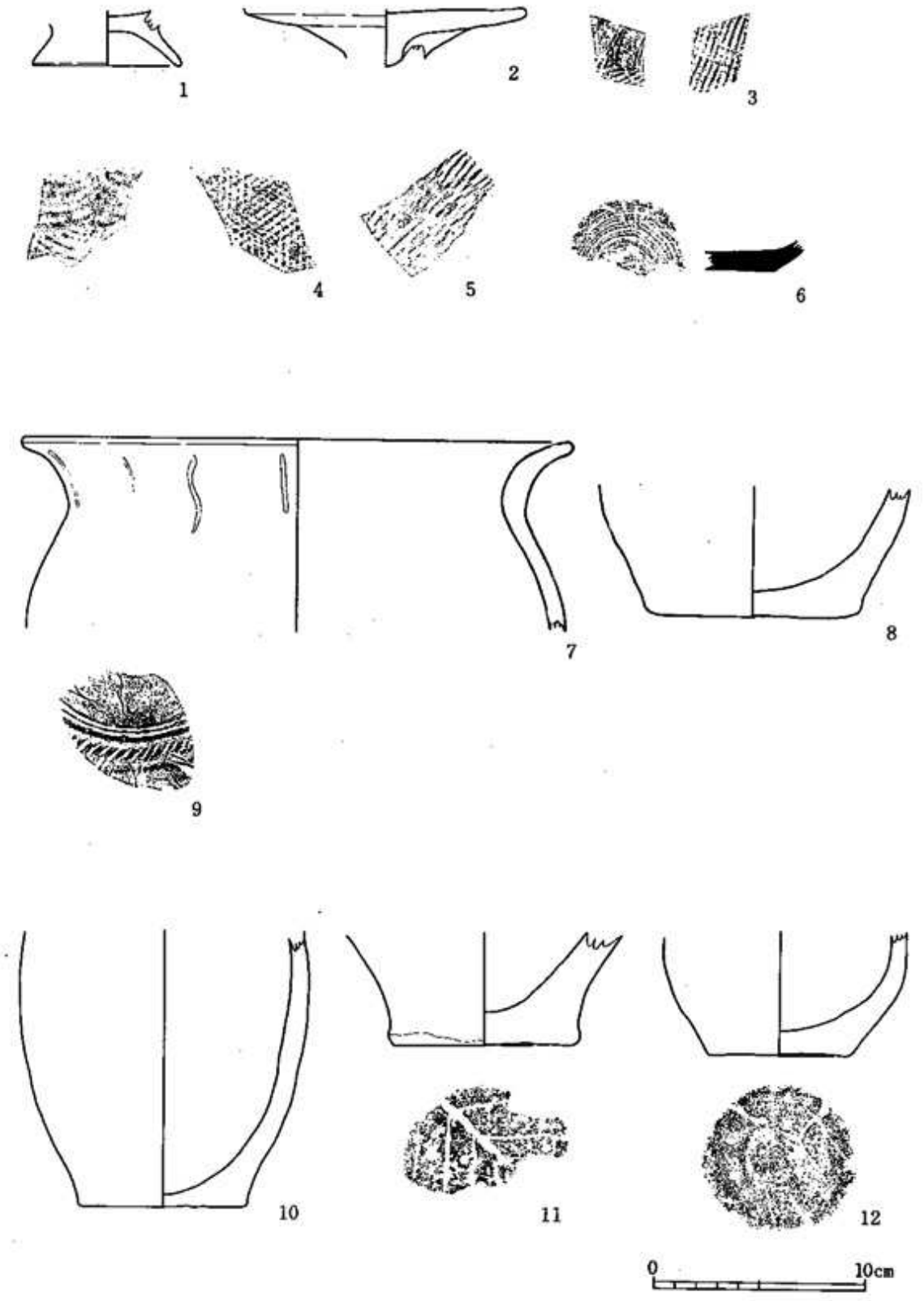
第29図　140・141号住居址出土土器・石器（1～6 140住，7・8 141住）



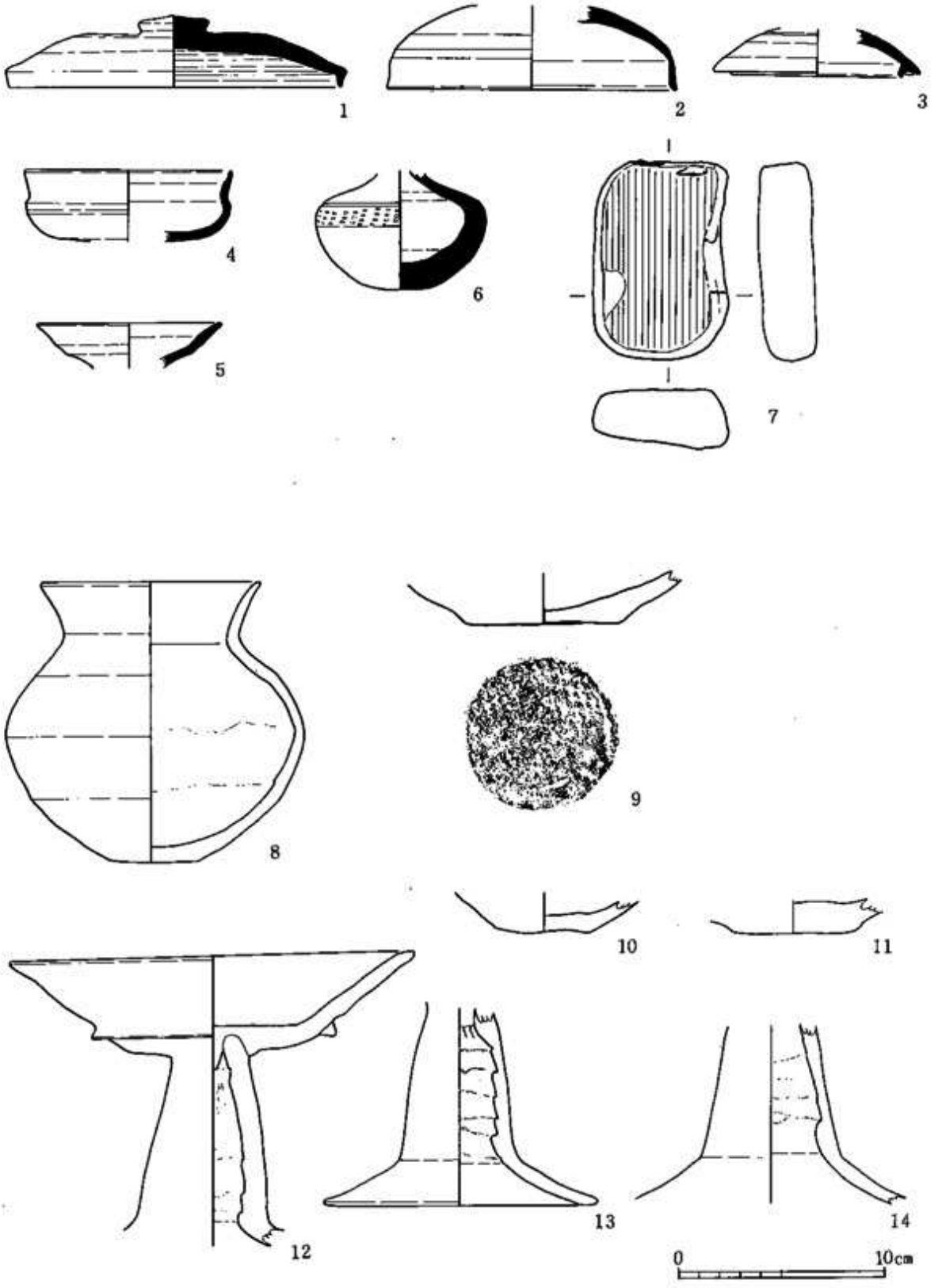
第30図　142・144号住居址出土土器・石器（1～5 142住，6～8 144住）



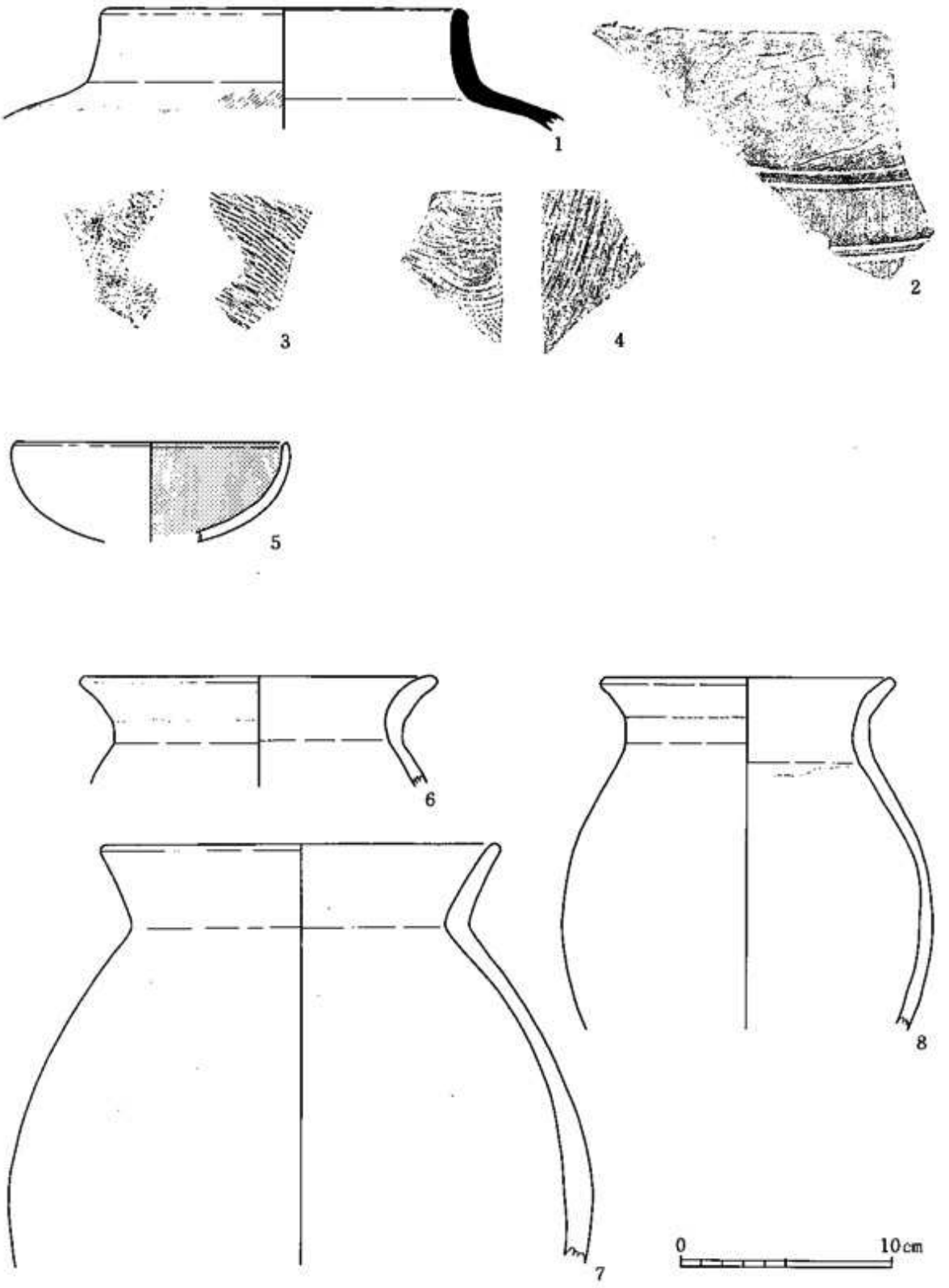
第31図　144号住居址出土土器



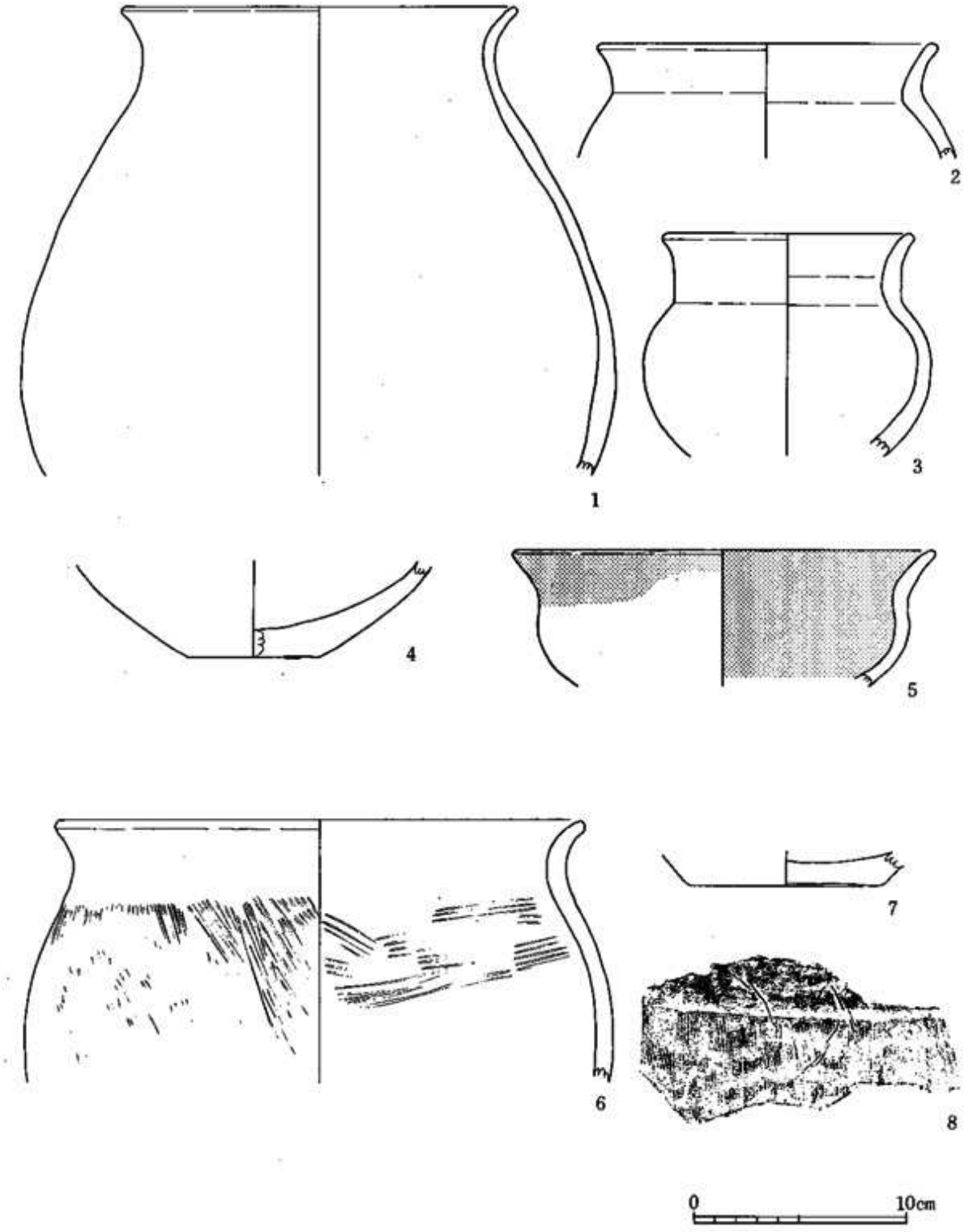
第32図　146・147・149号住居址出土土器（1～6 146住，7～9 147住，10～12 149住）



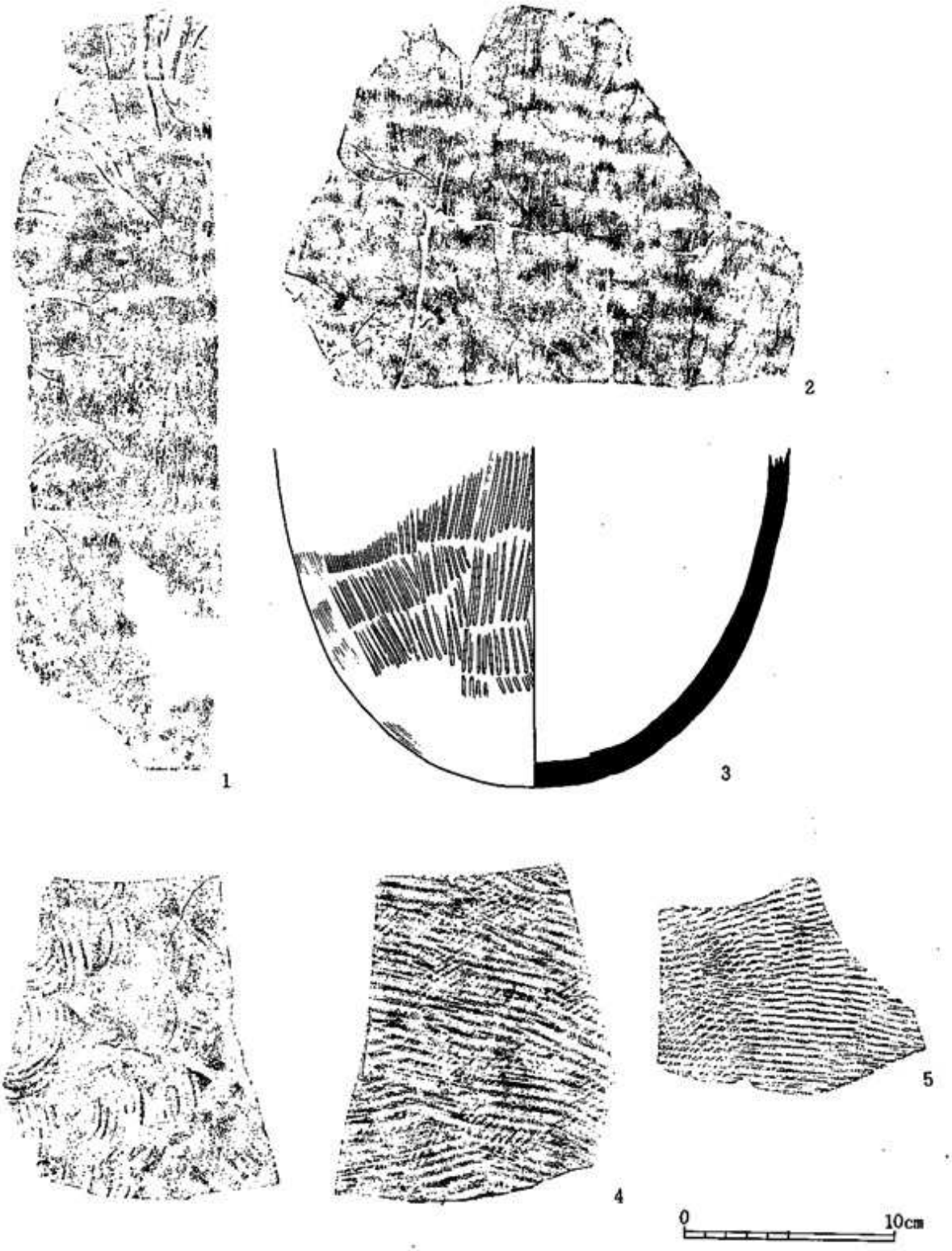
第33図　149・152号住居址出土土器・石器（1～7 149住，8～14 152住）



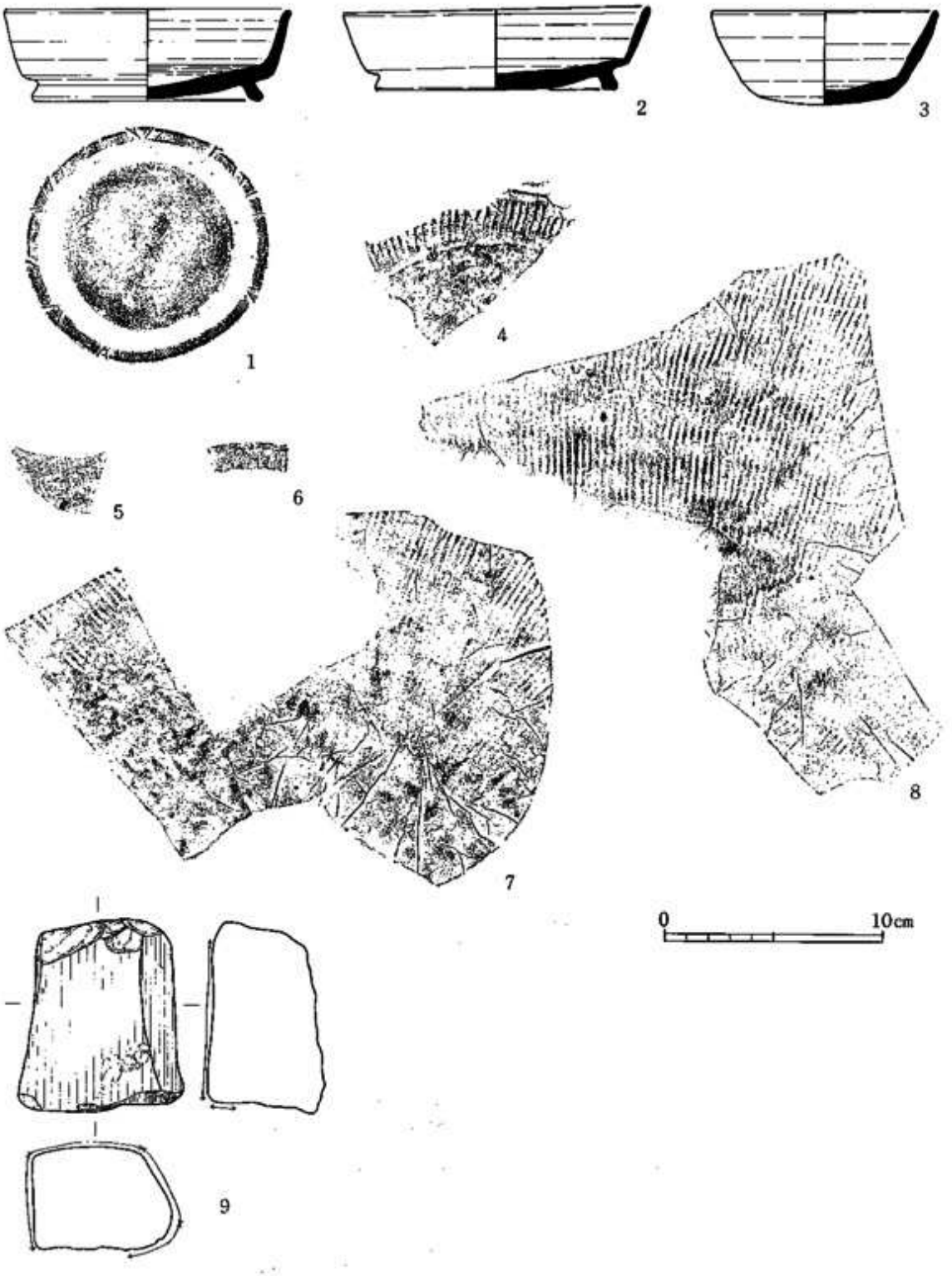
第34図　152・153・156号住居址出土土器（1～4 152住，5 153住，6～8 156住）



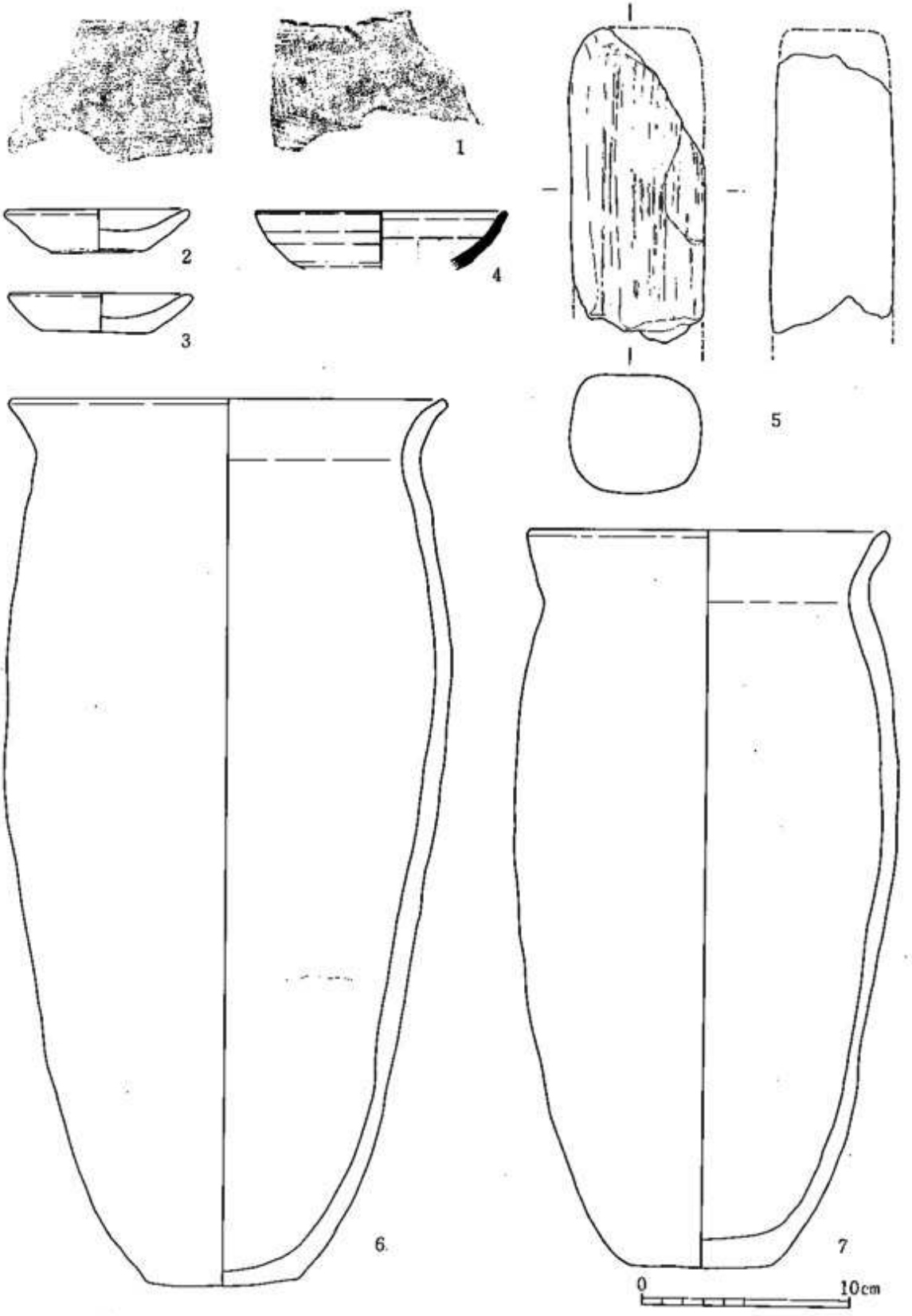
第35図　156・96号住居址出土土器（1～5　156住，6～8　96住）



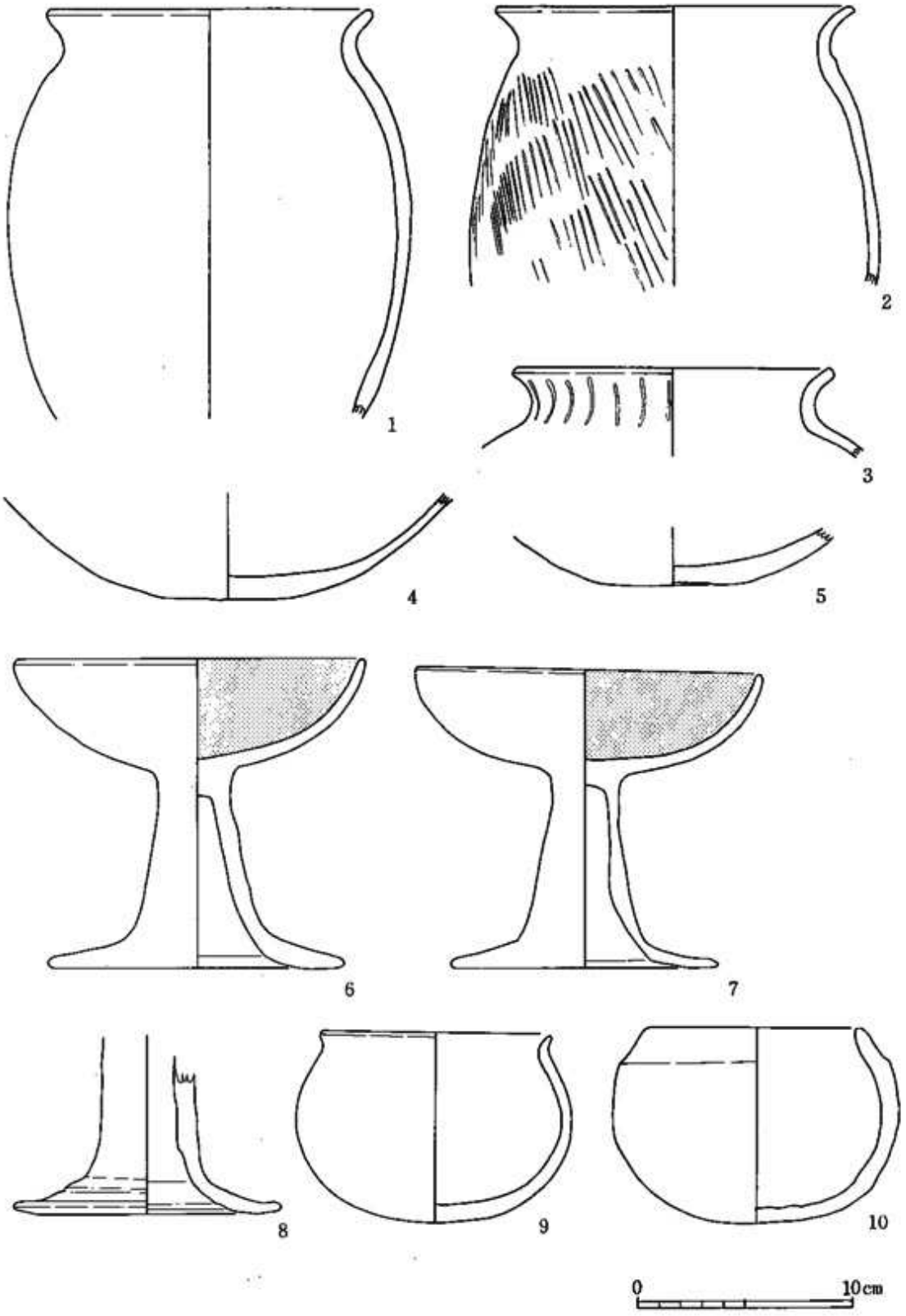
第36図　96号住居址出土土器



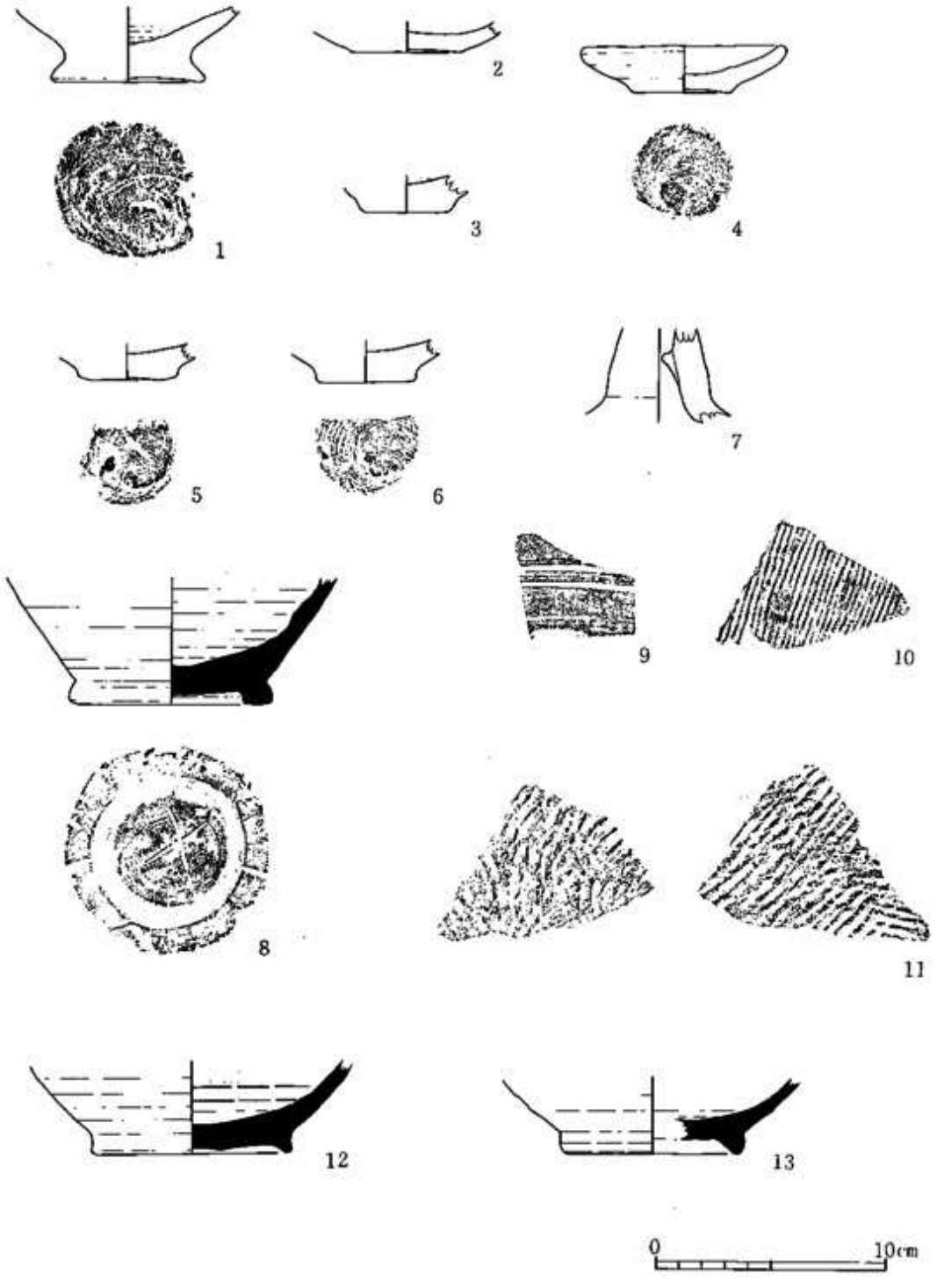
第37図　96号住居址出土土器・石器



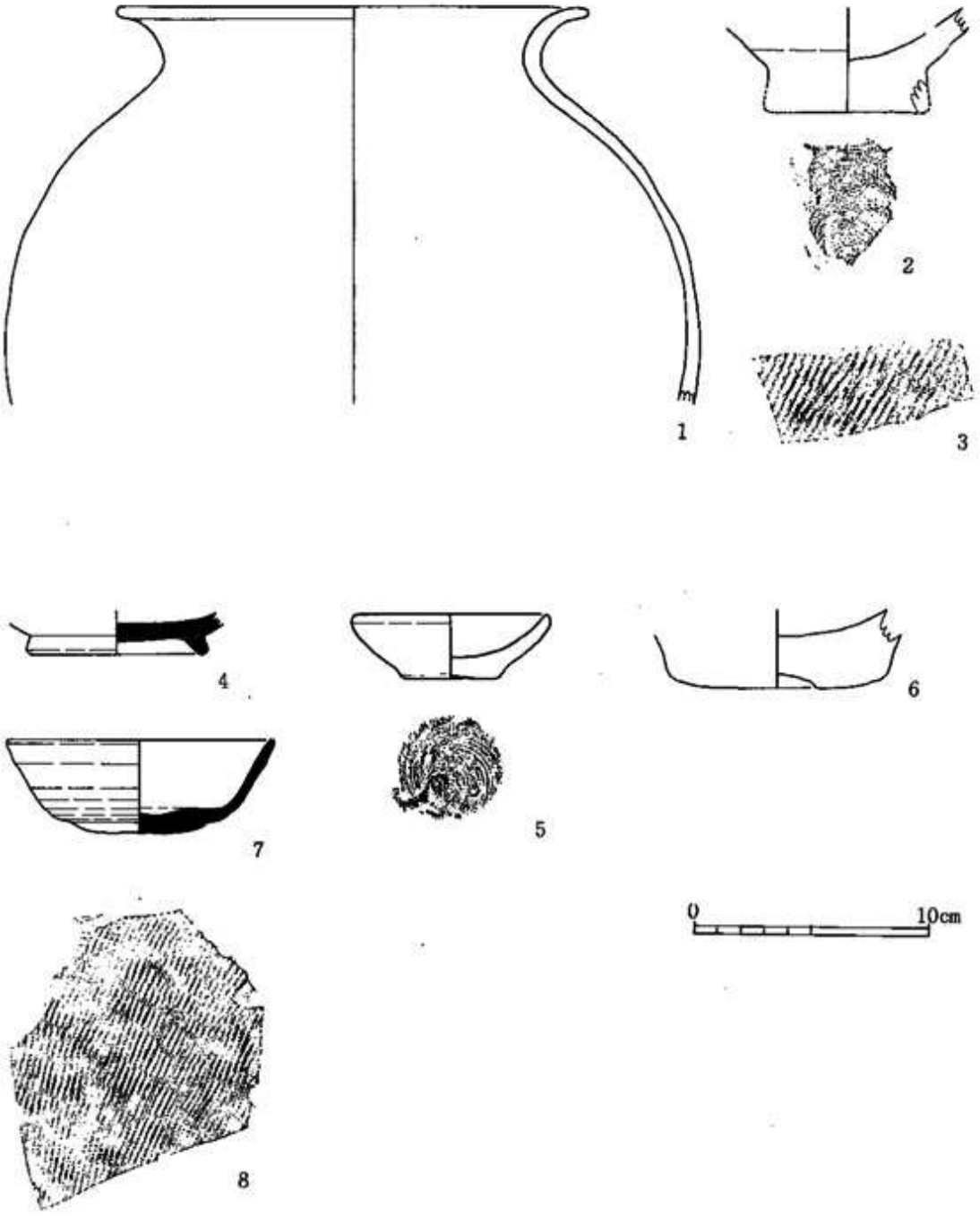
第38図　102・123号住居址出土土器・土製品（1～5　102住，6～7　123住）



第39図　123号住居址出土土器

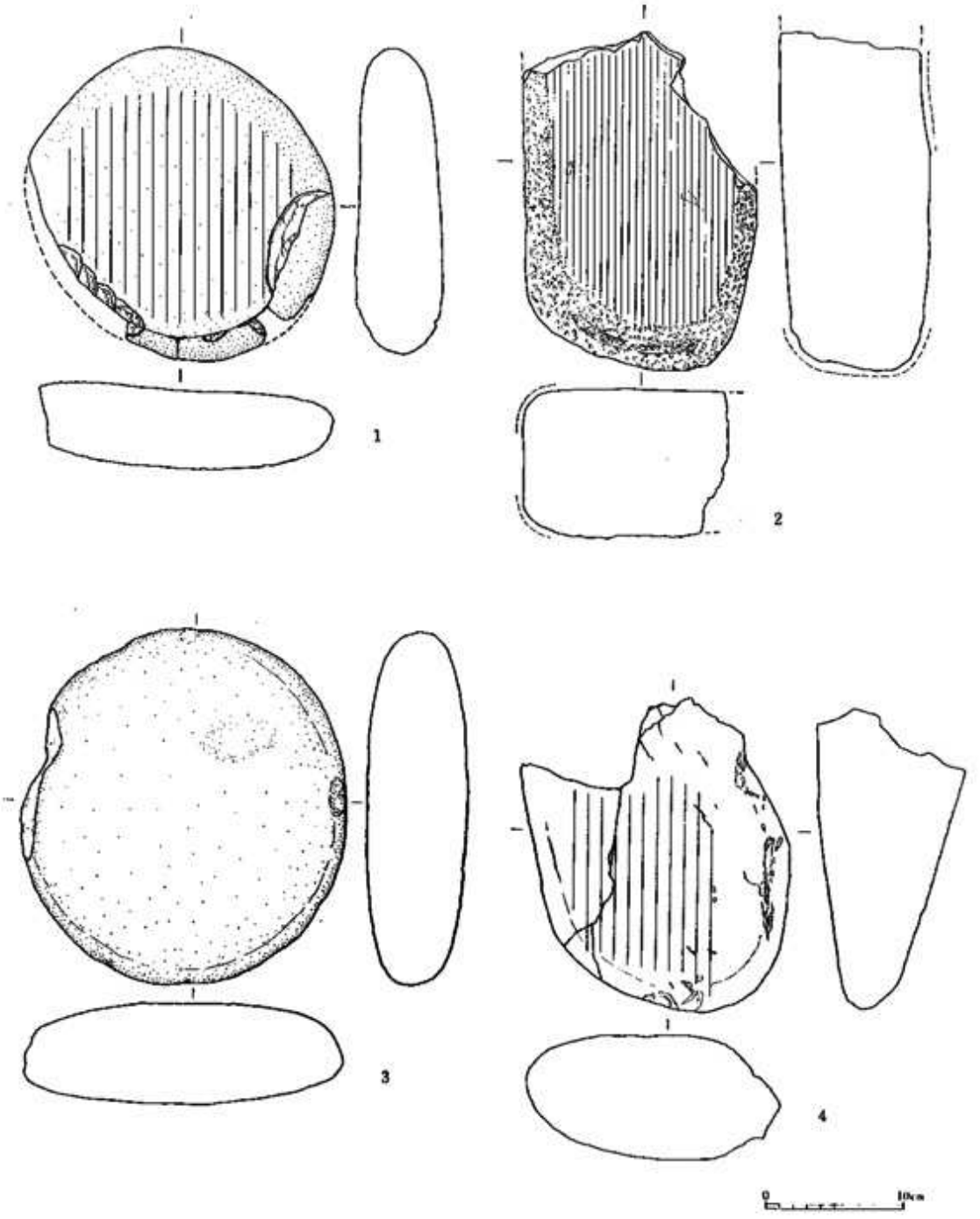


第40図　145号住居址出土土器

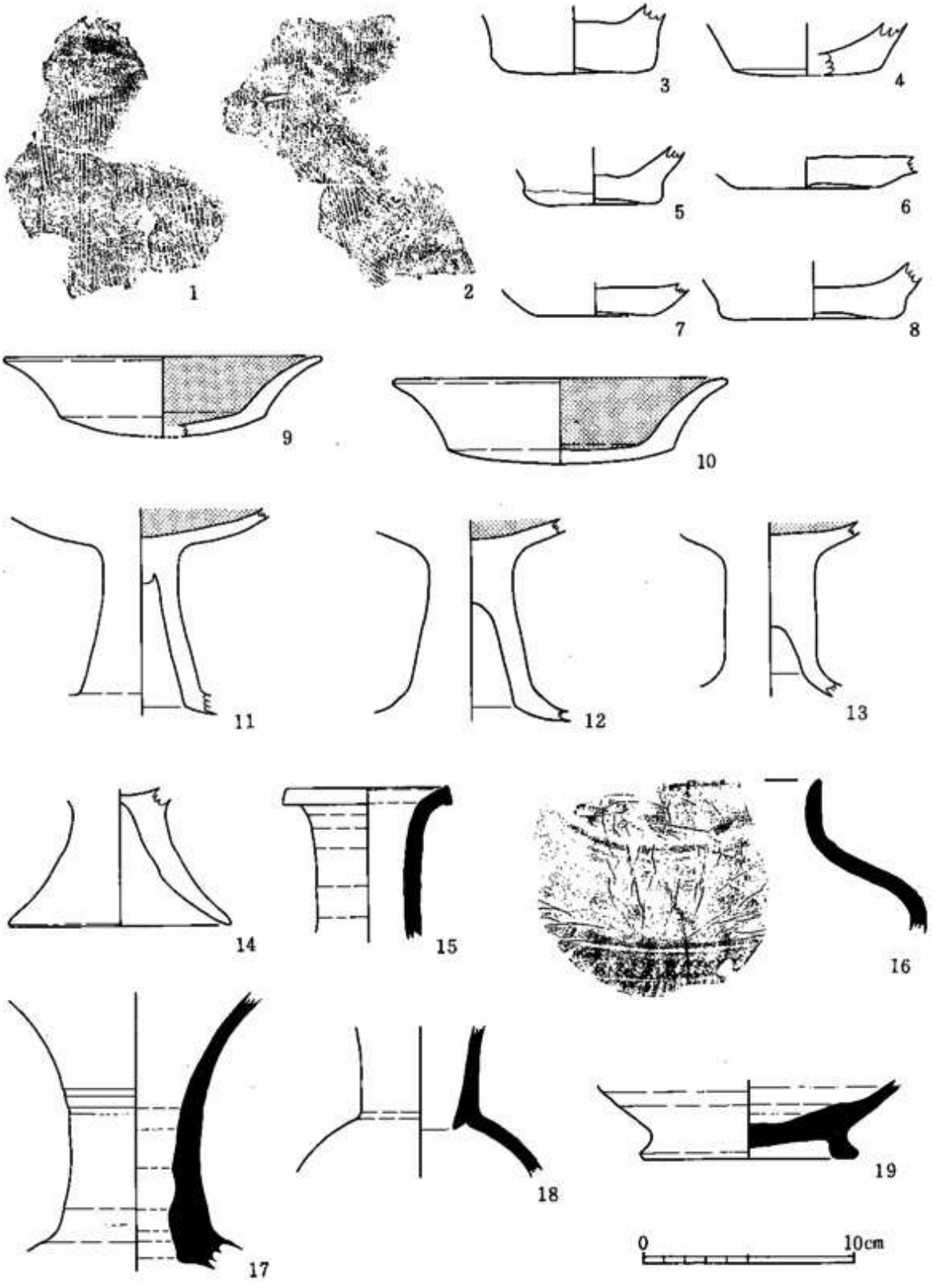


第41図　155号住居址，掘立柱建物址33・35・40・47・51出土土器

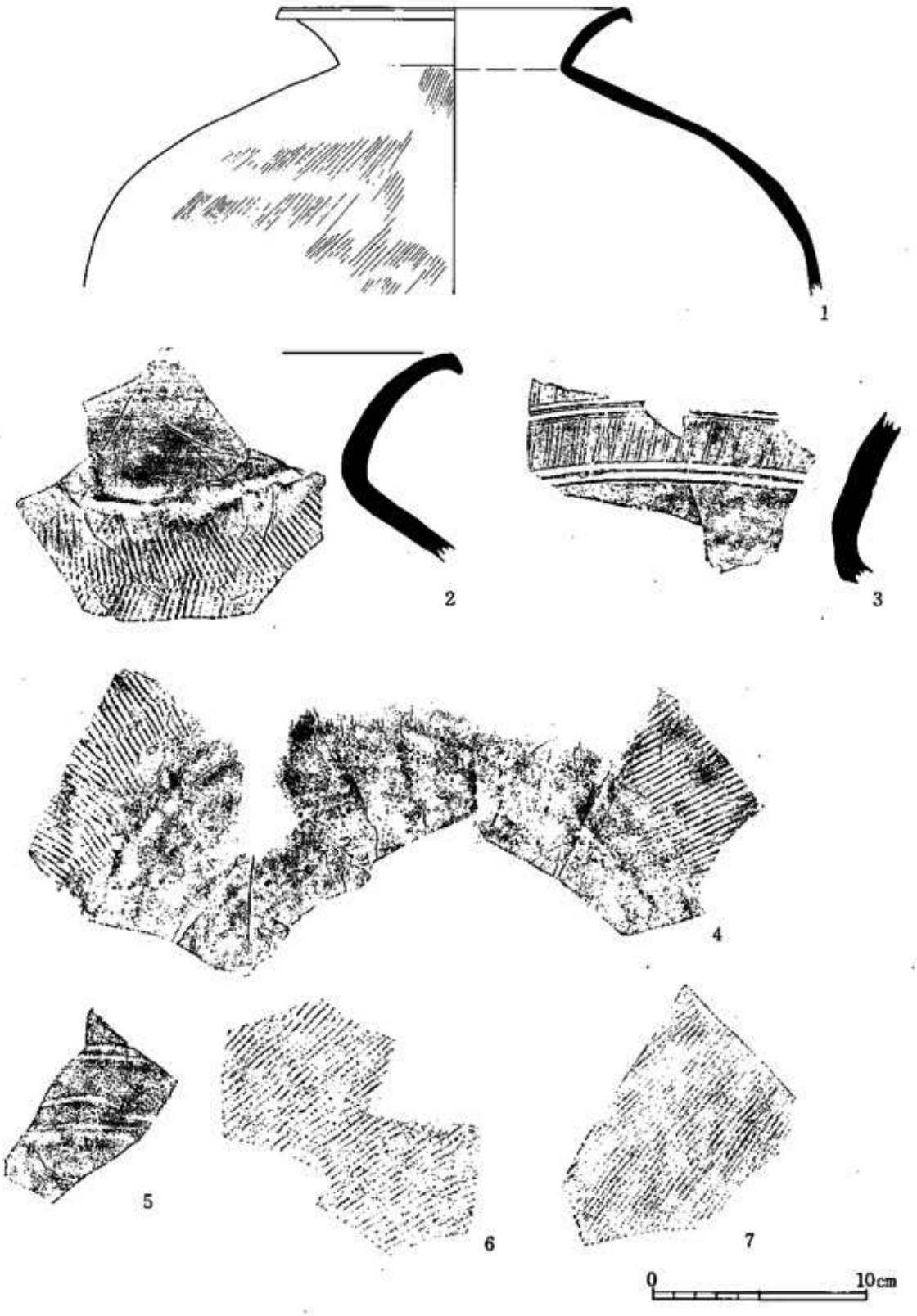
（1～3　155住，4　建33，5　建35，6　建40，7　建47，8　建51）



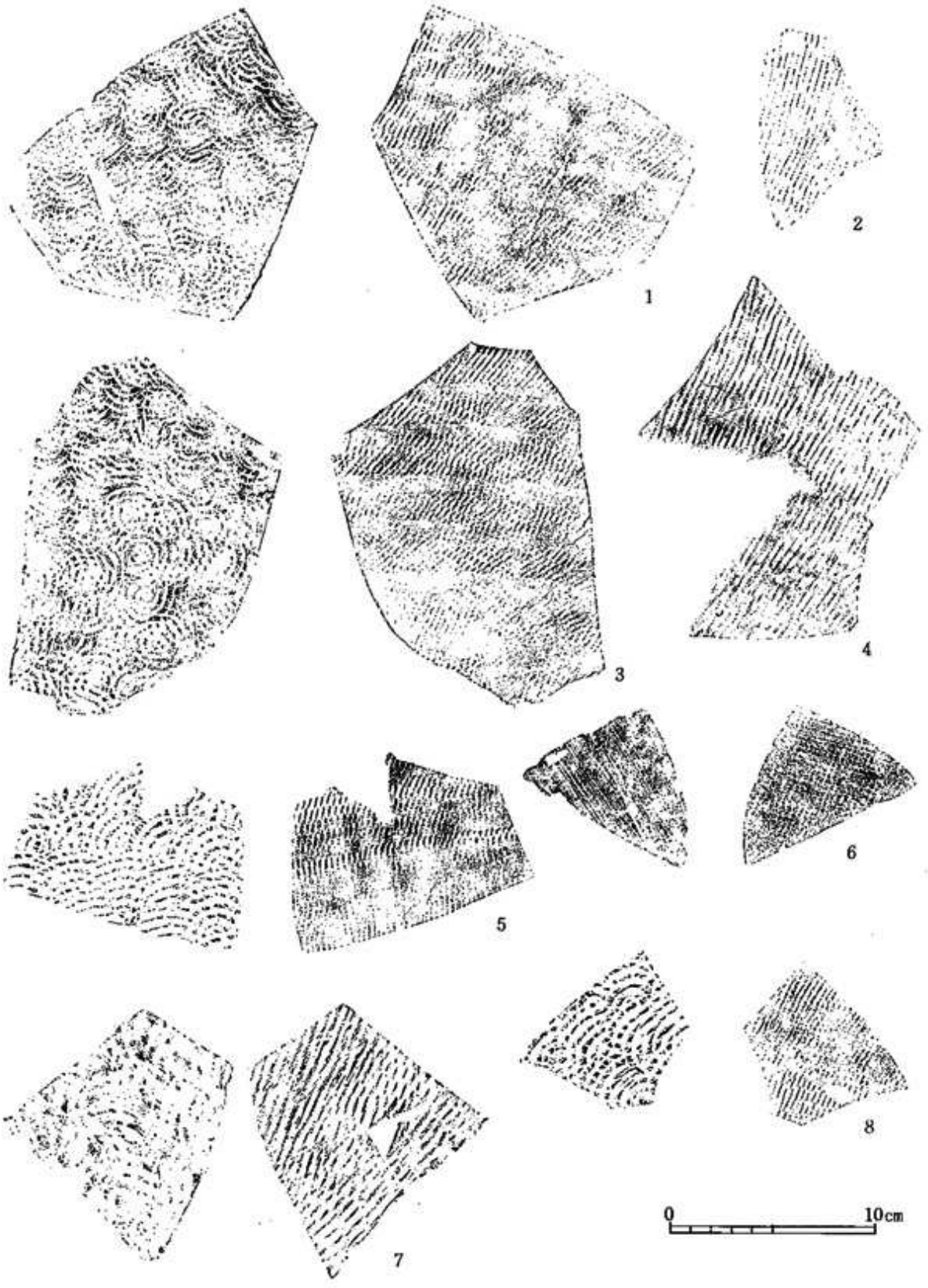
第42図　92・101・106・108号住居址出土石器（1　92住，2　101住，3　106住，4　108住）



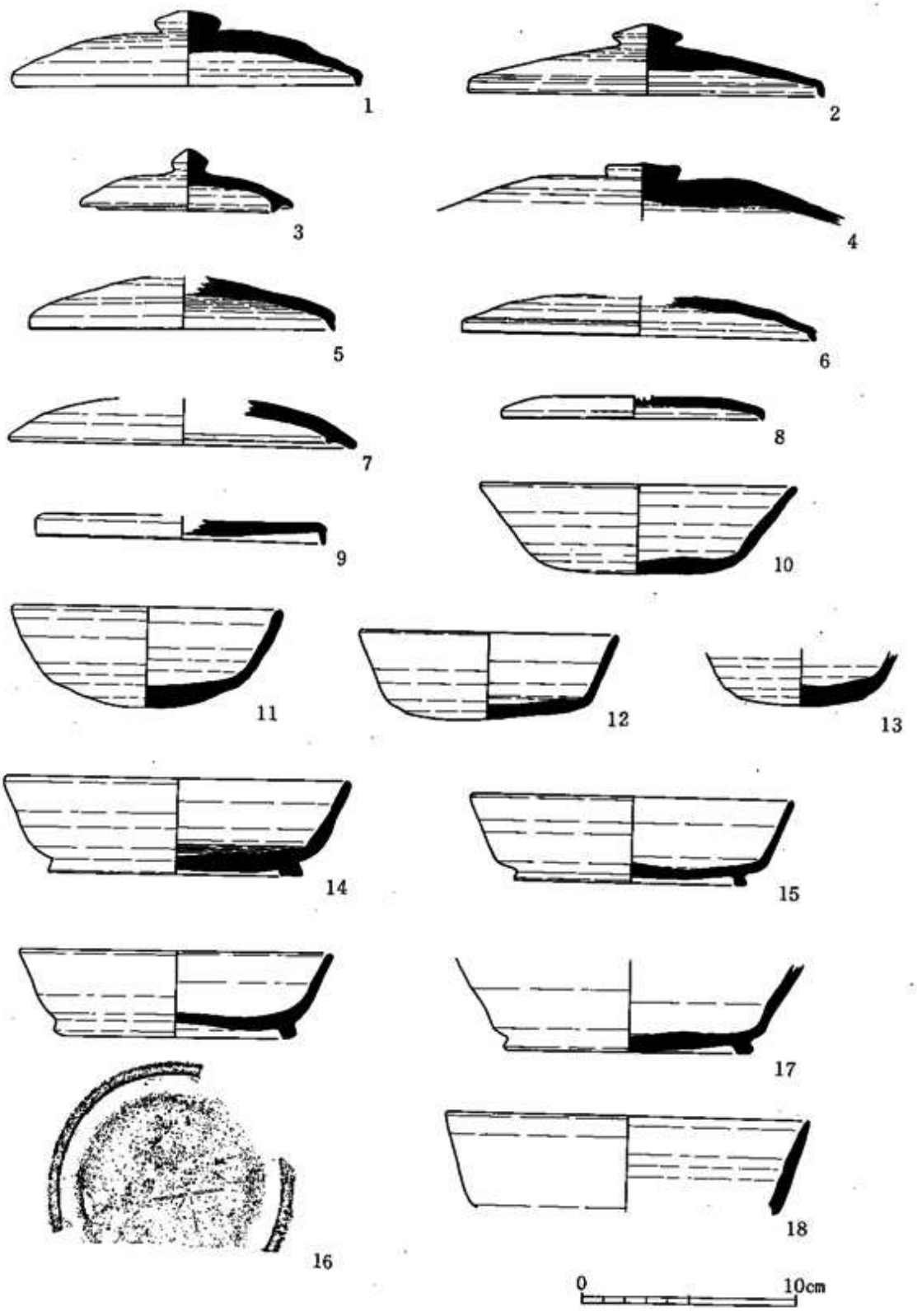
第43図　溝址37出土土器



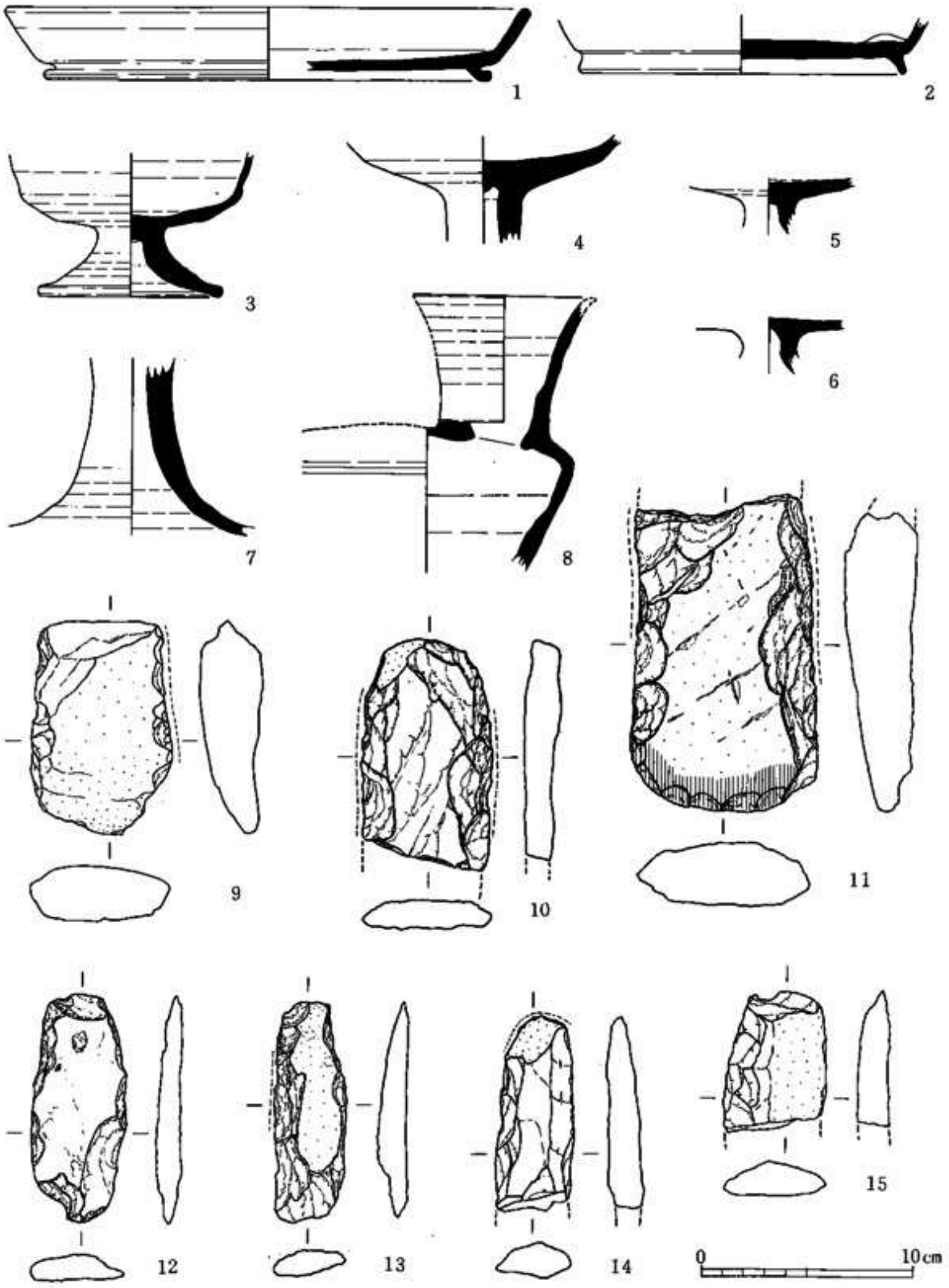
第44図　溝址37出土土器



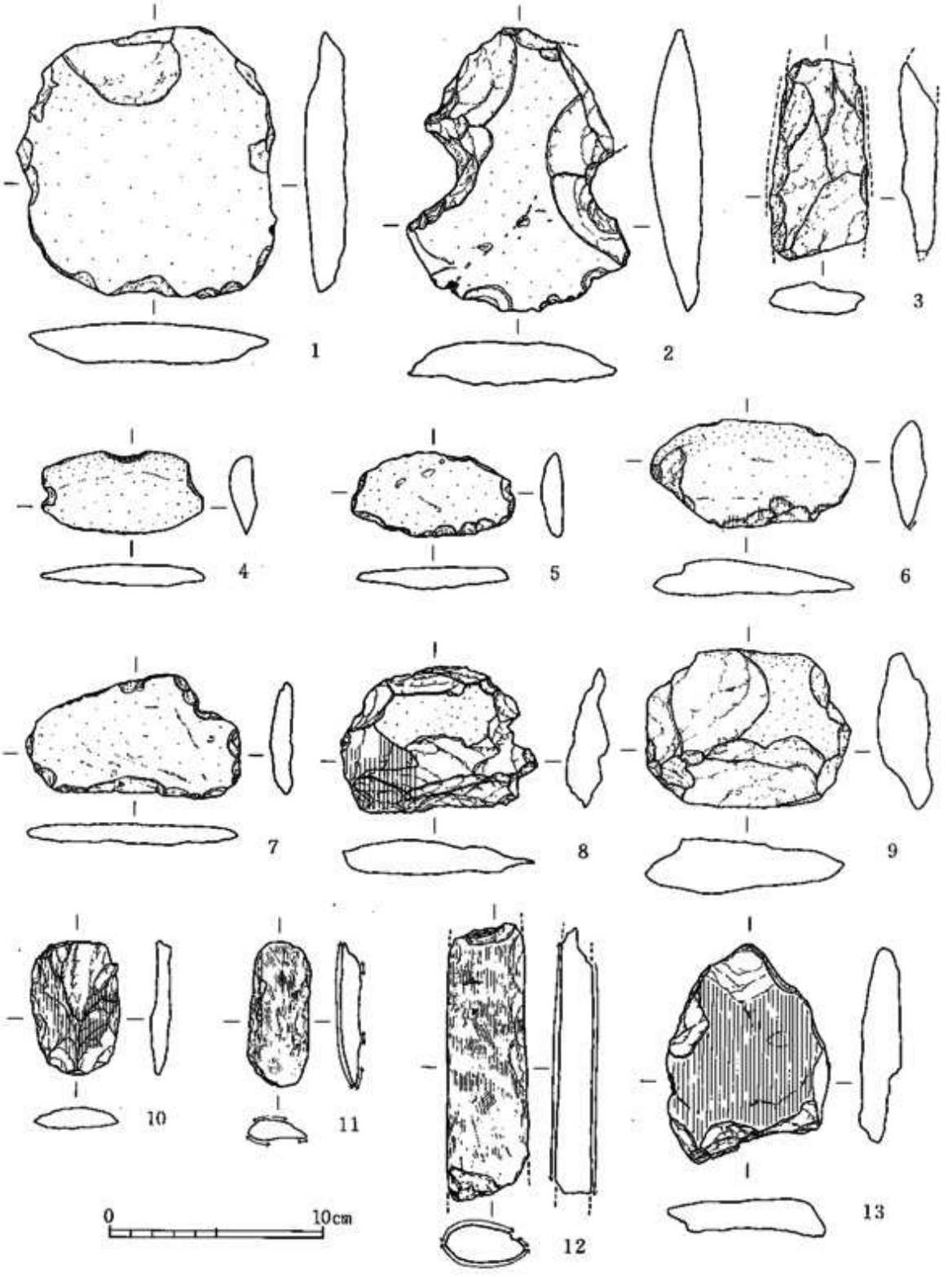
第45図　溝址37出土土器



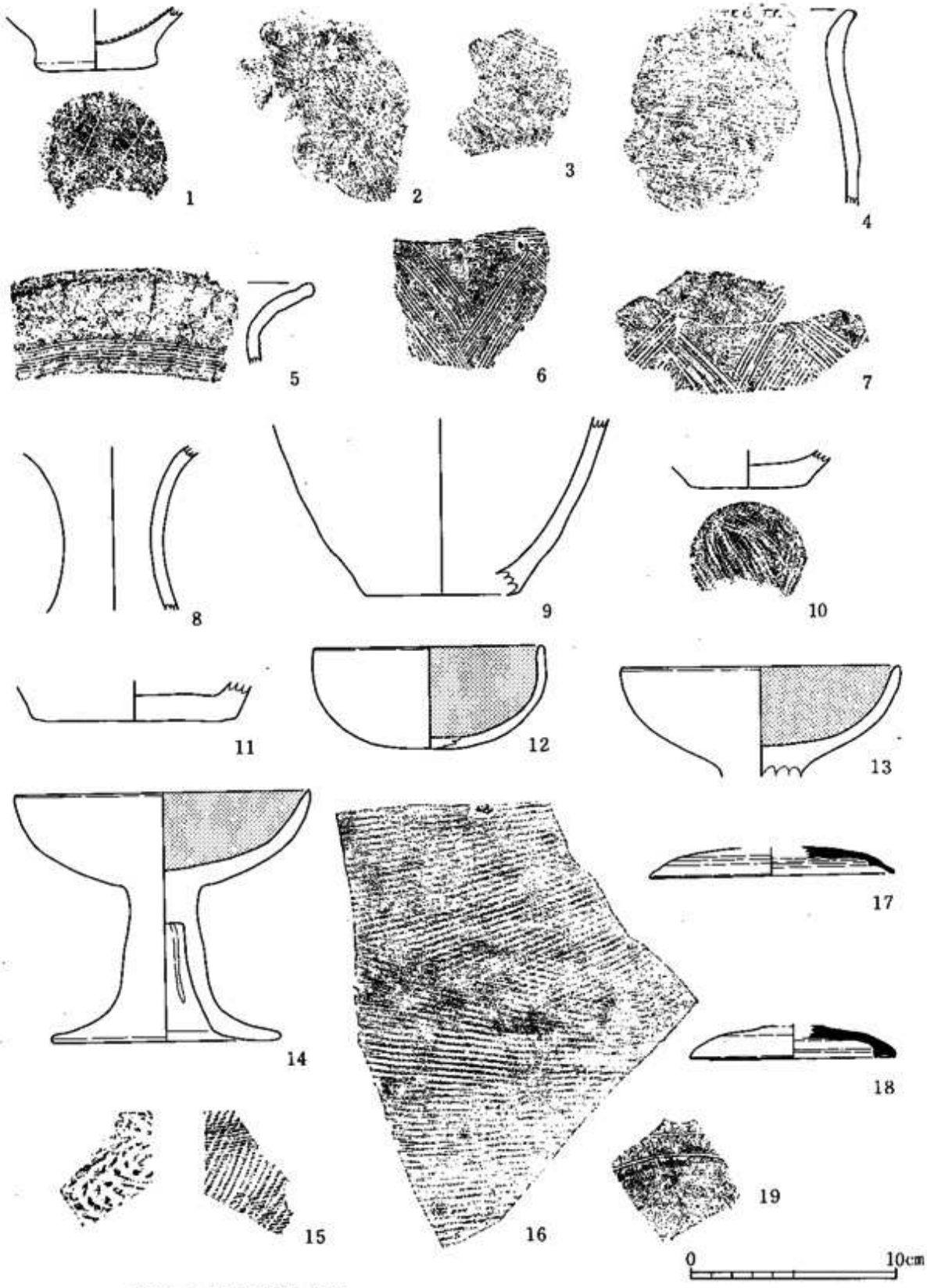
第46図　溝址37出土土器



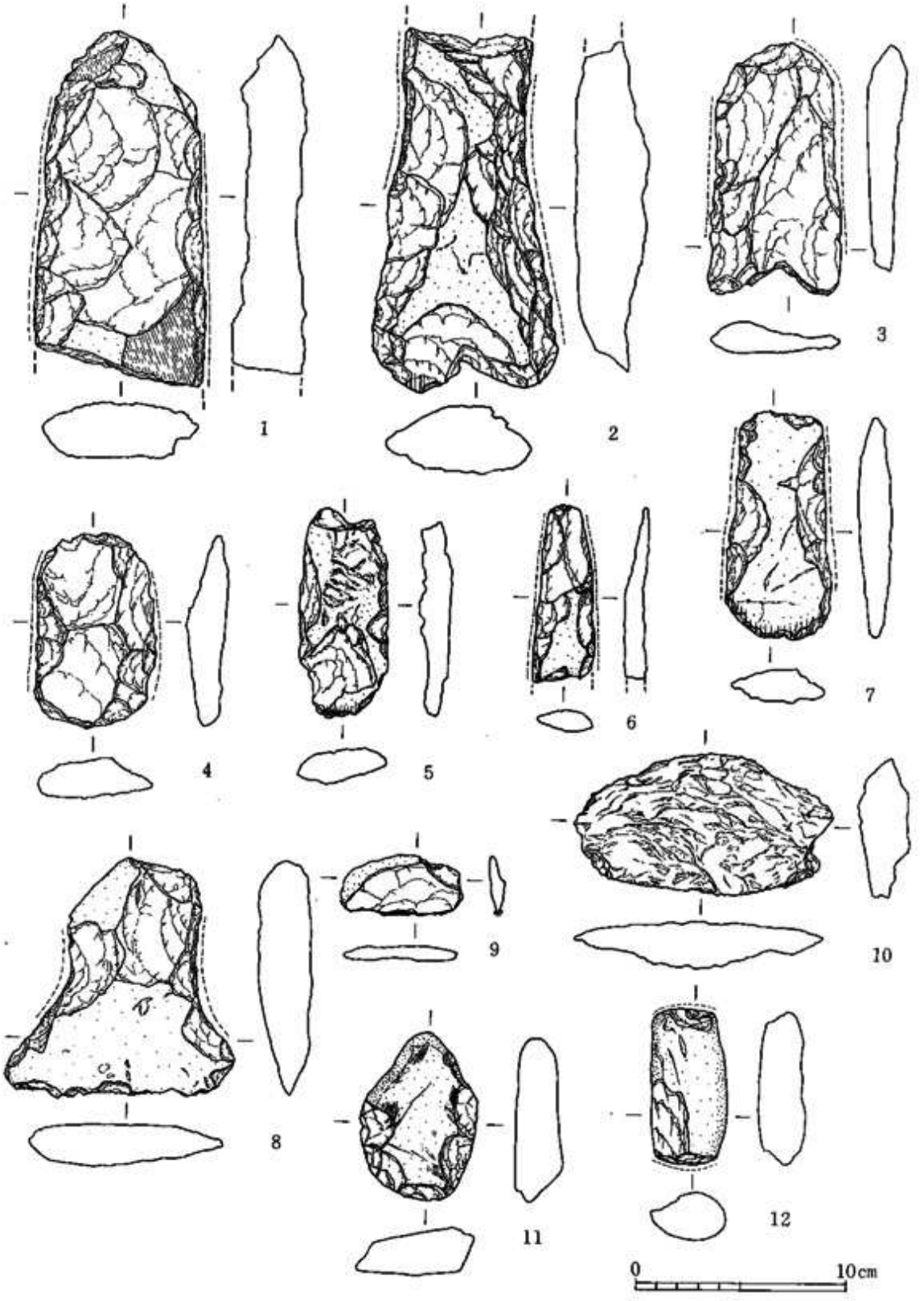
第47図　溝址37出土土器・石器



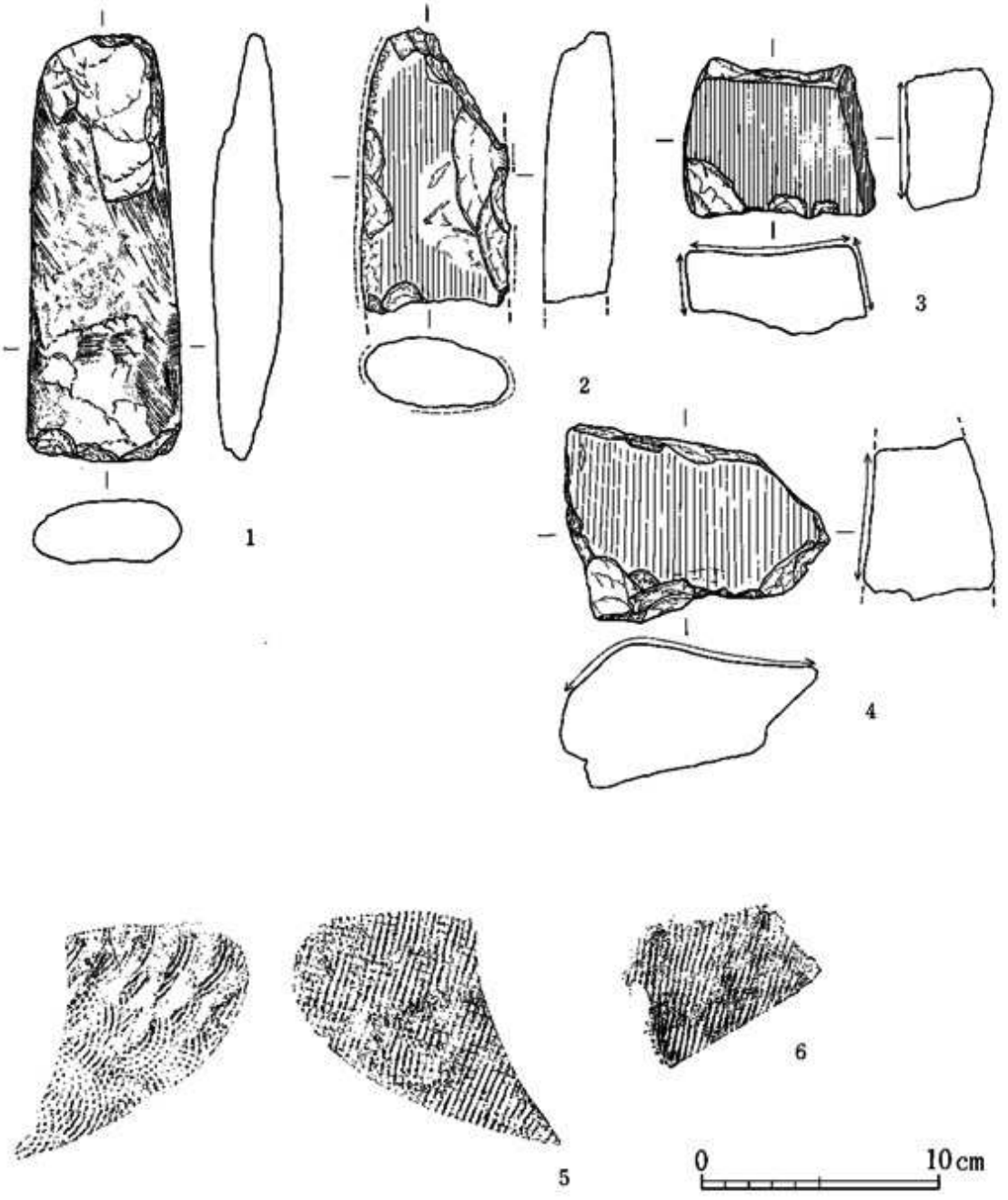
第48図　溝址37出土石器



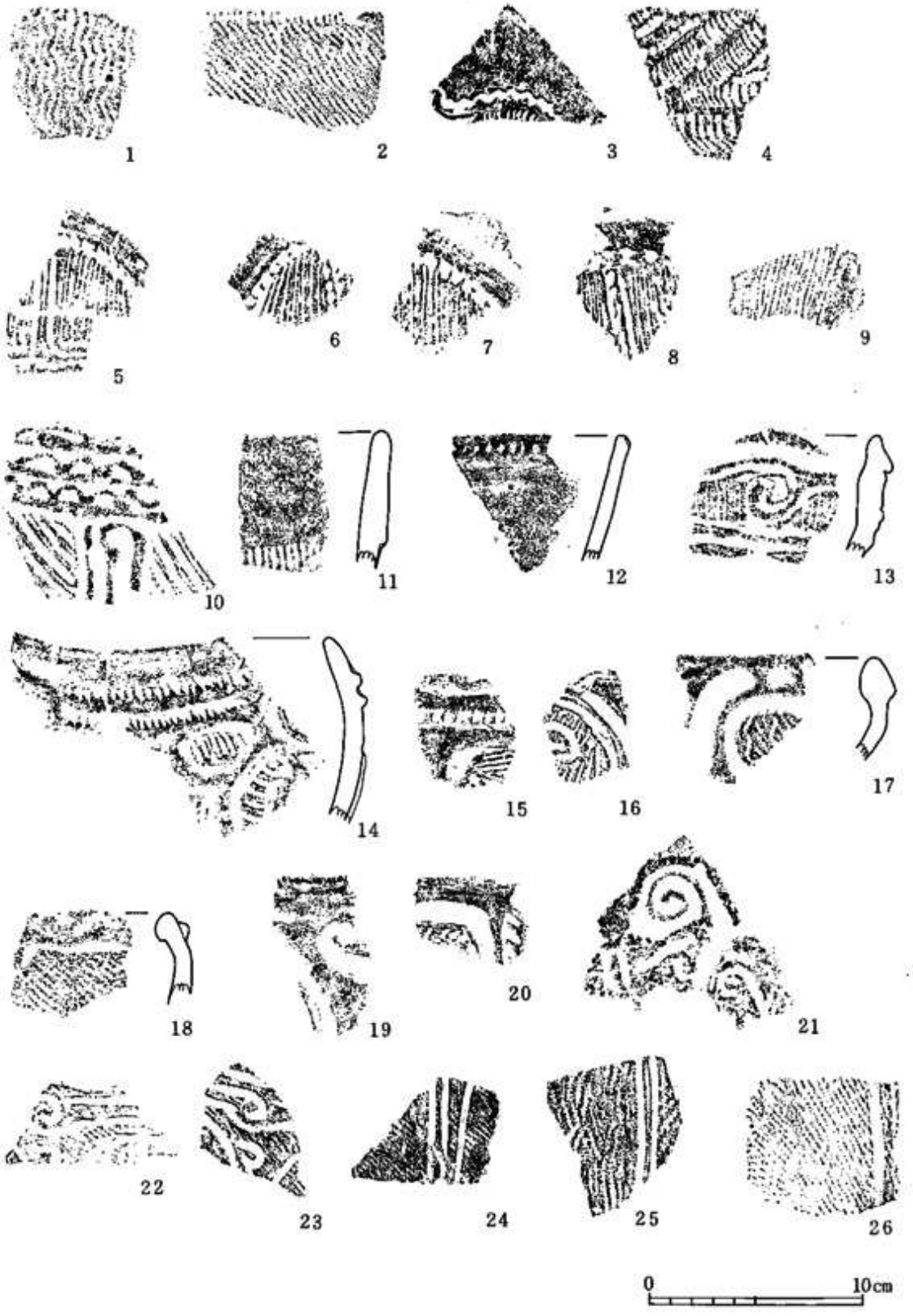
第49図　溝址38出土土器



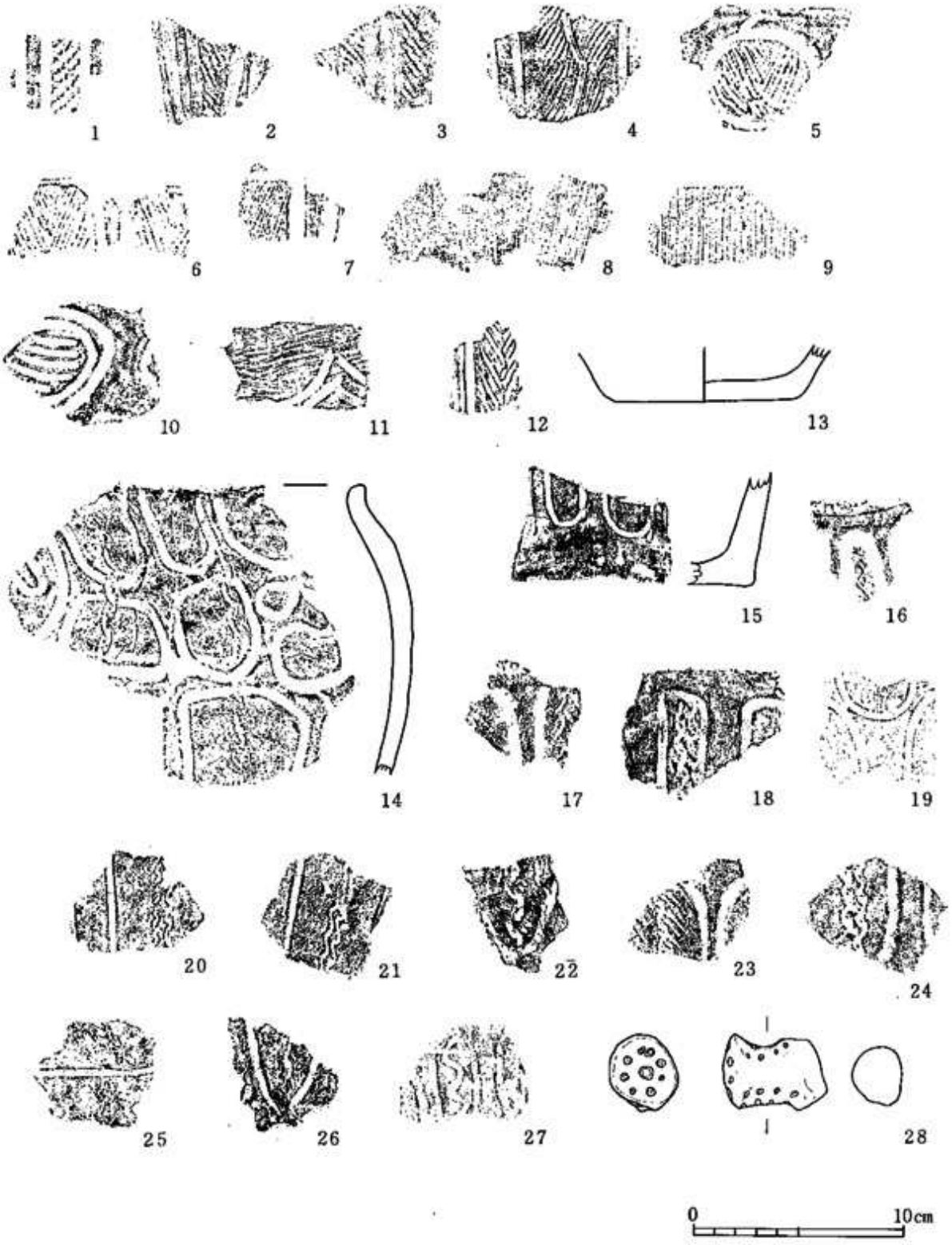
第50図　溝址38出土石器



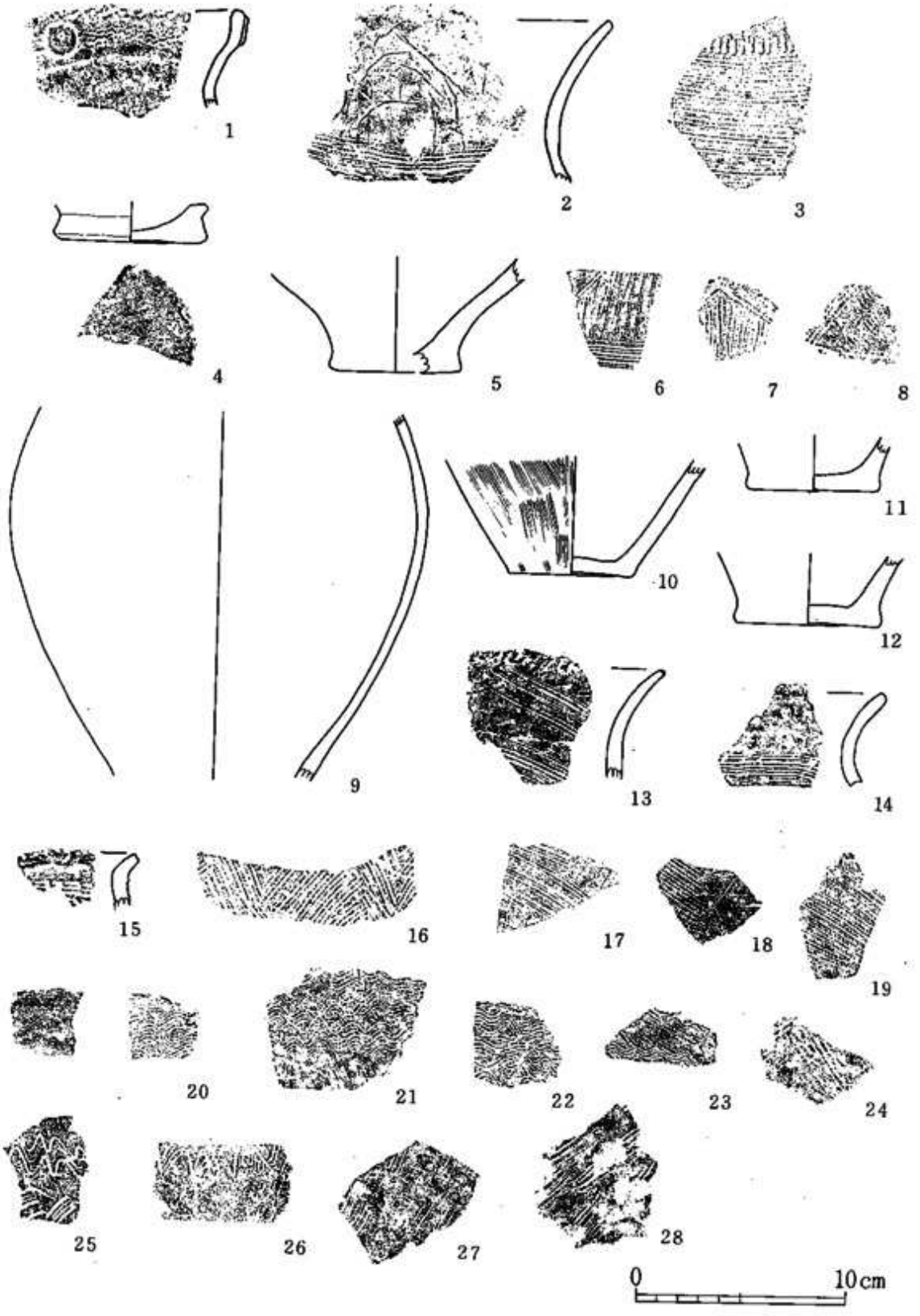
第51図　溝址38・39出土土器・石器（1～4 溝38, 5・6 溝39）



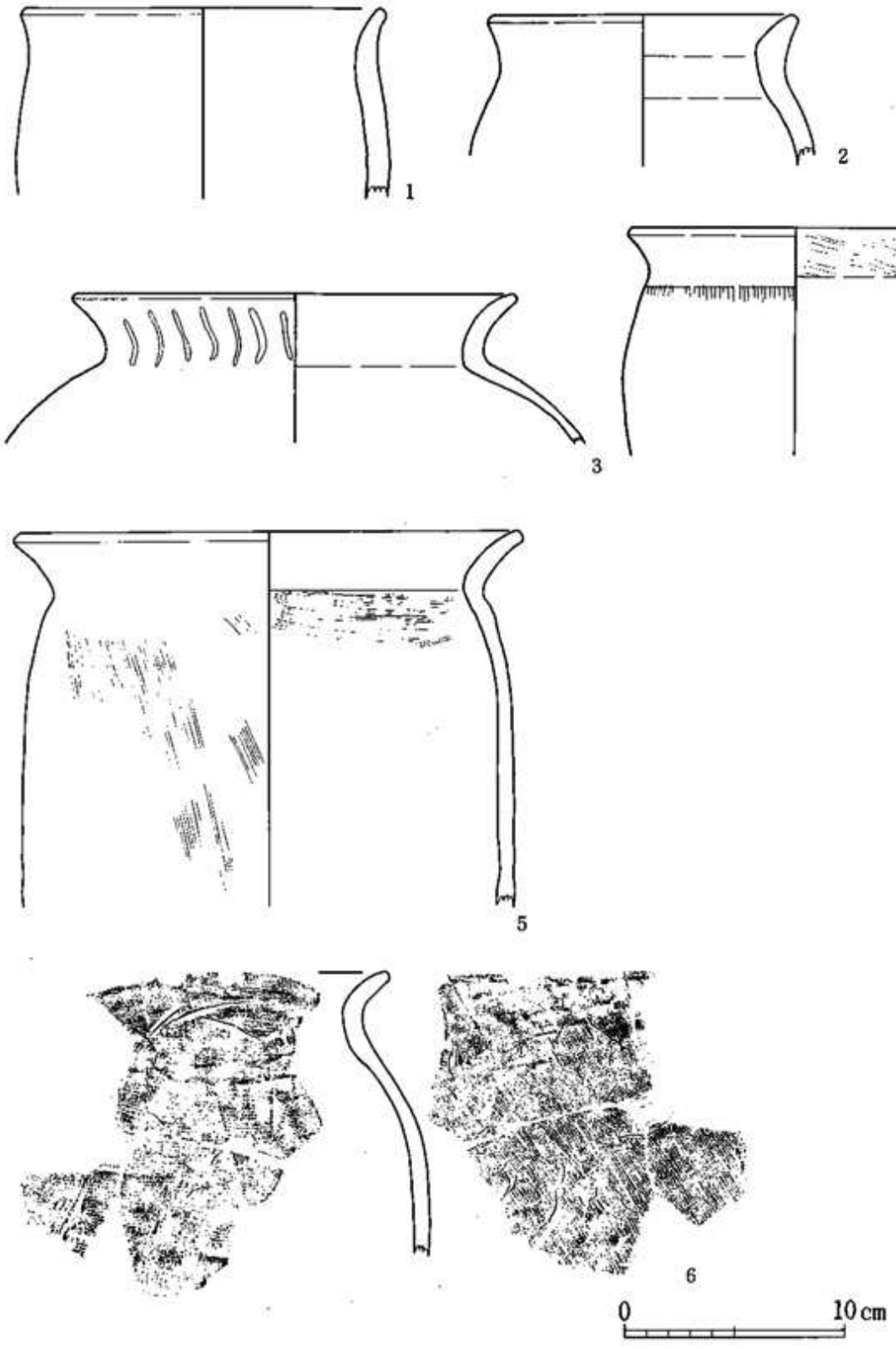
第52図　遺構外出土土器(1)



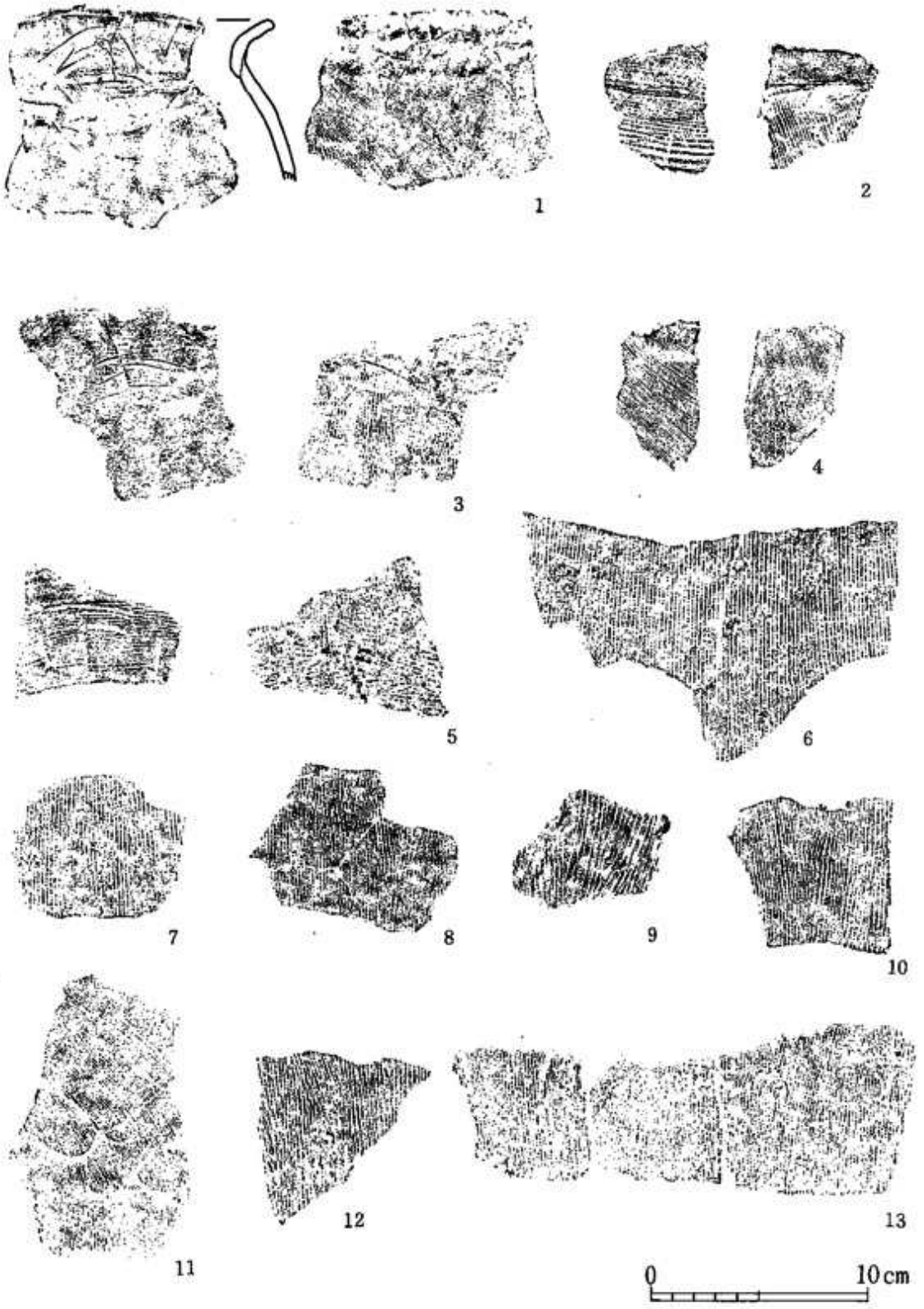
第53図　遺構外出土土器(2)



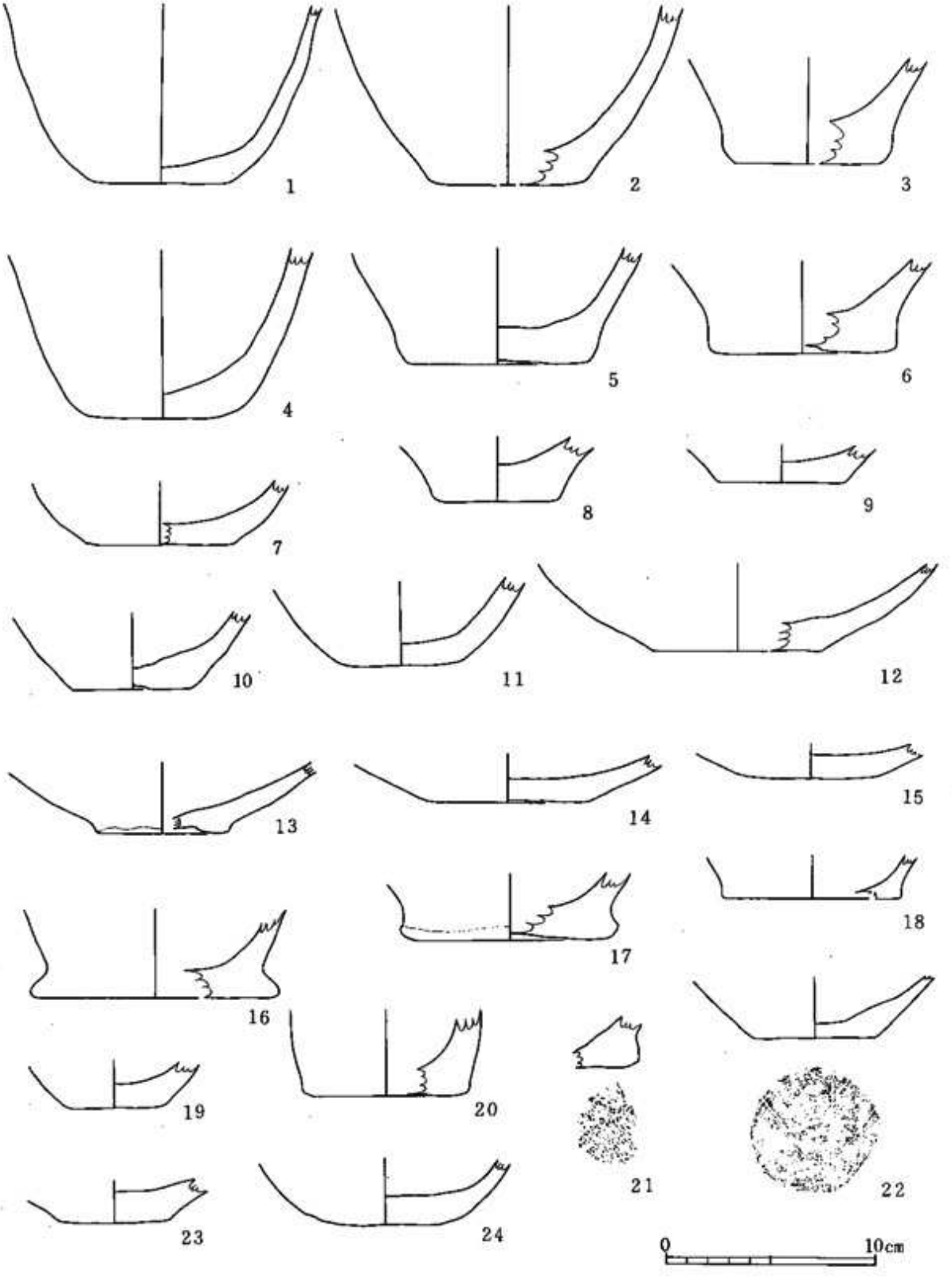
第54図　遺構外出土土器(3)



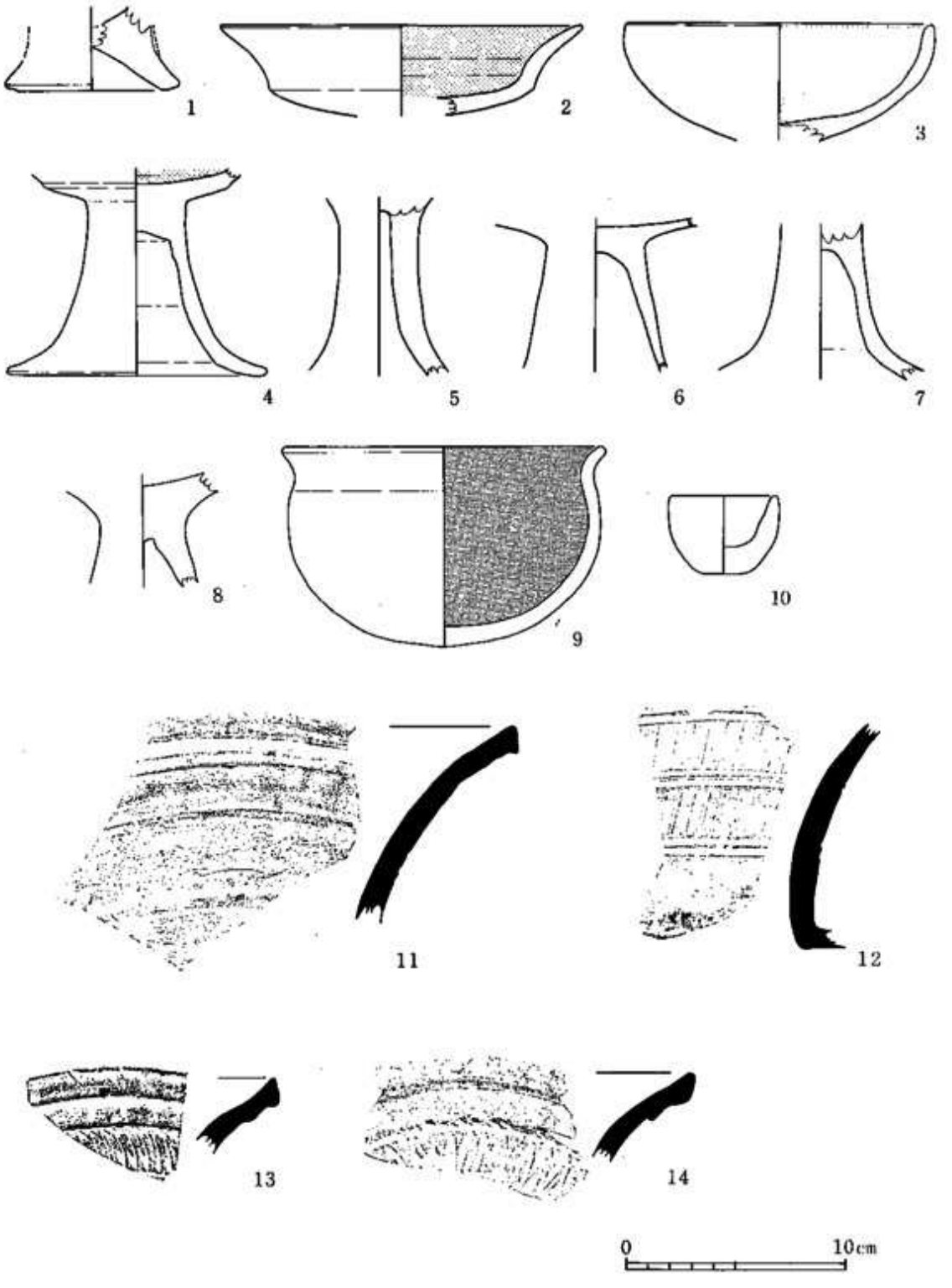
第55図　遺構外出土土器(4)



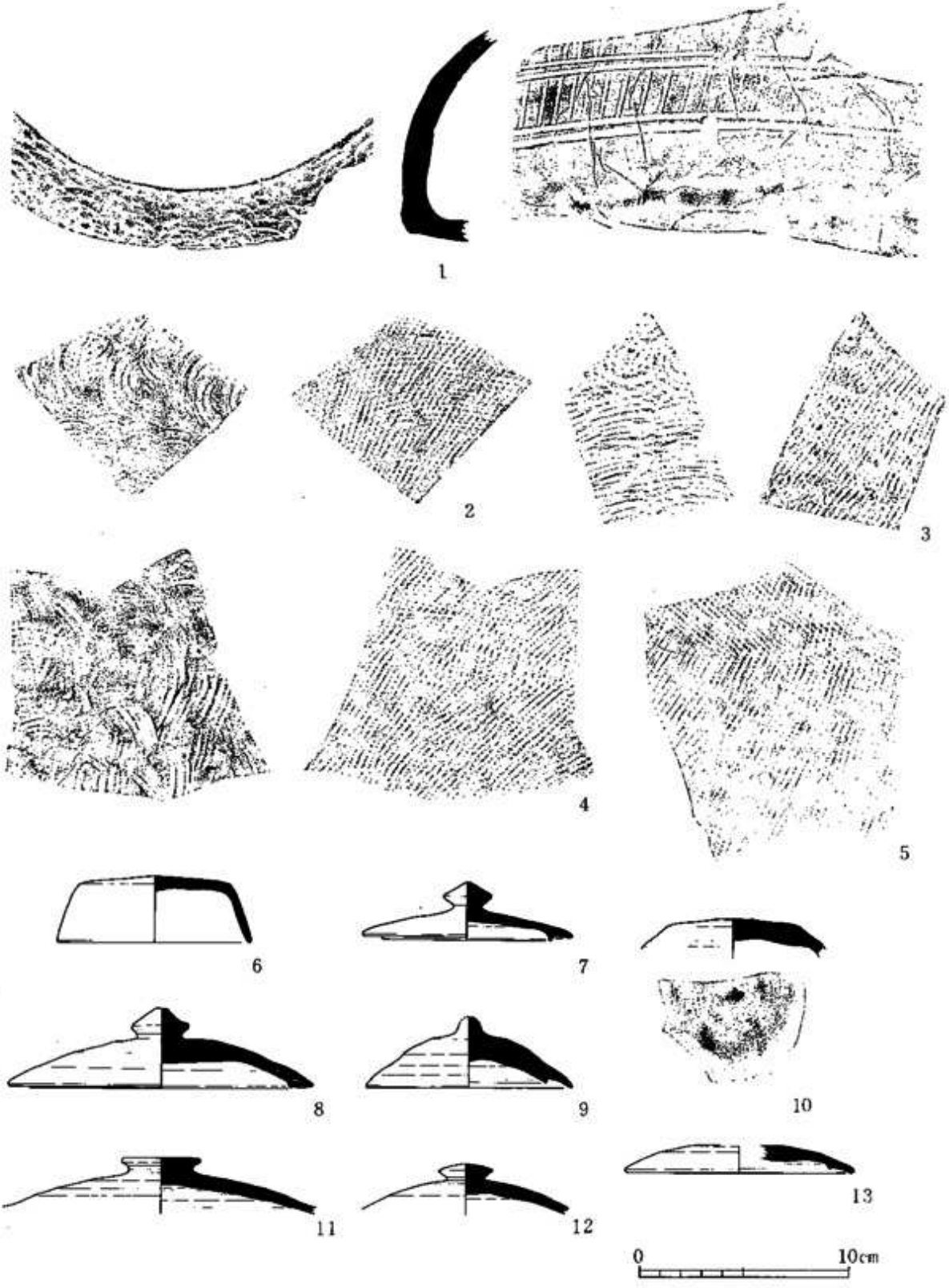
第56図　遺構外出土土器(5)



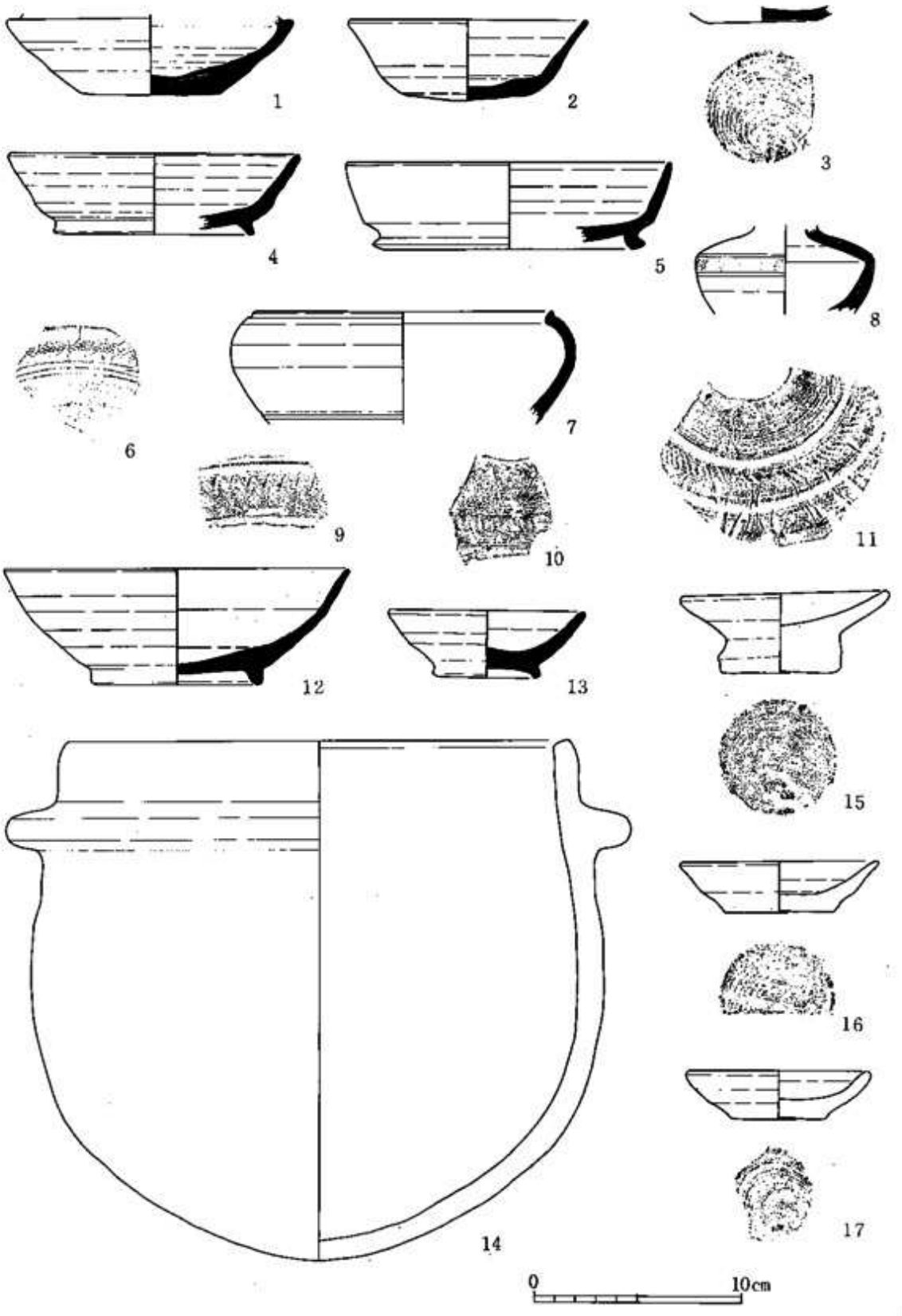
第57図　遺構外出土土器(6)



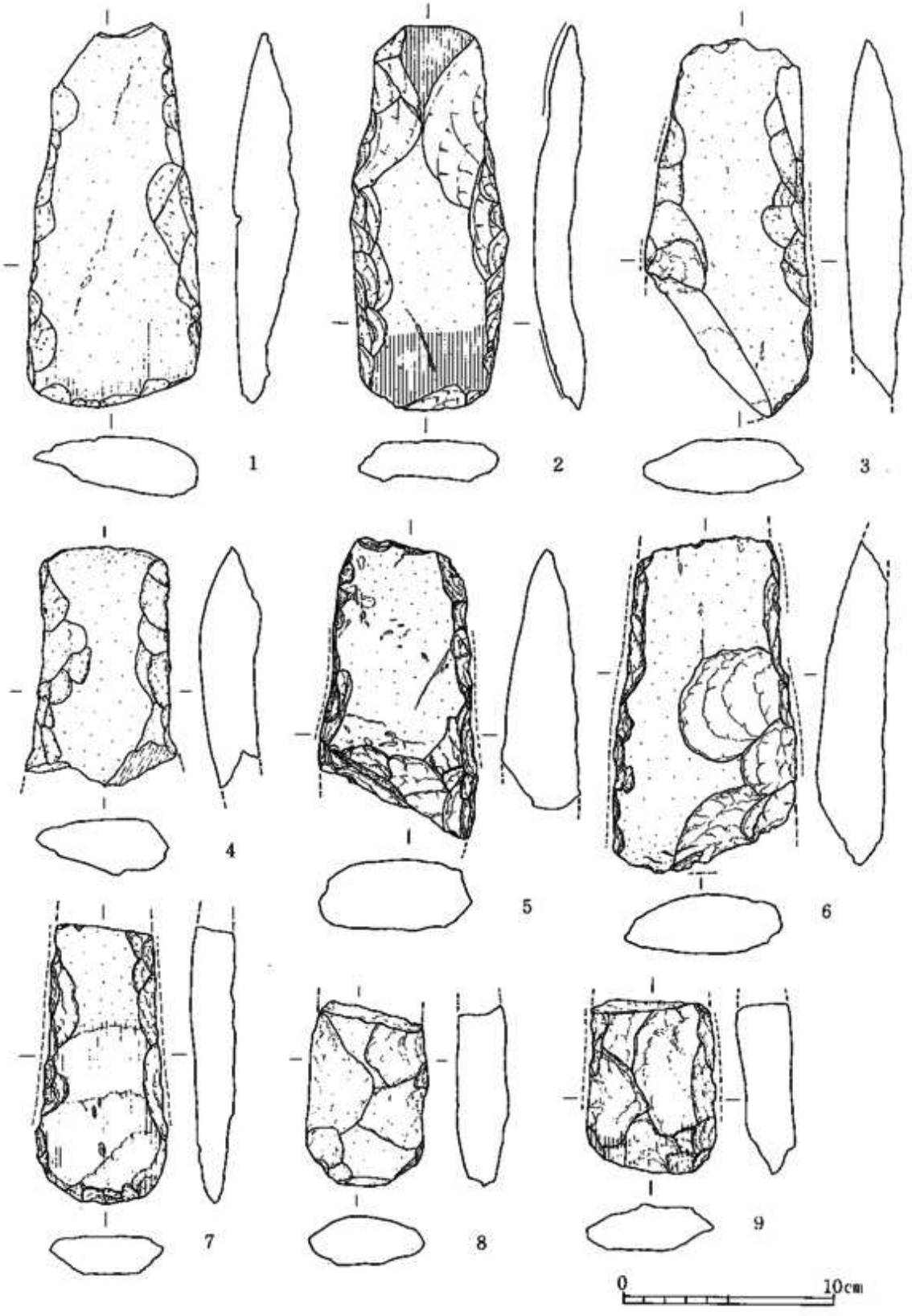
第58図　遺構外出土土器(7)



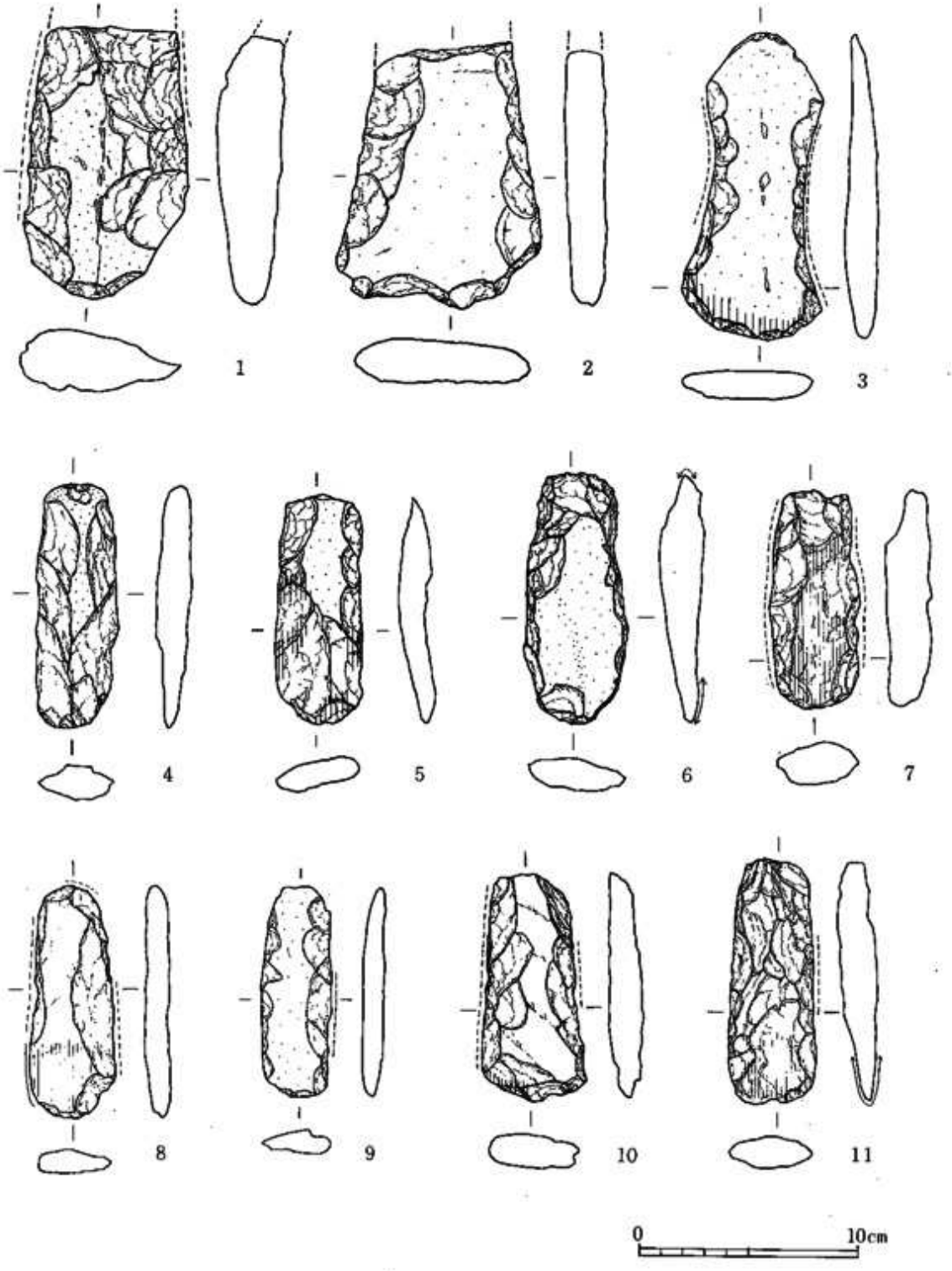
第59図　遺構外出土土器(8)



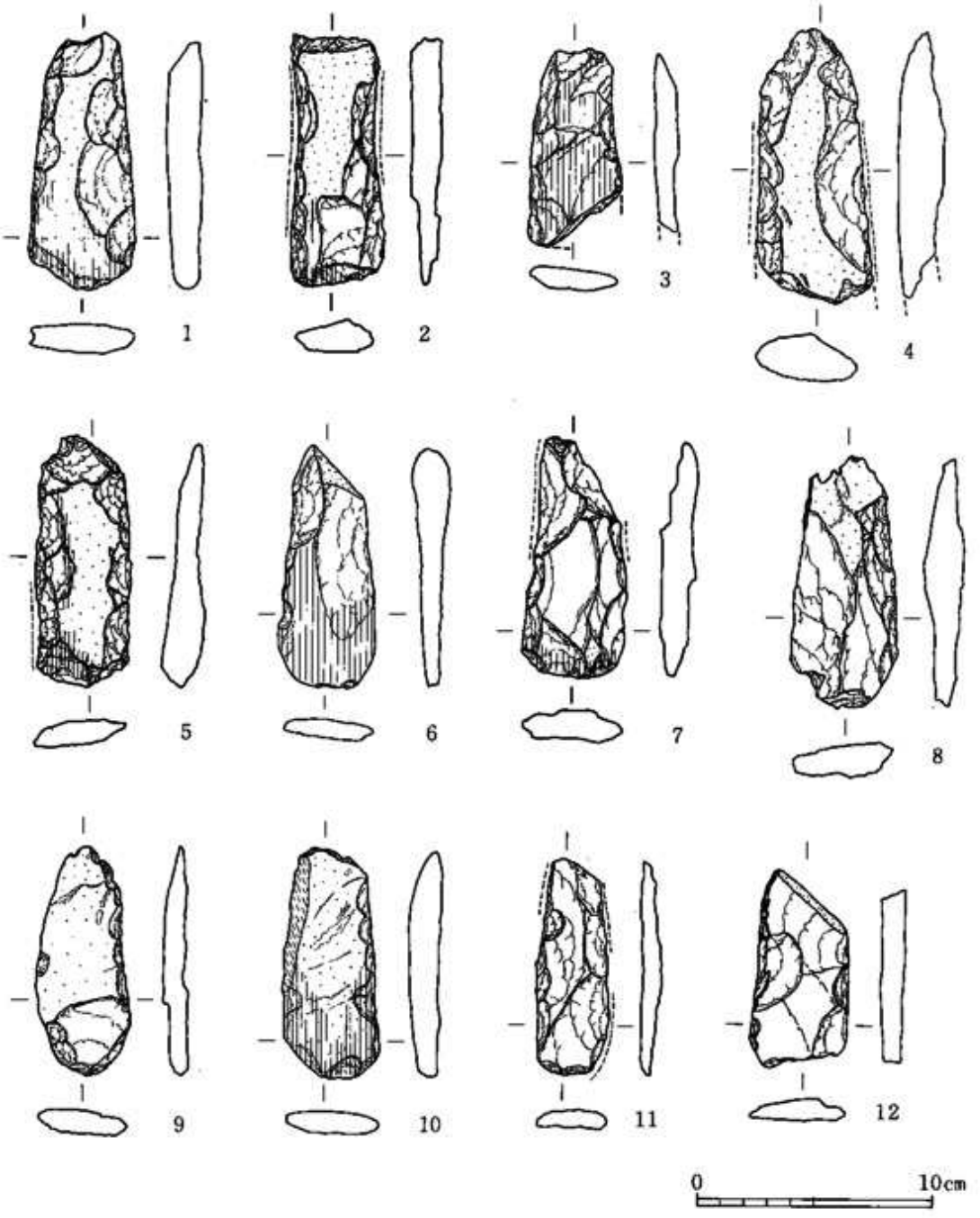
第60図　遺構外出土土器(9)



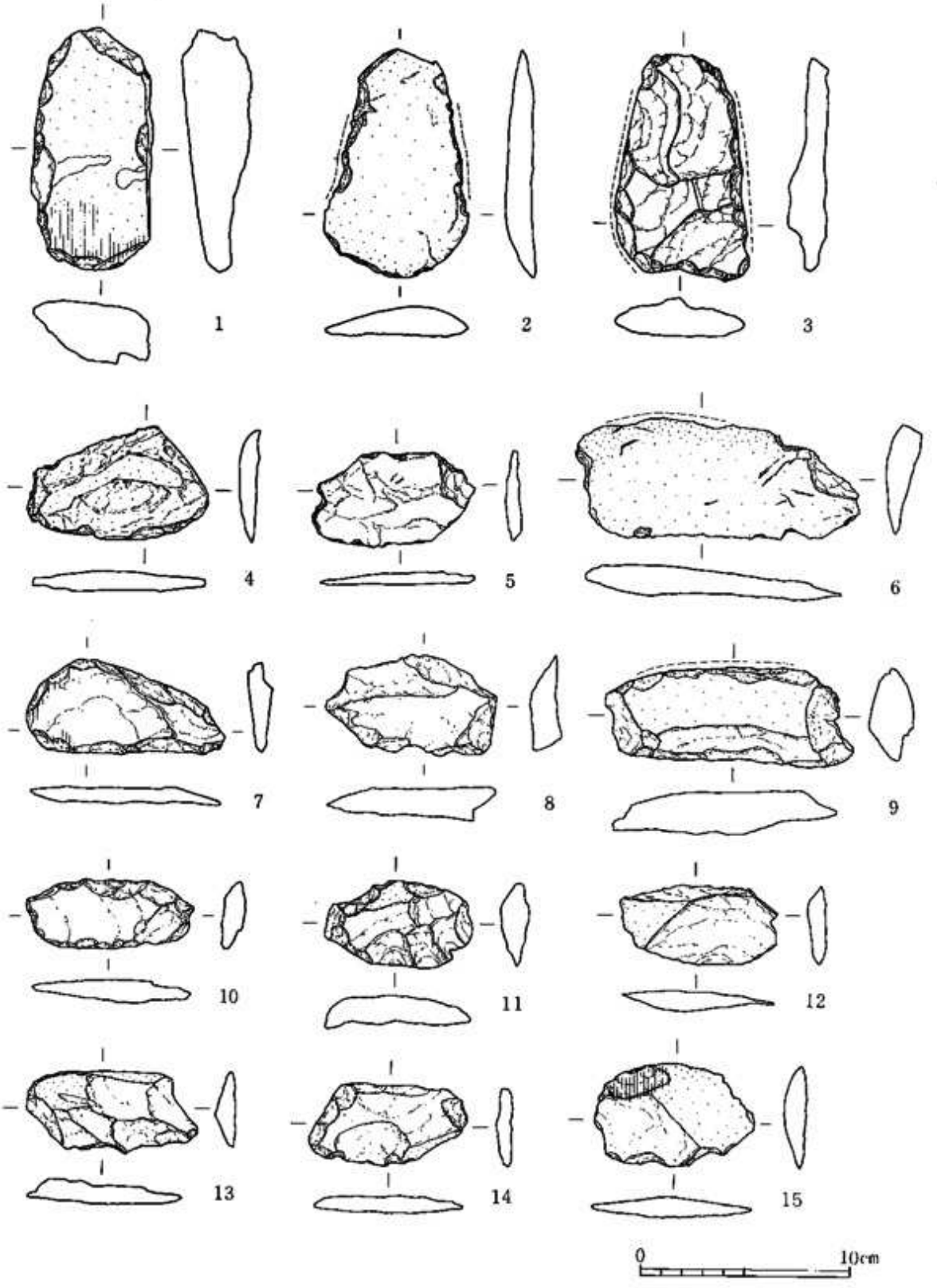
第61図　遺構外出土石器(1)



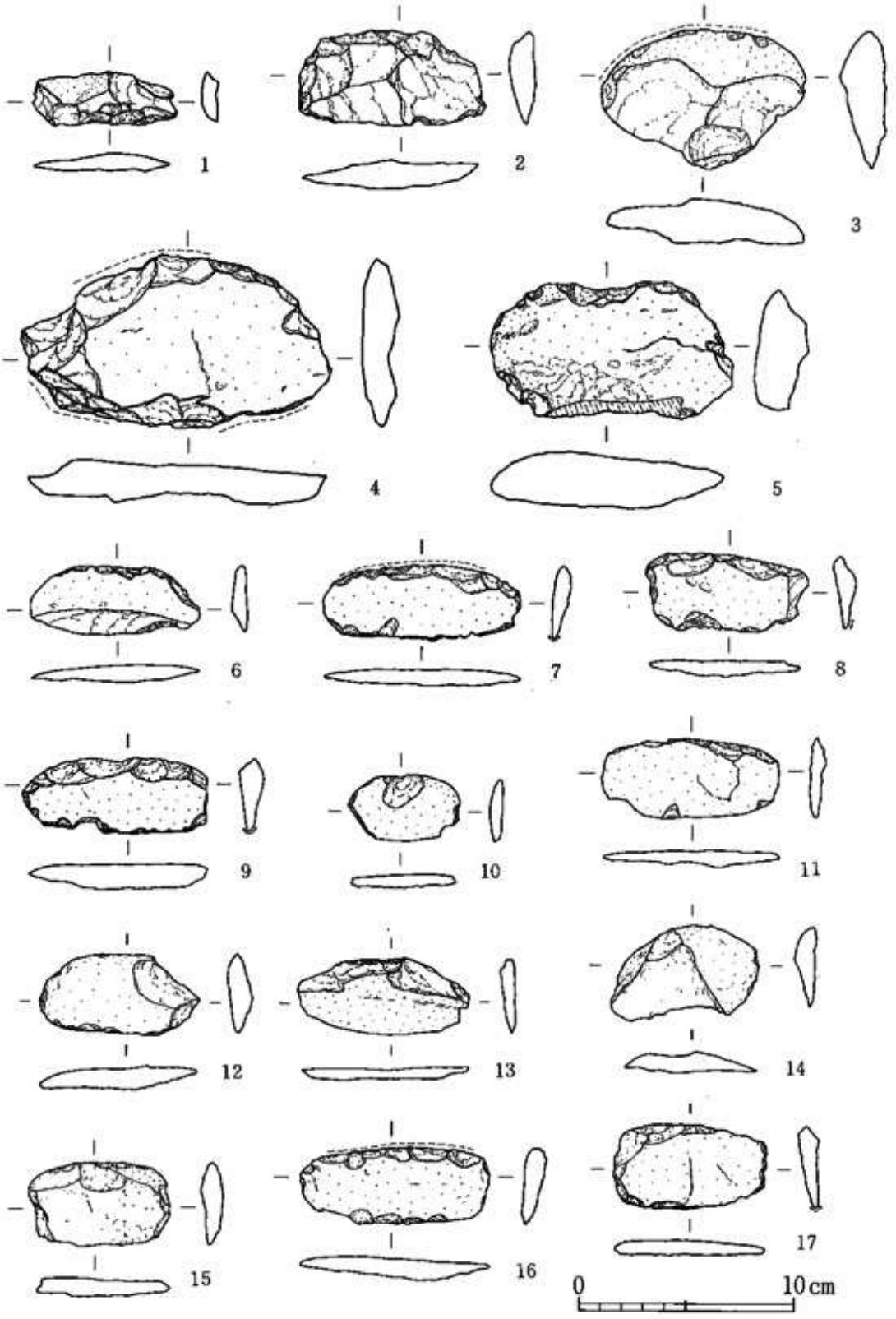
第62図　遺構外出土石器(2)



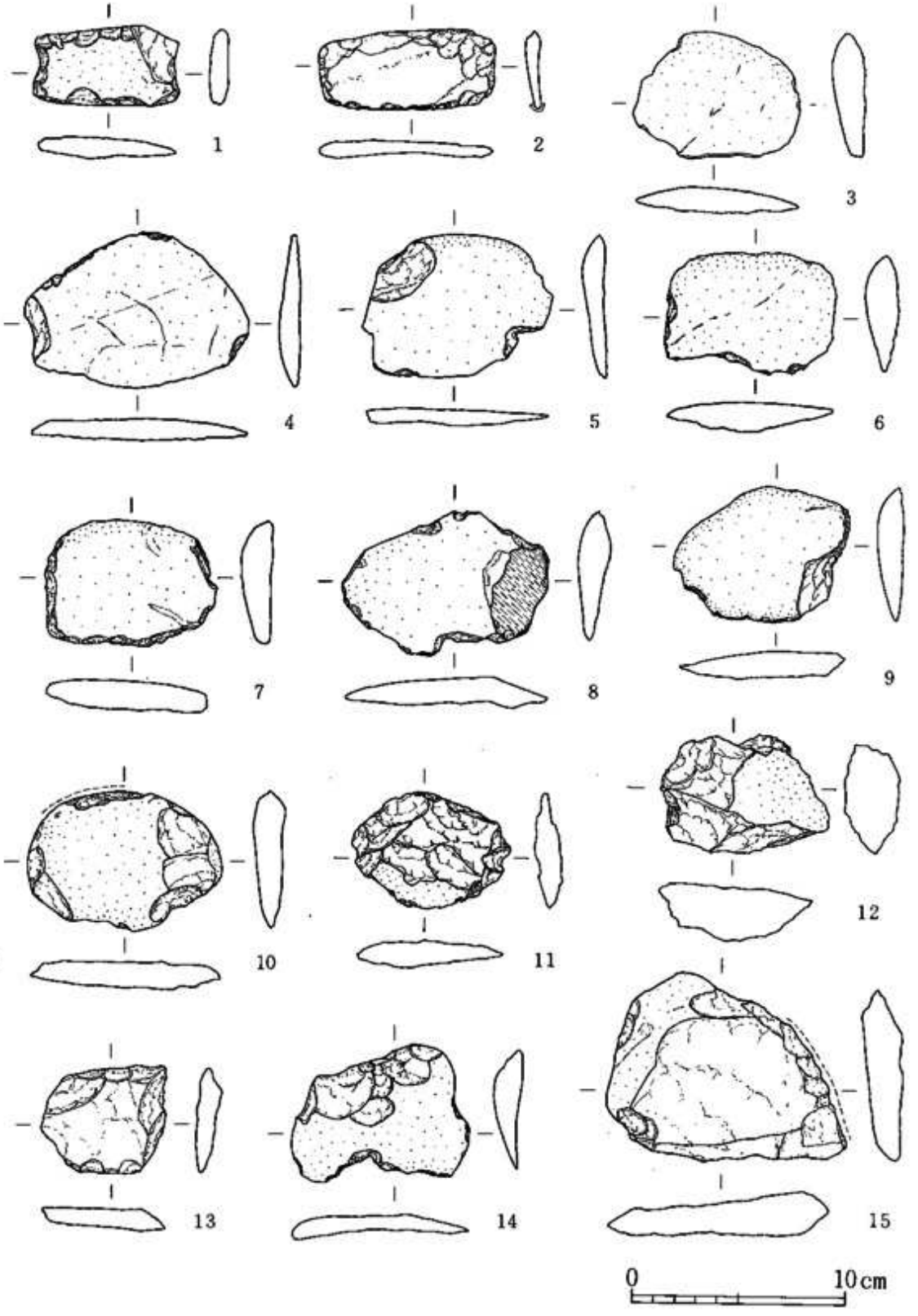
第63図　遺構外出土石器(3)



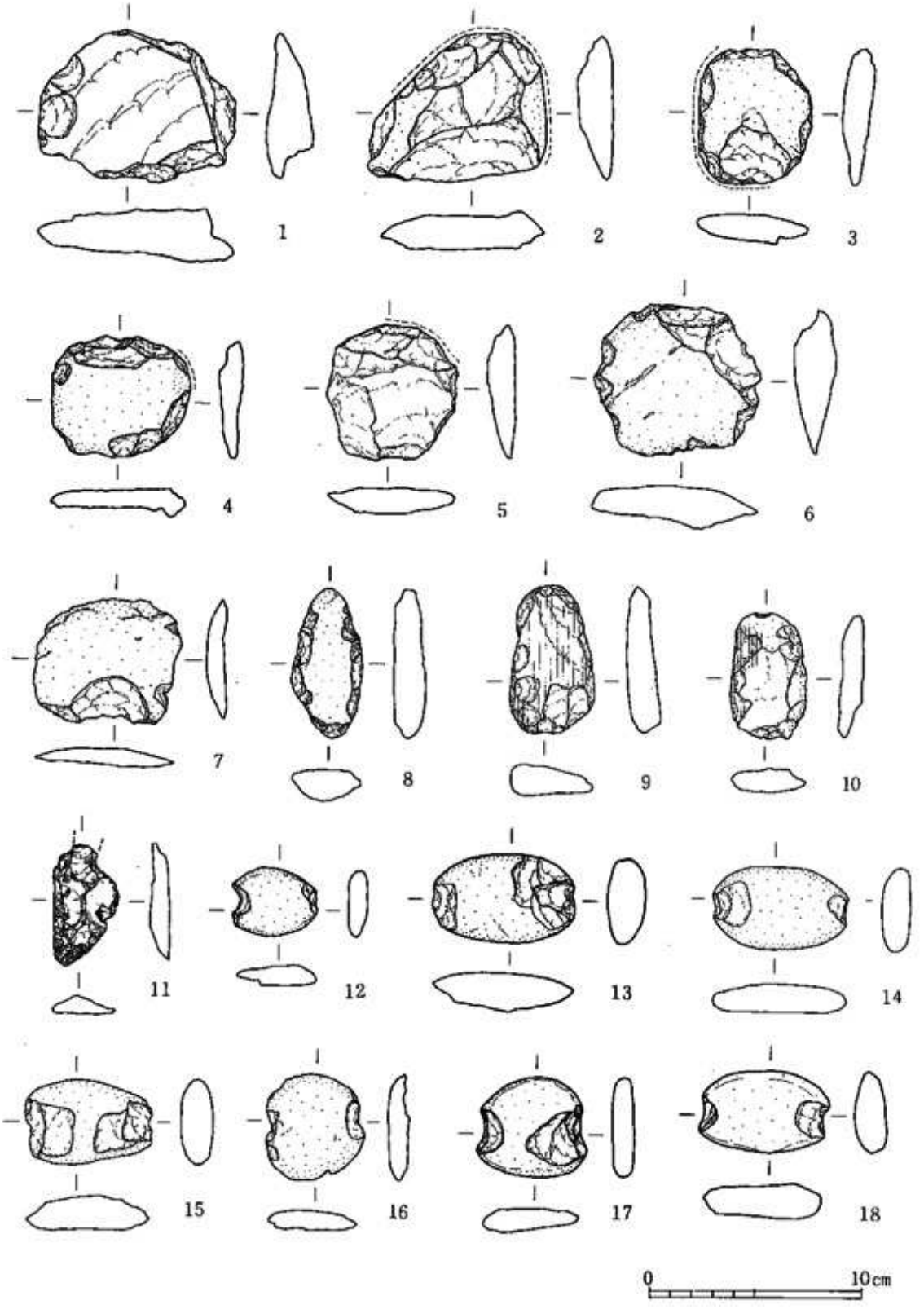
第64図　遺構外出土石器(4)



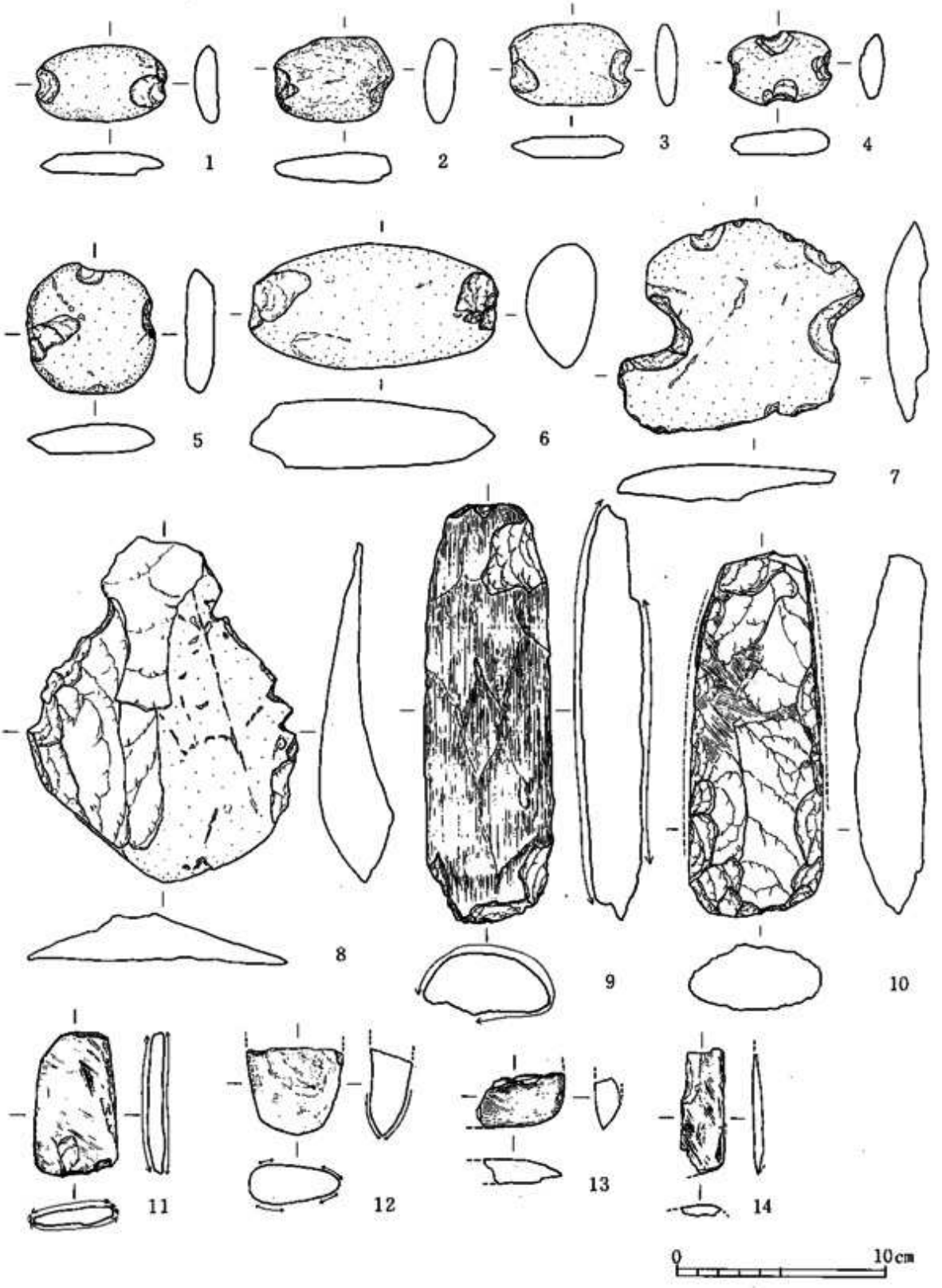
第65図　遺構外出土石器(5)



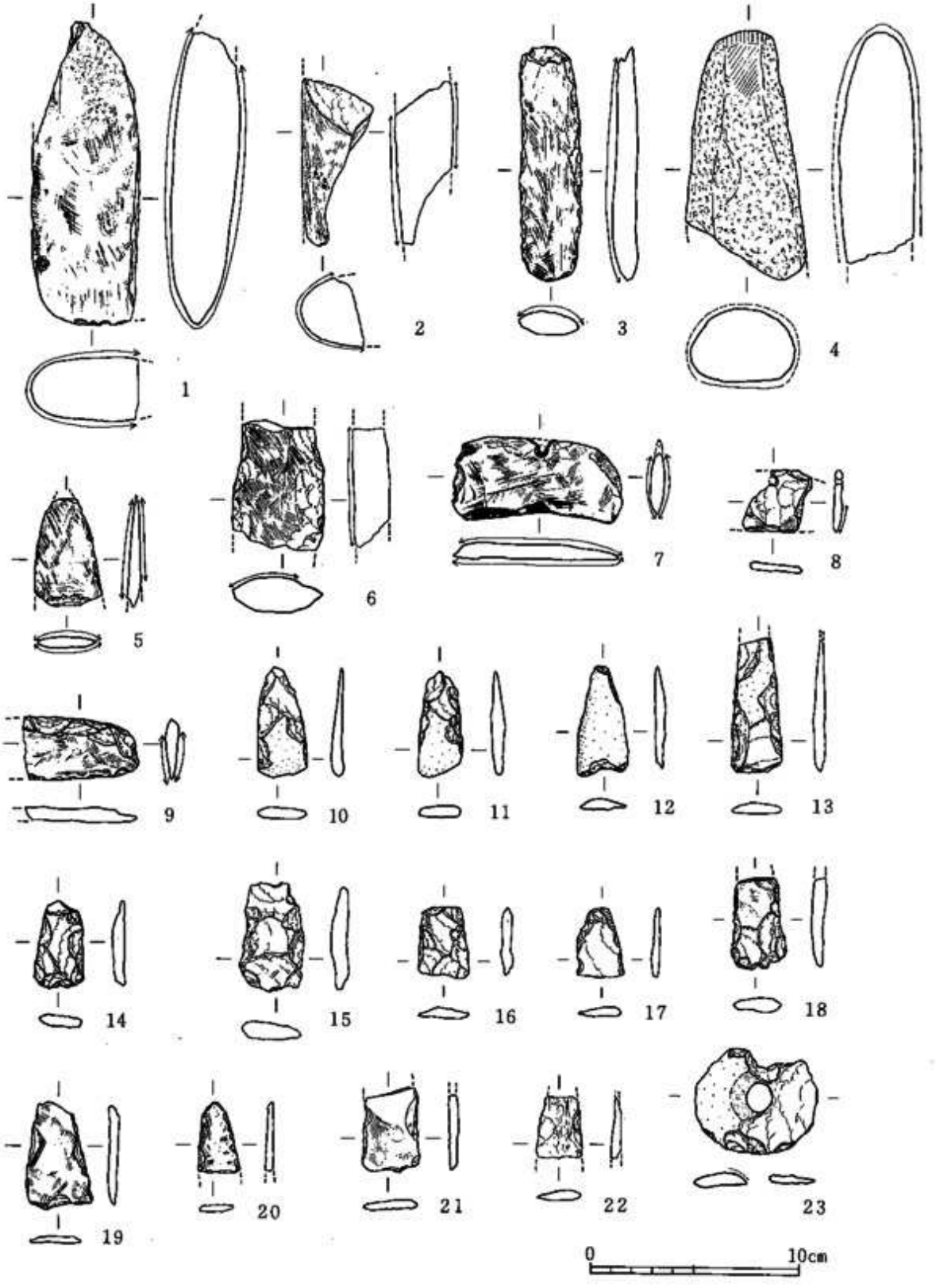
第66図　遺構外出土石器(6)



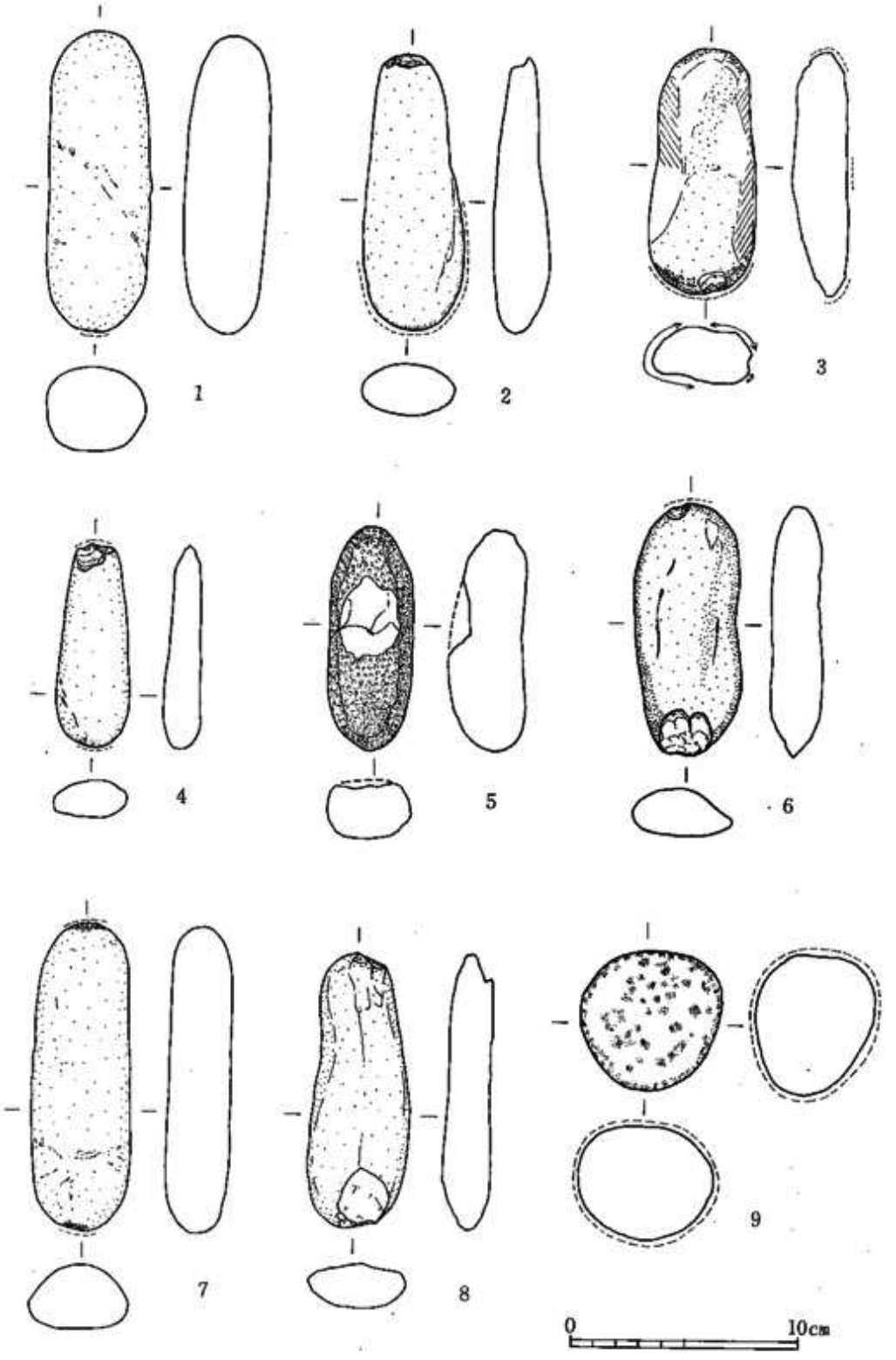
第67図　遺構外出土石器(7)



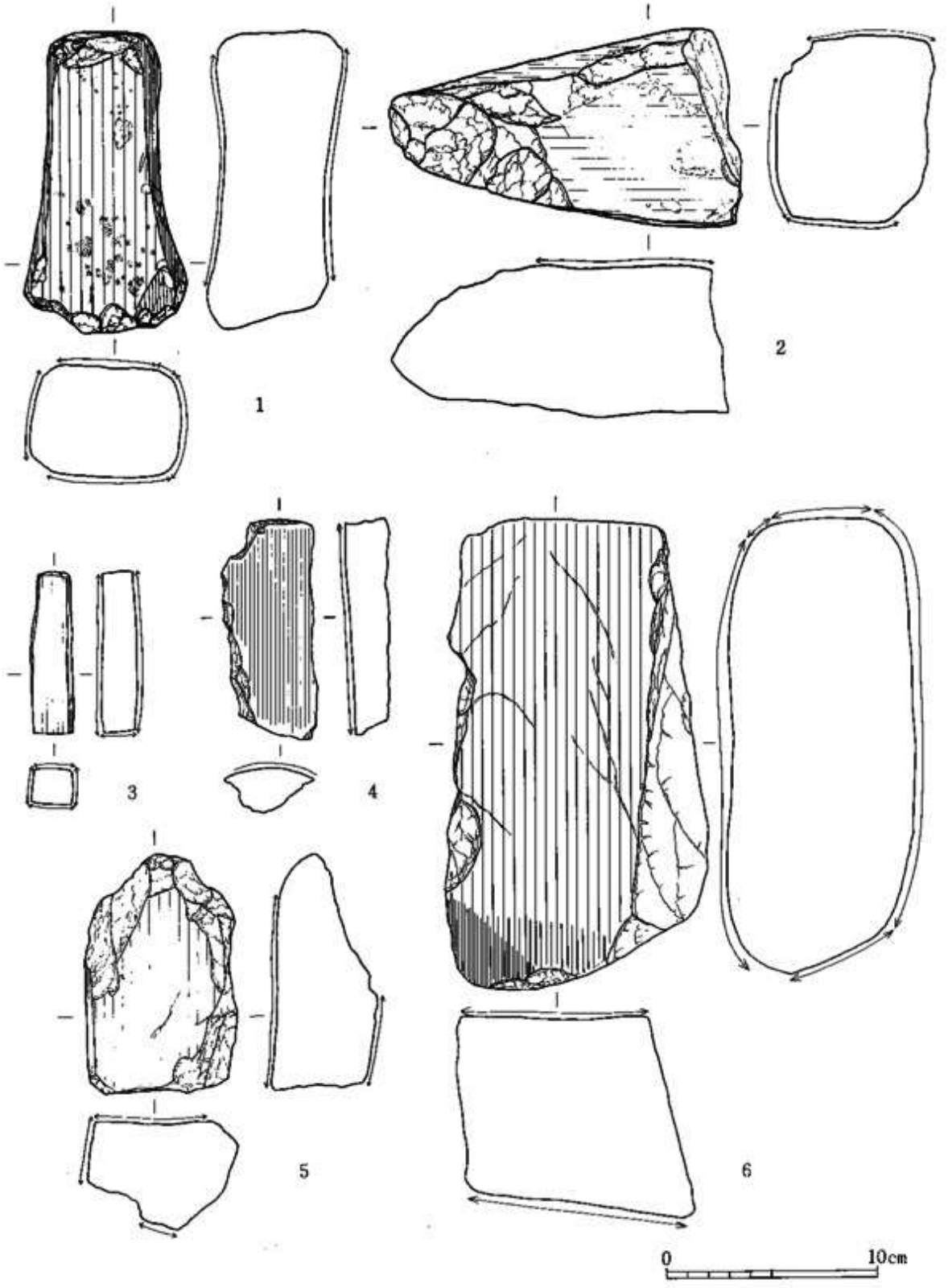
第68図　遺構外出土石器(8)



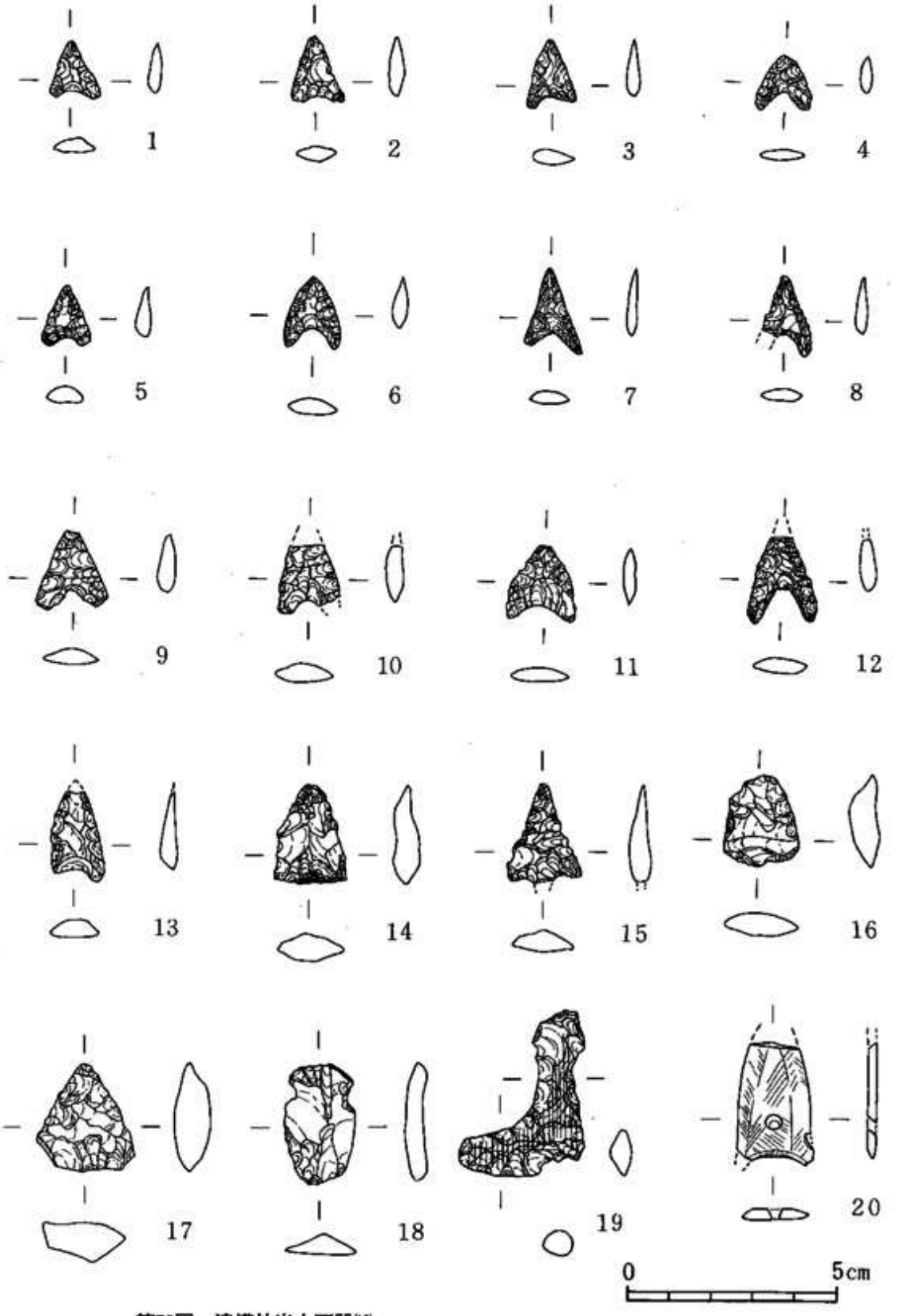
第69図　遺構外出土石器(9)



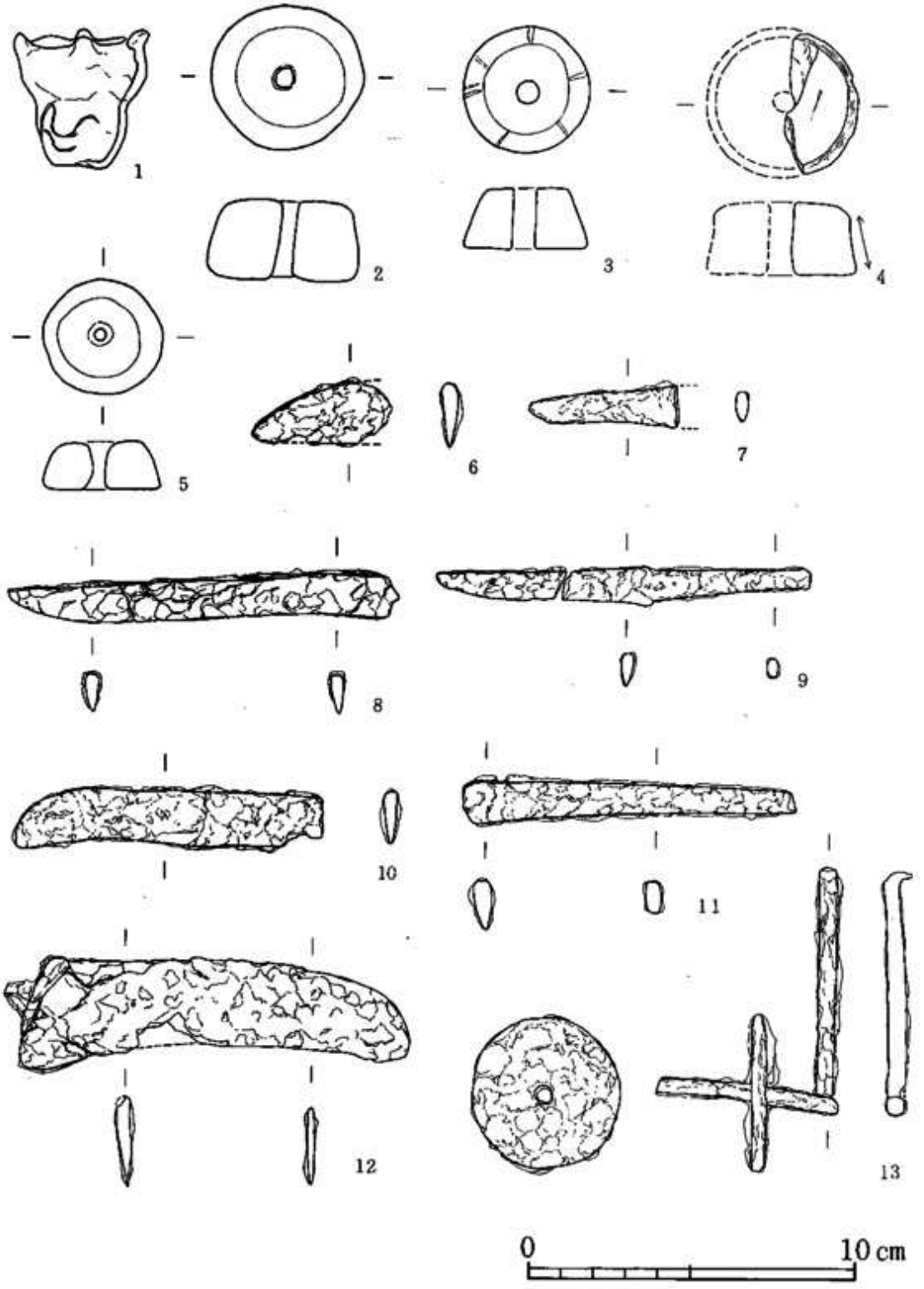
第70図　遺構外出土石器(10)



第71図　遺構外出土石器(1)

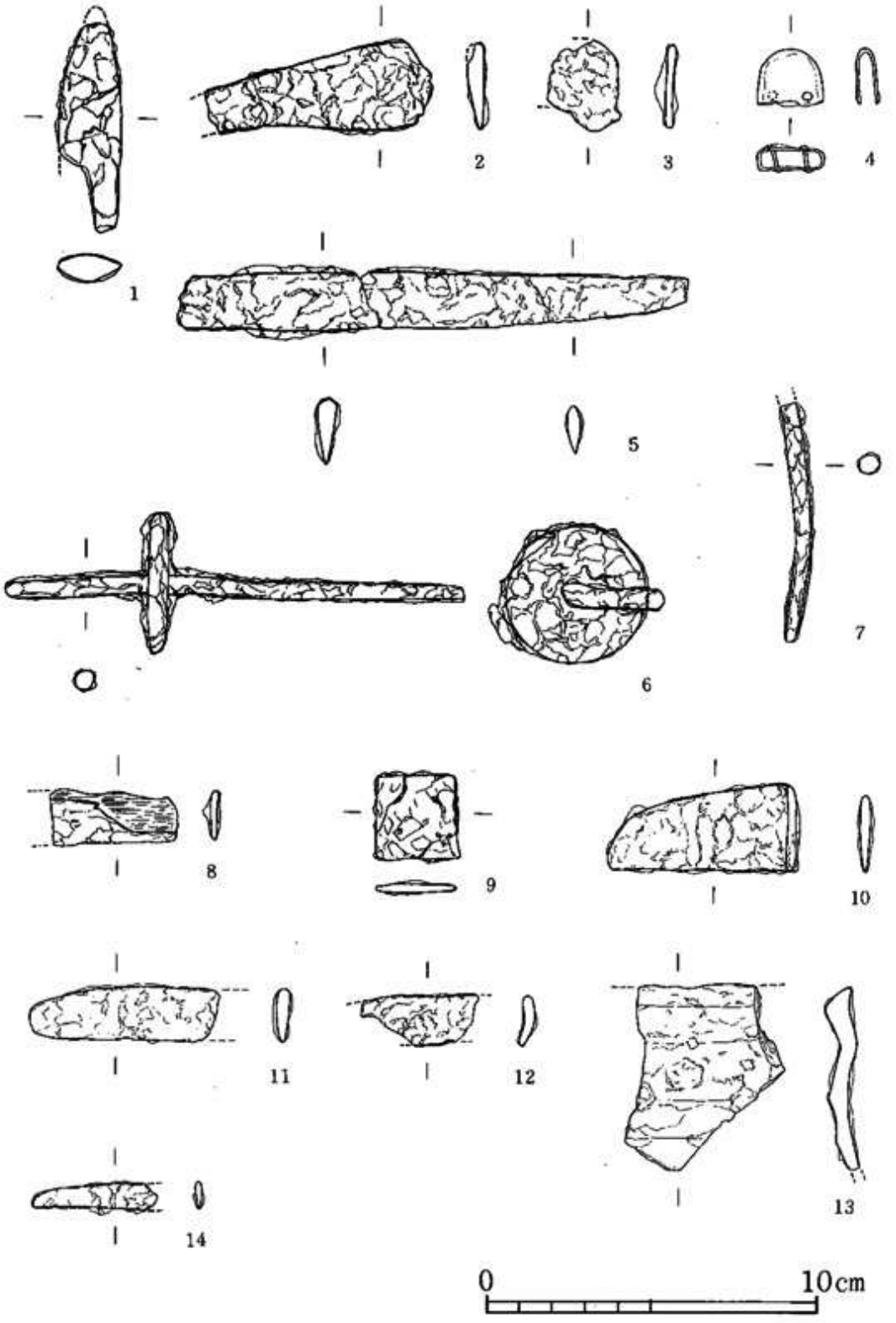


第72図　遺構外出土石器(12)



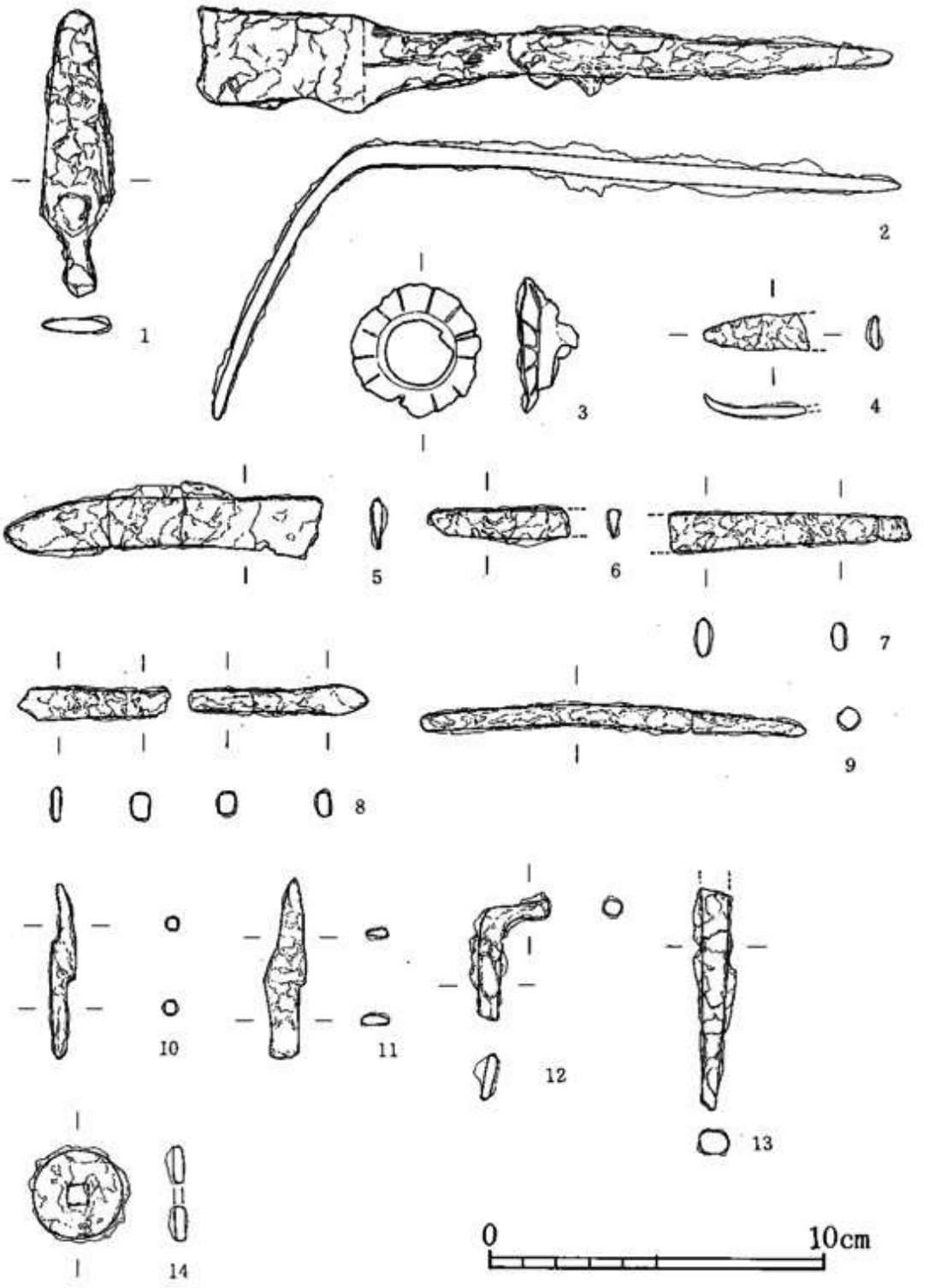
第73図　遺構および遺構外出土遺物

（1・5 遺構外，2 90住，3 149住，4 溝37，6～8 103住，9 104住，10 105住，11 127住，12・13 130住）

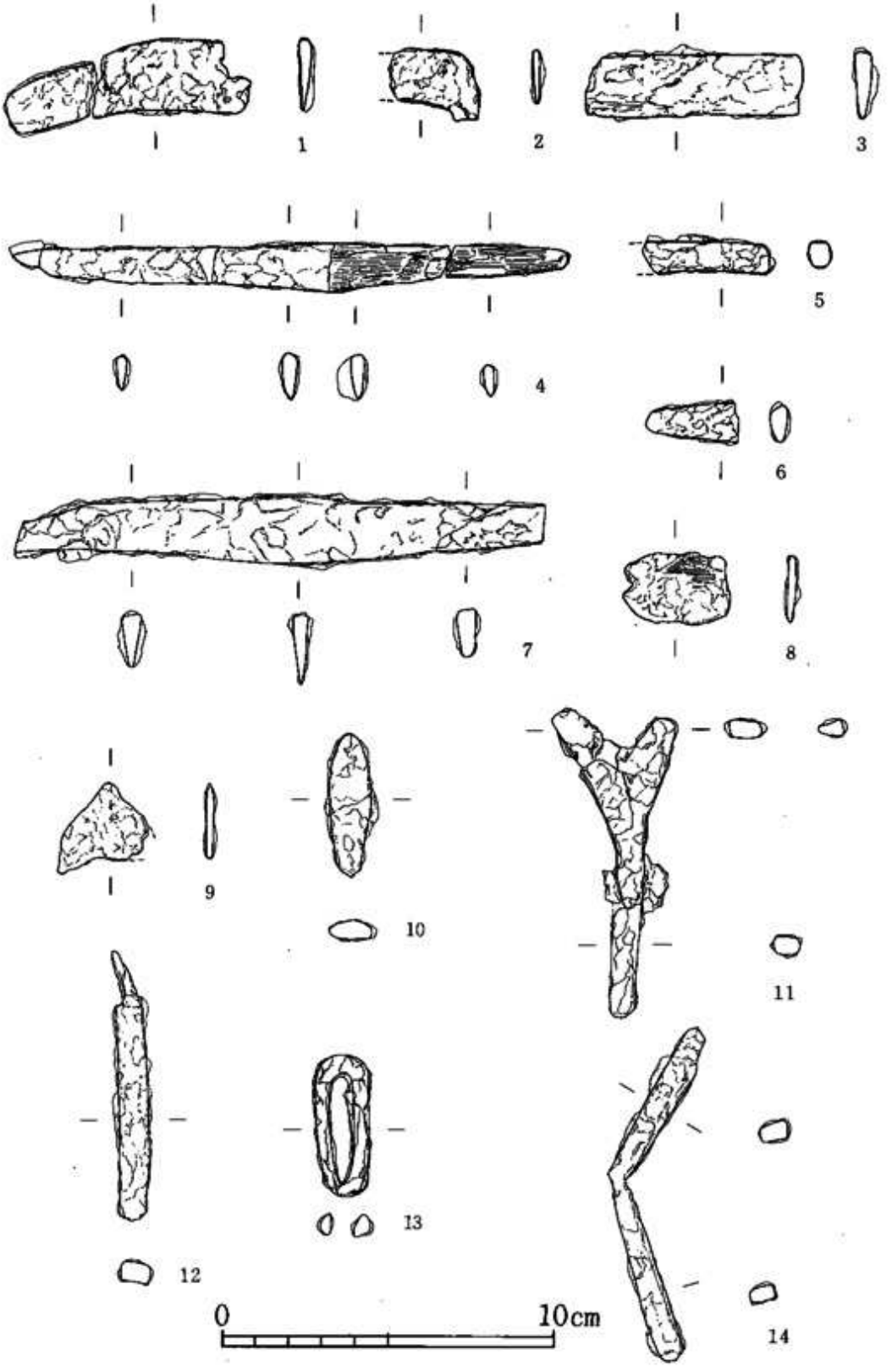


第74図　遺構出土金属製品

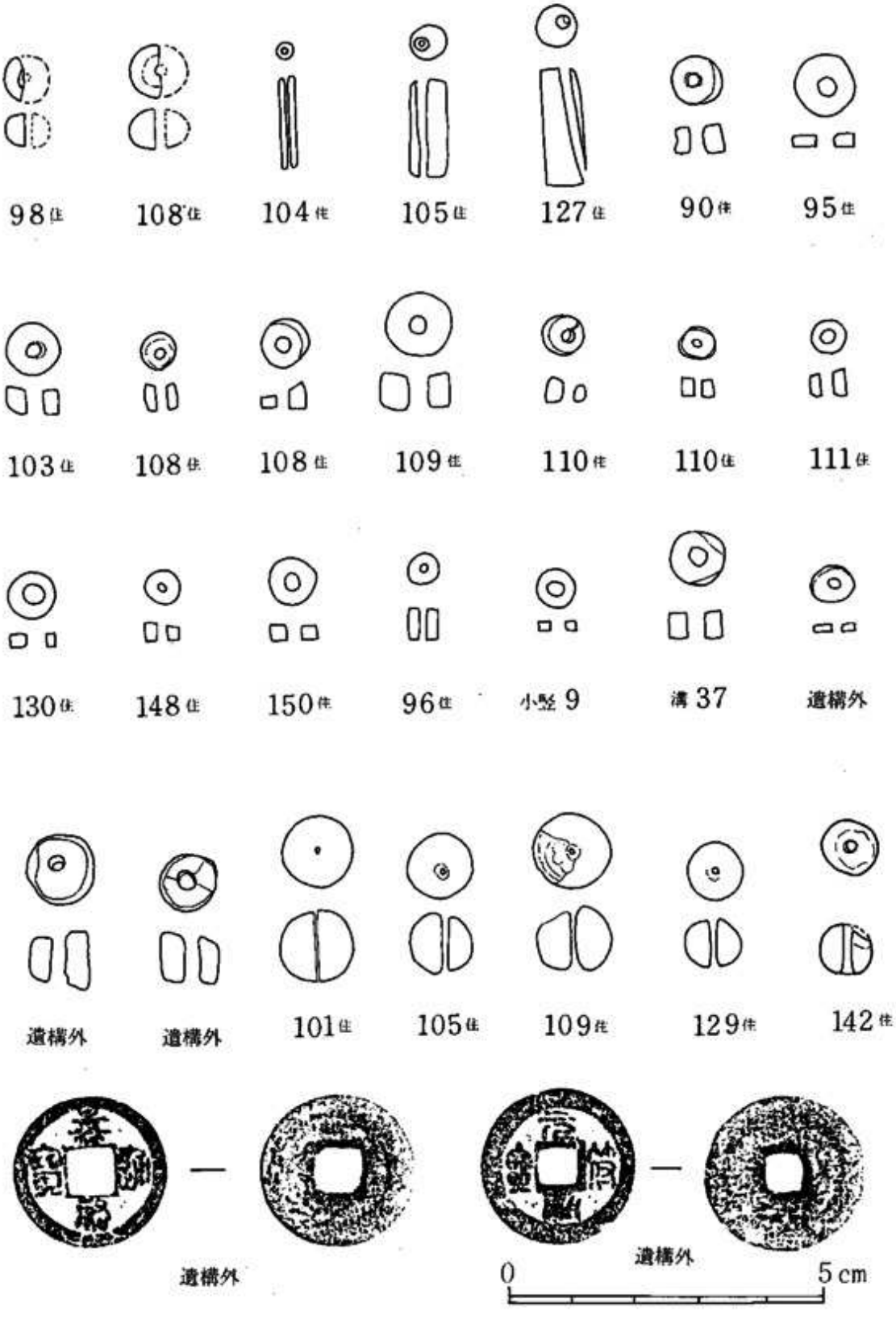
（1 132住，2 134住，3・4 141住，5 148住，6～9 149住 10～12 96住，13 102住，14 123住）



第75図　遺構出土金属製品（1～3 145住，4 建35，5～12 溝37，13・14 溝38）



第76図　遺構外出土鉄製品



第77図　遺構及び遺構外出土遺物

写真図版

図版 1

調査前風景

同　　上

図版 2

遺構分布状況

同　　上

同　　上

図版 3

遺構分布状況

同　　上

同　　上

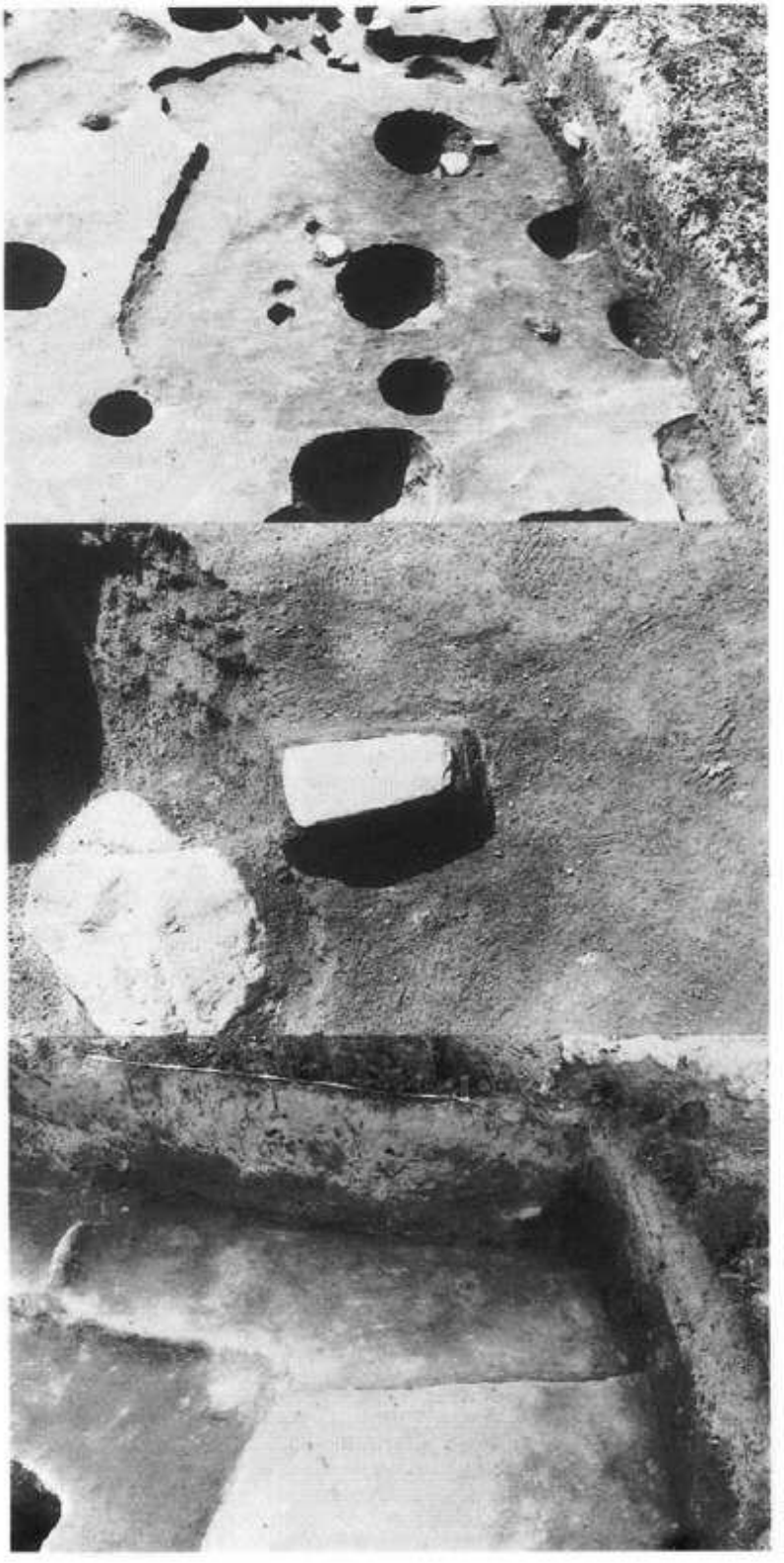
図版 4

遺構分布状況

同　　上

同　　上

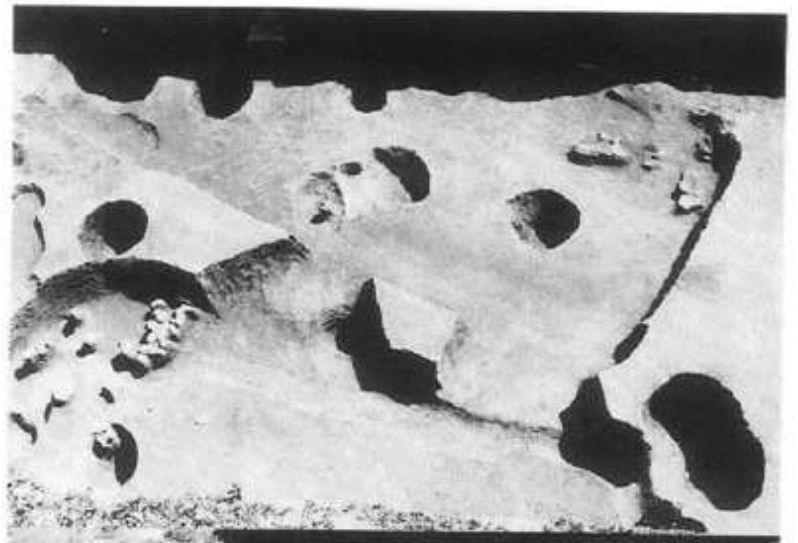
図版 5



92号住居址

同遺物出土状態

136号住居址



90・91号住居址

91号住居址遺物出土状態

95号住居址

図版 7

97号住居址

98号住居址

図版 8

99号住居址

100号住居址

101号住居址

図版 9

103号住居址

同　カマド

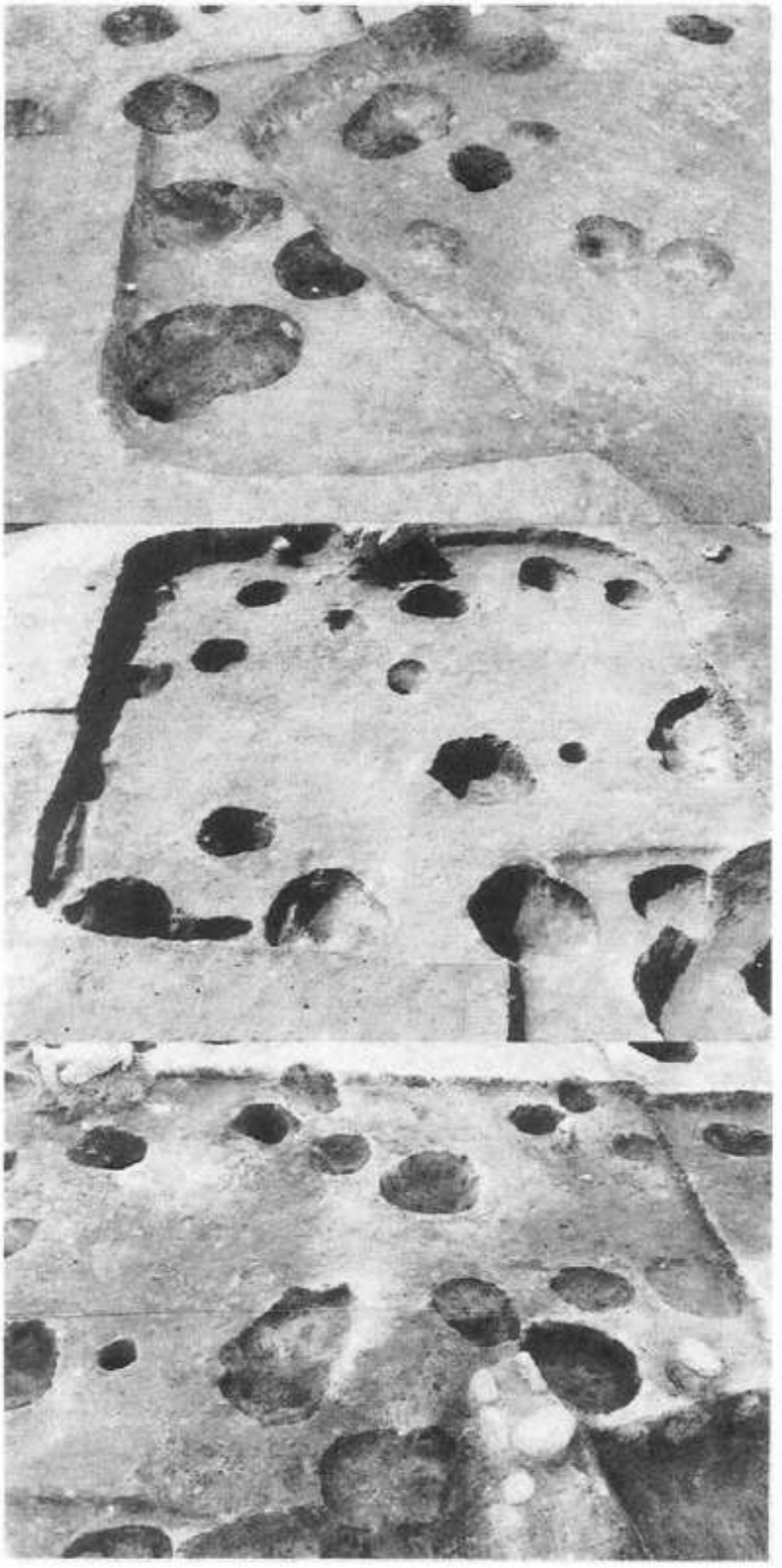
104・105号住居址

106号住居址

同遺物出土状態

107号住居址

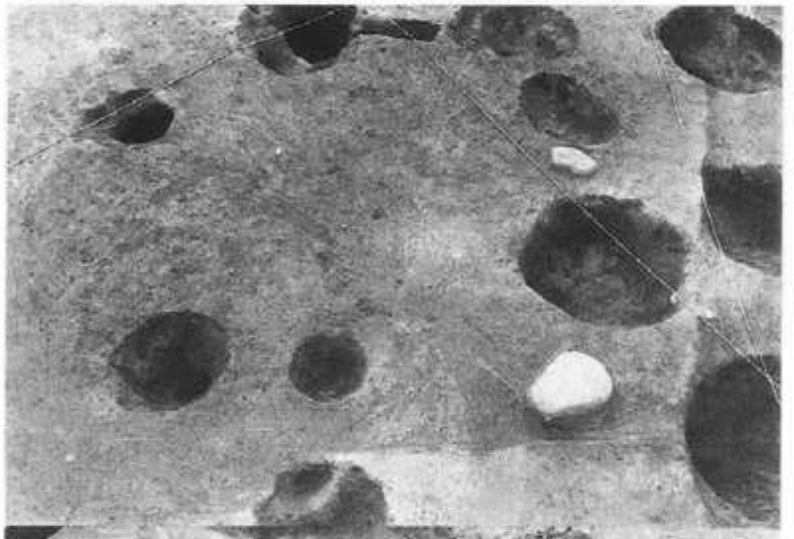
図版11



109号住居址

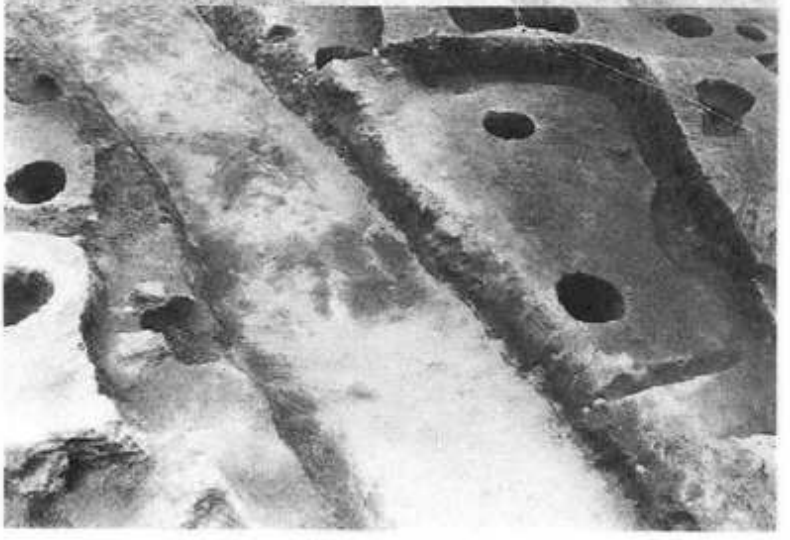
110号住居址

111号住居址



112号住居址

113号住居址



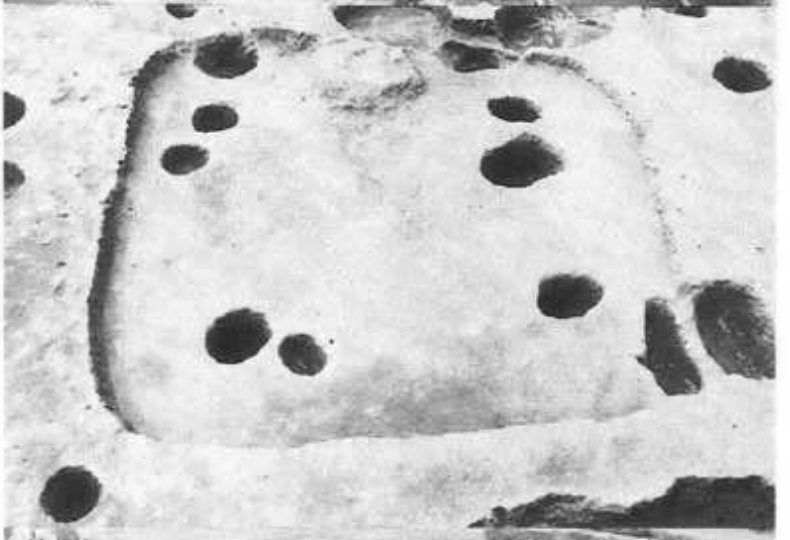
114号住居址

図版13

115号住居址

116号住居址

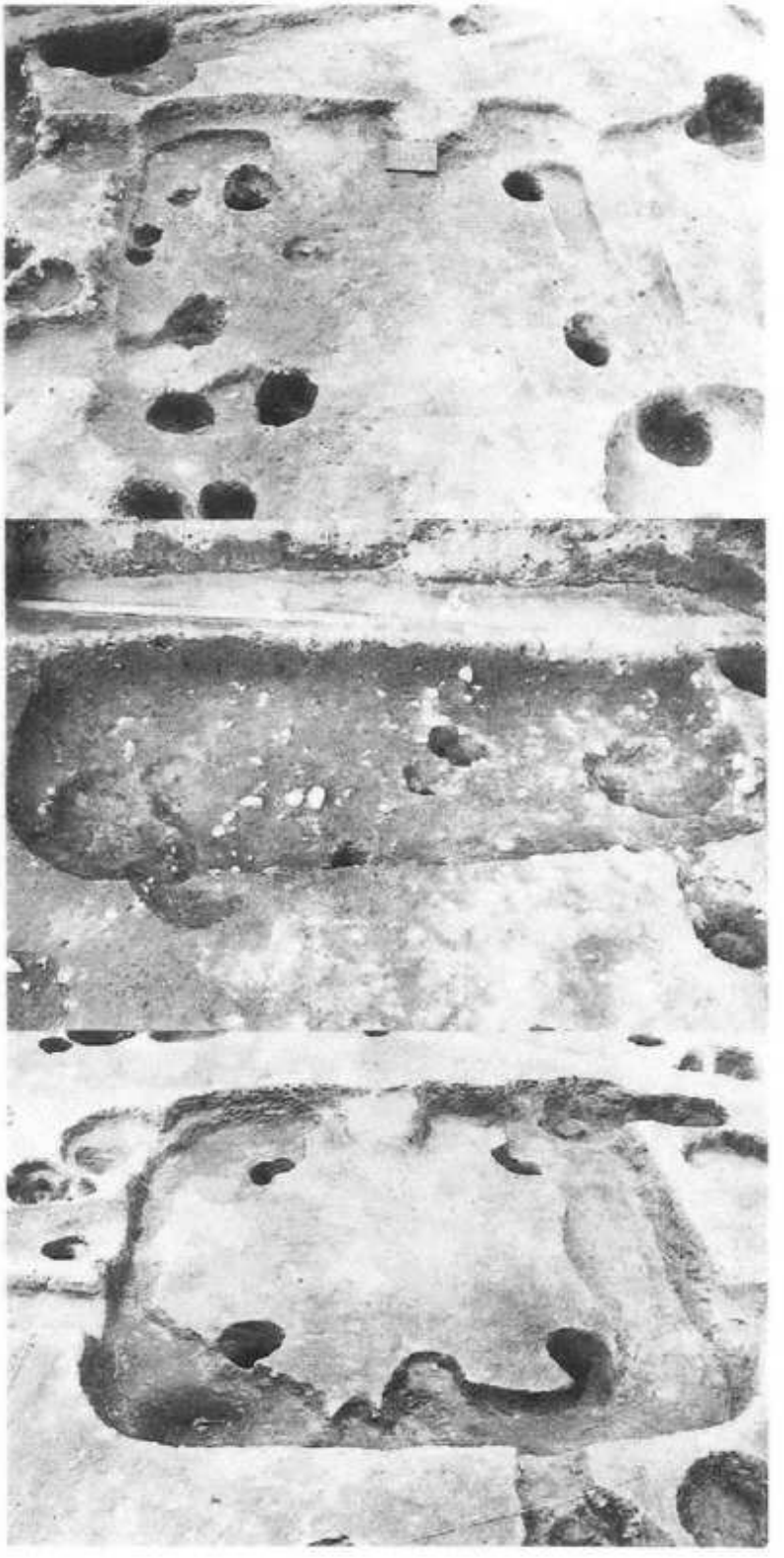
117号住居址



118号住居址

同　カマド

図版15



119号住居址

120号住居址

122号住居址

124号住居址

125号住居址

同遺物出土状態

図版17

126号住居址

同遺物出土状態

127号住居址

128号住居址

129号住居址

同カマド断面

図版19

130号住居址

同遺物出土状態

131号住居址

132号住居址

134号住居址

同　カマド

図版21

135号住居址

137号住居址埋設土器

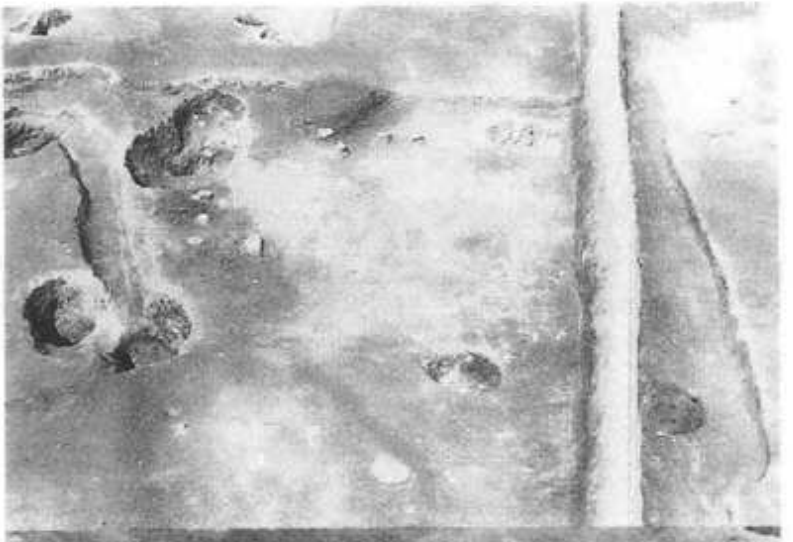
同　断面

138号住居址カマド

139号住居址

140号住居址

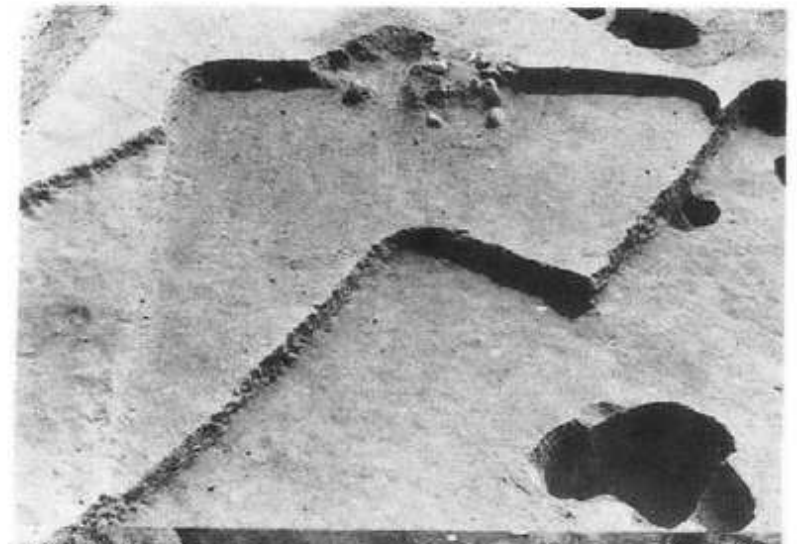
図版23



141号住居址

同遺物出土状態

142号住居址



148号住居址

149号住居址

同遺物出土状態

図版25

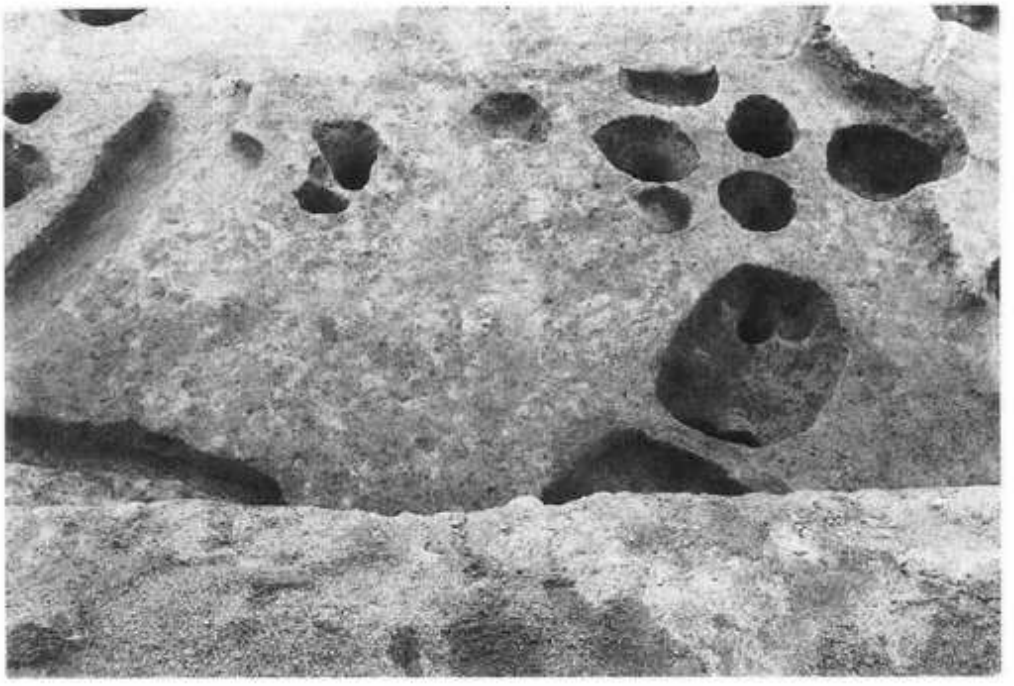
152号住居址

153号住居址

156号住居址

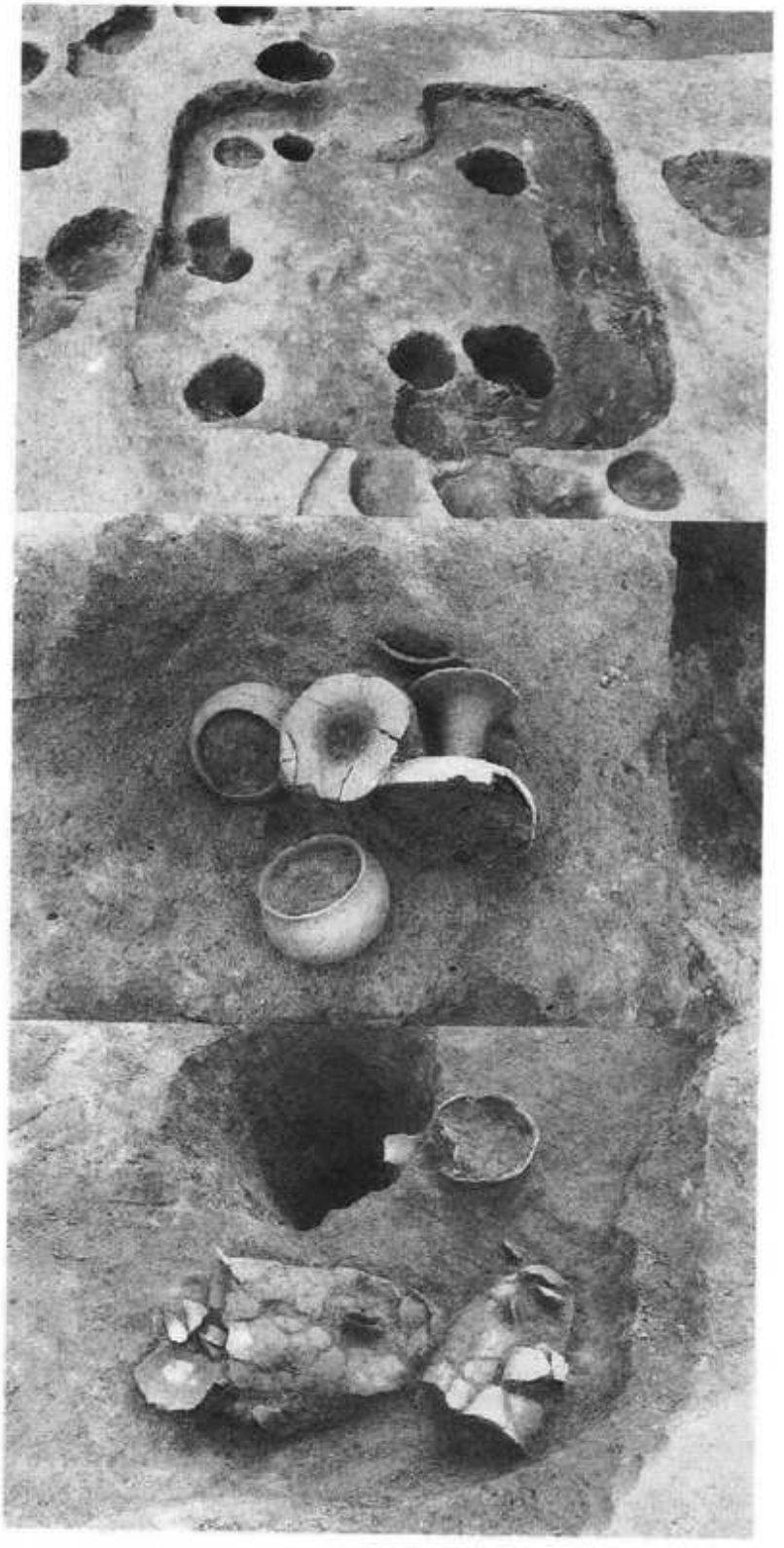
96号住居址

同カマド断面



102号住居址

同遺物出土状態



123号住居址

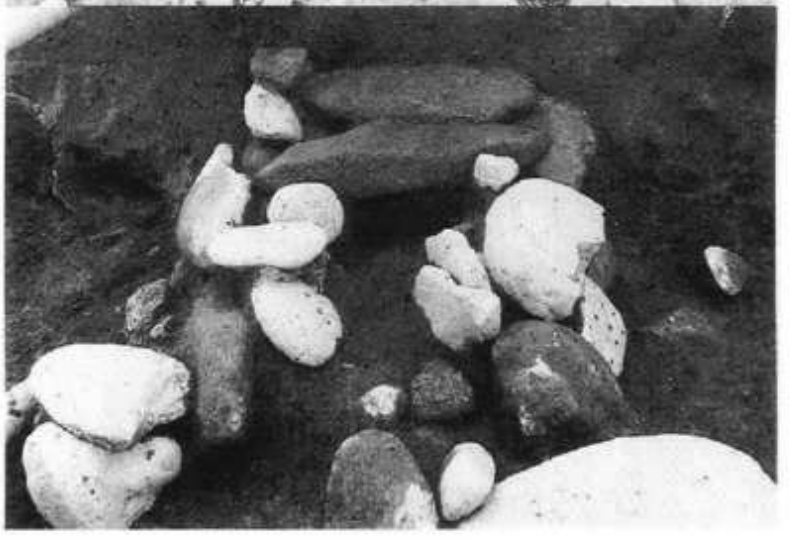
同遺物出土状態

同　　上

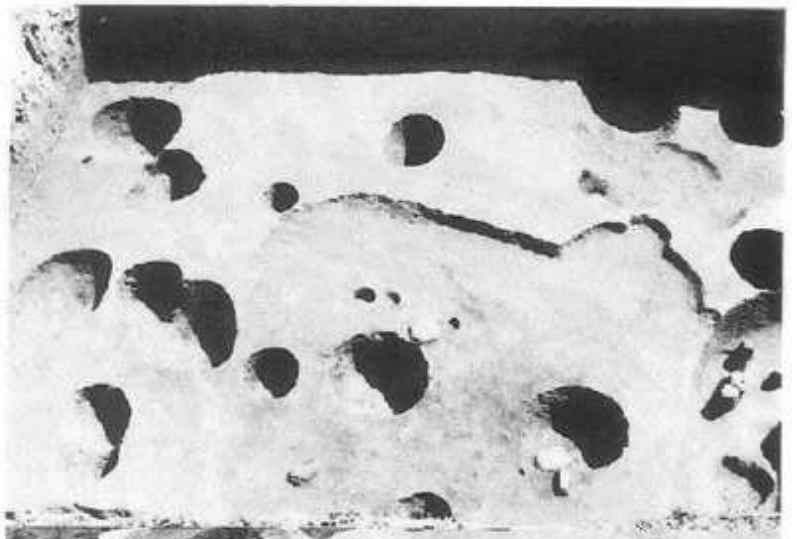
図版29

145号住居址遺物出土状態

155号住居址



同　カマド



掘立柱建物址25

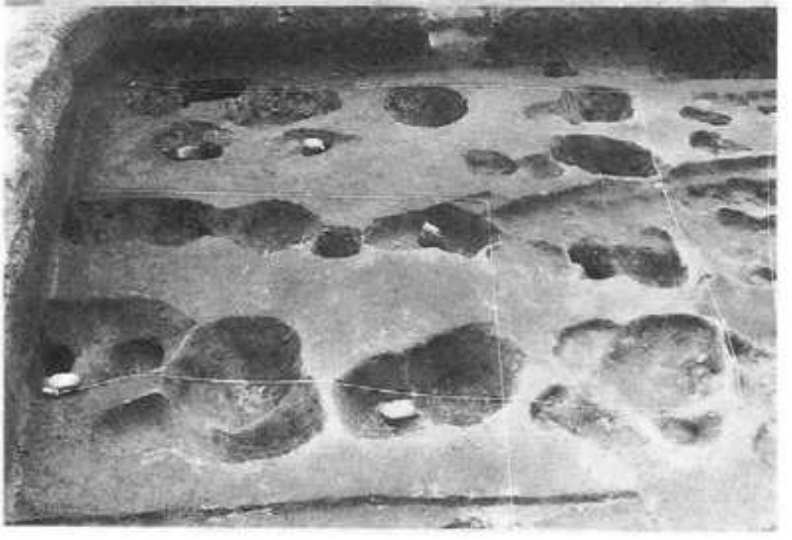
掘立柱建物址28

掘立柱建物址29

図版31

掘立柱建物址30

掘立柱建物址31



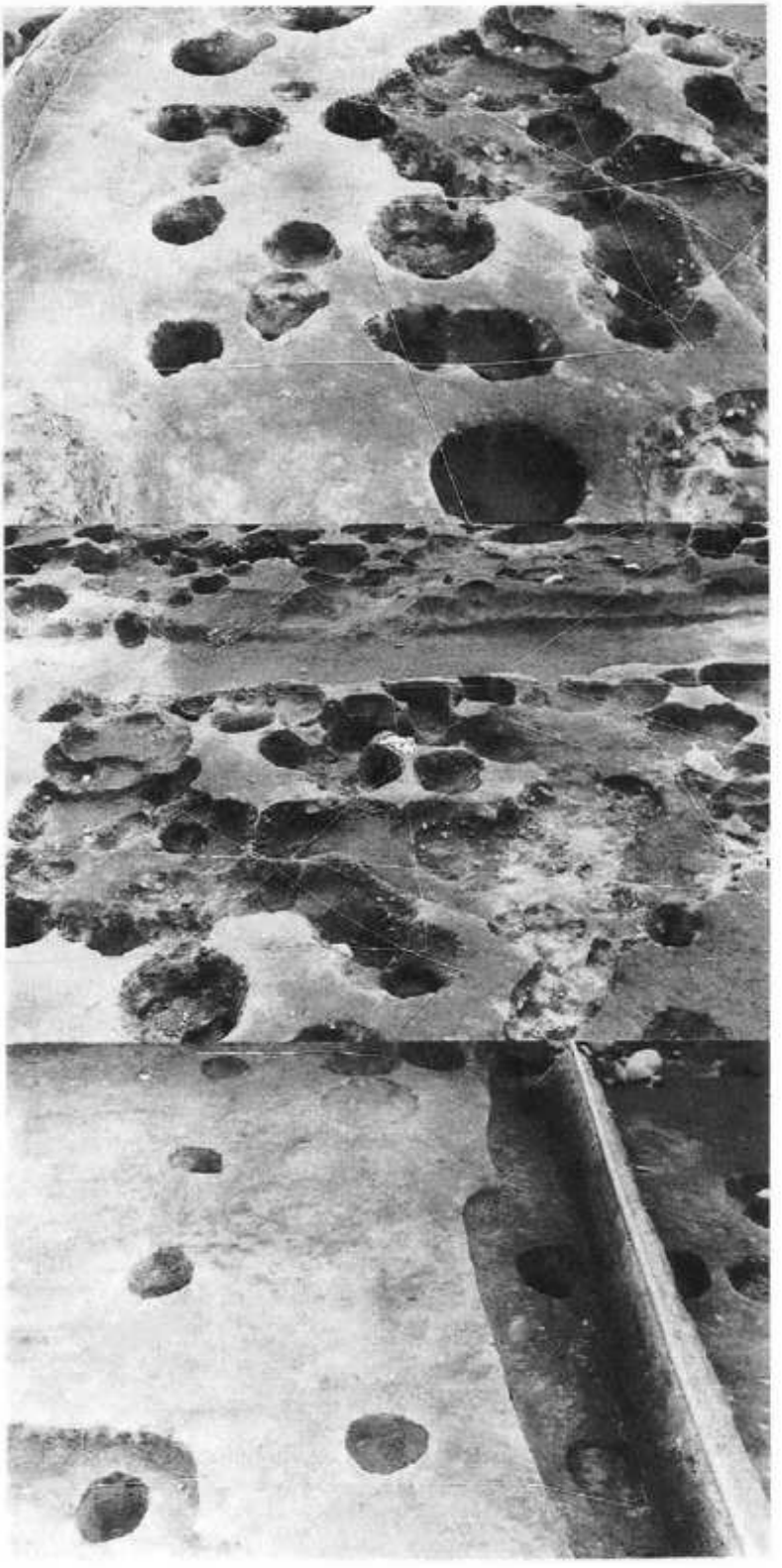
掘立柱建物址33

掘立柱建物址34・38

掘立柱建物址35

掘立柱建物址37

図版33



掘立柱建物址39

掘立柱建物址40

掘立柱建物址46

土坑16・溝状址2

土坑17

土坑18

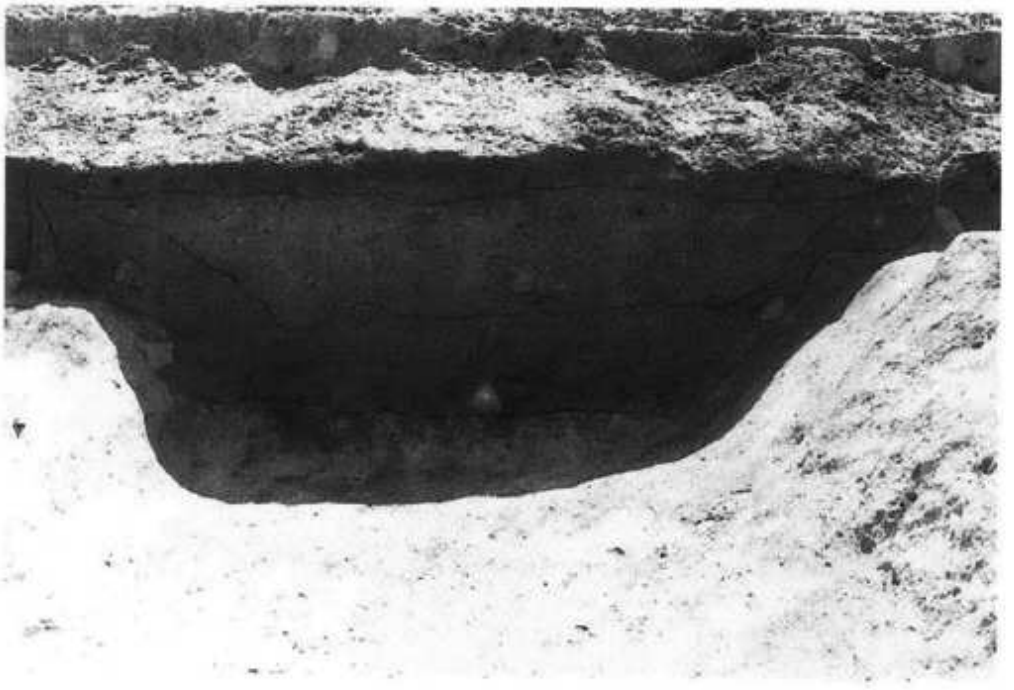
図版35

土坑19

小竪穴 8

小竪穴10

溝址37・柱列址1



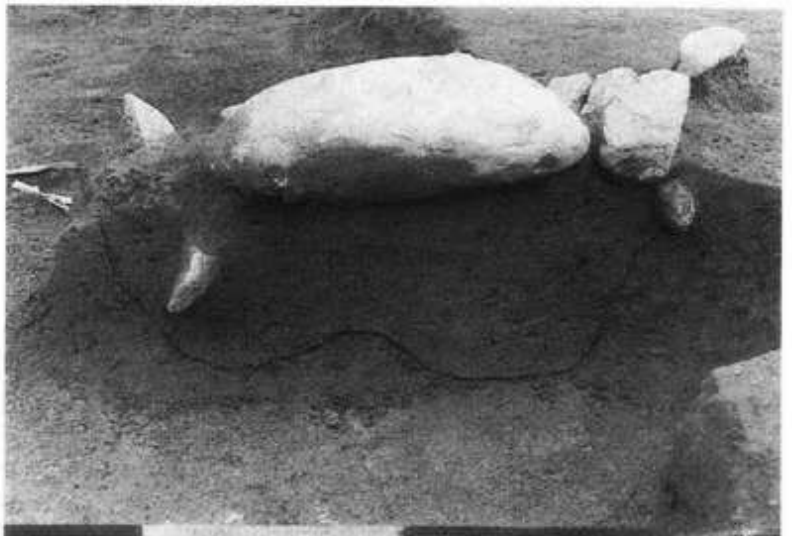
溝址37　断面

図版37

溝址38

溝址39

溝状址 3

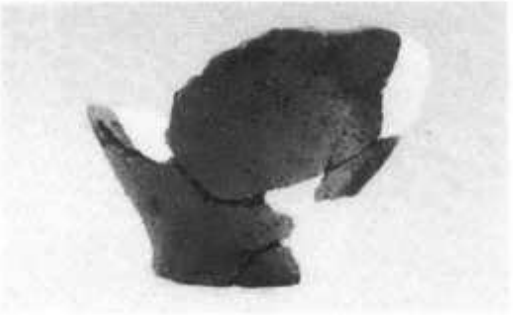


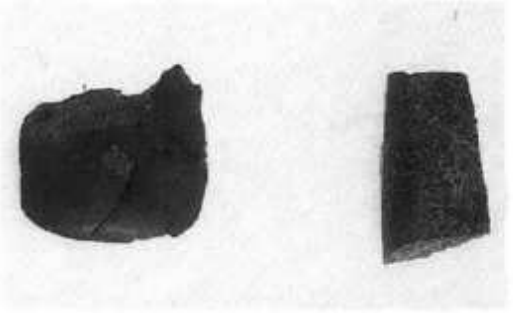
集石 5

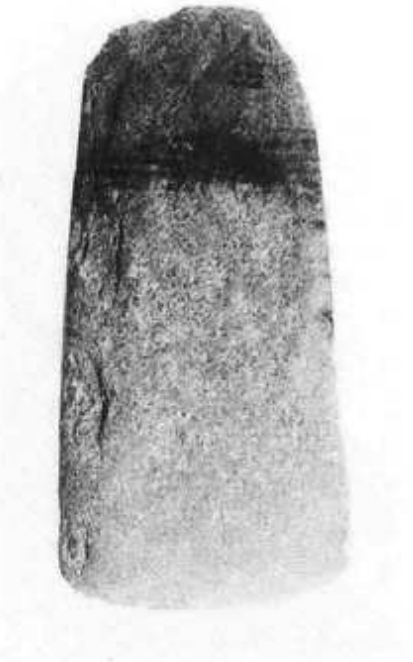
集石 7

遺構外遺物出土状態

図版39





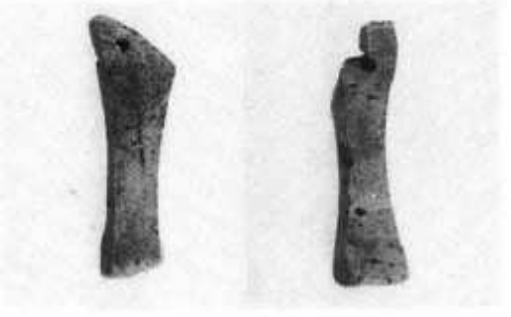


92号住居址出土遺物

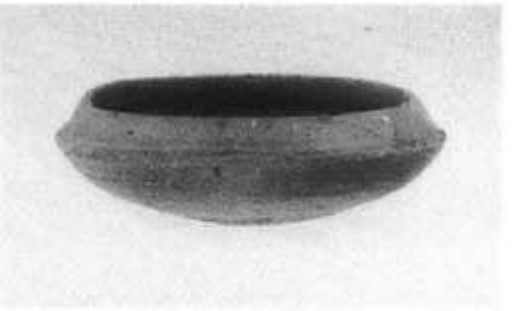
136号住居址出土遺物

90号住居址出土遺物

90号住居址出土遺物



91号住居址出土遺物



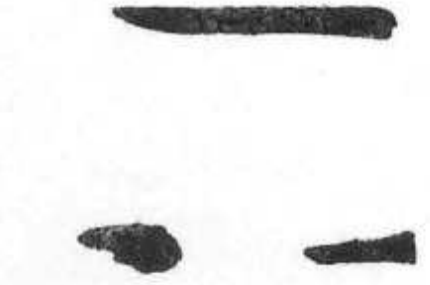
95号住居址出土遺物

98号住居址出土遺物

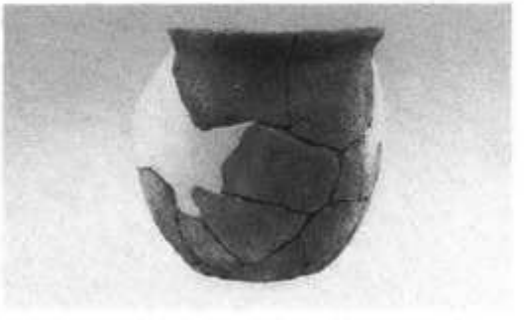
98号住居址出土遺物

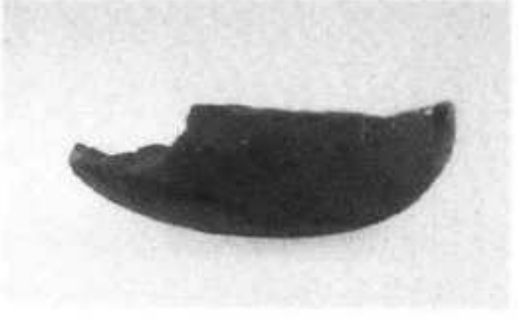
103号住居址出土遺物

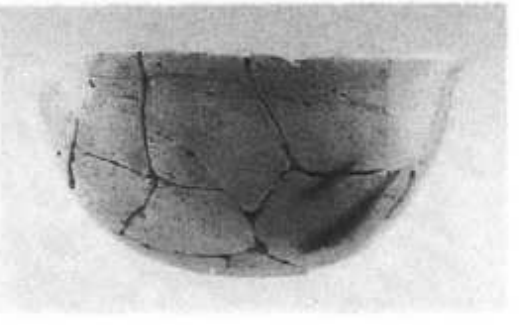
図版41

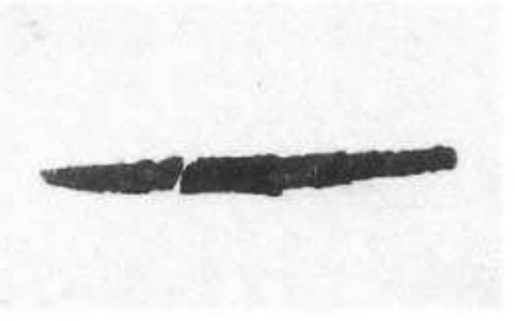


103号住居址出土遺物

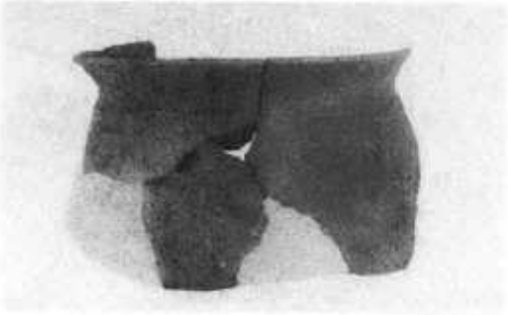


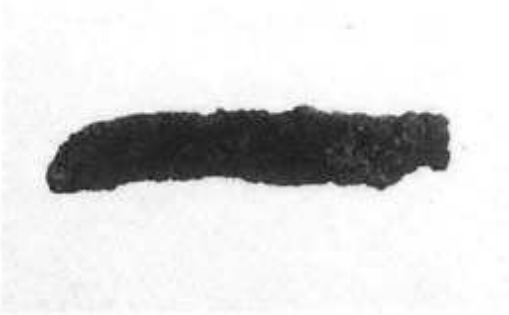




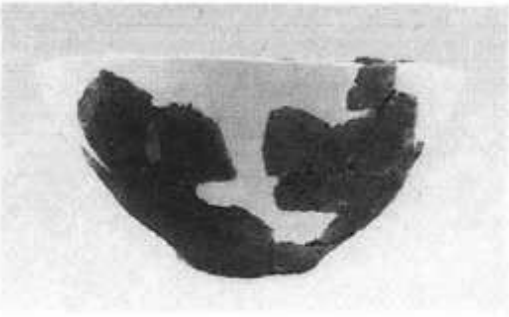


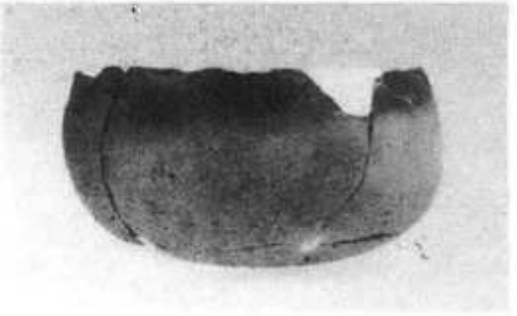
104号住居址出土遺物





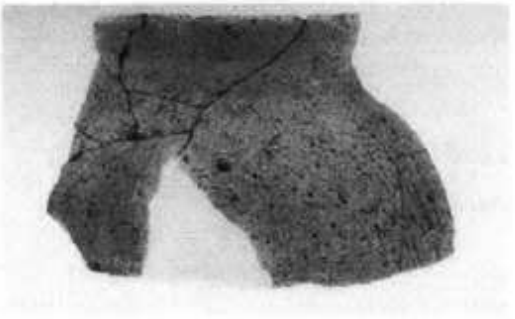
105号住居址出土遺物

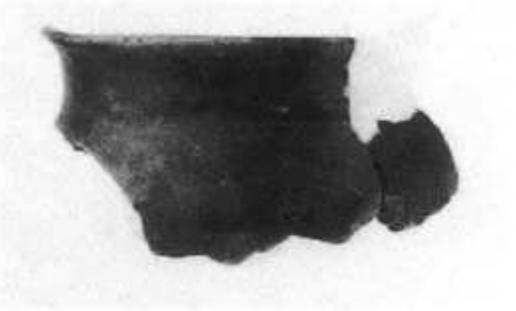




106号住居址出土遺物

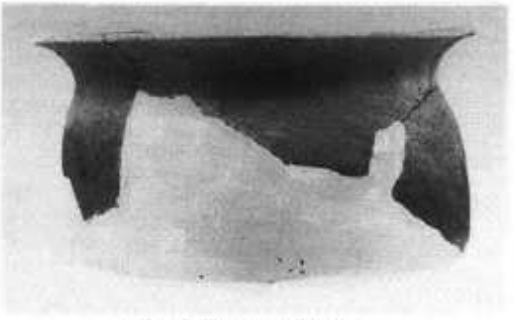
図版43





108号住居址出土遺物

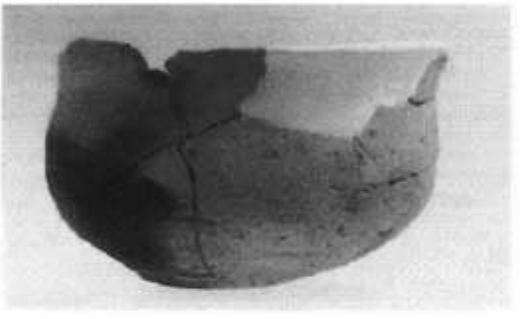
109号住居址出土遺物



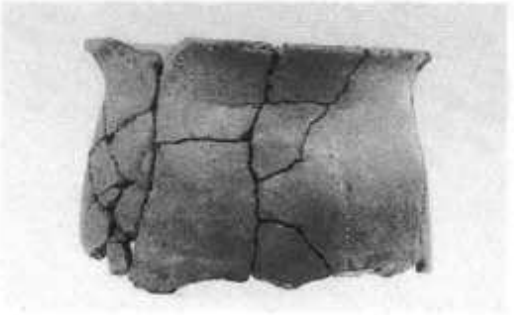
111号住居址出土遺物

114号住居址出土遺物

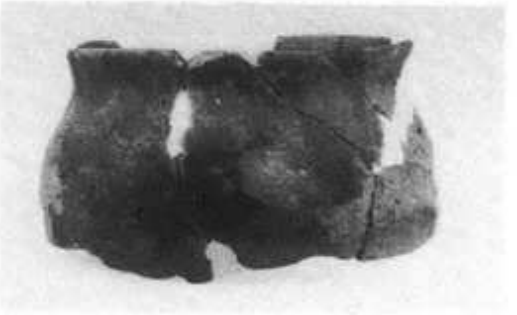
116号住居址出土遺物



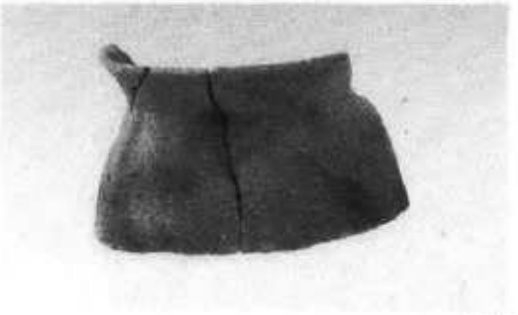
118号住居址出土遺物



119号住居址出土遺物

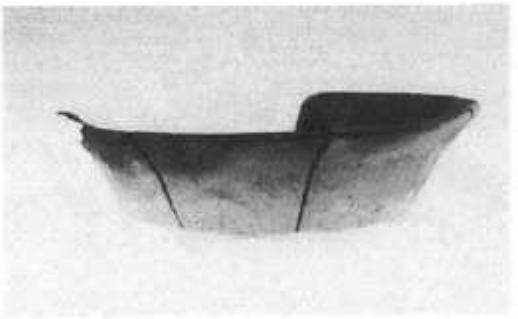
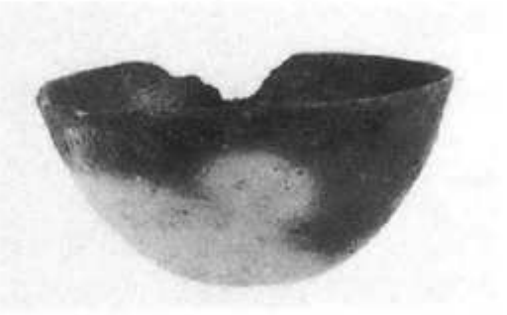


122号住居址出土遺物

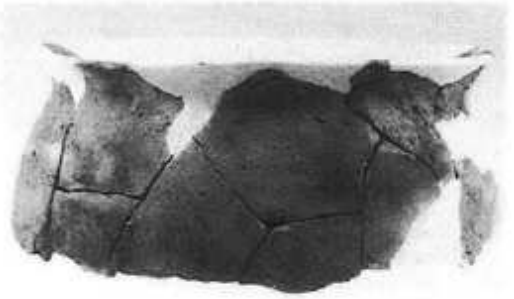
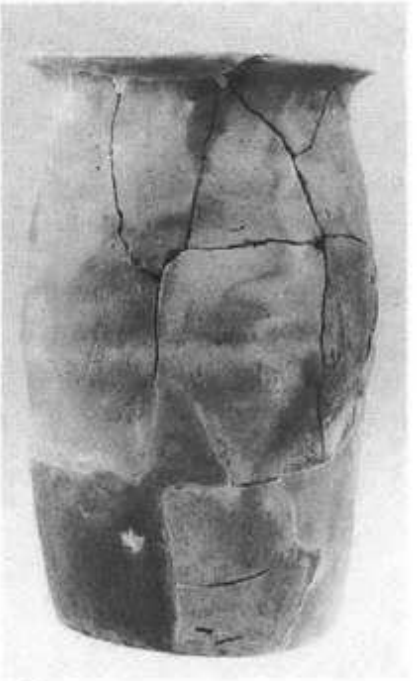
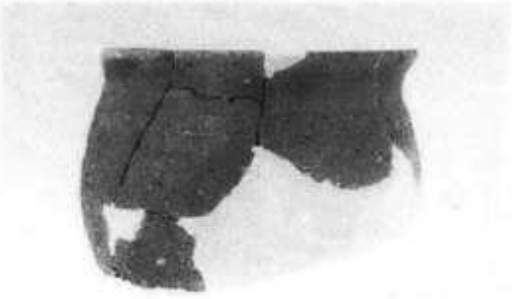


125号住居址出土遺物

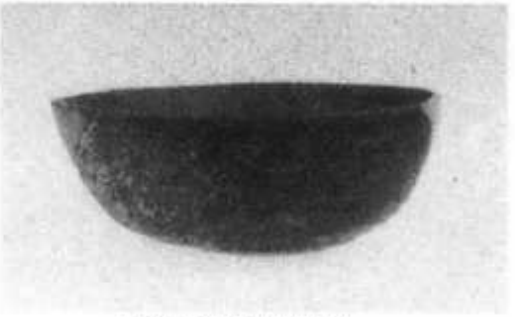
図版45

125号住居址出土遺物

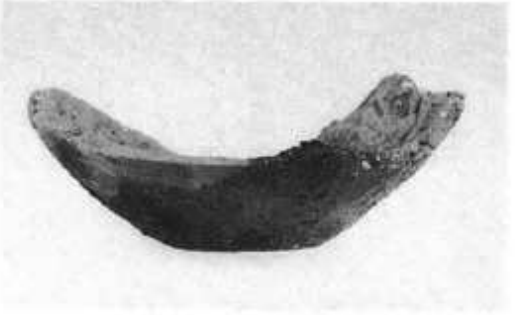




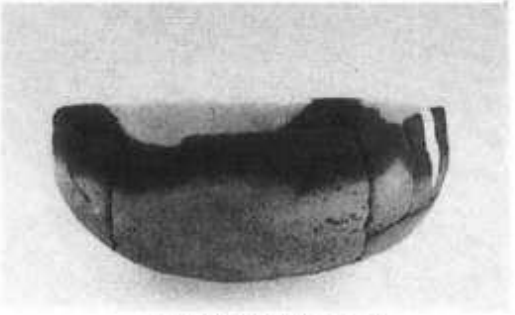
127号住居址出土遺物



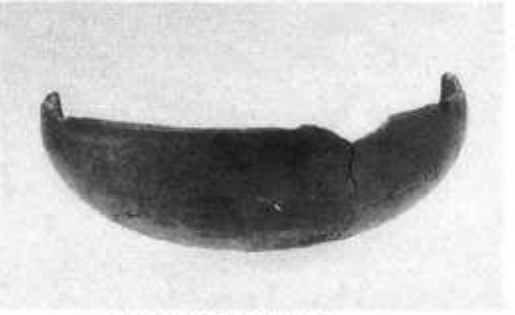
127号住居址出土遺物

127号住居址出土遺物





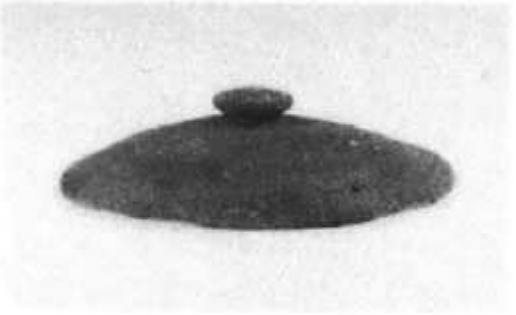
128号住居址出土遺物



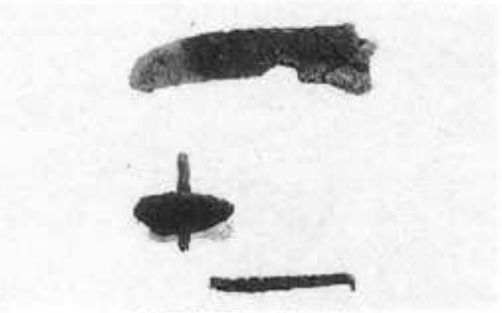
129号住居址出土遺物

図版47

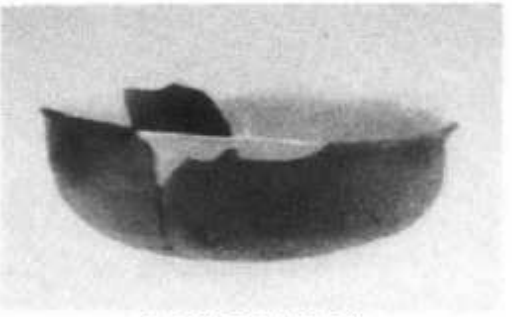
130号住居址出土遺物



130号住居址出土遺物

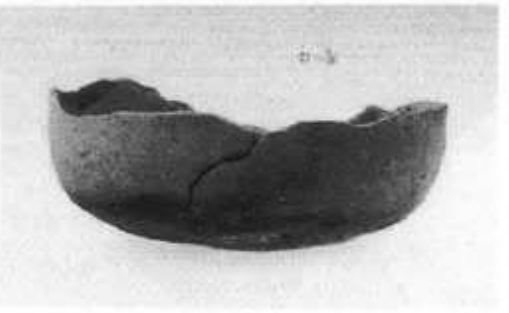


130号住居址出土遺物

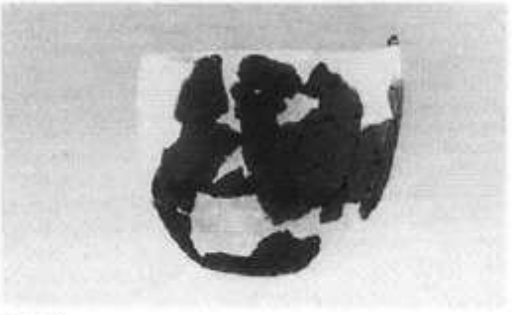


131号住居址出土遺物

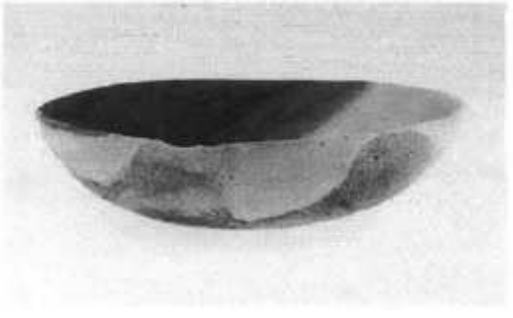
132号住居址出土遺物

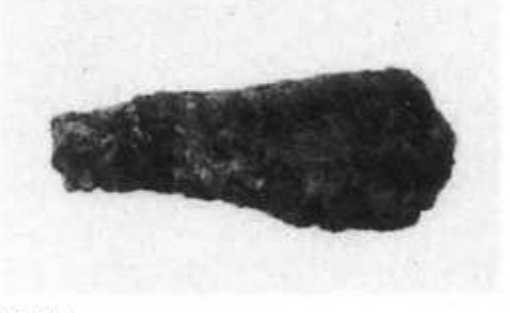


132号住居址出土遺物

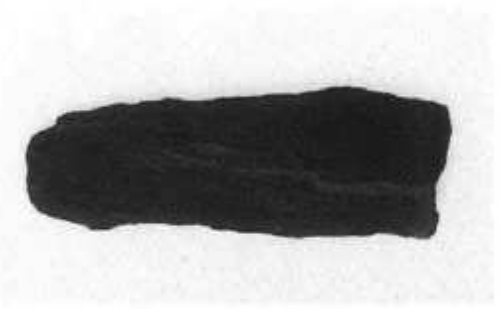


133号住居址出土遺物



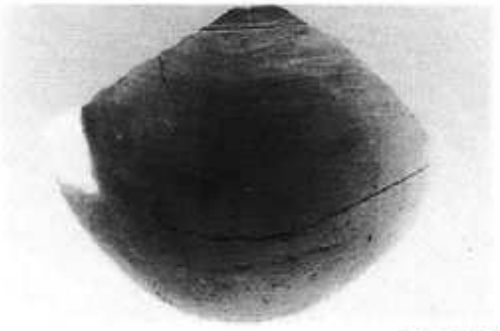


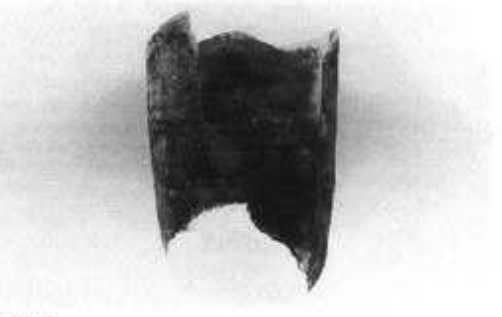
134号住居址出土遺物



135号住居址出土遺物

137号住居址出土遺物



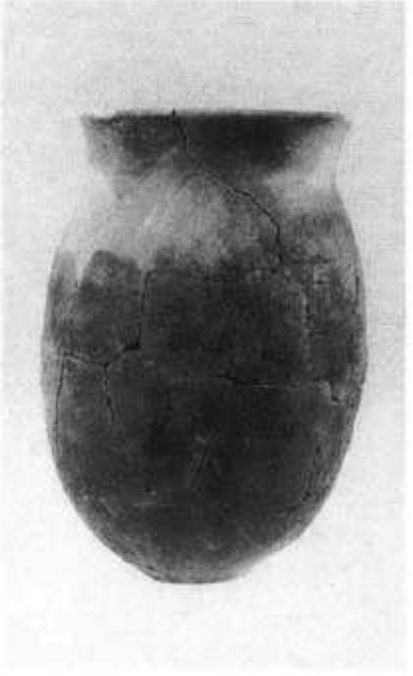


139号住居址出土遺物

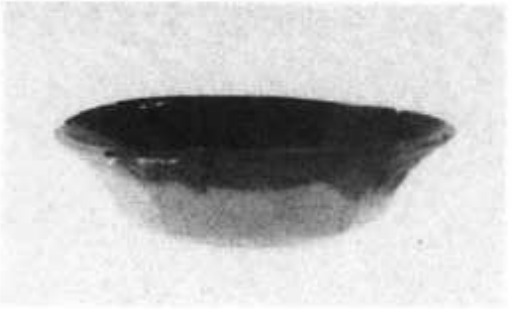
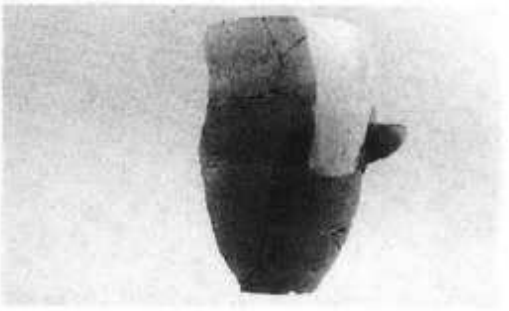
140号住居址出土遺物

141号住居址出土遺物

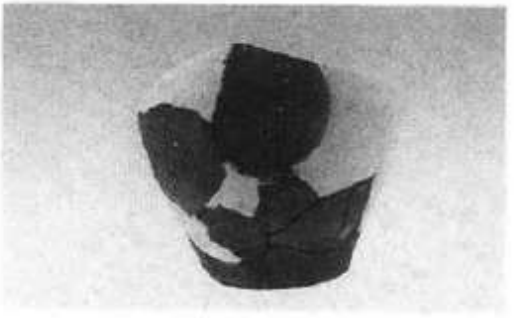
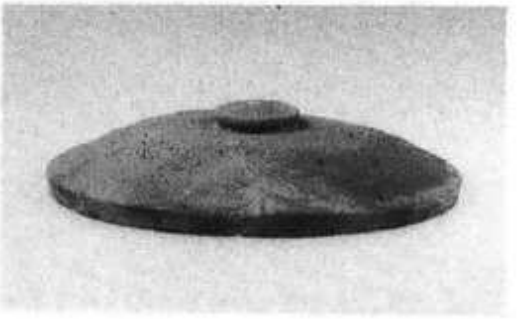
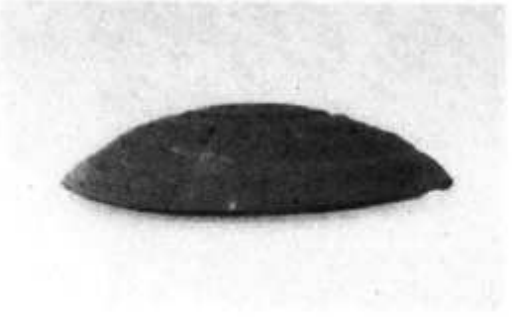
142号住居址出土遺物

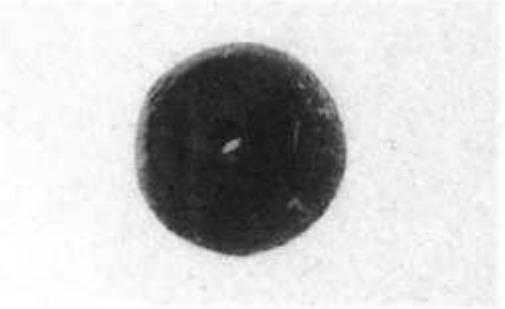
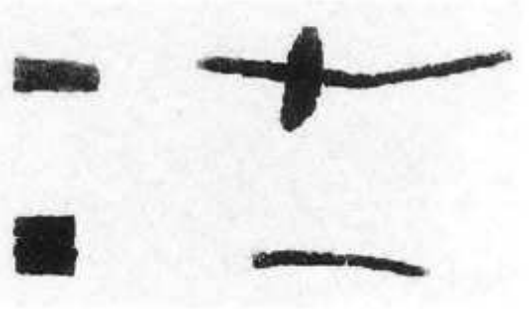


144号住居址出土遺物

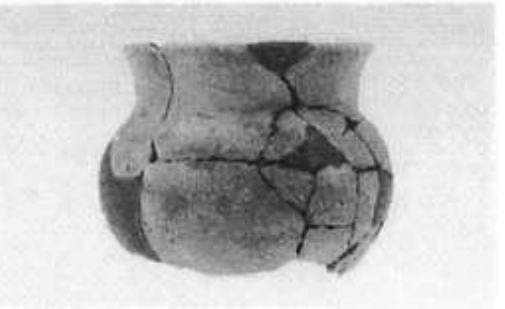
144号住居址出土遺物

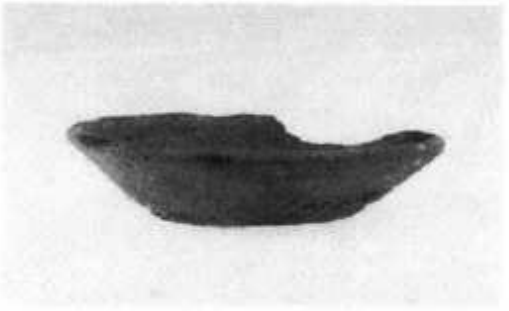
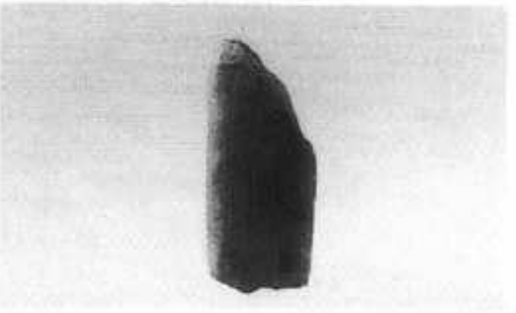
149号住居址出土遺物

152号住居址出土遺物



156号住居址出土遺物

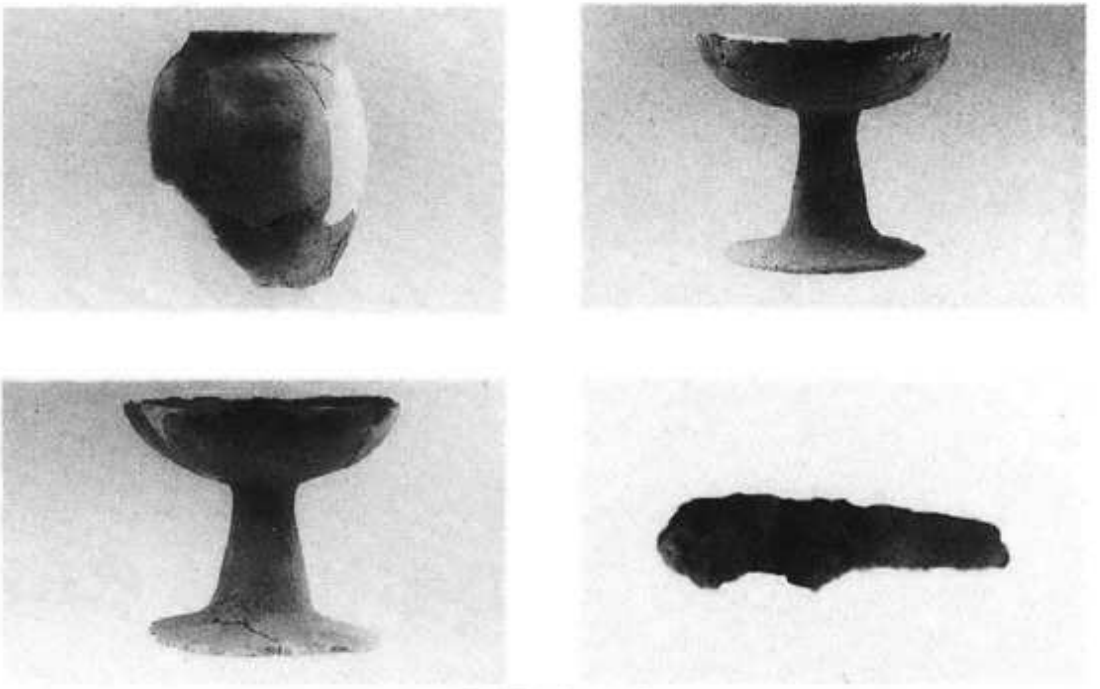
96号住居址出土遺物

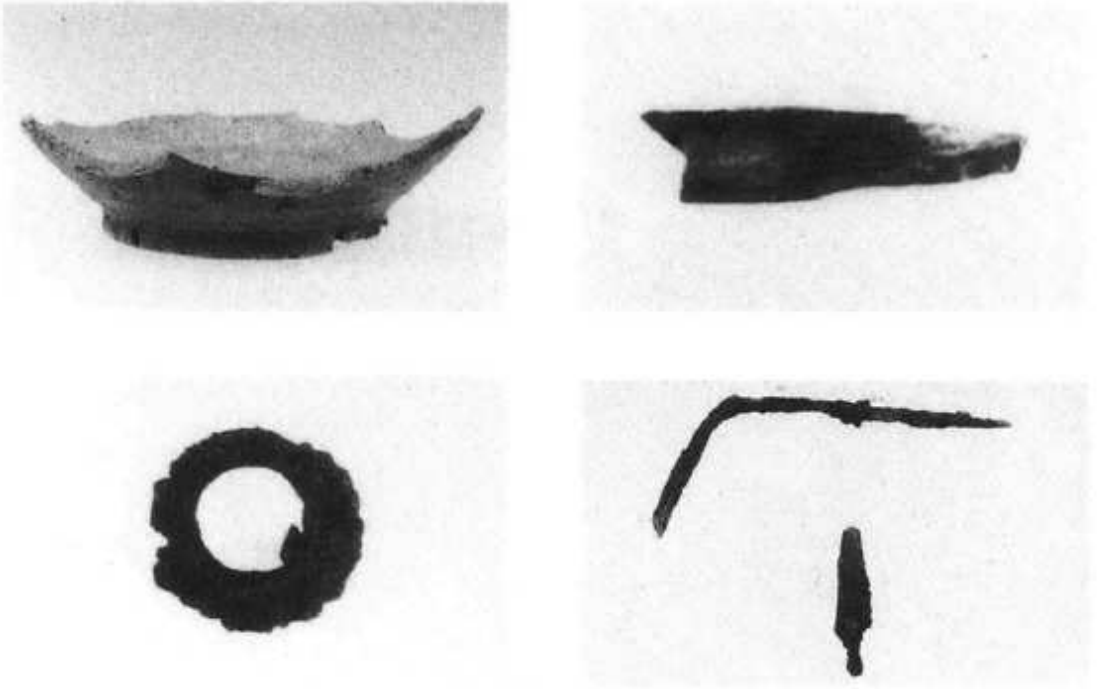
102号住居址出土遺物

123号住居址出土遺物

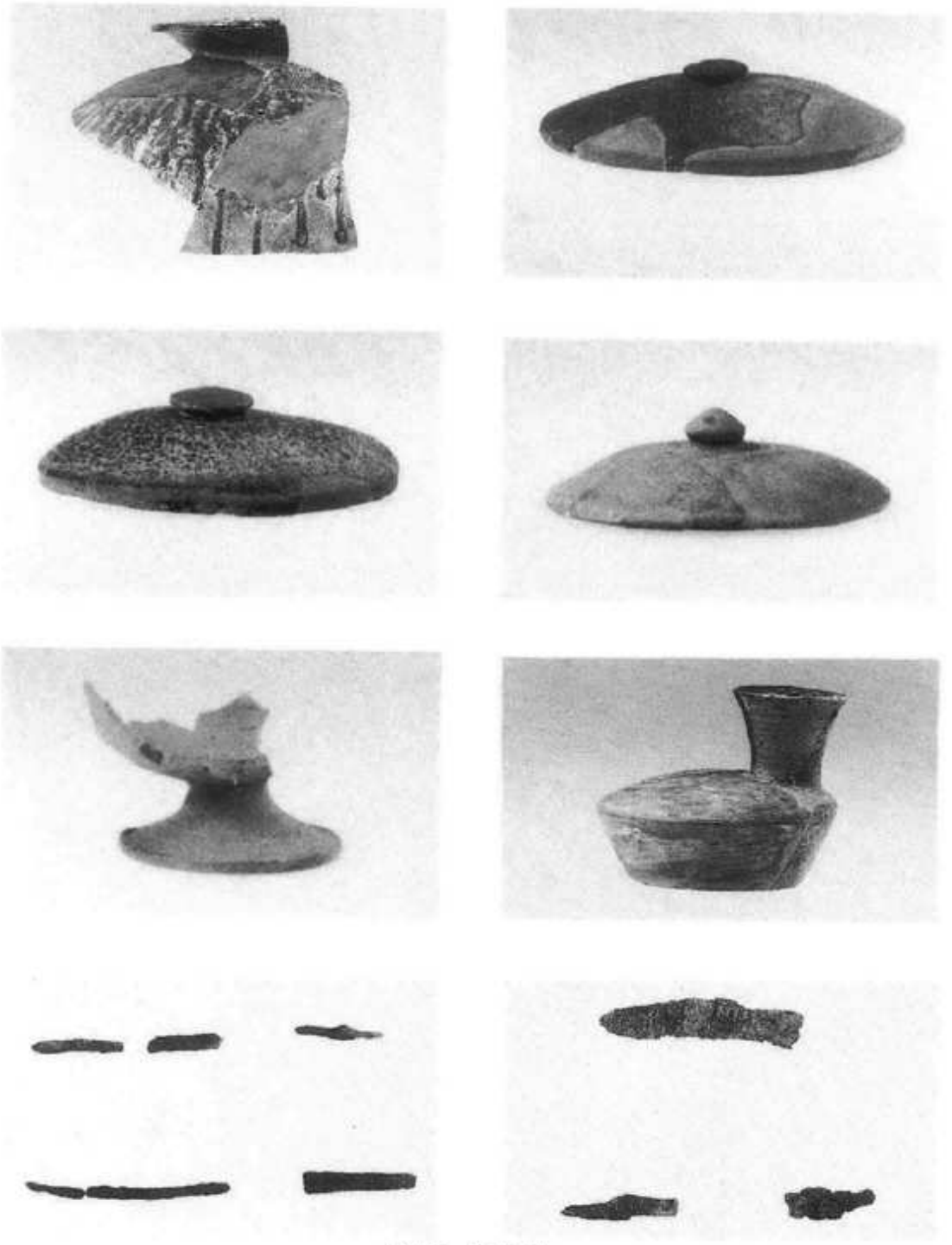
図版55



123号住居址出土遺物



145号住居址出土遺物



溝址37　出土遺物